

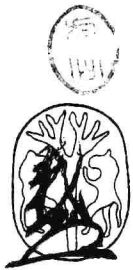
吉内義則著

對
原
氏
物
語
新
釋

卷二

昭和十二年九月二十日印刷
昭和十二年九月廿五日發行

校對 源氏物語新釋 卷之二
定價金貳圓八拾錢



著者 吉澤義則

發行者 下中彌三郎

印刷者 齋藤道太郎

東京市日本橋區吳服橋

發行所

東京市日本橋區吳服橋
振替東京二九六三九番
株式會社

平凡社

電話日本橋 二二二
一五五 五七七
五九八 番番番

凡 例

一本書は本文篇六冊、附卷一冊から成る。

一本書は湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所藏の河内本を以て嚴密に對校して本文を立てた。

一繙讀の便宜上、原本の假名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、假名遣を統一し、詞と地とを區別し、濁點・句讀點を施し、かつ適當に分節してある。

一底本及び河内本に於て誤刻誤寫の明白なものであるも、私意を以て之を改める事なく、又假名遣によつて、意味の兩様に解せられるもの及び兩本の特色とする點は特に其儘存し、原本の佛をどこまでも忠實に傳へる事に力めた。

一對校の記號としては黑點と括弧とを用ひた。本文右傍の六ポイント活字中、括弧を以て圍んだ部分は河内本で、黑點はそれに相當する詞を缺いてゐる事を意味するのである。

例へば、

いろ／＼の紙(かな)なるふみどもを(中將)引きいでて

とあるのは、湖月抄本には

いろ／＼の紙なるふみどもを引きいでて

とあるのが、河内本では

いろ／＼のかなぶみを中將引きいでて

となつてゐるといふ意味である。而して一般に假名の清濁は、「お(も)・ばし煩ふ」の如く、前後の續きによつて變更するのである。

一句讀を切る事は、半ば意味を解釋するのであるから、この點に特に留意し、從來の句讀を改めた箇所が尠くない。

一湖月抄本には本文の右傍に若干校異を施してあるが、印刷の都合上、今それらの校異は左傍に移した。例へば本書に

あな(こ)くるし　むつ(む)まじう

とあるが如きは、もと底本に「あな(こ)くるし」「むつ(む)まじう」などとあつたのを、河

内本と對校し異同を記入する必要上斯く改めたのである。

一 註釋は讀者の便を思つて、同註の反復も厭はなかつたのであるが、又多少簡にしたもの、省略したものが無いではない。それは附卷の語句索引によつて明瞭ならしめるやうになつてゐる。

一 附卷は源氏物語の解題・語句の索引・系圖及び年表から成り、本文篇と相俟つべきは勿論であるが、單獨に分離しても、常に源氏物語の辭書たるにとどまらず、廣く王朝語・王朝文學の基礎的研究資料たり得る事を信ずるのである。

著 者 識

卷二所收目次

玉 少 槿 薄 松 繪 關 蓬 滯 明 須

鬢 女 雲 風 合 屋 生 標 石 磨

三九 三五 三六 三三 三五 一八 一七 一四 一五 一 一

世の中いと煩はしく、源氏は胸
月夜との事から弘徽殿の怒に觸
れ、左遷の噂などもあるからで
ある。卷一四四八頁参照。
せめて知らずがほに強ひて平
氣を装つて暮して居つても。

ひたたけたらむすまひは、おち
つきの不意だ。とした所に住む
のは不意だ。おちつきの不意だ。
故郷おぼつかなくなるべきを、わ
が家の動靜がはつきり分りにく
からうことを。
人わろく女々しい心の動搖が
不體裁だの意。
きし方行く末、今までの榮華と
これから先の身のつらさを思ひ
續けて。

行きめぐりても、古今離別「下
の帯の道はかた、別るとも行
きめぐりても逢はむと思ふ」

世の中いと煩はしく、^{具合のわるい}はしたなき事のみまされば、^{これ以上の}せめて知ら
ずがほに^(七)あり経ても、^{これ以上の}これよりまさる事もやと思しなりぬ。^(果)
かの須磨は、昔こそ人の住處^{すみか}などもありけれ、今はいと里ばな
れ心すごく、海士^{あま}の家だに稀^かになむなり^(ナ)にたる^(ト)と
へど、^{源氏の心}人繁くひたたけたらむすまひは、いと本意^{ほんい}なかるべし、
さりとして都を遠ざからむも、故郷^{ふるさと}おぼつかなくなるべきを、人わ
ろくぞおぼし亂るる。よろづの事^(セ)、きし方行く^(さ)すゑ思ひつづ
け給^{おほ}ふ^ほし^續く^るに、悲しき事いとさましくなり。憂^(あ)き^まし^もの
と思^(し)ひ^ほし^思つ^るに^(な)べ^ての^(を)世^(を)も、今はと住み離れ^{(給}ひ^せ
を^(と)あ^ぼす^に・^うけ^こは、いと^(と)捨^てが^たき^事多^{かる}な^かにも、^{業上}姫
君の、あけくれに添へても思ひ歎き給へるさまの心苦しきは、
何事にもすぐれてあはれなるを、行きめぐりても又あひ見む事
を必ずとおぼさむにてだに、なほ^(三)二^(三)日の^{業上}ほどよそ^(業上)く^(業上)に明し
暮す折々だに、^{業上}あ^ぼつ^かな^きもの^(業上)に覺^え、^{業上}女^君も心細^うのみ思

逢ふを限りに、いつとも分らな
い再會の日を期限として別れて
ゆくは行方も知らず果なし途
ふを限と思ふばかりぞ」
やがて別るべき門出「古今哀傷
し今は限の門出なりけり」

いみじからむ道にも如何につ
らい旅にもせよ、御一緒に招供
が出來れば嬉しい。意中をほめかし
て、おもむけて

なほざりにても源氏が本氣で
はなくて、一寸でも顔を見たら
り、また通つてあられた婦人達
は、人知れず胸を痛める人々が
多かつた。文通したことが聞
物の聞えや、藤壺御自身のため斟酌さ
れ、藤壺御自身のため斟酌さ
れるけれども、河内本よし。

う給へるを、幾年その程と、限りある道にもあらず、逢ふを限
りに隔たりゆかむも、さだめなき世に、やがて別るべき門出に
もやと、いみじうおぼえ給へば、忍びて諸共にもやと
おぼし寄る折、あれど、さる心細からむ海づらの、波風よりほ
かに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて引具
し給へらむも、いとつきなく、わが心にも、なかく物思ひ
のつまなるべきを、などおぼし返すを、女君は、「いみじから
む道にも、おくれ聞えずだにあらば」とおもむけて、恨め
しげに思いたり。かの花散里にも、おはし通ふ事こそ稀なれ、
心細くおはれなる御有様を、この御蔭に隠れて、ものし給
へば、いみじう歎きおぼし、たるさま、いとことわりなり。
なほざりにても、ほのかに見奉り通ひ給ひし所々、給ひしな
ど、人知れぬ心を碎き給ふ人多かりける。入道の宮よりも、
物の聞えや又いかか、取りなされむと、わが御ため、

昔かやうにあひおぼし藤壺が
昔これ程同情を寄せられ好意を
見せて下さつたならばと。

都離れ給ひける都を離れたと
は書いてあるが、更に立返つて
出發當時の事を叙するのである。
今としも只今出發するとも。
さるべき所々に然るべき婦人
達の所に。

あはれと偲おぼるばかり感慨無
量思ひ出の種となる程念入り
書かれた手紙は見る價値もあつ
たらうが、その當時の悲しさに
紛れてはつきり聞き置かずじ
まひになつてしまつた。

二三日かねて出發の二三日前
におほい殿葵上の父左大臣邸
網代車車體の居形及び兩脇を
竹又は檜の網代で張つた牛車。
御方奏上の部屋。

須磨

•めいとほしう つつましけれど、忍びつつ御とぶらひ常源氏の處へにあり。
昔かやうに(も)あひお(も)ぼし、あはれをも見せ給はましかば、と
源氏に對して
打ち思ひ出で給ふに(も)、さもさま(も)に心をのみ盡すべかりけ
る、人の御契りかなと、つらう思ひ聞え給ふ源氏の心に。三月廿日あまり
の程になむ都離れ給ひける。人に(は)今としも知らせ給はず、た
だいと近う仕うまつり馴れたるかぎり、七八人ばかり御供にて、
いとかすかにて出で立ち給ふ。さるべき所々に(は)、御文ばかり
•聞え給ふ(わ)と(な)ら(ま)む。打忍び給ひし(わ)たり(な)どにも、あはれ
と偲おぼるばかり書き盡し給へるは、見所もありぬべか(も)りしか
ど、その折の心地のまぎれに、はか(ま)しくも(ま)聞き置かずな
りにけり。
•おほい殿(ふ)か(か)ねて、おほい殿(よ)に、夜夜に紛れてに隠れて渡り給へり。
網代車あじろなるまのうちやつれたるに、女(さ)のやう(ま)にて隠左大臣邸にるへ入り給ふもい
とあはれに、夢とのみ覺ゆ。御方(は)いと淋(さ)しげにうち荒れたる心(氣)

昔さぶらひし 昔奏上に仕へて居つた女房。
まうのほりつどひて 源氏の居る奏上の部屋に。

殊に物深からぬ若き人々、若い者は思慮が深くないから、かういつたのである。若い女房の中の思慮深くない者といふのではない。

久しき程に 久しく逢はなかつた間に私を見忘れないのがかたゆい。

つれづれに籠らせ 閉籠つて退屈にしておいで折に、とりとめもない昔話でも参上して申し上げようと存じますが。源氏は臘月夜との事から除名されて出仕もしないで暮してゐるのである。

位をまかへし奉りて 致仕は辭し官不辭位とあつて、位階をやめるのは罪科ある時の事であるから、この「位」は官職の意味である。

天の下をさかさまに あり得べからざる事。宇津保忠乞「天の下さかさまになるとも斯かる事あらじ」

地^色して、若君^{少君}の御乳母ども、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り、源氏がかく渡り給へるを、珍らしがり聞えて、まうの

ぼりつどひて、源氏が見奉るにつけても、殊に物深からぬ若き人々さへ、世の常なさ^を・思ひ知られて、涙にくれたり。若君はいとう

つくしうて、ざれ^て・走りおはしたり。源「久しき程に、忘れぬこそ哀なれ」とて、膝にすゑ給へる御氣色、^{源氏の}・忍び難げなり。

左大臣も奏上の部屋にあんどどこなたに渡り給ひて、對面たいめし給へり。左大臣「つれづれに籠らせ給へらむ程、何と・侍らぬ^{手とも参り來て}・昔^{の御}・物語も、参り來て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病^の・重きにより、お

ほやけにも仕うまつらず、官職位をも返し奉りて^{斯く籠り}・侍るに、私用には出あいて「私さまには腰のべて」など、世間の評判がよくならうが物の聞えひがくしかるべきを、致仕の身の上故今^をは世の中・憚るべき身にも侍らねど、手厳しい世の中がいちはやき世のいと怖

ろしう侍るなり^{りてなせ}。かかる御事を見給ふるにつけて、命長きは心憂く^{眼はしう}・思ふ給へ^知・らるる世の末にも侍るかな。天^{あめ}の下^{した}をさか

とある事も、それもこれも前世の宿縁故、結局は私の過失です。

さして斯く官爵を格別私のやうに官爵を取上げられる程でなく、つい一寸した軽い罪に觸れてさへ、勅勘を受けた人が、常日頃と同様平氣な顔をして居る事は異朝でも罪重き事に致して居りますのに。

昔の御物語 左大臣は昔の御物語をされて、桐壺の御事や、院が仰せられた御遺言の御趣旨などを語り出されて。

さまになしても、思ひ給へよらざりし御有様を見給ふれば、よろづいと・あぢきなくなむ」と聞え給ひて、いたうしほたれ給ふ。とある事もかかる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、いひもてゆけば、只みづからの怠りになむ侍る。さして斯く官爵を・つかさなど・取られず、あさはかなる事にかかづらひてだに、おほやけのかしこまりなる人の、うつしざまにて世の中（を過ぐす）にあり經るは、咎（とが）あもきわざに人の國にもし侍るなるを、遠く放ち遣はずべき定めなども侍るなるは、さま殊（特別重い罪に）なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心にまかせて、つれなく過ぐし侍らむも、いと・憚り多く、これより大きな恥に臨まぬさきに、世をのがれなむと思ふ給へ立ちぬる」など、こまやかに・聞え給ふ。昔の御物語、院の御事、あ・ぼし（桐壺院）のたまはせし御心ばへなど聞えいで給ひて、御直衣の袖も引き放ち給はぬに、君もえ心強くももてなし給はず。

過ぎ侍りにし人を、死んだ娘の事を忘れて時なく今以て悲しんでゐますが、今度の御事で、もし娘が生きて居る時でございまして、どんなに嘆いた事でございませう。源氏須磨に退去の事。

斯かる事源氏退去といふ夢の如く悲しい事。かくよはひ過ぎぬる。こんな年寄つた私共の間に残つて居られて、君にお馴染み申さぬ月日が長く、續く事であらうと思ひます。何よりも悲しう存じませう。

いひ出づる節ありて、指摘されるだけのわけがあつて、冤罪にあるだけ。思ひ給へ、寄らむ。君の場合はどう考へても心當りがございませぬ。湖月本「思ひ給よらん云々」とある。三位の中將、昔の頭中將。とまり給ひて、源氏が葵上の部屋に。

夕暮若君の何心(も)なく紛れありきて(給うつこ)、これかれに馴れ聞え給ふを、大臣が悲しくいみじとお(も)・ぼしたり。左大臣「過ぎ侍りにし人を、(い)・世に思ふ給へ忘るる世なくのみ今にかなしび侍るを、この御事に(て)・なむ、もし侍る世ならまし(りせ)・かば、葵上がいかやうに思ひ歎き侍らまし。よくぞ短くて斯かる夢を(も)・見ずなりにけると、思ふ給へ慰め侍る(を)・を夕暮の事さなく物し給ふが、左大臣と大臣の事かくよはひ過ぎぬるなかにとどまり給ひて、源氏になづさひ聞え(給は)・ぬ月日や隔たり給はむと思ひ給ふるを(を)・なむ、よろづの事よりも(越えこ)・悲しう侍る。古への人も、誠に犯しあるにてしも、斯かる事(罪)に(は)・當(り)・らざりけり。前世の宿縁でさるべきにて、異朝人のみかどにも斯かるたぐひ多く侍りけり(れど)。されどいひ出づる節ありてこそさる事も侍りけれ。とざまかうざまに、思ひ給へ寄らむ方なくなむ」など、多くの御物語聞え給ふ。三位の中將もまゐりあひ給ひて、(御)おほみきなど参り給ふに、夜更けぬれば、と(と)・まり給ひて、女房達を人々お前にさぶらはせ給

中納言の君 葵上の侍女。
いへばえに 伊勢物語・新勅撰
胸に 業平一いへばえにいはねば
な 胸がれて心一つに歎く頃か

わづかなる 花も残りずくな
なつた。
きり渡りたる 霧がこめてゐ

心やすくもありぬべかりし、
樂に逢へば逢はれた今迄を、格
別あせりもせず逢はないで過
御消息聞え給へり 大宮から源
氏に。
自らも ちかにお話申上げた
のですが、世の中が暗くなつた
やうな惱みを落着けようとして
居ります間に、着るで夜の明け
きらないうちに、お歸りになるの
も、昔とは勝手が違つてゐるや
うな気がします。

須磨

ひて、
おぼす・中納言の君、いへばえに悲しう思へるさまを、人
知れず・あはれとおぼす。人皆しづまりぬるに、
とりわきて語らひ給ふ。これにより・とまり給へるなるべし。
明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、
なる木陰のいと面白き庭に、うすきり渡りたる、そこはかと
なく霞みあひて、秋の夜のあはれに多く立ちまされり。隅
の間の勾欄に押しかかりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君、
見奉り送らむとにや、妻戸押しあけて居たり。又たい
めんあらむ事こそ、思へばいと難けれ。斯かりける世を知らで、
心やすくもありぬべかりし月頃を、さしも急がで隔てけるよ
など宜へば、物も聞えず・泣く。若君の御乳母宰相の君し
て、宮のお前より御消息聞え給へり。大宮自らも聞え・まほし

きを、かきくらす亂り心地ためらひ侍・る程に、いと夜深う
 出でさせ給ふなるも、さまかはりたる心地のみし侍るかな。心
 苦しき人のいぎたなきほどは、暫しもやすらはせ給はで」と聞
 え給へれば、うち泣き給ひて、

鳥邊山の歌 鳥邊山で葵上を火
 葬した時に立上つた煙に似奇つ
 た煙でも立上るかと、螢が驟を
 焼いてゐる須磨の浦を見に行
 のです。

鳥邊山燃えしけぶりも紛ふやと海士の鹽焼く浦見にぞゆく
 御返しともなくうちぢず・し給ひて、暁の別は、かうのみやは
 心づくしなる。思ひ知り給へる人もあらむかし」と宣へば、

思ひ知り給へる このつらい氣
 持をしみ味つた人もあるだ
 らう。

「いつとなく、別れといふ文字こそうたて侍るなるなかにも、
 今朝はなほたぐひあるまじう思ひ給へらるる程かな」と、鼻聲
 にて、けに淺からず思へり。聞えさせまほしき事も、かへす
 がへす思ふ給へながら、只むすぼほれ侍る程、おし量らせ給
 へ。いぎたなき人は、見給へむにつけても、ななく憂き世の
 がれがたう思ひ給へられぬべければ、心強く思ふ給へな
 して、急ぎまかで侍る」と聞え給ふ。出で給ふほどを、人々の

聞えさせまほしき 以下大宮へ
 の返事の詞。

むすぼほれ侍る程 悲しさに鬱
 結して居る心の程を御推察下さ
 い。

心強く思ふ給へなして 氣強く
 決心して夕霧には逢はずに。

して、急ぎまかで侍る」と聞え給ふ。出で給ふほどを、人々の

ましていはけなく、まして此の女房達は源氏の幼時からお目にかゝつてゐる人々故、たとしへなき御有様を、美しい源氏の姿を見て。

なき人の歌、故葵上との別は、一層隔たる事せう、故葵上が茶毘の煙となつた都にあなたが、おいででなくては、取添へて葵上の死んだ悲しさの上、源氏に別れる悲しさを取添へて。

殿に、源氏が二條院に御歸邸になつたと、わが御方の、東對なる源氏の部屋に仕へてゐる人々。

侍所、從者の詰所。御供、須磨への御供。

私の別れ、自宅の人々や親戚知友等に暇乞する事、さらぬ人親しう仕うまつる人以外の疎遠なる人。

ぞきて見奉る。入りがたの月(影)いとあかき(源氏のさま)に、いとどなまめかしう清らにて、物をおぼい(亂れ)・たるさま、虎狼(鬼神)だにも泣きぬべし。ましていはけなくおはせし程より見奉りそめてし人々なれば、たとしへなき御有様を、いみじ(悲しく思ふ)と思ふ。まことや御かへし(大宮からの御かへし)は、

大宮なき人の別やいとど隔たらむけぶりとなりし雲居ならでは、取添へてあはれのみ盡きせず、出で給ひぬる名残、ゆゆしきま(女房達は)で泣きあへり。

殿におはしたれば、わが御方の人々も、まどろまざりける氣色にて、所々に群れゐて、あさましとのみ世を思へる氣色なり。侍には、親しう仕うまつる限りは、御供にまゐるべき心(準備)まうけして、私の別れ惜しむ程にや、人目(影)もなし。さらぬ人は、とぶらひ(弘徽殿方から)・参るも重き咎めあり、煩はしき事(の)・まされば、(以前には)所せくつどひし馬、車(今は)のかたもなく淋しき(も)に、世は憂きものな(源氏の心に)

臺盤 長方形の机形の食卓。
かたへは 幾つかある臺盤のう
ち若干は。臺盤につく人がない
から。

臺所々々 臺は臺盤につく人々の
座席である。臺盤につく人がな
いから引返してかたづけてある
のである。
見る程だに 自分が居る時でさ
へ此の通りだから。
今ぞ起きさわぐ 源氏が歸つて
來られたから。

年月経ば 須磨に退住後の事を
源氏が思ひやるのである。

例の思はずなる 浮氣心から他
の女の許に泊つたのだなどと、
案外な意味に解釋しては居られ
なかつたか。

ひたやごもりにてやは 引籠つ
てばかりも居られぬ。

人にもなさけなきものと人から
無情者と疎外されるのもつら
い。斯かる世を見る事以外に案外な
事とは何事でせう。

りけりとあぼし知らる。臺盤なども、一部分はかたへは塵ばみて、疊所
所引返したり。源氏の心見る程だにかかり、須磨に退去り後はましていかに荒れゆかむ、
とあ・ぼす。業上の方西の對に渡り給へれば、御格子も參らでさながら・
ながめあかし給ひければ、簀子などに若きひと・わらはべなど・所
所に臥して、今ぞ起きさわぐ宿直姿どもこのふすがた・をかしうて出でい
るを見給ふにも、心細う、年月経ば、かかる人々も、辛抱しきれずえしもあ
り果てでや行きちらむ、など、平素は氣のつかぬ事までさしもあるまじき事さへ、御目
のみと・まりけり。昨夜源よべはしかくして夜更けにしかなむ。
例の思はずなるさまにやあぼしなしつる。京に居る間だけどもかくて侍る程だに御
目かれずと思ふを、退京間際にはかく世を離るるきはしも・心苦しき事の
・あ**の**づから多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき・
世に、人にもなさけなきものと心あかれ果てむ侍らむ事いとほしうて
なむな・と聞え給へば、業斯かる世を見・るよりほかに、思は
ずなる事は何事にか・思給へられむ・とばかり宣ひて、いみじと

父親王は、御父兵部卿宮は紫上に疎遠故、紫上は以前から私になつて居たのだが、まして父親王は世間の外聞をうらさかがつて、紫上手紙もやらぬお見舞にさへもおいでならぬしく。紫上は他人の手前も恥か

なかく知られ奉らて源氏の所に居る事を父親王に知られずるに。しまへばよかつと思つてゐるに。に俄なりし急な幸福のあわただしい變りやちよ。縁起がわるから次と別れる人々には次思ふ人々紫上は母、祖母、源氏といふが如く紫上を愛する人人に次々別れる人だ。

おほやけに 勸勤を受けた人は。

さるべきにて 前世の縁でかかる目にもあふのだらうと思ふが。

おぼし入りたるさま、人より殊なるを、ことわりぞかし、父親王はいとあろかにて、もとよりおぼしつぎにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて、音づれ、聞え給はず、御とぶらひにだに渡り給はぬを、人の見る、らむことも恥かしく、なかなか知られ奉らでやみなましを、繼母の北の方などの、「世に俄なりし・さいはひの・・・・・あわただしさ。あなゆゆしや。思ふ人々かたぐにつけて別れ給ふ人かな」と宣ひけるを、さるたよりありて漏り聞き給ふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えて音づれ聞え給はず、また頼もしき人もなく、げにぞあはれなる・・御有様なる。運なほ世に許されがたうて年月を経ば、岩ほのなかにも迎へ奉らむ。只今は人聞きのいとつきなかるべきなり。おほやけにかしこまり聞ゆる人は、あきらかなる月日の影をだに見ず、・安らかに身を振舞ふことも、いと罪おもかんなり。あやまちなけれど、さるべきにこそ斯

ひたおもむぎに 今(いま)はわきひら
見(み)ずの狂(くる)氣(き)じみた世(よ)の中(なか)の事(こと)
故(ゆゑ)。

帥(すい)のみや 源(げん)氏の御(ご)弟(てい)養(や)兵(へい)部(ぶ)卿(けい)
宮(みや)。

位(ゐ)なき人は 無(む)位(ゐ)の人(ひと)は文(ぶん)様(さま)の
不(ふ)着(ちやく)物(ぶつ)を着(き)るの(の)が定(さだ)まりであ
る。

身(み)はかくての歌(うた) 我(わが)身(み)は流(なが)浪(なみ)
てゆくにして、君(きみ)の側(わき)は離(わか)れ
ぬ鏡(かがみ)の中(なか)にうつるわが影(かげ)は、君(きみ)
を離(わか)れず(な)に居(ゐ)る事(こと)でせう。君(きみ)
別(わか)れても(も)の歌(うた) 二(ふた)人(に)は別(わか)れても
鏡(かがみ)の中(なか)の影(かげ)なりと留(とど)まるものな
らば、鏡(かがみ)を見(み)ても慰(なぐさ)めて居(ゐ)ませ
うもの(もの)を。

かる事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは、例なき事な
るを、ひたおもむぎに物ぐるほしき世にて、
さることもありなむ。など聞え知らせ給ふ。
日(ひ)たくるまで大殿籠れり。帥のみや三位の中將などおはしたり
にぞ。たいめし給はむとて、御直衣など奉る。位
なき人は」とて、無文の御直衣。なか／＼いとなつかしきを着
給ひて、うちやつれ給へる。いとめでたし。御鬢かき給ふ
とて、鏡臺に寄り給へるに、面瘦せ給へる影の、我ながらいと
あてに清らなれば、涙こよなうこそ衰へにけれ。この影のや
うにや瘦せて侍る。あはれなるわざかな」と宣へば、女君、
涙を一目うけて見おこせ給へる、いと忍びがたし。
身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ
と聞え給へば、
別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし

みこ 帥宮。

かの人も あの人もう一度逢つてやらなければ無情だと思ふかも知れぬとお思ひになるので。物憂くて 紫上のそばを離れたいから。女御 麗景殿。花散里の御姉。かずまへ給ひて つまらぬ自分を源氏が人なみに思召してお立寄り下さいました事。

殿の内 花散里の邸内の有様。

住み離れたらむ 都を離れて住むべき須磨の住居の有様が思ひやられる。西面 花散里の方。

須磨

いふともなく、給へるさま、なほこころ見る、おぼし知らるる人の御有様なり、なる御物語、花散里の心細げにおぼして常に聞え給ふも、かの人もし一度見ずばつらしと、その夜は又出で給ふものから、いと物憂くて、しておはしたれば、女御、「かくかずまへ給ひて立寄せ給へる事」と、喜ぶ、聞え給ふさま、書き續けむもるさし。いとみじう心細き御有様、只この御蔭に隠れて、過ぐい給へる年月、いとど荒れまさらむ程おぼしやられて、殿の内いとかすかなり。月おぼろにさし出でて、池廣く山木深きわたり、心細げに見ゆるにも、住み離れたらむ巖のなかおぼしやらる。西面には、かうしも渡り給はずやと、

知らぬ涙のみこそ後撰離別「行く先を知らぬ涙の悲しきは只目の前に落つるなりけり」あけぐれ 曉方が夜がいよく明けはなれよとすの際に一時暗く感ぜられる。その頃をあげぐれといふ。世に靡かぬ 右大臣方の權威に靡かぬ人々だけを。

よそひもなく 飾りもなく簡素にして。さるべきふみども 然るべき漢籍や白氏文集などを入れた箱、その外琴一張だけを持参する。

西の對に 紫上に引繼いだ。りやうじ給ふみしやう 領じ給ふ御庄。所領の莊園。券田宅莊園などの所有主を證する手形。倉庫のある場所をいふのから轉じて倉庫のことをいふ。少納言を少納言をしつかり者と見込んでおいたので、親しい家合達と一緒にたつて、それらを管理するやうに少納言に委任した。

須磨

思へばはかなしや。只知らぬ涙のみこそ心おくらすものな。（り）

れ」など宣ひて、あけぐれの程に出で給ひぬ。

よろつの事どもしたためさせ給ふ。親しう仕うまつり世に靡かぬかぎりの人々、殿の事取り行ふべき上下定めおかせ給ふ。御

供にしたがひ聞ゆるかぎりは、又えり出で給へり。かの山

里の御すみかの具は、えさらず取り使ひ給ふべき物ども、殊

更によそひもなく事そぎて、又さるべきふみどもふ

んじふなど、入れたる箱、さては琴一

つ、ぞ持たせ給ふ。所せき御調度、花やかなる御よそひな

ど、更に具し給はず。怪しの山がつめきても

てなし給ふ。さふらふ人々よりはじめ、よろづの事、皆西の對

に聞え渡し給ふ。りやうじ給ふみしやう、みまきより始め

て、さるべき所々の券など、皆奉り置き給ふ。そ

れよりほかの御倉町・納殿などいふ事まで、少納言を

源氏歸郷後
二條院の留守の事を
かみしも
（普）
（ふ）
（山）
（科）
是非とも
（し）
（な）
（し）
（つ）
（こ）
（又）
（さ）
（る）
（べ）
（き）
（ふ）
（み）
（ど）
（も）
（ふ）
（ん）
（じ）
（ふ）
（な）
（ど）
（入）
（れ）
（た）
（る）
（箱）
（な）
（ど）
（さ）
（て）
（は）
（琴）
（一）
（つ）
（ぞ）
（持）
（た）
（せ）
（給）
（ふ）
（所）
（せ）
（き）
（御）
（調）
（度）
（花）
（や）
（か）
（な）
（る）
（御）
（よ）
（そ）
（ひ）
（な）
（ど）
（怪）
（し）
（の）
（山）
（が）
（つ）
（め）
（き）
（て）
（も）
（て）
（な）
（し）
（給）
（ふ）
（さ）
（ふ）
（ら）
（ふ）
（人）
（々）
（よ）
（り）
（は）
（じ）
（め）
（よ）
（ろ）
（づ）
（の）
（事）
（皆）
（西）
（の）
（對）
（に）
（聞）
（え）
（渡）
（し）
（給）
（ふ）
（り）
（や）
（う）
（じ）
（給）
（ふ）
（み）
（ま）
（き）
（よ）
（り）
（始）
（め）
（て）
（さ）
（る）
（べ）
（き）
（所）
（々）
（の）
（券）
（な）
（ど）
（皆）
（奉）
（り）
（置）
（き）
（給）
（ふ）
（そ）
（れ）
（よ）
（り）
（ほ）
（か）
（の）
（御）
（倉）
（町）
（納）
（殿）
（な）
（ど）
（い）
（ふ）
（事）
（ま）
（で）
（少）
（納）
（言）
（を）
（乳）
（母）
（の）
（心）

つれなき御もてなし源氏から
冷淡な取扱は受けてゐるもの
一緒に居た間は慰めて居つた
のであるが、これからは何によ
つて慰められようと思ふけれど
も。

上下皆まうのぼらせ上蔭下蔭
の女房全體を繁上方に招いて。

今はと世まいざ退京といふ時
の憂さつらさも一度も逢ふ折が
逢瀬なきの歌一度も逢ふ折が
なく、因なつたたのでせうか。
「流るる」に流涙の意がひいかせ
てある。涙の河は流れる涙を河
に見立て、呼んだもの。
道のほど途中では大變だから。
人目については手紙を落して

はかばかしくしきものうらめたから見置き給へれば、親しきかな
家司けいしども具して、しろしめすべきさまども宣まことひあづく。源氏付の
御方の中務中將の君中務などやうの人々、つれなき御もてなし
ながら、見奉る程程こそ慰めつれ、何事につけてかと思へども、
運ま命ありてこの世に又歸るやうもあらむを待ちつけむと思
はむ人は、繁上仕へて居よこなたにさぶらへ」とのたまひて、上下皆まうのぼ
らせ給ひて、さるべき物どもなど品々品々くばらせ給
ふ。若君夕霧の御乳母たち、花散里などにも、風流な散弄物は勿論をかしきさまのはさ
るものにて、實用の方面迄まめくしき筋にあばし寄らぬ事なし。關月夜内侍
のかみの御もとに、傳わりなくして、傳聞え給ふ。源文とはせ給
道理ながらはぬもことわりに思ひ給へながら、今はと世を思ひ給へ侍る程
の憂さもつらさも、たぐひなき事にてこそ侍りけれ。
逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや流るるみ水脈をのはじめなりけむ
と思ひ給へ出づるのみなむ罪のがれがたう侍りける。道のほど

女 朧月夜。

涙河の歌 御流謫後の再會の機を待たずには私は死んでしまふ事
でせう。瀬は機會である。いま一度
なくして別れるのかと思ふのは残念だが。

憂しとおぼしなすゆかり 朧月夜の身内の者には源氏が嫌つて居る人々が多い爲に、並大抵ならず秘して居られる事故、強ひまひになつては仰しやらずじまつた。あすとの 明日出發といふ日の夕方。

春宮 後の冷泉院。

はた 別離の悲はどこも同じといふもの。つらかりし御心ばへも 源氏は藤壺が今迄冷淡であつた事もそれとなく恨みたと思はれたが、今更になつたと今更いやな事だと藤壺が思はれるだらうし。

須磨

も危ければ、こまかには・聞え給はず。女といみじう覺え給ひて、忍び給へど、御袖よりあまるも所せくなむ。

朧月夜 涙河うかぶ水泡も消えぬべし流れてのちの瀬をも待たずて

泣くく 亂れ書き給へる御手、いとをかしげなり。いま一度・

たいめ・なくてやとおぼすは、なほ口惜しけれど、おぼし返して、憂しとおぼしなす・ゆかり多くて、おぼろげならず忍び給

へば、いとあながちにも聞え給はずなりぬ。

あすとの暮には、院の御墓をがみ奉り給ふとて、北山へまう

で給ふ。曉かけて月いづる頃なれば、まづ入道の宮にまうで給

ふ。近き御簾の前に御座まゐりて、御みづから聞えさせ給ふ。

春宮の御事を、いみじくうしろめたきものに思ひ聞え給ふ。

かたみに・心深きどちの御物語、はたよろづのあはれま

さりけむかし。なつかしうめでたき御けはひの昔に・變らぬに、

つらかりし御心ばへも、かすめ聞えさせまほしけれど、今更に

大將 源氏。

御山 桐壺院の御陵。

とみに物も 涙にむせ返つてゐられて。

見しはなく、桐壺院は崩御源氏は謫居といふ悲しい世の末に、私は出家した甲斐もなく泣く暮してゐます。

別れしに 院の崩御によつて悲しさは盡きたのに、又謫居の事だ。此の世のつらさがまさりまし

うたてとおぼさるべし、わが御心にも、なかく今一きは亂れ
 まさりぬべければ、念じかへして、ただ、源かく思ひかけぬ罪
 に當り侍るも、思ふ給へあはする事藤壺との間の秘密の一ふしになむ空怖ろしう
 ・侍る。惜しげなき身源氏の身はなきになしても、宮春宮の御世だに事のどな
 ・くおはしまさば」とのみ聞え給ふぞことわりなるや。宮藤壺も皆
 ・あばし知らるる事まぐにすれば、御心のみ動きて、聞え
 やり給はず。大將、よろづの事をかき集めおぼし續けて、
 泣き給へる氣色、いと盡きせずなまめき給たり。源御山みやまに參り
 侍るを、御ことづてや」と聞え給ふに、とみに物も聞え
 給はず、わりなくためらひ給ふ御氣色なり。
 見しは亡くあるは悲しき世の果はてを背きし効かひもなくぞふる
 いみじき御心惑ひどもに、あばし集むる事ども、えぞ續けさ
 せ給はぬ。
 別れしに悲しき事は盡きにしを又ぞ此世の憂さはまされる

月待ち出でて 前に「曉かけて
月いづる頃」とあつた。

かの御禊の日、葵卷の齋院の御
禊の日。卷一、三三三頁。
右近の尉の藏人、伊豫介の子で
紀伊守の弟。
得べきかうぶりも、當然從五位
下に叙せられる筈の處、その年
限も過ぎたのに、到頭除籍され
て、役も免ぜられて具合がわる
いので。

引きつれて、賀茂の瑞垣を見る
につけても、行列を作つて葵を
かざして練りあるいた御禊の當
時が思ひ出されて賀茂の神まで
が恨めしい。

憂き世をばの歌、退去後に残る
我名の正否は糺の神に御一任し
て、今私は憂き世を遁れて須磨
に退去します。
物めです。右近尉は物に感じ
易い若人故。

須磨

月待ち出でて、出で給ふ。御供にただ五六人ばかり、下人も睦
まじき限りして、御馬にてぞおはする。更なる事なれど、
得意時代のありし世の御ありきに異なり。皆いと悲しう、思ふうちに、
かの御禊の日、假の御隨身にて仕うまつりし右近の尉の藏人、
得べきかうぶりも程、過ぎつるを、遂に御簡削られて、官もと
られてはしたなければ、御供にまゐる内なり。賀茂の下の御社
をかれと見渡す程、ふと、思ひいでられて、おりておほん馬の
口を取る。

右近尉引きつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣
といふを、源氏心げにいかか思ふらむ、人よりけに花やかなりしも
のを、とおぼすも心苦し。源氏君も御馬よりあり給ひて、御社の
かたををがみ給ふとて、神にまかり申し給ふ。
源氏憂き世をば今ぞ別るとどまらむ名をば糺の神にまかせて
と宜ふさま、物めでする若き人にて、

てあはれにめでたしと見奉る。

御山にまうで給ひて、(昔) 故院在世當時のおはしましし御有様(など)、只目の前の

限りなきにても 至尊の御身分であつても。

申し給ひても 源氏が御墓の前

やうにおぼし出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞいはむかたなく口惜しきわざなりける。よろづの事を泣く泣く申し給ひても、そのことわりをあらはにえ承り給はねば、さばかり申し宣はせしさまくの御遺言(ごゆいごん)は、いづちへか消え失せにけむといふかひなし。御墓は道の草しげくなりて、分け入り給ふほど、いとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立(こたち)木深く心すこし。歸り出で(は)む方もなき(知られぬ)心地して、をがみ給ふに、ありし御面影(の)・さやかに見え給へ(ひ)る(も)、そぞろ寒きほどなり。

なき影や 故院の御靈は何と思つて私を御覽になる事やら、あれあの父帝の御佛と思つて見て居つた月も、此度の左遷を悲しく思つたのか、雲隠れてしまつた。

源氏なき影やいかが見るらむよそへつつ眺むる月も雲隠れぬる明(明)け果つる程に歸り給ひて(出で給へり)、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を(天宮の)御かはりとしてさふらはせ給へば、その局にとて、王命婦の

又まゐり侍らずもう一度参上せずじまひになつてしまひます事が、數多の心配にまして心配に思はれます。

いつかまた私は零落した山賤ですから、また春の都の花を散りすぎたる散りすぎたるとあるが「散過」が正しい。卷一、二七六頁。

あぢきなき事に以下命婦の心に藤壺と源氏との事を思ひ續けるのである。

心と 自ら求めて。

くやしうわが心一つにそれといふのも自分の料簡一つに歸する事のやうに命婦は悔しく思はれる。

源氏文「今日なむ都離れ侍る。(今一度まる)又まゐり侍らずなり。(侍と)ぬるなむ、
あまたの憂へにまさりて思ふ給へられ侍る。よろづ推し量りて
啓し給へ。春宮に

源氏
いつかまた春の都の花を見む時うしなへる山がつにして」
櫻の散りすぎたる枝につけ・・・給へり。斯くなむと御覽せ
さすれば、春宮御年八をさなき御心地にも、まめだちておはします。命婦御

返り・いかが物し侍らむ」と啓すれば、春宮暫し見ぬだに戀しき
ものを、遠くはましていかにといへかし」と宣はす。(れは)もの
はかなの御返りやと、あはれに見奉る。命婦はあぢきなき事に御心を
碎き給ひし昔の事、折々の御有様思ひつづけらるるにも、物思
ひなくて我も人も過ぐし給ひつべかりける世を、心とおぼし歎

きけるを、くやしう、わが心一つにかからむ事のやうにぞ覺ゆ
る。御返りは、「更に・聞えさせやり侍らず・・・お前には啓し
侍りぬ。心細げにおぼしめしたる御氣色もいみじう・・・なむ」

いちはやき世を何かといふと直に弘徽殿方に睨まれるのを憚つて。

人わろく恨めしき人多く人目
にわるい程恨めしく思はれる人
が攀山で。

狩の御衣 狩衣。

いかに聞ゆべき事お別れした
ら、どんなにお話したい事が澤
山積つたなと思はれる事だら
う。
怪しういぶせき妙に胸のつか
へたやうな心持がするのにか

わが身かくて自分がかうして
はかない浮世を捨てて須磨に行
つたならば、どんな風に紫上は
漂浪される事やらと。

ど、さしあたりては、替教のないいちはやき世を思ひ憚りて、斯かる程に
参り寄る人もなし。世ゆすりて惜悲ししみあはれがり聞えうご、下
にはおほやけを誇り恨み奉れど、身を捨ててとぶらひ参らむに
も、何のかひかはと思ふにや、かかる折こは人わろく恨めしき
人多く、世のなかはあぢきなきものかな、とのみよろづにつけ
てちも・ぼすし・知らるる。

出縫の當日

紫上

その日は、女君に御物語のどかに聞え暮し給ひて、例の夜深く
出で立ち・給ふ。狩の御衣かんぞなど、旅の御よそあそひいたくやつし給

ひて、端近く月出でにけりな。なほすこし出でて、見だに送り給へ

かし。いかに聞ゆべき事多く積りにけりとのみ覺えむとすらむ。

一日二日ひとふたたまさかに隔つる折せだに、怪しういぶせき心地するも

のを」とて、御簾の巻きあげて、端の方おはすにいざなひ聞え給へば、

女君泣き沈み給へるおはする・・・ためらひてゐざり出で給へる月影

・・・いみじうをかしげにて居給へりる・・・わが身かくて

おぼし入りたるが、自分で悲しんで居ては沈みきつておられる紫上が、入悲しがられる事だらうから。

生ける世の生別といふ事のあつたことを、死ぬまでは貴女に別れることはいないと約束したものであつた。

惜しからぬ、惜しからぬわが命と取りかへても、今日の生別を暫く引留めたいものです。

申の時ばかり 午後四時頃。

大江殿 難波の渡邊にあつて、齋宮が伊勢から歸洛される時の唐國にの歌 源氏の歌 楚の屈原は懷王に放たれて行く、澤畔にさまよひ終に汨羅に投じたが、私はそれよりも行方知れぬ流浪の生活をする事だらう。

はかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへ給はむと、
しるめたく悲しけれど、
おぼし入りたるがいとどし
るべければ

「生ける世の別を知らず契りつつ命を人にかぎりけるかな
はかなし」など、
あさはかに聞えなし給へば

惜しからぬ命にかへて目の前の別をしばしとどめてしがな
げにさぞおぼさるらむと、いと見捨てがた
果てなば、はしたなかるべきにより、急ぎ出で給ひぬ。

道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗り
給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかり

にかの浦に著き給ひぬ。假初の道にても、かかる旅をならひ給
はぬ心地に、心細さもをかしさも珍らかなり。大江殿といひけ

る所はいたく荒れて、松ばかりぞしるしなりける。

唐國に名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ

かつ返るま 波のかへるのを都
にかへるのに思ひよせて羨しく
といつたのである。
羨しくも 伊勢物語「いとどし
く過ぎゆく方の戀しきに羨しく
も返る浪かな」

三千里のほかの心地 文集十三
一十一月中長至夜、三千里外遠
行人、若爲^一獨宿^二楊梅館^三、冷枕
單床^一、若身^二堪^三へがたく涙がこぼ
れる。伊勢物語・古今雜上「わ
が上に露ぞおくなる天の川とわ
たる舟の櫂の半か」
ふるさとをの歌 峯の霞はわが
故郷を隔てて居るけれども、故
郷人の眺める空もわが眺める空
も同じ空ではある。「か」は「か
な」の意。
藻鹽垂れつつ 古今雜下行平「わ
くらには問ふ人あらば須磨の浦
に藻鹽垂れつつわぶと答へよ」

昔の御心のすさび 昔の心の遊
戯即ち浮氣心が思ひ出される。
御庄のつかさ 源氏の私領の管
理者。

須磨

渚に寄る波のかつ返るを・見給ひて、
ずんじ給へるさま、さる世の古言なれども、
れ、悲しとのみ御供の人々・思へり。うち顧み給へるに、こ
しかたの山は霞はるかにて、誠に三千里のほかの心地するに、
權の雫も堪へがたし。

源氏 何を見てもつらく
つらからぬものなくなむ。おはすべき所は、行平の中納言の、

藻鹽垂れつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはや
入りて、あはれに心すごげなる山・中なり。垣のさまより始め

て、珍らかに見給ふ。茅屋ども、葦葺ける廊めく屋など、をか
しうしつらひなしたり。所につけたる御すまひ、やう變りて、

斯かる折ならずばをかしうもありなましと、昔の御心のすさび

・あ・ぼし出づ・。近き所の御庄のつかさ・召して、さ
るべき事どもなど、良清の朝臣など親しき家司にて、仰せ行ふ

水深うやりなし 庭内に遣水を深く流し。
うつつならず 現實とは思はれぬ。
親しき殿人 源氏に親しい家來。

うもれいたく 気がしづんで。

事しづまりゆく 物事がかたづいていく。

松島の歌 わが歸りを待つて居て下さる入道宮はどんな氣持で暮して居られるだらう。須磨の浦に居る私が涙がちに居る此頃は。松島に待つて、海人に尼がひとかしてある。

もあはれなり。時の間に、いと見所ありてつくるじ。しなさせ給ふ。

水深うやりなし、植木(などし)として、今はとしづまり(さ)給ふ心地うつつならず。國(攝津守)の守も親しき殿人(とらびと)なれば、忍びて心寄せ仕(源氏に)

うまつる。かかる旅所(相談相手もないから)ともなく、人さわがしけれども、はかば

かしく物をも宣ひあはすべき人(妻らむ)しなれば、知らぬ國の心地し

て、いとうもれいたく、いかで年月を過ぐ(む)さましと(すらむと)お

ばしやらる。

やう(次第に)く事しづまりゆくに、長雨(夏になつて)の頃になりて、(つれづれと)京

の事どもおぼしやらるるに、戀しき人多く、女君(業上が歌いて居た様子)のおぼしたり

しさま、春宮(冷泉院)の御こと、若君(夕霧が無心に遊んで居た事)の何心もなく紛れ給ひしなどは

じめ(て)、此處彼處思ひやり聞え給ふ(うて)。京へ人いだし立て給ふ。

二條の院へ奉り給ふと、入道の宮と(は)は、書きもやり給はず、

くらされ給へり(ふ)。宮には、

「松島の海人の苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたる頃」

きし方行くさき 此頃はわけて
過去も未来も暗闇になつたやう
な氣がして、涙の爲に汀の水か
さも殖えまして。訂まさりて
訂まさりて 貫之集・六帖四「君
惜しむ涙落ち添ひこの川の汀ま
さりて流るべらなり」

こりずまの歌 私は性懲りも
なくあなたに逢ひたいと思つて
居るが、あなたは何と思つて居
られる事であらう。こりずまは懲
りずから須磨にいひかけたもの
で、懲りは君まつ鳥などいふ時
の君と同じく小枕詞である。
大殿にも 左大臣にも宰相乳母
にもお手紙があつて、その中に
は夕霧に忠實にお仕へ申すべき
旨を書き送られた。

もてならし給ひし 源氏が今迄
使ひ馴らされたお道具類や。

今はともう死んでしまつた人
の様に紫上が敷いて居るので。

須磨

悲しきは始終の事ですが、
いつと侍らぬなかにも、きし方行くさきかきくらし
汀まさりてなむ。内侍のかみの御もとに、例の中納言の君の
・ ・ ・ 私ごとのやうにて、なかなるに、源文「つれく」と過ぎにし
方の思ふ給へ出でらるるにつけても、

源氏 海松布に見る目にかけてある。
こりずまの浦のみるめも床しきを鹽焼く蜚やいかが思はむ」

さま、書き盡し給ふ言の葉、思ひやるべし。大殿にも、

宰相の乳母にも、仕うまつるべき事なども書きつか

はす。京には、この御文とところに見給ひつつ、御心亂れ

給ふ人々のみ多かり。二條の院の君は、そのままに起きもあが

り給はず、盡きせぬさまにおぼしこがるれば、さぶらふ人々も

こしらへわびつつ、心細う思ひあへり。もてならし給ひし御

調度ども、彈鳴らし給ひし御こと、ぬぎ捨て給へる御ぞの匂ひ

などにつけても、今はと世になくなりたりむ人のやうにのみお

ぼしたれば、かつは、ゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈

二かたに 僧都は二つの意味をかたに祈齋された。即ち一つは紫上がお歎きになる心を落着けて安するやうにと、又一つは源氏がお祈り申される。

旅の御宿直物 旅中の夜具類の平絹。目を細かく堅く織つた無文の直衣など着たる源氏は今迄無文の直衣なども紫上は新調して贈るにつけても、紫上は昔と勝手が違つたやうな氣がして悲しい。さらぬ鏡前に源氏が詠んだ歌「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れ物」とかう思ひめぐらし色々苦勞もして、經驗を経て來た年輩の人にさへ悲しいのだもの。ままして紫上にお馴染み申上げ、君は又父母にもなつてお世だから、養育し馴れて來られた事

忘草も生ひやすらむ 忘れる事もあらう。忘草は萱草(クワンザウ)の事。

りの事など聞ゆ(礼ほ)。二かたに御修法(みちほふ)などせさせ給ふ。かつは斯くお(も)ぼし歎く御心を(も)しづめ給ひて慰め、又(平ら)かじもとの如(思ひ)くに歸り給ふべきさまに(給へ)など、心苦しきままに祈り申し給ふ。旅の御宿直物(おんとのもの)など、調じて奉り給ふ。織(かとり)の御直衣指貫(など)し給ひて、さま變りたる心地するもいみじきに、「さらぬ鏡(E)」と宣ひし(御)・面影の、げに身に添ひ給へるも(た)心地のみナれど、かひなし。出で入り給ひしかた、寄り居給ひし眞木柱などを見たまふにも、胸(柴止は)のみふたがりて(盡)きせず悲し、物をとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬるよはひの人だにあり、ままして馴れむつび聞え(給ひ)、父母(源氏が)になりつつあつかひ聞えおほし立てならはし給へれば、俄(源氏に)に引きわかれて、戀(柴上が)しう思ひ聞え給へる、ことわりなり。ひたすら世に亡くなりなむは、いはむ方なくて、いふかひなき(く)にても、やうく忘草も生ひやすらむ。聞(須磨は)くほどは近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらぬをおぼすに、

なさけある氣色 少しでも源氏に同情してゐるやうな様子です。あはれをも御覽じ過ぐし源氏の御情をも大抵は知らぬ顔で通し、無愛相な仕打をされたかばかりに憂き世のこれ程うに露程も二人の情事について言ひ出す事もなくすんだのも一つはまた源氏のお仕打が切なる感情の自由にかかせないで、世間體よく秘密をかくしを思ひ出したとどうして源氏を思ひ出しか。おもしもむけ 方針・態度・仕打。

鹽垂るるの歌、長い間お待ち申して居る私も、涙に濡れるのを仕事として歎を重ねて居ます。なげきの木は鹽焼く材料で、その木を積みあげるといふ意味を影る。きかされた一種の修辭法である。

須磨

盡きせず・なむ。入道の宮にも、春宮の御事により、あぼし歎くさま、いと更なり。御宿世のほどを、ぼすには、いかが浅くはあぼされむ。年頃は、只物の聞えなどの、つつましさ、すこし・なさけある氣色見せ・ば、それにつけて人の咎めいづる事もそとのみ、ひとへにあぼし忍びつつ、あはれをも多う御覽じ過ぐし、すく／＼しうもてなし給ひしを、かばかりに憂き世の人言なれど、かけても此の方にはいひ出づる事・なくてやみぬるばかりの人の御もむけも、あながちなりし心の引く方に、まかせず、かつは目やすくもて隠しつるぞかしと、あはれに、(も思ほし知れぬ御心はへのまめごとにもはか
なき事にもありがたきまなどをあはれに)戀しうもいかが、あ
 ぼし出でざらむ。御返りもすこしこまやかにて、(藤文)此頃は、いとど、

鹽垂るる事をやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞ積む

大殿の事など書いてあるに、夕霧の事など書いてあるに、おのづから自然の機もあらう。頼り何人も配する附添つて居ると、却つて親の道は夫婦は迷ふ。一乗の一人の親の心は後撰のあなねども歌を思ふ道として感ひぬるかな。この歌を本歌として感ひぬるかな。この歌を本歌として感ひぬるかな。この歌を本歌として感ひぬるかな。

須磨

おぼせば、やがて御さうじんにて、あけくれ行ひ。ておはす。大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、おのづからあひ見てむ。頼もしき人々物し給へば、うしろめたらはあらず、とおぼしなざるは、なかくこの道は惑はれ給はぬにやあらむ。

まことや、さわがしかりし程の紛れに、漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりも、ふりはへ尋ねまぬれり。浅からぬ事ども書き給へり。言の葉筆づかひなどは、人より殊になまめかしう、いたり深く見えたり。御息なほうつつとは思ひ給へられぬ御すまひを承るも、明けぬ夜の心惑ひか。と。なむ。さりとも年月は隔て給はじと思ひやり聞えさするにも、罪深き身のみこそ、又聞えさせむ事も遙かなるべけれ。

浮海布と登日
 うきめ刈る伊勢をの蟹を思ひやれ藻鹽垂るてふ須磨の浦にて

伊勢島やの歌、伊勢島やから漁りてもまづは、潮干潟であさつたならば、貝はあるべき筈であらうが、そのかひもないといふ意味で、「いふかひなき」を生みだす序詞である。伊勢島は伊勢といふと同じことで、萬葉集に大和の事を大和島といつてあるのと同じく、一種の歌言葉である。歌は何のかひもない我が身であつたの意。筆をおいてはまた筆を執り。筆をおいてはまた筆を執り。

あはれに思ひ聞えし人を以下源氏の心。あの御息所は私がある前、可愛いと思つた人ではあるが、生霊の一條で、いやな女だと疎んじた私の間違つて考へかたし、御息所もがつかりして別れてしまつたのだ。

すゑさせ給ひて、引きとめて置かれて。

氣色ある一ふしある。河内本の如く「氣色ばめる」とある方がよく聞える。

さぶらひ人。身分ある人に侍して雑用を勤める人。斯く世を離るべき都を離れねばならぬ身を豫期して居りましたらいつそ伊勢にお供するののでしたに、と徒然で心細いものですから。

よろづに思ふ給へ亂るる世の有様も、なほいかになりはつべきにか。と多かり。

御息所 伊勢島や潮干の潟に漁りてもいふかひなきは我身なりけり

物をあはれとおぼしけるすまに、打置きく書き給へる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻き續けて、墨つきなど見どころあり。

あはれに思ひ聞えし人を、ひとふし憂しと思ひ聞えさせし心あやまりに、この御息所も思ひうんじて別れ給ひにし、とおぼせ

出づれば、今にいとほしう忝きものに思ひ聞え給ふ。折からの御文、いとあはれなれば、御使さへ睦まじうて、二三日すゑさせ給ひて、かしの物語などせさせて聞召す。若やかに氣色あるさぶらひの人なりけり。かくあはれなる御すまひなれば、かやうの人もあつから物遠からで、ほの見奉る御さまかたちを、いみじうめでたしと涙落しけり。御返り書き給ふ。言の葉思ひやるべし。かく世を離るべき身と思ひ

伊勢人の歌 湖月抄師説「伊勢へ御供申したらば、波の上漕ぐ危き事ありとも、斯かる愛目にあふまじきものを、儀也」細流「伊勢人は怪しきものぞなぞといへば小船に乗りて波の上漕ぐ。この歌にて詠み給ふにや」
 鹽が積むの歌 私は歎きの中に須磨の浦に住んで思ひなやまなければ住むがひどかして住む浦の意味に使つてある。

見給ふに 花散里からの返事を源氏が

をかしきも 源氏の心に。河内目馴れぬ心地 京で見なれた手紙だが、かうして見ると珍らしく思はれて。
 荒れまざるの歌 お別の後日毎に荒れゆくわが軒先の忍草を眺めて居りますと、涙が露のやうにしげく袖の上に降りかかります。ついで 花散里方の土塀。

給へらましかば、同じうは慕ひ聞え・ましものを、などなむつれに心細きままに、

源氏 伊勢人の波の上漕ぐ小舟にもうきめは刈らでのらましものを 蟹が積むなげきの中に鹽垂れていつまですまの浦とながめむ

聞えさせむ事のいつとも 侍らぬこそ、盡させぬ心地し侍

れ」などぞありける。かやうに、いづこにも覺束なからず聞

えかはし給ふ。花散里も悲しとあぼしけるままに、

書き集め給ひける御心々見給ふに、をかしきも、

目馴れぬ心地して、いづれも打見つつ慰め給ひ、

かつは物思ひの催しぐさなめり。

花散里 荒れまざる軒のしのぶを眺めつつ繁くも露のかかる袖かな

とあるを、げに葎より外の後見もなきさまにておはすら

む、と思しやりて、「長雨にち所々くづれて」など聞き

給へば、京の家司のもとに仰せ遣はして、近き國々のみし

仕うまつるべき由 修理すべき
やう申し遣はす。

限りある女御御息所にも
限は定まつた閨中の務を持つ
る女御や御息所でもなく、尙
侍といふおもて勤めの役である
からといふ事でも源氏との關係を
お濟ましになつた。又かの
憎い源氏故に、臆月夜も
ける事になつたのだが。

思ひいづる事のみ 臆月夜の心
の内に源氏の事のみが色々思ひ
出されるのは勿體ない。
その人 源氏の事。

やうの者など催させて、(すりなど)仕うまつるべき由宣はす。

かんの君は人笑へにいみじうおぼしくづほるを、(いらいら)おとどいと
右大臣のまなむめ故

悲しうし給ふ君にて、せちに宮にも申し、私御殿うちにも奏し給ひけ

れば、(何かは)限りある女御御息所にもおはせず、おほやげさま

の宮仕(ほな)ととおぼしなせり(おも)へりしき。又かの(入心)憎かり

しゆゑ(い)こそいかめしきことも出でこしか、許され給ひて參り
が室内するに

給ふべきにつけても、なほ心にしみにし事のみぞ、あはれに覺
源氏の事

え給ひける。七月になりて參り給ふ(ふみ)いみじかりし御思ひ
臆月夜室内

の名残なれば、人の謗り(を)も知ろしめさ(しん)れず、例のうへにつ

と(うへ)さぶらはせ給ひて、よろづに恨み、かつはあはれに契

ら(り)語らば、朱雀院は御さまかたちも、いとなまめかしう清らなれ

ど、思ひいづる事のみ多かる心の内ぞ(い)忝き。御(お)遊び(な)

のついでに(も)、朱雀その人(の)なきこそいとさう(い)しけれ。い

かにましてさ思ふ人多からむ。何事にも、光なき心地(こ)・するか

院のおぼし宣はせし。故院御遺言の事は卷一、三九八頁参照。涙ぐませ給ふに、朱雀院が。世の中こそ、世の中は生きて居つても詰らぬものだと悟つたから、長生きしようとは思はぬ。私が死んだらどう思ひますか。

近き程の別れに、つい程近い須磨の別れ(源氏との別)ほどにも思つてくれないだらうと思ふと残念です。拾遺戀一「戀ひ死なむ後は何せむ生ける日の爲こそ人は見まきくほしけれ」

いづれに落つるにか、私の爲にか源氏の爲にか、どちらに對してこぼれる涙でせう。今までそなたとの間に皇子のなみのが淋しい。春宮を院の宣はせし、冷泉院を朱雀院の御猶子にして位を譲り給へと桐壺院の御遺言のあつた事。よからぬ事も、弘徽殿が冷泉院をおしつけて八宮をお立て申さうとして居られるから。若き御心の強き所なき、主上の御さま。

な」^(な)と宣はせて、^{桐壺院}朱雀院のおぼし宣はせし御心^(遺言)を^(も)たがへ^(最)・つるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませ給ふ^(へる)に^(も)、え念じ給はず。^{朱雀}世の中こそあるにつけても^(なきにつけても常ならず)あぢきなきものなりけれと思ひ知るままに、久しく世^(う)にあらむものとなむ更に思は^(ほえ)ぬ。さもなりなむに、いかがおぼさるべき。近き程の別れに思ひおとされむこそねた^(かるご)。生ける世にとは、げによからぬ人のいひおきけむ」と、いとなつかしき御さまにて、物をまことにあはれとおぼし入りて宣はするに^(こ)、つけて、ほろ^{關のさま}くとこぼれ出づれば、^{朱雀}さりや。いづれに落つるにか^(ならむ)と宣はす。^{朱雀}今まで御子たちの^(たに)なきこそさうくしけれ。春宮を院の宣はせしさまに思へど、よからぬ事も^(ごもの)、出でくめれば、心苦しう^(ま)など、世^{主上の御心に背いて政事をされる人々があ}を御心のほかにま^(る)つりごちなし給ふ人々のあるに、若き御心の強き所なき程にて、いとほしとおぼしたる事^(ご)も多かり。

心づくしの秋風に 古今秋上
 一木の間に漏りくる月の影見
 れば心づくしの秋は來にけり
 關吹き越ゆる 續古今躰旅行平
 一旅人は秋涼しくなりにけり關
 吹き越ゆる須磨の浦風

そばだて、白樂天の遺愛寺鐘
 欵枕聽とあるのによつて書い
 た言葉。耳をたて、といふ意
 味。
 四方の嵐 四方に吹きめぐつて
 ある嵐。淋しさを強調した言葉。
 枕浮くばかりに 六帖五人磨
 一獨寢の床にたまれる涙には石
 の枕も浮きぬべらなり

戀ひわびての歌 浦波が都戀し
 まに堪へかねて泣くわが聲に似
 て聞えるが、あれはわが聲に似
 の住む都から風が吹いて來るの
 であらう。
 げにいかにも思ふらむ 成程この
 人々は何と思つてゐる事だらう
 私といふ者一人の爲に身の程々
 につけて親兄弟と片時も離れ
 難く思つてゐる家を別れてこ
 との通り落着き場を失つてゐるよ
 さうでお思ひになると、ひどく可愛

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行
 平の中納言の關吹き越ゆるといひけむ浦浪、夜々はげにいと近
 く聞えて、又なくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

源氏の
 お前にいと人ずくなにて、うち休みわたれるに、獨り目をさ
 まし、結ひて、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、浪ただこ
 こもとに立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばか
 りになりにけり。琴をすこし搔鳴し給へるが、我ながらいとす
 ごう聞ゆれば、弾きさし給ひて、

源氏の
 戀ひわびて泣くねに紛ふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ
 と謠ひ給へるに、人々あどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれ
 で、あいなう起き居つつ、鼻を忍びやかにかみわたす。源氏の心
 かに思ふらむ、わが身一つにより、親はらから片時立ち離れが
 たく程につけつと思ふらむ家を別れ、親はらから片時立ち離れ
 て斯く惑ひあへる、と、おぼすに、いみじくて、いとかく思

色々の紙を、さまざまの色の紙を繼合せて。

人々の語り 卷一、一七一頁參照。

げに及ばぬ磯の 成程話の通りに想像も詞も及ばぬ程美しい磯の景色を類なく巧に書き集められた。千枝常則 河海抄「千枝常則、在二高名録、共以畫工也」作繪 墨繪の上を彩色する事。

所がらはまして 須磨といふ場所柄だけにまして人間界のものとも思はれない。白き綾のなよやかなる 白い綾の柔かな下著に紫苑色の指貫を召し、綺麗な色合の御直衣に、帯もしまりなく打寛ろいで居られるお姿で。

頌 慶

て居る様子を
ひ沈むさまを、(も) 心細しと思ふたうと思召すので

はぶれごとうち宜ひ紛らはし、つれづれなるままに、色々の紙

をつぎつつ、手習をし給ふ。珍しきさまなる唐の綾などに、さ

まづの繪どもをかきすさび(な)給へる、屏風のおもてどもなど、

いとめでたく見どころあり。(多か) いっぞや山寺にて、若紫巻の事

えし海山の有様を、遙(京から)におぼしやりしを、御目に近くては、

げに及ばぬ磯のたたまひ、になく書き集め給へり。人々此頃の

上手にすめる千枝常則など召して、作繪を仕うまつらせばやと、

心もとながりあへり。(あ) なつかしうめでたき御有様に、

世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことに

て、四五人ばかりぞつとさぶらひける。前裁の花いろく咲き

みだれ面白き夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひてたたまひ給

ふ御さまの、ゆゆしう清らなること、所がらはましてこの世の

ものとも見え給はず。白き綾のなよやかなる、紫苑色など

釋迦牟尼佛弟子經文を誦する
時最初に「釋迦牟尼佛弟子、某
歸命頂禮白佛言云々」と唱へ

黒木の御數珠に白い手に黒木
の數珠の映えた美しさを見て

はつかりは初雁は私が戀
らく思つてゐる人の仲間なのだ
を飛ば行く雁が悲しく聞える
かきつらねの歌雁は昔の友で
はなれないが雁の聲は列
ねは雁の縁語が思はれる
心からは自分のすきで故郷
の常世の國を捨てて旅の空に鳴
く雁を昔は自分とは無關係な
ものと思つたに今思へば自分
の境遇と同じものでした伊豫介の
さきの右近のじやう伊豫介の
子で紀伊守の弟假の隨身を勤
めた人

奉りて、こまやかなる御直衣(こ)、帶しどけなく打亂れ給へる御
さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるるかに讀み給へる
・・・・・、又世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひののしりて
漕ぎゆくなども聞ゆ。ほのかに(聞えて)、ただ小さき鳥の浮べると
見やらるるも(さまく)、心細げなるに、雁のつらねて鳴(鳴きつづきて)・・・く聲、
楫(か)のおとにまがへるを、うち眺め給ひて、御涙のこぼるるを搔
き拂ひ給へる御手つき(の)、黒木の御數珠にはえ給へるは、故郷
の女(などの)・・・戀しき・人々(ども)の心(地)、皆慰みにけり。

はつかりは戀しき人のつらなれや旅の空飛ぶ聲のかなしき
と宣へば、良清、

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はその世の友ならねども
民部惟光の事の大輔、
心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにもおもひけるかな
さきの右近のじやう、

常世出でての歌 私共も源氏や
傍輩達と一緒に居る間は旅の悲
しさがまぎれる。

所々眺め給ふらむ あちこちの
婦人達もこの月を眺めて居られ
るだらうと。
二千里外故人心 文集十四「三
五夜中新月色二千里外故人心」

霧や隔つる 賢木卷 藤壺の歌
一九重に霧や隔つる雲の上の月
を遙に思ひやるかな」卷一、四
二六頁参照。

見る程ぞの歌 自分が都で戀人
達に再會の機は遠いが、月を眺
めてゐる間は暫時氣がまぎれ
る。
恩賜の御衣は 菅家後集「去年
今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷、
恩賜御衣今在、此、捧持毎日拜二
餘香」

須 磨

「常世出でて旅の空なる雁がねもつらにあくれぬ程ぞ慰む
友にはくれては
友まどはしてはいかに侍らまし」といふ。親の常陸常陸介になりて

くだりし。にも誘はれで源氏のお供に參れるなりけり。したには思ひ碎くべ
かめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。
うはべは元氣よく

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとお
東山の端からぼし出でて、殿上の御遊び・戀しく、所々眺め給ふらむかしと

思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。「二千里・
外・故人・心」とずし給へる。例の涙もとどめられず。入道
人々は

の宮の、「霧や隔つる」と宣はせしほど、いはむかたなく戀し
源の心にく、折々の事・思ひ出で給ふに、よよと泣かれ給ふ。人々「夜更
け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。
源氏は

見る程ぞしばし慰むめぐりあはむ月の都ははるかなれども
源氏

その夜、うへのいとなつかしう昔・物語などし給ひし御さま
朱右院の、院に似奉り給へりしも戀しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜

憂しとのみの歌、御衣を戴いた事などを思へば、主上に對して只管つらいと思ふだけではなく、懐しく思はれて、兩様の涙に袖が濡れます。類廣く眷族が多く。

ほかより、須磨は他所より景色のよい所故。

きん 七絃琴。

所のさま人の程、須磨といふ場所の源氏といふ美しい人物、琴の音の心細さ、それらを皆集めて、物の哀を解する人は皆泣いた。大貳の事を、帥は親王の任ずる官で之を帥宮と申す。帥宮は吏務を執らず、帥が之に代る。権帥が故に大貳を帥ともいふ。上つしかとさぶらひて、早速參

の御衣は今ここにあり」とずしつ入り給ひぬ。御ぞは誠に、
・身放たず傍に置き給へり。

憂しとのみひとへに物は思ほえて左右にも濡るる袖かな

その頃、大貳はのぼりける。いかめしう類廣く、むすめが
ちにて所せかりければ、北の方は舟にてのぼる。浦づたひに逍

遙しつづくるに、ほかより、面白きわたりなれば、心と

まるに、大將かくておはすと聞けば、あいなうすいたる若きむ

すめたちは、舟のうちさへ恥かしう心げさうせらる。まして五

節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、きんの聲風につきて

遙に聞ゆるに、所のさま、人の御程、物のねの心細さ取り集め

・心ある限り、皆泣きにけり。帥御消息聞えたり。いと遙

なる程よりまかりのぼりて、まづいつしかさぶらひて、

都の御物語もそこそ思ひ給へ侍りつれ。思ひの外にかくておは

しましける御宿りを、まかり過ぎ侍る、忝く悲しうも侍るか

あひ知りて侍る 知人の誰彼が
澤山迎へに来て居りますので。
所せきを 大勢参上しては。

殊更に参り侍らむ 又改めて参
上致しませう。
この殿の 源氏が引立てて藏人
にしてやられた男故。

聞えを思ひて 外聞を憚つて。

御かへりさやうになむ 源氏か
ら大貳への返事の文言もそんな
風である。

まがくしう 不吉な程。

琴のねにの歌 君が奏する琴の
音に船も引止められて逡巡此處
を去るに忍びずに居るわが心を
君は御存じでせうか。初句から
綱手繩まではたゆたふを生む序
詞であつて、同時に歌の意に交
渉を持つ句。 古今戀一「いで我
人な咎めそ 大船のゆたのたゆ
たに物思ふ頃ぞ」

須磨

な。あひ知りて侍る人々、さるべきこれかれまで來向ひて
あまた侍れば、所せきを思ひ給へ憚り侍る事ども
侍りて、えさぶらはぬこと。殊更に参り侍らむ」など聞えたり。
子のちくぜん（ま）の守ぞ参れる。この殿の、藏人になし顧み（ま）給
ひし人なれば、いとも悲しいみじと思へども、又見る人々のあ
れば、聞えを思ひて、暫しも立ちとどまらず。源都離れての
ち、昔親しかりし人々、あひ見る事難（ま）うのみなりに
たるに、かくわざと立寄り物したる事」と宣ふ。御かへり
さやう（ま）に（ま）なむ。守泣くく歸りて、おはする御有様語
るに、帥（ま）よりはじめ、迎への人々、まがくしう泣きみ
ちたり。五節はとかくして聞えたり。
「琴のねに引きとめらるる綱手繩たゆたふ心君知るらめや
すきしさも、人な咎めそ」と聞えたり。ほほゑみて見給ふ
いと恥かしげなり。

心ありての歌 私を思ふ心があ
つて躊躇して去るに忍びないな
らば此處を素通りになさる管
はない引く手の綱はたゆたは
ばの枕詞。古今雜下「思
ひさりせむとは」又「思
ひさりせむとは」大鏡二
管公左衛門尉に「又播磨の國に
おはし宿りて、明石の驛といふ
所に御宿りせしめ給ひて、驛の
しつて作らしめ給へる氣色を御覽
是春秋「莫鷲時變改、一榮一落
まして落ちとまり」ましてこの
歌を賜はつた五節は此處に一人
居残りたいやうに思つた。一人
命婦の君王命婦は一切の事情
を知つて居るから。

睦まじう 源氏と懇意にして居
つた公卿達

「心ありて引く手の綱のたゆたはば打過ぎましや須磨の浦波
いさりせむとは思はざりしはや」とあり。うまやのをさにくし
取らす人もありけるを、まして落ちとまりぬべくなむおぼ
えける。

都には、月日過ぐるままに、御門を・始め奉りて、戀ひ聞ゆる

・折節多かり。春宮は、まして常に思し出でつつ、忍びて泣き

給ふを、見奉る御乳母・、まして命婦の君・、は、いみじう

あはれに見奉る。入道の宮は春宮の御事をゆゆしうのみおぼ

ししに、大將もかくさすらへ給ひぬるを、いみじうおぼし敷か

る。かかがはせん平らかにおはし過ぐして事もよろしくならは

など思ほすいと物はかなき程におはしますぞ頼もしけなき心地

し給ひける。御はらからのみこたち、睦まじう聞え給ひし

上達部など、初めつがたはとぶらひ聞え給ふなどありき。哀な
る文を作りかはし、それにつけても世の中にのみめでられ給へ

霜ののちの夢 朗詠 下雑大江朝
綱「胡角一聲霜後夢、漢宮万里
月前勝」

唯これ西に行くなり 菅家後集
「英發桂芳半具圓、三千世界一
周天、天適玄鑿雲將レ舞、唯是西
行不_三左_二遷_一」
いづかたの歌 私も何處の空
にまご_くする事だらう。月は
雲路にも迷はず往還してゐる。
その月の手前も恥かしい。

友千鳥の歌 友千鳥が聲をあは
せて鳴いて居る曉は、一人寢覺
の床に泣いて居つても、泣く友
達があると思つて力強い。

珍らしき事 京にあつては念
誦される事もなかつたのだか
ら。

家に 伺候の人々の須磨に掛け
る私宅。

も、 そんな場合が實際起る事のやうに あらむ事のやうにゆゆしくて、「霜ののちの夢」と いといた
ずし給ふ。月いとあかうさし入りて、はかなき旅の御座所は、 おましどころ
奥まで限なし。ゆかの上に夜深き空も見ゆ。入りがたの月・凄 影
く見ゆるに、「唯これ西に行くなり」と獨りごち給ひて、

いづかたの雲路に我も迷ひなむ月の見るらむ事もはづかし
と獨りごち給ひて、例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあ

はれに鳴く。

友千鳥もろごゑに鳴くあかつきは一人寢ざめのところ頼もし

まだ起きたる人もなければ、かへすく獨りごちて臥し給へり。
この歌を繰返し獨吟して

夜深く御手水まゐりて、御念誦などし給ふも、珍らしき事のや

うに、 よろづの事 めでたくのみ覺え給へば、 見 見え奉り捨てず、
源氏を

人 ちやりなら 家 家にあからさまにもえ出でざりけり。

明石の浦はただ這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、かの入道

のむすめを思ひ出でて文などやりけれど、返りごとともせず。父

承け引かざらむ。先方が不承知らしいのでも、わざと出か
けていつて、空手で歸る後姿も
阿呆らしく見えようと、ひどく
氣が引けて。

世に知らず心高う。入道は非常
に高くとまつてゐるのだが。
國のうちはその國の人々は國
守の類のみ尊重してゐるや
うだが、入道の偏屈な心には
良清が前國守の子であるけれど
も尊重せず、今迄過して來た
のであるが、
母君 明石上の母君、即ち入道
の妻。

あこの御宿世にて。娘が源氏に
嫁ぐといふ宿縁故にこんな思ひ
がけない事があるのだ。

御め 御妻、即ち愛人。

御門の御め 臘月夜の事。

思ふ心殊なり 私には別の考が
ある。

の。入道ぞ、「聞ゆべき事なむ。あからさまにたいめんもがな」といひけれど、承け引かざらむものゆゑ、行きかかりて、空しく歸らむろ手もをこなるべしと、くしいたうて行かず。世に知らず心高う思へるに、國のうちは、守のゆかりのみこそはかしこきことにすめれど、ひがめる心は、更にも思はで年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、入道、桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそ、おほやけの御かしこまりにて、須磨の浦に物し給ふなれ。あこの御宿世にて、覚えぬ事のあるなり。いかで斯かるついでにこの君に奉らむ」といふ。母、「あななたはや。京の人の語るを聞けば、やんごとなき御めどもいと多く持ち給うて、そのあまりに、忍びく御門の御めをさへ。あやまち給ひて斯くもさわがれ給ふなる人は、まさにかくあやしき山がつを心とどめ給ひてむや」といふ。腹立ちて、

心をやりに得意になつていふのも頑固らしく見える。なだめてたくとも、いくら結構な事でも、娘を初めて縁づけるのに、何も罪に當つて流されて来た人を選ぶ事はありません。さても心ま、それでも娘に心をとめて下さるならとにかく。

故母御息所 桐壺更衣。

大臣 明石入道

北方 明石上

按察大納言 桐壺更衣
かうざくなる、優れてゐるといふ評判を取つて、かうざくは警策の音で、きやうざくともいふ。河内本は「優なる名取りて」

ふ心殊なり。差上げる支度をせよ さる心をし給へ。ついでして此處にもおはしまさ

せむ」と、(わが) 心をやりていふもかたくなしく見ゆ。(伊) にぞ有

・襟は、家の内を まはゆきまでしつらひかしづきけり。母君、「なだて、め

でたくとも、物のはじめに、罪に當りて流されおはしたらむ人

をしも心(思ひ)・かけむ。さても心をとどめ給ふ・べくはこそあらめ、

たはぶれにても・(よじ)あるまじき事なり」といふを、いといたく

つぶやく。入道「罪に當ることは、もろこし唐土にもわがみかどにも、かく

世にすぐれ何事にも人に殊になりぬる人の、必ずあることなり。

いかに物し給ふ君ぞ。(は)・(かの)故母御息所は、おのが叔父(おぢ)に物し給

ひし按察大納言の御むすめなり。いとかうざくなる名を取りて

宮仕に出だし給へりしに、桐壺院國王すぐれて時めかし給ふ事並びな

かりける程に、私儀殿などの人のそねみ多くて亡せ給ひにしかど、この君の

とまり給へる・(い)いとめでたし・(か)・かく女は心を高くつかふ

べきものなり。おのれかかる田舎人なりとておほし捨てじ」な

なつかしうあてはかに、やまし
みがあつて、あでやかで。
身の有様を、わが身の上を取る
にも足らぬ者と自覺して。

思ふ人々、自分を愛してくれる
親達。

海の底にも、若紫巻にもあつ
た。卷一、一七三頁参照。

年に二たび住吉に、この事は若
菜上巻に見ゑる。

權系し若木の櫻、前に「植木ど
もなどして」とあつた。二六頁
参照。

南殿の櫻は、紫宸殿前左近櫻。
一年の花の宴に、花宴巻に載せ
られた事。卷一、三〇九頁以下
参照。

どいひ居たり。このむすめ明石上すぐれたるても・・・かたちならぬど、
・なつかしうあてはかに、心はたらきのありさうなごとばせあるさまなどぞ、げに都の・・や
んどとなき人にも・劣るまじかりける。身明石上が自ら思ふ心の有様を口惜しきもの
に思ひ知りて、高源氏のやうなき人は我を何の數にもおぼさじ、程身の程相應の結締はしたにつけた
る世くないをば更に見じ、命長くて思ふ人々父母にも・おくれなば、尼にも
なりなむ、海の底にも入りなむ、などぞ思ひける。父君入道、所せ明石上を
く思ひかしづきて、年に二たび住吉にまうでさせけり。神の御
しるしを疾く見せはぞ人知れず頼みやとぞ・思ひける。
須磨には、年なご・返りて日長くつれくなるに、植ゑし若木の
櫻も・ほのかに咲きそめて、空の氣色うららかなるに、よろづの
事おほし出でられて、うち泣き給ふ折々多かり。二月廿三・日上あ
まりなりて・、いにし年、京を別れし時色、心苦しひ・かりし人々のおほ・
御有様などいと戀しく、南殿なんでんの櫻はさかりになりぬらむ、一年ひととせ
の花の宴に、院桐葉院の御氣色、内朱雀院の上のいと清らになまめいて、わ

いつとなくの歌、いつも大宮人が戀しいが、櫻をかざして遊んだ春も来て一入戀しい。新古今春下赤人「百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮しつ大殿の三位の中將もとの頭中將」
時世の覺え、右大臣の四君の夫であるから。

一つ泪ぞ、悲しい時に流れる其後撰雑二「嬉しきも憂きも心は一つにて分れぬものは涙なりけり」

石の階、石の階段。

聽色、何人も著用し得る衣服の色で、紅色紫色などの薄きをいふ。

あらはに、丸見えに見える。簡素なる住居のさまである。

類 磨

が作れる句をずし・・・給ひしも(舞有様など)思ひ出で聞え給ふ。

源氏
いつとなく大宮人のこひしきに櫻かざしし今日も來にけり

いとつれなるに、(かの左大臣)大殿の三位の中將は、今は宰相になりて、人がらのいとよければ、時世の覺え・・重くて物し給へ

ど、世の中いとあはれにあぢきなく、物の折ごと(源氏を)に戀しく覺え給へば、事の聞えありて罪に當るともいかがはせむ、とおほし

なりて、俄に(須磨に)まうで給ふ・・うち見るより珍らしく嬉しきにも、

一つ泪ぞこぼれける。(源氏の)すまひ給へるさま、いはむ方なく唐めき

たり。所のさま、(あたり)繪にかきたらむやうなるに、竹編める

垣しわたして、石の階(はし)松の柱、おろそかなるものから、珍らかに

をかし。山がつめきて、聽色(ゆるしいろ)の黄がち・なるに、青鈍(あをにび)の狩衣

指貫(さし)うちやつれて、殊更に田舎びもてなし給へるしも、(知つて)いみじ

う見るにゑまれて、清らなり。取り使ひ給へる調度・も・假初(いと)に

・・して、おまし所・もあらは・(はか)に見入れらる。基、雙六(すくろく)の

彈墓 四角の中高の盤の兩方に
碁子を置き、互に弾きあつて勝
負を決する。

物參れるなど たべ物をおすす
めするなどいふ事も 殊更に場
所柄に相應しく、風流に調じて
ある。

そこはかとなく 取止めもない
事を喋舌るにつけても 彼等の
考も自分の考と同じ事だ。

見やりなる 向ふに見える倉か
何かの中にある 稗の稻を取出し
て来て馬に食はせるなどを
飛鳥井 催馬樂 飛鳥井「飛鳥井
に飛鳥井に宿りはすべし、お
け影もよし、みもひも寒し、
み稗もよし」

盡きすべくもあらねば 拙い筆
には書き盡されさうもないので
なまなかその一端も此處には記
し得ない。

盤、調度、彈墓の具など、田舎わざにしなして、
とをかじ、念誦の具、ひけりと見えたり。
ひけりと見えたり。(物參れる)など、殊更、所につけ、興
ありてしなしたり。蟹どもあさりして、かひつ物もて參れるを、
召し出でて御覽ず。浦に年經る。さまなど問はせ給ふに、さま
さま、安げなき身の憂へを申す。そこはかとなくさへ
づるも、心のゆくへは同じ事なるかな。と、あはれに見給ふ。
御ぞども、かづけさせ給ふを、生けるかひありと思へり。御
馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稻ども、取
り出でて飼ふなど、珍らしう見給ふ。「飛鳥井」すこし謠ひて、
月ごろの御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の、何とも世を
おぼさ、で物し給ふ、悲しさを、あとのあけくれにつけて
あ、ぼし歎く」など、語り給ふに、堪へがたくおぼしたり。
盡きすべくもあらねば、なかく、片端もえまねばず。夜もす

さりとも斯くてやはいくら何でもいづまでも此儘ではござ

雲近くの歌 私は春日の晴れたやうに潔白な身です

かつは頼まれながら 歸京も出

來る事と一方では頼みに思はれ

ながらも、私のやうな目にあつ

た人は、昔の賢人でさへ、又と

立派に世に立つ事はむつかしい

事でしたから、何のく、都の境

地を二度と見ようとは思ひませぬ

たづかなきの歌 私は都で頼り

ない思ひをしながらあなたを戀

いとしもと拾遺戀四「思ふと

らひてぞ見ねば戀しき」

巳の日 公事根源「上巳の祓と

て人皆東流の水上にて、はらへ

きことは、かたみにえし給はず。日やうくさしあがりて、中將心
あわただしければ、頼みのみしつ出で給ふを、見送り給ふ氣源氏
色、いとなかくなり。中將いつ又たいめん賜はらむとすらむ。

さりとも斯くてやは」と申し給ふに、源氏あるじ。の應、

「雲近く飛びかふたづも空に見よ我は春日はるびの曇りなき身ぞ

かつは頼まれながら、かくなりぬる人は、昔の賢き人だに、も

はかくしう世に又まじらふ事難く侍りければ、何か、都の境

を、又見むとなむ思ひ侍らぬ」など宣ふ。の宰相、

「たづかなき雲居に獨りねをぞなく翅並べし友を戀ひつつ

ある事かか事の折にも忝く馴れ聞え侍りてのいと

もとくやしう思ひ給へらるる折多くのなど、しめやかに

あらで歸り給ひぬる名殘、いとど悲しうの眺めくらし給ふ。

三月のついでの日に出で來たる巳の日、「今日なむ、斯くおぼす事

ある人は、御禊し給ふべき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、

ぜんじやう 軟障。幕の類。

人形（の） などで物又形代ともいふ。陰陽師が身を紙など祈禱の時に用ひる人形で、紙などを人の形に切り、身を擬でてその身の災をこれに移して水に流す。

知らざりし（き）の歌 私は今迄知りもしなかつた大海原に人形のやうに流れて来て、物悲しさは一方でない、いろくと思ひなやんでゐる。

八百萬の歌 すべての天神地祇も私に同情して下さるでせう、これといふ犯した罪もないのですから。

眩笠雨（ひげ） 驟雨。傘が間にあはなから眩で雨をよける意。

さる心もなきに こんな天気になりさうな様子もなかつたのに。

海（の）・づらもゆかしくて出（源氏が）で給ふ。いとあゝろそかに、ぜんじやうばかりを引きめぐらして（おはす）、この國（攝津）に通ひ（し）ける陰陽師召して、祓（を）へせさせ給ふ。舟（ひとがた）に事々しき人形（など作りて舟に）・乗せて流すを見給ふにも、（身に）よそへられて、

知らざりし（源氏）大海の原（ひがた）に流れ来てひとかたにやは物は悲しきとて居給へる（舞）・さま、さるはれ（開れやかな場所）に出でて、いふよしなく見え給ふ。

海（の）のおもては、うらくと風（な）ぎわたりて、ゆくへも知らぬに、こし方行く先（も）・ぼしつづけられて、

八百萬神（源氏）もあはれとおもふらむ犯せる罪のそれとなければ

と宜（能）ふ・に、俄（いみじく）に風（を）・吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓（を）へ・もし果てず、立ち（人々が）さわぎたり。眩笠雨（ひげ）とか降り来て、いとあわただしければ、皆歸り給は（ひな）・むとするに、笠も取りあへず。

さる心もなきに、よろづ吹き散らし（て）、またなき風なり。波いといかめし（う）立ち来て、人々の足を空（も）なり。海のおもては、

衾を張りたらむやうに 一面に
光る形容。

氣色づきて 前以てそんな様子
があつて吹き出すものだ。

高潮 海嘯。

そのさまとも見えぬ人 人間ら
しくも見えない人が来て。
宮 宮中の事であるが、源氏は
それを龍宮と考へたのである。

さは さては。以下源氏の心中。

衾（引き）を・張りたらむやうに光りみちて、神鳴りひらめく。落ち
かかる心地して・・・・・、辛うじてたどり来て、人々（まだ）かか
る目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。
あさましう珍（う）らかなり」と惑ふに、（神）なほやまず鳴りみちて、
雨の脚當る所・、通りぬべくはらめ（はらくと）き落つ。かくて世は盡（果て）きぬ
るにやと・・・、心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經（きやう）うちずし
ておはす。暮れぬれば、神・すこし鳴りやみ・・・て、風ぞ・夜（猶）
も吹く。多く立てつる願（ぐわん）の力なるべし。人々今暫し斯くだにあら
ば、波に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、
取り・あへず人そこなはるるとは聞けど、いとかかる事はまだ
知ら・ず」といひあへり。曉がた・、皆うちやすみたり。君も
聊か寝入り給へれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など・宮よ
り召（し）しあるには參り給はぬ」とて、たどりありくと見・るに、
目をさまして、さ・は海の中の龍王の、いといたう物めでするも

物むつかしう 氣色がわるく。

のにて、見自分入れたるなりけりと思すに、いと・物むつかしう、
このすまひ堪へがたくおぼしなりぬ。

なほ雨風やまず 上巳の祓の時
から引續いての事。
心強うしも 源氏は氣を強くも
お持ちになれない。
斯かりとて こんな天變がある
からといつて。

いとかるくしき名をや 結局
輕率といふ惡名を流すがおちだ
らうと。
ただ同じさまなる物 須磨巻に
あつた宮へ召す事をいふ。

雲間もなく 雲の晴間もなく明
け暮れる日數が重なるにつれ
いとど歸東なく さうでなくて
も都の音信が少いのに天候がわ
るいから一層使も來ないの意。
あながちにあやしき みすばら
しい蓑笠姿で使が無理やりにび
しよ濡れでやつて來た。あなが
ちに「そぼち參れる」を修飾
する。

なほ雨風やまず、神鳴りしづまらで日頃(經)になりぬ。いと(と)・物わ
びしきこと數知らず。さし方行く先悲しき御有様に、心強(う)し
もえおぼしな(源氏)さず。いかにせまし、斯かりとて、都に歸らむこ
とも、まだ世に許されもなくては、人笑はれなる事こそまさら
め、なほこれより深(から)き・山を求めてや跡絶えなまし、とお。
ぼすにも、「波風に騒(さ)が・れて」な・ど人のいひ傳へむ事(の)、後
の世まで、いと(と)・かるくしき名を・や流し果てむとおぼし亂
る。御夢にも、ただ同じさまなる物のみ來つつ、ま(つき)つはし聞ゆ
と見給ふ。雲間もなく明け暮るる日數に添へて、京(ち)の方もいと
ど・覺東なく、かくな(此儘身を減ほしてしまふ事かと)ながら身をはふらかしつるにやと、心細(こ)う思
せど、頭さし出づべくもあらぬ空(荒れ空の爲に)の亂れに、出(京から)で立ち參る人も
なし。二條(茶上の方)の院よりぞ、あながちにあやしき姿にて、そぼち參
れる。道かひ(途中ですれちがつても)にてだに、人か何ぞとだ(も)に御覽(人)じ分(ま)くべくもあら
ず、まづ追(ふ)ひ拂(ふ)ひつべきしづ(男)のをの、あはれ(聞かしく)に睦まじうおぼさ

くしにける 卑屈になつた。

ながめやる方なくなむ どちら
むいとも見はらしがきかぬとい
ふ意と思ひなぐさめる方法がない
いとふ意とかねてある。浦風やの歌 須磨の事を思ひやつて居る私の袖を涙の波が絶えず濡らして居る此頃、須磨の浦風はどんなに吹いて居る事ぞいませう。

仁王會 朝家の御祈の爲に、毎年三月及び七月に吉日を選んで大極殿又は紫宸殿清凉殿などで、仁王護國般若經を講せしめられる年中行事。又臨時にも行はれる。

いぶかしうて 聞きたくて。

氷雹。ひさめ。

るも、我ながら忝く、くしにける心の程・おもひ知らる。御文には、業上支あさましくをやみなき頃の氣色に、いとど空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うち濡らし波間なき頃」あはれに悲しき事ども・書き集め給へり。源氏がその手紙を開くなり引きあくるより、いとど汀・まさりぬべく、かきくらす心地し給ふ。使京にも、

『この雨風、いと怪しき、物のさとしなり』とて、仁王會など行はるべしとなむ聞え侍りし。禁中うちに參り給ふ上達部なども、すべて道閉ぢて、まつりごと絶えてなむ侍る」など、はかしくしうもあらず、かたくなしう語りなせど、京のかたの事とおぼせば、源氏の心にいぶかしうて、お前に召しいでて問はせ給ふ。使只例の雨のをやみなく降りて、風は時々吹き出でつ日頃になり侍るを、例ならぬ事に驚き侍るなり。いとかく地の底・通るばかりの氷降り、いかづちのしづまらぬ事は侍

心を起して 皆が氣を引立て

沈めるともがらま 悲境に居る
人達を多くお救ひなされた。
今何の報いにか 今何の應報で
餘りにも非道な波風に溺れな
さるのだらう。河内本の如く「こ
こら」のない方がよく聞える。

御社 住吉神社。

大炊殿 食物の調理所。

う悲しきに、心を起して、すこし物もの覺あゆる限りは、身みをかへて、
この御身み一つを救ひ奉らむとどよみて、もろごゑに佛神を念じ
奉る。「帝王ていおうの深き宮に養はれ・給たまひて、いろく（奉り）の樂しみに
おごり給ひしかど、深き御みうつくしみ・大八洲（大）にあまねく、沈
めるともがらをこそ多く浮べ給ひしか。今何の報いにか、こ
ら横よこさまなる波風にはおぼほれ給はむ。天地てんちことわり給へ。罪
なくて罪にあたり、官位つかさくらゐを取られ、家を離れ、境かぎを去りて、
明暮あけくれ安やすき空なく歎なげき給ふに、かく悲しき目をさへ見、命盡いのちじんきな
むとするは、前さきの世の報いか此の世の犯としか、神佛かみぶつあきらか
にましますば、この愁なげへや・め給へ」と、御社みよしらのかたに向きて、
さまく（を）の願ねがひを立て、又海の中の龍王りゅうわうよろづの神たちに願
を立てさせ給ふに、いよく鳴り轟とどろきて、おはしますに續つづきた
る廊らうに落ちかかりぬ。焔ほのほ燃もえあがりて廊は焼けぬ。心魂こころたましひなくて、
ある限り惑ふ。うしろの方なる大炊殿おほひとおぼしき・屋やに移し奉

上下となく、身分の上下を問はず皆大炊殿に籠つて。

このおまし所 源氏の假の居場所、即ち大炊殿と思しき屋。

雷みとどろかし 雷に縁を持たせての詞。

夜を明かしてこそはと 夜を明かしてから、の事にしよう、と、人が暗の中をまご／＼して居る時に。

近き世界に この近所に、事情を察し、過去未來の事を心得て、何やかやと此の天變の原因をばつきり理解する人もゐない。

りて、⁽³⁾上下となく立ちこみて、いと⁽⁴⁾らうがはしく泣きどよむ聲
•••い⁽⁵⁾かづちにも劣らず。空は墨をすりたるやうにて日も暮
れにけり。

やう／＼風なほり、⁽⁶⁾雨の脚が裂へ、星の光も見ゆるに、このお

•••まし所のいと珍らかなるもいと忝くて、⁽⁷⁾寢殿に返し移し奉

らむとするに、焼け残りたるかたもうとましげに、そこらの人

の踏みとどろかし惑へ⁽⁸⁾るに、御簾⁽⁹⁾なども皆吹き散らしてけり。

夜を明かしてこそはとたどりあへるに、君は⁽¹⁰⁾御念誦し給ひて

おぼしめぐらすに、いと心あわただし。月さし⁽¹¹⁾•••て、しほの

近く満ち⁽¹²⁾•ける跡もあらはに⁽¹³⁾•、名残なほ寄せ返る浪荒きを、

柴の戸押しあけてながめおはします。近き世界に、物の心を知

り、きし方行く先の事打覺え、とやかやくと⁽¹⁴⁾•••••、はか

ばかし⁽¹⁵⁾う悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、⁽¹⁶⁾たかき人お

はする⁽¹⁷⁾•所とて、集まり参りて、⁽¹⁸⁾聞きも知り給はぬ事どもをさ

へづりあへるも、いと珍源氏の心にらかなれど、え追ひも拂はず。毒毒この
 風今暫しやまざらましかば、しほ潮が降にのぼりて、残る所もあそなからまし
 ・・・・・神の助けあるかならざりけり」といふを聞き給ふも、
 いと心細しといへばおろかなり。

海にますの歌 海にまします神の助けがなかつたならば、潮の八百會の中に押流されてしまつた事だらう。八百會は潮の八方から集中する所。いりもみつる 熬りつ揉みつ荒れり風の騒ぎに、何といつても君はひどくお疲れになつたので。ごうじ給ひ お疲れになつたので。忝き御座所なれば 勿體ない程の御座所故。

かしこき御影に なつかしい父上様にお別れて申して以來。

この浦に身をや この海岸で死んでしまひませう。

海源氏にます神の助にかからずば潮の八百會にさすらへなまし
 日ねもすにいりもみつるかぜみの騒ぎに、さこそいへ、いたうご
 うじ給ひにければ、心思はずにもあらずうちまどろみ給ふ。忝わよしとき御座
 所ころなれば、只物に寄り居給へるに、故院の・只御在世にお姿其後でちはしまししさまなが
 ら立ち給ひて、桐源氏など斯くあやしき所には物するぞ」とて、御
 手を取りて引き立て給ふ。桐源氏住吉の神の導き給ふままた、はや
 船出して、この浦を去りね」と宣はす。いと嬉しくて、運桐庭院のかし
 こき御影御事に別死別れ奉りにしこなた、さまこ・悲しき事のみ多く
 侍れば、今は貝・この渚に身をや捨て侍りなまし」と聞えたまへ
 ば、桐源氏いとあるまじき事。これは只聊のかなる、物の報いなり。

おのづから犯し、自分で氣のつかぬ罪も犯して居たので。

その罪を終ふる程、死後その罪を償ふ爲に餘暇がなくて、娑婆の事は顧みずに居つたけれども。

妻すべき事、源氏が早く歸京するやうにとの事。

月の顔、月影の事。「人もなくて」の句に應じて書いたのである。

わが斯く、自分が斯く悲しみを極め、命の盡きようとして居つたのを助ける爲に天翔つて來られたのだと、源氏は嬉しく思召すにつけて。
名残頼もしう、夢の後で大變に頼もしく嬉しく思召される。夢なかくなる御心まどひに、夢を見なかつた方が却つてました。位に御心がかきみだされるのうつつの悲しき事、浪風の騒ぎの事。

我は位にありし時、あやまつ事なかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふる程いとまなくて、この世を顧みざりつれど、いみじき憂へに沈むを見るに、堪へがたくて、海に入り渚にのぼり、いたくごうじにたれど、斯かるついでに、内だいに奏すべき事あるによりてなむ急ぎのぼりぬる」とて、立ち去り給ひぬ。源氏の心に飽かず悲しくて、御供に參りなむ」と泣き入り給ひて、見あげ給へれば、人もなくて、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御供はひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。年頃夢のうちにも見奉らで、戀しう覺束なき御さまを、ほのかなれど、さだかに見奉りつるのみ面影に覺え給ひて、わが斯く悲しみを極め、命盡きなむとしつるを、助けに翔り給へるとあはれにおぼすに、よくぞ斯かる騒ぎもありけると、名残たのもしう、嬉しとおぼえ給ふ事かぎりなし。天變胸つとふたがりて、なかくなる御心まどひに、うつつの悲し

いぶせさに 気が鬱して。

ちひさやかなる舟 明石入道からの迎への舟。

前の守新發意 前播磨守入道、即ち明石入道の事。新發意とは、新に發心して佛道に歸した人。

事の心取り申さむ 事情を申し上げたい。

得意 知音。親しい友。

わたくしにいささかあひ怨むる事侍りて 明石上にいひ寄つて承引されなかつた事を怨んで。

はや逢へ はや舟に行つて入道に逢へ。

さま異なる物の 妙な形相のもの。の告げ知らせる事がございましたので。

き事もうち忘れて、夢にも御いらへを今すこし聞えずなりぬる事といぶせさに、又や見え給ふと殊更に寝入り給へど、更に御目もあはで曉がたになりけり。

渚にちひさやかなる舟寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿

りをさしてく。「何人ならむ」と問へば、源氏の宿所明石の浦より、前の

守新發意の、御船よそひて參れるなり。良清の事源少納言さぶらひ給は

ば、たいめんして事の心取り申さむといふ。良清おどろきて、

良入道はかの國の得意にて、年頃あひ語らひ侍りつれど、

わたくしにいささかあひ怨むる事侍りて、殊なるせうそこをだ

に通はさで久しうなり侍りぬるを、浪のまぎれに、いかなる事

かあらむ」とおぼめく。君の御夢などもおぼしあはする事もあ

りて、良清は「はや逢へ」と宣へば、舟にいきて逢ひたり。さばかり

激しかりつる浪風に、いつのまにか船出しつらむと、心得

がたく思へり。入道「いぬる朝日の日の夢に、さま異なる物の告げ

かざねて示す事ので。又々夢の告
がございましてので。

用ひさせ給はぬまでも、私の申
上げる事を源氏が御取上げなき
らぬまでも、この警示の十三日
を過ぎずこの由を源氏におし
せ申さうと思つて。

此處にも申し、こちらでもひよ
つとしてお心當りの事でもござ
いましたでせうかと思ひまし
さとしのやうなる、神のお告め
いた事のあるのを、過去未來の
世に思合せて御覽になつて、
事實に聞き傳へむ、世人が開
き傳へて後に非難されるのが不
快だらうといふ事を氣遣つて、
今度の事は眞に神明のお助けで
もあらうのに、それにお助けな
いならば、又これ以上の物笑の憂
目を見るかも知れない、世の人
の心に背くのでさへ矢張心苦し
いのだから。

知らず事侍りしかば、信じがたき事と思ひ給へしかど、

「十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひまうけて、必ず

あらたかなる靈験を示さう

雨風やまば此の浦に寄せよ」と、かざねて示す事の侍りしかば、

須磨の浦

試みに船のよそひを設けて、今日を待ち侍りしに、いかめしき雨

今日を

風、いかづちの驚かし侍りつれば、人のみかどにも、夢を信じ

唐土

て國を助くるたぐひ多う侍りけるを、用ひさせ給はぬまでも、

このいましめの日を過ぐさず、この由を告げ申し侍らむとて、

須磨

舟いだし侍りつるに、怪しき風ほそ吹きて、この浦に著

颯風

き侍り事、誠に神のしるべたがはずなむ、いと

御

しとどめ侍り

も憚り多く侍れど、この由申し給へ」といふ。良清忍びやかに

源氏に

傳へ申す。君おぼしまはすに、夢うつつさまへ静かならず、

聞ゆ

源氏

さとしのやうなる事どもを、きし方行く末、おぼしあはせ

殘らむ

て、世の人の聞き傳へむのちの謗りも安からざるべきを憚りて、

はかなき事をも 世のはかなき
をも察すると同時に又一方では
己よりも年長であり又は位が高
く世間の名望も一段とすぐれて
ゐる人には躰き従つて、その意
向を考へて見るべきだ。

しりぞきて咎なし 「不_レ退有_レ
咎」この語が老子に見える註
してあるけれども今の老子には
ない。

更にのちのあとの名を 未来に
悪名の立つのを豫防した所で一
向格別な事もあるまい。「更に」
は「たけき事もあらじ」を修飾
する。

都の方よりとて 都の方からだ
といつて見舞つてくれる人もあ
りませぬ。

嬉しき釣舟をなむ お迎の舟を
頂いて嬉しく思ひます。後撰雜
三「波のみ濡れつるものを吹
く風のたより嬉しき蟹の釣舟」

誠の神の助けにもあらむを、背くものならば、又これよりまさ
りて、人笑はれなる目をや見む、うつつうつつまのイの人の心(心)だにな
ほ苦し、はかなき事をもかつ見つつ、我よりよはひまさり、も
しは位高く、時世の寄せ(よし 寄せ)、今一際まさ(れ)る人には靡き従ひ
て、その心むけをたどるべきものなり(けり)、しりぞきて咎なし
とこそ昔のさかしき人もいひおきけれ、げに斯く命を命がけの危険にあひきはめ、
世に又なき目の限りを見盡しつ、更にのちのあとの名を(はとて
もか)かても、たけき事もあらじ、夢の中にも父御門の御教へあ
りつれば、又何事をか疑はむ、とちぼして、御返り宣ふ。 薰不案知
らぬ世界に、珍らしき憂へのかぎり見つれど、都の方よりとて、
言問ひおこする人もなし。只ゆくへなき空の月日の光ばかりを
ふるさと 故郷の友と眺め侍るに、嬉しき釣舟をなむ。かの浦に静やかに
隠るふべき隈侍りなむや」と宣ふ(へり)。限りなく喜びかしてお殿を申上げるまり
申す。「ともあれかくもあれ、夜の明け果てぬさきに御舟に奉召せれ」

濱のさま 明石海岸の様子。

入道のらうじ占めたる領の地所、即ち海岸にも入道折に興を催すべき渚の苦屋を建て、山陰の方には四季折の事を餘念なく勤行をして後世の山陰の邊に莊嚴な御堂を建て、念佛三昧を行ひ、御堂を建てるに、秋の實を刈り納めて、餘生を送るべき稻の倉町など、何れも季節々々場所柄に似合はしく見所のあるやうに全體的に設計してある。

高潮 海嘯。

ほのかに見奉るより 今迄暗かつたので、入道は源氏と同船かつたので、源氏のさまを見なかつたのである。入道が月日の光を上手に入れた夢を見た事が若菜上巻に見えてゐる。

明 石

とて、例の親しきかぎり四五人ばかりして奉りぬ。例の風いで来て、飛ぶやうに明石に著き給ひぬ。ただ這ひ渡るほどは片時の間といへど、なほ怪しきまで見ゆる風風陰様の心なり。

濱のさまげにいと心景色がよいことなり。人繁う見ゆるのみなむ、御願源氏の希にひにそむきける。入道のらうじ占めたる所々、海海岸のつらにも

・山隠れにも、時々につけて興をさかすべき渚の苦屋、行ひをして後の世の事を思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を建てて三昧行ざんまいひ（勤め）、この世の設けに、秋の田の實を刈り

納め、残りのよはひ積むべき稻の倉町どもなど、折々、所につけたる、見所ありてし集めたり。高潮たかしほにおちて、此頃明石上むすめなどは岡邊山陰の家の宿に移して住ませければ、この濱の館たちに心やすくお

はしま（さ）す。船源氏がより御車乗り移られる時分に奉り移るほど、日やうくさしあがりて、ほのかに見奉るより、老いも忘れよほひ齡延ぶる心地して、

月日の光を上手に入れた夢大にを見た事が若菜上巻に見えてゐる。

入道が源氏を

所のさままは場所の風情は勿論の事、家作の趣向、立木、立石、下草の有様、庭に引入れた見ごろな入江の水などは、繪に畫くならば、修養の足らない繪師は、實景程には畫けまいと思はれる。

すまひけるさまなど 入道の住居の様子などは、都の高貴の方方の邸宅に劣らない位で、えんにまばゆき 艶麗な光るやうな點では。

今はいみじき 此度はとんでもない使に出かけて悲しい目にあつた。

御祈りの師 源氏の身の安泰を祈つてくれる祈禱師。
この程の御有様 雨風や靈夢の事など。

に得奉りたる心地して、營み仕うまつる事(いと)。ことわりなり。

所のさまをば更にもいはず、作りなしたる心ばへ、木立、立石(たていし)、

前栽などの有様、えもいはぬ入江の水など、繪にかかば(んに)。

心のいたりすくなからむ繪師は、かき及ぶまじと見ゆ(え)。月(う)ご(今までの)

須磨の住居(り)よりは、こよなくあきららになつかし(晴々として)。御(御座所の飾付)しつ

らひなどえならずして、すまひけるさまなど、げに都のやんご

となき所々に(も)・異ならず。えんにまばゆきさまは、まさりざま(すじ)

にぞ見ゆる。

源氏(まご)は、すこし御心しづまりては、京の御文ども聞え給ふ。參れり(榮上からの使)

し使は、「今はいみじき道に出で立ちて悲しき目を見る(事)。」と泣

き沈みて、あの須磨にとまりたるを召して、身に餘れる物ども(明石に 源氏から)

多く賜ひてつかはす。睦まじき御祈りの師ども、さるべき所々(師入達)

には、この程の御有様、くはしくいひつかはすべし。入道の宮(藤壺)

ばかりには、珍らかに(九死に一生を得た事)てよみがへれるさまなど聞え給ふ(ひ)。

二條の院の紫上の眞心の籠つた手紙に對する返事は。返すもあらん限の悲惨な目を経験し盡したわけですから。

鏡を見ても須磨卷にあつた紫上の歌「別れも影だにともるものならば鏡を見ても慰めてまし」二頁。かく覺束なながらやと、斯くお目にも懸らぬ儘で出家するのかと、今までの多くの悲しい色々の愁へはそつちのけになつて。遙かにも思ひやるかな知らぬ須磨の浦からなほ遠方の明石の浦に移り來て、遙に都を思ひやつて居ります。夢のうちなる心地 まるで夢の中に居るやうな氣がして、その人なかに間違が多い事ですから、どいと見まほしきそば目なるさい側から覗き込んで読んで見たい程であるから。

あざりする 惠慶集「あざりする與謝の蜚人ほこるらし浦風ぬるく霞み流れり」

人繁き厭ひ 明石は人が澤山居て、初はいやに感じたが。

二條の院のあはれなりし程の御かへりは、書きもやり給はず、すらくとも書けず 筆を打置き、涙を押しのごひつつ聞え給ふ御氣色、なほ殊なり。源文「返すく、いみじき目のかぎりを見盡し果てつる。有様なれば、(身の)出家の志が募りますが今はと世を思ひ離るる心のみまさり侍れど、『鏡を見ても』と宣ひし面影の離るる世なきを、かく覺束なながらやと、おまつかこころ悲しきさまのうれば、しさはさしおかれて、(さ)

遙かにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦傳ひして夢のうちなる心地のみして、さめ果てぬほど、いかにひがごと多からむ」と、(ひじ)と、(とりともなく風雅に)そこはかとなく書き亂り給へるしもぞ、いと見まほしきそば目なるを、いとこよなき御志の程と、人々見奉る。從者等はあの故郷に心細げなることづてすべかめり。をやみなかりし空の氣色、名残なく澄みわたりて、あざりする海士どもほこらしげなり。須磨はいと心細くて、海士の岩屋も稀なりしを、人繁き厭ひはし給ひしかど、明石此處は又さまことに、(又を)

荒れ空模様も

いと傍痛きまで 餘處目も見ともない程に時々源氏に愚痴をこぼす。

かく觸えなくて 斯く思ひがけずも明石にめぐり來たのも夫婦になるべき因縁があるのかと思召すが。

ただなるよりは 何事もなくて居るよりは、浮氣をしたと聞いては、口がちがふと思はれるのが氣恥かしくて、意中をほのめかされる事はない。

此處にはかしこまりて 入道は源氏の居られる處には遠慮して自分もあまり參上せずすこし離れた下屋に伺候する。

いかで思ふ心を げひ娘を差上げるといふ素志を達しようとする。

年は六十 入道の年齢。

かしこま あはれなる事多くて、よろづにおぼし慰まる。

あるじの 入道、行ひ勤めたるさま、深く行ひ遊ましてはあるがいみじう思ひすましたるを、

只この娘一人をもてわづらひたる氣色、いと傍痛きまで時々漏源氏に

らし憂へ聞ゆ。御心地にも、明石上は美人だと聞いて居ったからをかしと聞きおき給ひし人なれば、

かく覺えなくてめぐりおはしたるも、(は)さるべき契りあるにやと

思しながら、なほかう身を沈めたる程は、佛道修行行ひよりほかの事は

思はじ、都の人も、榮上もただなるよりは、いひしに違ふと思さむも

心恥かしう思さるれば、氣色だち給ふ事(も)なし。事に觸れて、

心ばせ有様なべてならずもありけるかな、(なり)とゆ(い)かしう思さ

れぬにしもあらず。此處にはかしこまりて、みづからもをさを

さ參らず、物隔たりたる下(しも)の屋にさぶらふ。さるは明春見奉ら

まほしう、(は)飽かず思ひ聞えて、いかで思ふ心をかなへむと、佛

神をいよく念じ奉る。年は六十ばかりになり、(むそち)たれど、いと

清げにあらまほしう行ひ(勤行の爲に使せて)さらばひて、人柄が上品な爲か人の程のあてはかなれば

物きたなからず老人はとかく
小ぎたないものだが入道はさう
ではなく風流な所もあるのだ。

くづし出てて聞ゆ ぼつゝお
話申上げる。斯かる所をも人をも
のやうな所をも入道のやうな人
をも見なかつたならば。
さこそいひしか 須磨巻に「あ
この御宿世にて覚えぬ事のある
なり」などといつた事を受けて
いふ意味で、「つままじしうなり
て」を修飾する。母君 明石上の母君、即ち入道
の妻。さうじみ 明石上の事。

身の程知られて わが身の分際
が知られて、源氏の妻などいふ
事は、迎も及びもつかぬ事と思
つた。

にやあらむ、うちひがみほれ(こ)運縁しき事はあれど、古への事を(物)
も見知りて、物きたなからず、よしづきたる事もまじれば、
昔の物語などせさせて聞き給ふに、すこしつれづれのまぎれな
り。年頃(源氏は公事私事に忙しくて)おほやけ私御いとまなくて、さしも聞きおき給はぬ世
の古事(ふること)ども、くづし出でて(つこ)聞ゆ。斯かる所をも人をも見ざら
ましかば、さうくしくやとまで、興ありとおぼす事もまじる。
かうは馴れ聞ゆれど、いとけだかう心恥かしき御有(源氏の)様に、さ
こそいひしか、つつまじしうなりて、わが思ふ事は心のままにも
え打ちいで聞えぬを、心もとなう口惜しと、母君と(に)もいひ合せ
て歎く。さうじみも、おしなべての人だに目やすきは見えぬ世
界(なれ世)に、世には斯かる人もおはしけりと、見奉りしにつけ
て、身の程知られて、いと遙かにぞ思ひ聞えける。親たちの
斯く思ひあつかふを聞くにも、似げなき事かなと思ふに、ただ
なるよりは物あはれなり。

よろづに 萬事に身をいれてお
世話申上げるさまを。
人さまの 入道の人柄の飽くま
上品なのに免じて黙つて居られ
る。

住み馴れ給ひし故郷 二條院の
いはむかたなく戀しきこと
ともいへない戀しきが、いづ方
とあてどもなく動いてゐるやう
な頼りない心持がなきてつて。
あはと遙かに 新古今雜上射恒
一淡路にてあはと遙に見し月の
近き今宵は所がらかも
あはと見るの歌 隈なく澄み渡
つた月下で、淡路島を眺めてゐ
ると、島ばかりでなく哀愁まで
もかくられるところなく全貌を表
はす。初二句はあはれの枕詞を
手も觸れ給はぬきん七絃琴で
あらう。所謂孔子琴の事

かうれう。花鳥「廣陵散は琴の
秘曲なり。嵇康が華陽の亭にし
て神人にあひて傳へたる曲也。
この神人は昔の伶倫の變化な
り。晋書嵇康傳に委し。變化な
所の岡邊の家 明石上の住む

四月うづきになりぬ。（れは）衣ころもがへの御装束さうぞく、御帳みらでうの帷子かたじらなど、よしあ
るさまにし調進するいづ。よろづに仕源氏の爲にうまつり營源氏心むを、いとほし（く）出すず
仕方だとろなりとあ（も）ぼせど、人（の）・さまの飽くまで思ひあがりたるさま
の・あてなるに、あぼし許して見給ふ。京（の）よりもうちしきりたる
御源風の見舞とふらひども、たゆみなく多かり。のどやかなる夕月ゆふづよ夜に、
海の上くもりなく見えわたれるも、住み馴れ給ひし故郷ふるさとの池（の）・
水に思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しき事、いづかた
ともなくゆくへなき心地し給（ふ）ひて、只目すゑめのまへに見やらるるは
淡路島なりけり。源「あはと遙かに」など宣ひて、
源氏 あはと見る淡路の島のあはれさへ残る隈なく澄める夜の月
（く） 久しう手も觸れ給はぬきんを、袋（う）よりとり出（く）で給ひて、はかな
く搔き鳴らし給へる御さまを、見奉る人もやすからず、あはれ
に悲（く）しう思ひあへり。かうれうといふ手（精一杯）にあるかぎり弾きすま
し給へるに、かの岡邊の家も、松の響き波の音にあひて、心（も）ば

しはふる人 賢木卷卷一、四二
二頁参照。

濱風を引きありく 風邪にかゝるの
も忘れて濱邊をうろついてゐる。
更に背きにし世の中も 一度捨てた
浮世の事も又跡戻りして思ひ出され
さうです。

折々の御遊び 禁中で催された
管絃の御遊、誰や彼やの奏する
琴や笛、又は歌の詠ひ振。
こと笛 彈物や笛。「こと」は絃
樂器の總名。

ふる人 老人。明石入道の事。

さま／＼いみじうのみ 入道は
源氏が七絃琴も十三絃琴も堪能
なのに感心した。

せある若き人は、身にしみて思ふべか（事）めり。何とも聞きわく

まじきこのもかのものはふる・人どもも、（さ）すずるはしくて、

濱風を引きありく。入道もえ堪へで、（くやうはふ）供養法たゆみて、いそぎ

参れり。入道「更に背きにし世の中も取りかへし思ひ出でぬべく侍

る。（り）のちの世に願ひ侍る所の有様も、思ふ給へやらるる夜のさ

まかな」と、泣く／＼めで聞ゆ。わが御心にも、折々の御遊び、

その人かの人のこと笛、もしは聲の出だし（で）さま、時々につけて

世にめでられ給ひし有様、御門より始め奉りて、もてかしづき

あがめられ奉り給ひしを、（事）人の上もわが御身の有様も思し出で

られて、夢の心地し給ふま（源氏の心に）まに、掻き鳴らし給へる聲も、心す

ごく聞ゆ。（え）ふる人は・涙もと・めあへず、岡邊に琵琶（さう）の

琴取りにやりて、入道琵琶の法師になりて、いとをかしう珍ら

しうて一つ二つ弾きいでたり。箏の御琴（き）まゐりたれば、すこし

弾き給ふも、さま／＼いみじうのみ思ひ聞えたり。（源氏に）いとさしも

物の滞りなき 一望千里視路を
妨げるものゝない。

たが門さして 伊行釋「まだ宵
に打来て叩く水鶏かな誰が門さ
して入れぬなるらむ」

御心とまりて 源氏には面白く
感ぜられて。しどけく 氣らくな撥どりで弾
く。大方に宣ふを 源氏は明石上の
事の心に持ちながら而も一般的
の事のやうにいつたのである。
遊ばすより 君がお弾きになる
より以上に懐しい態度で弾く人
はどの世界にありませう。拙
老は延喜の帝の御手から筆の奏
法を傳授した三代目に當るの
すが、あやしう それを下手に眞似す
るものがありまして、それが自
然かの前大王の御奏法に似て居
ります。せむだいわう 前大王。河内本
は前王の意で「延喜」と傍に註
す。山伏のひが耳に、さう思ふのも
私の聞き誤から、松風の音を娘
居るのでせう。

聞えぬ物の音さへ
聞えぬ物のねだに、時と場合によつては面白く聞えるものだが折からこそはまさるものなるを、はるく

と物の滞りなき海岸故海づらなるに、なか／＼春秋の花紅葉のさかり

なるよりは、只そこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、

水鶏くひなのうち叩きたるは、たが門かどさしてとあはれにお・ぼゆ。ね

もいと二なう出づる琴ことどもを、いとなつかしう弾き鳴らしたる

も御心とまりて、筆の翠運「これは、女のなつかしきさまにて、しどけ

なく弾きたるこそをかしけれ」と、大方に宣ふを、入道は、あ

いなくうちゑみて、入道「遊ばすよりなつかしきさまなるは、いづ

このか侍らむ。なにがし、延喜の御門の御手より弾き傳へた

る事三代になむなり侍りぬるを、かう拙き身にて、この世の事

は捨て忘れ侍りぬるを、物のせち切にいふせき折々は、搔鳴らし

侍りぬるを、あやしう明石上の事まねぶもの侍るこそ、じねんに白然かのぜ

むだんいんわんの御手に通ひて侍れ。山伏のひが耳に、松風を聞き

渡し侍るにやあらむ。いかでかこれ忍びて聞召させてしがな

琴を琴とも
私の下手な琴など
は琴と思つて聞いては下さるま
は程の上手の家で、先程も
弾いたのが残念です。古歌「松
風に耳馴れにける山伏は琴を琴
とも思はざりけり」

その御筋にて、その御血統の方
ぐの中においでなつて跡をつ
こに斯う入道の家に入居る
しい奏法はひそかに傳へて居る
す。いふ事は甚だ興味深い事
聞召さむにはお聞き下さるな
らば何の遠慮など致しませう。
娘を御前に召出しても聞いて頂
きませう。
商人のなかにてだに、白樂天が
潯陽江に行き、長安の娼女で後
に賈人の妻となつた女から琵琶
の音を聞いて感心し、琵琶行と
いふ長詩を作つた。琵琶行と
賦の手を弾きしづむる人、本手
を弾きこなす人は昔も稀でした
ものに、娘は大して行きつまる所
もなく、娘は以上感ずる手法
なき波の聲に並い荒波の響と一緒
くたに思ひ集める悲しいので
すが、色々々て思ひ集める折々も
あります。

明石

と聞ゆるままに、うちわななきで、涙おとすべかめり。君、
「こと琴を琴とも聞き給ふまじかりけるあたりに、ねたきわざかな」
とて押しやり給ふ。酒「怪しう昔より箏は女なむ弾き取るものな
りける。嵯峨天皇の御傳授によつて嵯峨の御傳へにて、女五の宮、當時の名手でしたがさる世の中の上手に物
し給ひけるを、その御筋にて、取立てて傳ふる人なし。すべて
只今世に名を取れる人々、一寸弾ける位の自分免許の者ばかりだにかきなでの心やりばかりにのみある
を、ここに斯う引き、とどこめ給へりける、いと興ありける事かな。
いかでかは、聞くべき」と宣ふ。入道「聞召さむには、何の憚りかは
侍らむ。お前に召しても、あきじと商人のなかにてだにこそ、ふること
白樂天の事聞きはやす人は、侍りけれ。琵琶なむ賦の手を弾きしづむる人、
古へも難う侍りしを、をさく滞ることなう、なつかしき手な
ど筋ことになむ。どうして弾き覺えたのかいかでたどるにか侍らむ、娘の琵琶の音が荒き波の聲にまじ
るは、悲しうも思ふ給へられながら、かきつむる物歎かしさ、
まぎるる折々も侍る」風流がつて居るのでなど、すき居たれば、源氏はをかしとおぼして、

箏の琴取りかへて 琵琶と引換へに箏を入道に渡した。程傳授を受けにいと過ぐして 調子に乗つて弾いた。今の世には知られてゐない古風な手を弾いて、手さばきも大層唐めいて居つて、左手でゆする絃の音も深く澄んで開清き渚に貝や拾はむ、催馬樂伊勢海一伊勢の海の、清き渚の鹽貝になりのりそや摘まむ、貝や拾はむや、玉や拾はむや、貝御くだもの、菓子。

人々に 良清や惟光其他源氏の家來達に。

さすがに 親心を察して。

かう覺えなき世界に こんな思ひがけない田舎に。
老法師 明石入道自身の事。

箏のこと取りかへて賜はせたり。げにいと過ぐしてかい弾きたり。今の世に聞えぬ筋引きつけて、手づかひいといたう唐めきこ、ゆのね深うすましたり。伊勢の海ならねど、「清き渚に貝や拾はむ」など、聲よき人に謠はせて、我も時々ひやうし取りて聲打添へ給ふを、琴・弾きさしつつめで聞ゆ。御くだものなど珍しきさまにて參らせ、人々に酒しひそしなどして、あつづから物思ひを忘れてしまひさうな面白い夜である。風涼しうて、月も入りがたになるままに澄みまさりて、靜かなる程に、御物語残りなく聞え。て、この浦に住み始めし程の心づかひ、のちの世を勤むるさま、かきくづし聞えて、このむすめの有様、問はず語りに聞ゆ。をかしきもの、さすがにあはれと聞き給ふふしくもあり。いと取り申しかたき事なれど、わか君、かう覺えなき世界に、かりにても移ろひちはしましたるは、もし年頃老法師の祈り申し侍る神佛のあはれび

めのわらは 明石上の事。

六時の勤め 晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜と六時に佛前
で勤行する事。みづからの私自身の極樂往生の祈願はもとよりで、さきの世の私自身は前世の宿縁が拙くてこんな田舎者となつたのでせうが、親は大匠でした。

次々さのみ 子から孫とさういふやうに次々賤しくなる一方です。せうと悲しく思つてゐます。

あまたの人のそねみ 若紫巻にて「代々の國の司など用意殊にしてさける心ばへ見すなれど、更らうけ引かず」とあつた。卷一、一七三頁参照。

おはしまして、しばしの程御心をも惱まし奉る(り給ふ)。にやとなむ思ふ給ふる。その故は、住吉の神を頼み始め奉りてこの十八年になり侍りぬ。めのわらはのいと(女)き(童)なう侍りしより、思ふ心侍りて、年頃(毎)の春秋ごとに、かの御社に参る事(を)・なむ(し)・侍る。晝(夜)の六時の勤めに(も)、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、只この人を高き本意かなへ給へとなむ念じ侍る。さきの世の契りつたなく(て)、こそ斯く口惜しき山がつとなり侍りけめ、親大臣の位を保ち給へりき。みづから斯く田舎の民となりては(は)べり。次々さのみ劣りまからむ(り侍ら)。は、何の身にかなり侍らむと悲しく思ひ侍るを、これは生れし時より、頼むところなむ侍る。いかにして都の高き人に奉らむと思ふ心深きにより、程々につけて、あまたの人(々)のそねみを負ひ、身のためからさき目を見る。折々も多く侍れど、更に苦しみと思ひ給へず、命(の)のかぎりは、せば(貧しい身にも)袖にもはぐくみ侍りなむ。かくながら見捨て侍りなば、(此儘私が死んだら)

おきて侍る いひ聞かせてござ
います。

横さまの罪にあたりて無實の
罪に沈んで思ひがけぬ田舎に
流浪して居るのも何の罪業に
よつてか今までは気がかりに
思つてゐましたが

今宵の御物語にこそはと 河内
本に従ふべきである。

などかは斯くさだかに 入道が
前に「わが君かう覺えなき世界
の程御心をも惱まし奉るにやと
なむ思ふ給ふる」といつた詞を
受けていふ。七六頁以下。

獨寢は 明石の浦でつくづく
思ひ明してある娘の獨寢の心淋
しさを君も御存じですか。「つれ
づれと思ひ」は「思ひあかす」を
明石にいひかけた序詞。

海の中にもまじり失せね』となむおきて侍る」など、すべてま
ねふべくもあらぬ事どもを、うち泣きうち泣き聞ゆ。君も物を
さまくおぼし續くる折からは、うち涙ぐみつつ聞召す。『横

さまの罪にあたりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかと
覺東なくおもひつるを、今宵の御物語に
からぬさきの世の契り」

だかに思ひ知り給ひける事を今までは告げ給はざりつらむ。都
離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかの事な
くて月日を経るに、心も皆くづほれにけり。かかろ人ものし給

ふとはほの聞きながら、いたづら人をば、ゆゆしきものにこそ
思ひ捨て給ふらめと、思ひくしつるを、さらば導き給ふべき
にこそあなれ。心細き獨寢の慰めにも」など宣ふを、かぎりな

く嬉しと思へり。
「獨寢は君も知りぬやつれ」と思ひあかしのうら淋しさを

獨寢は君も知りぬやつれ」と思ひあかしのうら淋しさを

されど浦馴れたらむ人は浦に淋
しみなれたあなたは、私程に淋
しくはありませぬ。旅衣の歌
旅衣の歌 私は旅愁の爲に夜を
明かしかねて熟睡も出来ませ
ぬ。旅衣はうらがなしきの枕詞。
草の枕は旅愁のこと。

うるさしや 煩雜だから此處に
は記さぬ。ひがごとどもに 間違まじりに
書き立てた事故、もと愚痴
で頑固な入道の性質も一層誇張
されて顯はれてゐる事だらう。

心恥かしきさま 入道の様子が
どことなく奥ゆかしいやうに思
はせるにつけても、却て斯かる
人目につかぬ所に案外派な女
が居る事もあらうと、源氏は注
意して。

遠近もの歌 源氏の歌。遠近も
分らぬ大空で物思に沈んでゐる
のかもつかないから、入道がほめる
かしてくれた宿の梢を言づれる
のです。

まして年月(を)・思(う)ひ給へわたるいふせさを、推し量らせ給へ」と
聞ゆるけはひ(など)、うちわななきたれど、さすがに故なからず。
源「されど浦馴れたらむ人は」とて、

旅衣源氏うらがなしきにあかしかね草のまくらは夢もむすばず

とうち亂れ給へる御さまは、いとぞ愛敬づき、いふよしなき御
けはひなる。かぞ知らぬ事ども聞え盡したれど、うるさしや。

ひがごとどもに書きなしたれば、いとどをこにかたくなしき入
道の心ばへもあらはれぬべかめり。

入道の心 思ふ事かつかかなひぬる心地して、涼しう思ひ居たるに、又

の日の晝つ方、岡邊源氏からに御文遣はす。心恥かしきさまなめるも、
なか／＼斯かる物の隈にぞ思ひの外なる事も籠るべかんめる、

と心づかひし給ひて、高麗くるみの胡桃色の紙(の)に、えならず・引きつ
くろひ(給ひて)、

「遠近(を)も知らぬ雲居(を)にながめわびかすめし宿(源氏の家)の梢をぞとふ

思ふには 古今懸一「思ふには
忍ぶる事ぞまけにける色には出
でじと思ひしものを」

内に入りて 入道が娘の部屋に
入つて返事をせき立てるけれど
も。

包みあまりぬるにや 古今雜上
「癖しきを何に包まむ唐衣袂ゆ
たかに裁てといはれましを」

眺むらむの歌 君が眺めて居ら
れると同じ雲居を娘も眺めてゐ
るのでせう。

玉裳 玉は美稱。海岸故玉藻に
よせたのである。
宣旨書 代筆。
いぶせくもの歌 なぜ物思をし
てゐるのかと尋ねてくれる人が
ないの、鬱々と煩悶してゐま
す。

思ふには」とばかりやありけむ。入道も人知れず待ち聞ゆとて、

かの家岡部の家に來居たりけるもしるければ、御使源氏の御使をいとまばゆきまで醉あ

はす。御おほん・返りいと久し。内(參)に入りてそそのかせど、むすめ

は更に聞かず。いと恥かしげなる御文源氏ののさまに、さし出明石上のさまでむ手

つきも恥かしうつつましう、人の御程源氏わが身の程思ふに、こよ

なくて、「心地あし」とて寄り臥しぬ。いひわびて入道ぞ書く。あまりの

文懸隔故「いともかしこきは、田舎びて侍る袂(侍)に包みあまりぬるにや、

更に見給(心)ひも及び侍らぬかしこさになむ。さるは、

眺むらむ同じ雲居をながむるは思ひもちなじ思ひなるらむ(べし)

となむ見給ふる。いとすきくしや」と聞えたり。陸奥紙みちのくにがみに、

いたう古めきたれど、書きざまよしばみたり。げにもすきたる源氏の心

かなと、めざましう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉裳などか

づけたり。又の日、宣旨書せんじがきは見知らず(心)・・・なむ」とて、

「いぶせくも心に物を惱むかなややいかにと問ふ人もなみ

いひがたみ 一條院「戀しとも
まだ見ぬ人のいひがたみ心に物
の歎かしきかな」
うもれいたからむ 引込思案と
いふものだらう。

例のどうなきま 例によつて少
しも書かうとはしないのを、強
ひて勧められて。

思ふらむの歌 私を御覽にもな
らぬあなたを、噂に聞いただけ
で煩悶なさる筈はないから、あ
なたの御心の程がどうやらと疑
はしく思はれます。

上衆めき 上臈らしく。

つれづれなる夕暮 夕暮の淋し
さに堪へられぬとか、曙の風趣が
黙してをれぬとかいふやうに人
前を取つてくろつて、先方でも同
感されさうな機会を推量して、
時々文通をなさるに、その相手
としてつりあはぬほど下手では
ない。「折々」は「書きかはし」を
修飾する。

いひがたみ」と、この度は、いといたうなよびたる薄様に、い
と美しげに書き給へり。若き人のためでざらむも、いとあまりう
もれいたからむ、めでたしとは見れど、なずらひならぬ身の程
の、いみじうかひなければ、なかく世にあるものと尋ね知り
給ふにつけて、涙ぐまれて、更に例のどうなきまを、せめていは
れて、淺からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄くまぎらはし
て、

明石上

思ふらむ心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きか惱まむ

手のさま書きたるさまなど、(都の) やんごとなき人に、いたう劣

るまじう上衆めきたり。源氏の心をかしと見給へど、

うちしきりて遣さむも人目つつましければ、二三日隔てつつ、

つれづれなる夕暮、もしは物あはれなる曙などやうにまぎらは

して、折々人も同じ心に見知りぬべき程推し量りて、書きかは

し給ふに、似げなからず。明石上の事心深く思ひあがりたる氣色も、源氏の心見で

夏清がらうじて良清が自分の物にしすまして話して居つた口振も不快だし、又彼が今も心を振も居ようもの、目の前を自分が横取りするの、氣の毒だ人進み參らば先方で押しかけて來たら、餘儀なく應じたやうに胡麻化さうと思ふけれども女はた併し女は。

關隔たりては須磨から明石の浦に來ては、關の事が一層氣にかかつて、須磨の關の名は枕草子には多く詠まれてゐるのであるが、古書に所見がない爲に變遷が明かでない、關址も源光寺の邊といはれて居るが證はない。たはぶれにくくも、古今誹諧一ありぬやと試みがてらあひ見ねばたはぶれにくき迄ぞ戀しき。

お前の御階 清涼殿前の階段。

はやまじとおぼすものから、良清がらうじていひし氣色もめざましう、年頃心づけてあらむを、目の前に思ひたがへ・むもいとほしうおぼしめぐらされて、人進み參らば、さる方にてもまざらはしてむ・と思せど、女はたなか／＼やんごとなき際の人よりも、いたう思ひあがりて、ねたげにもてなし聞えたれば、根氣くらべにぞ過ぎける。京のことに、かく關隔たり・・ては、いよ／＼覺束なく思ひ聞え給ひて、いかにせまし、たはぶれにくくもあるかな、忍びてや迎へ奉りてまし、とおぼし弱る折あれど、さりともし斯くてやは年・をかさねむ、今更に人わろき事をやは、とおぼししづめたり。

その年、おほやけに物のさとししきりて、物さわがしきこと多かり。三月十三日、神鳴りひらめき、雨風さわがしき夜、御門の御夢に、院の御門、お前の御階のもとに立たせ給ひて、御氣色いとあしうて、睨み聞えさせ給ふを、かしこまりておはしま

聞えさせ給ふ事ども 桐壺院から朱雀院に。

思ひなしなる事は 氣のせいであらういふものです。

睨み給ひしに 故院がお睨みになつた御目に主上が御目を見合はされたと夢に御覽になつた爲か眼病をお煩ひになつて。

おほきおとど 弘徽殿の御父。

そはかとなく どことがどうといふことなしに。

さまぐなり 太政大臣の薨去といひ、太后の御病氣といひ、それやこれやの御歎き。

世のもどき 今源氏を許しては、輕率といふ世間の非難を招くでせう。

す。聞えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いとど怖ろしういとほしと思して、弘徽殿后に聞えさせ給ひければ、弘徽雨など降り、空亂れたる夜は、思ひなしなる事はさぞ侍る。かろくしきやうに、思し驚くまじき事」と聞え給ふ。

睨み給ひしに見合せ給ふと見しけにや、御目（いたう）・・・・・煩ひ給ひて、堪へがたう惱み給ふ。御慎み、内にも宮にも限りなくせさせ給ふ。（二條太政大臣）おほきおとど亡せ給ひぬ。（當然の御壽命ではあるが）ことわりの御よはひなれど、

次々におのづから騒がしき事あるに、（弘徽殿）大宮もそこはかとなく煩ひ給ひて、程経れば、弱り給ふやうなる、（朱雀院）うちにおぼし歎く事

さまぐなり。（朱雀）なほこの源氏の君、誠に犯す事なきにてかく沈むならば、必ずこの報いありなむとなむ覺え給ふ。（待も）今はなほ

もとの位をも賜ひてむ」と、たびくおぼし宣ふを、（弘徽）世のもどきあはくしきやうなるべし。罪におちて都を去りし人を、

三とせをだに過ぐさず（いかが）許されむことは、世の人もいかが

おぼし憚る程に 主上が遠慮しておいでになる間に。御なやみども 主上の御眼病と弘徽殿の御病氣と。さま／＼に 主上と弘徽殿とそれ／＼。

渡り給はむ事をば 源氏は自分の方から女の家に行く事を、あるまじき事と思つてゐると。いと口惜しき際のが、假初に田舎の下つた人の輕口にて、源氏から夫婦となるのだ、私など源氏のだから、煩悶を増す事だらう、斯く及びもつかぬ望をいだいて居る親達も、私がまだ若い間に、あつてにもならぬ事を、あて居るだらうが、却つて心配する事になるだらう、と思案して。

只この浦におはせむ程 源氏が明石の居られる間だけ文通の出來るのが一通りならぬ事だ。

いひ傳へ侍らむ・・」など、きさきかたう諫め・・給ふに、おぼし憚る程に、月日かさなりて、御なやみども、さま／＼にあもりまさらせ給ふ。

明石には、例の秋は濱風の異なるに、獨寝源氏はもまめやかに物わびしうて、入道にも折々語らはせ給ふ。酒とかうまぎらはして、

明石上をこち參らせよ」と宣ひて、渡り給はむ事をば、あるまじう思したるを、さうじみはた更・・に思ひ立つべくもあらず。いと口

惜しき際の田舎人・・こそ、かりにくたりたる人のうちとげと・・につきて、さやうにかろらかに・語らふわざをもすなれ、

人かすにもあぼされざらむものゆゑ、我はいみじき物思ひをや添へむ、かく及びなき心を思へる親達も、世ごもりて過ぐす・

年月こそ、あいなだのみに行末心にくく思ふらめ、なかくなる心をや盡さ・む、と思ひ・て、只この浦におはせむ程、

かかる・・・御文ばかりを聞えかはさむこそあるか・ならぬ

年頃音にのみ 今迄源氏の事を
評判にだけ聞いて。

世になきものと 天下無類と噂
に聞き傳へて居つた。

かくまで世にあるものと かう
まで私の存在を認めてお手紙を
下さるなどは、斯かる蛋の間に
朽ちてしまふ身を取つて過分の
喜びなのだ、などと思ふと一層
恥かしくて。
塵もけぢかき事は 源氏に逢は
うなどと夢にも思ひ寄らな
い。

めてたき人と聞ゆとも 君がい
くら結構な方であつても、娘に
無情な仕打をされる事もあらう
に、神や佛を力にして、君の御
料簡をも娘の運命も顧みずに
随分無闇な望を起したものだ
と思ひかへしてなやんでゐる。

忍びて 入道はそつと陰陽師に
吉日を選ばせて。

・事ならめ、年頃音おとにのみ聞きて、いつかはさる人の御有様をほ

のかにも見奉らむなど遙かに思ひ聞えしを、かく思ひかけざり

し御すまひにて、まほならねどほのかにも見奉り、世になきも

のと聞き傳へし御琴源氏ののねをも風につけて、聞き、明暮の御有様

・覺東(を)なからで、見聞き奉りて、かくまで世にあるものとおぼし

尋ぬるなどこそ、かかる海士のなかに、朽ちぬる身に、あまる

事なれ、など思ふに、いよく恥かしくて、露もけぢかき事は

・思ひ寄らず。親たちは、ここらの年頃の祈りのかなふべきを

・思ひながら、ゆくりかに見せ奉りて、おほしかずまへざらむ

時、いかなる歎きをかせむ、と思ひやるに、ゆゆしくて、め

でたき人と聞ゆとも、つらういみじうもあるべきを、目に見

えぬ佛神(神佛)を頼み奉りて、人の御心をも宿世をも知らで、など打

返し思ひ亂れ(居)・たり。君は、「此頃の波(波の音を聞くにつけても明石上の琴が聞きたい)の音に、かの物のねを聞
かばや。さらずばかひなくこそ」など常は宣ふ。忍びてよろし

十三日 八月十三日。後撰春下「あたら
あたら夜の 夜の花とを同じくは心知れ
らむ人に見せばや」娘を源氏に
許す意。
夜更かして 都への開えを憚つ

思ふどち見まほしき 伊行釋「思
ふどちいざ見にゆかむ玉津島入
江の底に沈む月影」

秋の夜の歌 秋の夜の月が照
つて居るが、月毛の駒よ戀しい
都に走つてゆけ、暫しの間なり
と紫上を見たいものだ。
いたき所 海岸にある入道の
家のつら 海にきいた點の
此處に居て 岡邊の家に居て
は、物思ひありたけをしつくす
事だらうと思ひやられるにつけ
ても。

き日・見せて、母君のとかく思ひわづらふを聞き・入れず、弟
子どもなどにだに知らせず、心一つに立ち居輝くばかりしつら
ひて、十・三日の月の花やかにさし出でたるに、ただ、「あたら
夜の」と聞えたり。君は、すきのさまやと思せど、御直衣奉り
引き繕ひて、夜更かして出で給ふ。御車は二なく作り・たれ
ど、所せしとて、御馬にて出で給ふ。惟光などばかりをさぶら
はせ給ふ。 岡邊の家は山の中に引込んだ所である やや遠く入る所なりけり。道の程も、四方の浦々見
渡し給ひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ戀しき
人の御事を思ひいで聞え給ふに、 直様 やがて馬引き過ぎておもむき
ぬべくおぼす。
 源氏 秋の夜のつきげの駒よわが戀ふる雲居に翔れ時のまも見む
と、 獨言 うちひとりとごたれ給ふ。 岡邊の家のさま 造れるさま木深く、 よしあり いたき所ま
りて、 岡邊の家 見どころあるすまひなり。海のつらはいかめしう面白く、
これは心細く住みたるさま・、 此處に居て 此處に居て思ひ残す事はあら

三昧堂 入道の勤行する堂が附
近にあるので、打鳴らす鐘の聲
が松風の響に和して物悲しく。

うちやすらひ 君は暫時立ちど
まつてもやかと娘に仰しやど
かうまでは 娘はかうまで近い
ところでは 思つてゐるので、
くないと深く思つてゐるので、
こよなうも 下源氏の心。
ばし一人前らしきもの。
な。靡きさうにも思はれない身
分の婦人でも、こゝまで云ひよ
つてしまへば、氣強く相手にし
ないといふやうなことはなかつ
たのが今迄の例であつたのにか
さま、氣位が高馬鹿にしてるの
か、氣位が押し立てたむも無風
なさけなう押したむも無風
流さな無理わざするの事情がゆ
けるのは人目がわるい。

じ・かしとす・らむとおぼしやらるるに、ものあはれなり。三昧
堂近くて、鐘の聲松の風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひ
たる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の聲を
盡したり。ここかしこの有様など御覽ず。むすめ住ませたる方
は、心ことにみがきて、月入れたる槇の戸口、氣色ばかり押し
あげたり。うちやすらひ、何かと宣ふに、
見え奉らじと深う思ふに、もの歎かしうて、うちとけぬ心ざま
を、こよなうも人めいたるかな、さしもあるまじき際の人だに、
かばかりいひよりぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、
いとかくやつれたるに、あなづらはしきにや、とねたう、さま
ざまにおぼし惱めり。なさけなう押し立てたむも、事のさまにた
がへり、心くらべに負けむこそ人わるけれなど、亂れ怨み給ふ
さま、げに物思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳の
紐に、箏の琴の引き鳴らされたるも、けはひしどけなく、うち

この聞きならしたる 始終お聲に聞いて居つた琴までもお聞かせ下さらないのですか。

睦言を 源氏の歌。憂き世の夢のやうな悲しさも幾分あきらめられる事もあらうかと、睦まじく語り合せる人がほしい。睦まじく明けぬ夜に 私のやうに長夜の夢に迷つてゐる心には、何が夢、何が現と、判別して語る事が出来ませぬ。

かう物おほえぬに 突然源氏が來られたので 大變當惑して。されどさのみも さうばかりも句の下につひに戸を明けてはひられた」といふ句を補つて見なければならぬ。

常は厭はしき 古今戀三「長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人から秋の夜なれば」人に知られじと 明石上に逢つた事を誰にも知られまいと思召すにつけても、源氏は心が落着

とけながらかきまさぐりける程。見えてをかしければ、源「この聞きならしたる琴をさへや」など、よろづに宣ふ。

睦言を語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかばさむやと

明けぬ夜にやがて惑へる心にはいづれを夢とわきて語らむ

ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおほえたり。何心明石上は

もなく打解けてゐたりけるを、かう物おほえぬに、いとわりな

くて、近かりける曹司ざうしの内に心とく入りて、いかで堅めけるに

かいと強きを、しひても押し立ち給はぬさまなり。されどさ

のみもいかでかはあらむ。人さまいとあてにそびえて、心恥か

しきけはひぞした。かうあながちなりける契りをおぼす

にも、淺からずあはれなり。御志の近まさりするなるべし。常

は厭はしき夜の長さも、疾く明けぬる心地すれば、人に知られ

じとおぼす。心あわただしうて、こまかに語らひおきて

出で給ひぬ。

御文 後朝の文。
あいなき つまらない 京への疑
心暗鬼から、こそ、と後朝の
文を送られるのの意。

さればよと 女の方では、案の
定捨てられたのだと嘆いて居る
から。
今更に 世を捨てて居りなが
ら、今更心を亂すのも氣の毒だ。

二條の君 紫上が、風の便りに
も此の事を漏れ聞いて、二人の
間に隠し立てがあつたのだと、
冗談にも思ひ疎まるといふ事
があつては、心苦しく又恥かし
く思召すのも、あまりにも深い
御愛情である。

さすがに心とどめて 紫上も道
に氣にかけて恨まれる折々もあ
るが、自分は何でたわいもない
氣まぐれをして紫上からあんな
に恨まれた事だらうなどと。

御文 (も) 後朝の文であるから
い・と・忍・び・て・ぞ・今日・は・ある。あいなき御心の鬼なりや。こ
こにも、斯かる事いかで (斯かる事人に知らせ)
使 (の使を) ことくしくももてなさぬを、胸痛く思へり。かくてのちは、
忍 (源氏が明石上方に) びつ・つ・時々・あはす。程もすこし離れたるに、おのづから物い
ひ (口のわるい海人が多くの中にはあるかもしれぬ) さがなき海士の子もや立ちまじらむと、おぼし憚るほどを、
さればよと思ひ歎き (思ひ) たるを、げにいかならむと、入道も極
樂の願ひをば忘れて、只この御氣色を待つことにはす。今更に
心を亂るも、いとほしげなり。二條の (腕の) 君の、風のつてにも
漏り聞き給はむ事は、たはぶれにても、心の隔てありけると思
ひ (聞か) とまれ奉らむは、心苦しう恥かしうおぼさるるも、あなが
ちなる御志の程な (心) りかし。かかる方のことをば、さすがに心
(心) とどめて怨み給へりし折々 (心の) を、などであやなきすさびごと
につけてもさ思はれ奉りけむ、など、取 (親しかった昔を) りかへさまほしう、人 (明石上の) の
有様 (有様を) を見給ふにつけても、戀 (紫上の戀しさ) しさの慰む方 (の) なければ、例より

人なみ／＼にいつの世になつた所て人並々の女になれる身の上とも思つては居なかつたが、只何がなしに長閑に暮して來た今迄の年月は、何の苦勞もなかつた。

あはれとは月日のたつにつれて明石上に對する愛情は深まつてゆくが。

獨り臥しがち岡邊の家には行かずに。

返りごと書くべきこれを見た人から返事を貰ふやうな趣向にしておいた。

二條の君 紫上。

年かはりぬ 源氏二十八歳。

人なみ／＼になるべき身とは思はざりしかど、只そこはかとなとちりともなくて獨身で暮して來た今迄はく、過ぐしつる年月は、何事をか心をもなやましけむ、かういみじう物思はしき世にこそありけれ、と、かねて推し量り思ひしよりもよろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎憎めない懸み度で源氏に接したぬさまに見え奉る。あはれとは月日に添へておぼしませど、やんことなき方のおぼつかなくて年月を過ぐし給ふが、ただならずうち思ひおこせ給ふらむがいと心苦しければ、獨り臥しがち源氏をにて過ぐし給ふ。繪をさま／＼書きあつめて、思ふ事どもを書きつけ、返りごと聞くべきさまにしなし給へり。見む人の心にしみぬべき、物のさまなり。いかでか空にかよふ御心ならむ、二條の君も、物あはれに慰むかたなく覺え給ふ折々、同じやうに繪をかき集め給ひつ、やがてわか御有様を、にき日記のやうに書き給へり。いかなるべき御有様どもにかあらむ。年かはりぬ。うち朱雀院御極に御藥の事ありて、世の中さま／＼にののし

當代のみこ

朱雀院の皇子。



御目の惱み 朱雀院御眼病の事は八三頁参照。

終の事といづれは許される事と思召してゐられたが、無常の世の習ひ故、どうなり果てる身ぞと歎いて居られたに。

る。當代のみこは右大臣の御むすめ、承香殿じようきやうでんの女御の御腹に、
 男後に今上みこ・生れ給へる、二つになり給へば、いといはけなし。春冷泉
 宮院にこそは譲り聞え給はめ、おほやけの御後見をし世をまつり
 ごつべき人をおぼしめぐらすに、この源氏の・かく沈み給
 ふこと、いとあたらしうあるまじき事なれば、遂弘徽殿の御制止に後の御いさ
 めをも背きて、許されぬべき定め出で來ぬ。こぞより、后弘徽殿も
 御物怪ものけになやみ給ひ、さまざまの物のさとし・しきりさわ
 がしきを、いみじき御慎みどもをし給ふしるしにや、よろしう
 おはしましける、御目の惱みさへ、此頃・重くならせ給ひて
 物心細くおぼされければ、七月廿餘日の程に、又かさねて京へ
 歸り給ふべき宣旨くだる。終つひの事と思ひしかど、世の常なき
 につけても、いかになり果つべきにかと歎き給ふを、かう俄か
 なれば、嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむこと
 をおぼし歎（も）くに、入道（も）・さるべき事と思ひながら、うち聞く

夜がれなく、毎晩缺かきさずに娘と睦しく話される。

怪しう 源氏の心。

思ひのほかに 思ひがけずも悲しい旅路に出かけたが、遂には歸京する日の來る事と一方では心を慰めて居つたのだ。

この度は 今度は歸京といふ嬉しい出發だが、二度と此の浦に來る事はなからうと思ふと悲しい。

程さへ 季節さへ。秋の半であるから。

なぜ心づから なぜ自分は自ら求めて今も昔もつまらぬ戀の爲に身を憂なしにするのだらう。

より、胸ふたがりて覺ゆれど、思ひのごと榮え給はばこそはわ
上の事
が思ひのかなふにはあらめ、など思ひなほす。その頃は、夜が
れなく語らひ給ふ。六月ばかりより、心苦しき氣色ありてなや
みけり。かく別れ給ふべき程なれば、あやにくなるにやありけ
む、ありしよりもあはれにおぼして、怪しう物思ふべき身にも
ありけるかなと、おぼし亂る。女は更にもいはず思ひ沈みたり。
いとことわり。思ひのほかに悲しき道に出で立ち給ひし
かど、遂には行きめぐり來なむと、かつはおぼし慰
めき。この度は嬉しき方の御出で立ちの、又やはかへり見
るべきとおぼすに、哀なり。さぶらふ人々も、程々につけては
喜びおもひ、京よりも御迎へに人々參り、心地よげなるを、あ
るじの入道、涙にくれて月も立ちぬ。程さへあはれなる空
の氣色に、なぞや心づから今も昔もすずろなる事にて身をはふ
らかすらむ、とさまににおぼし亂る。心を知れる人々

見奉りむつかるめり。ぶつ／＼
月頃は、今までは人にそんな様
子を見せず、時々人目を忍ん
で逢ひに行かれたりなど、此の別
の冷淡さであつたのに、この別
れ、これでは却つて娘の款の種
だのに。

あさてばかりに。出發は明後日
頃といふ日になつて。

めざましうも。目のさめる程の
美人だなあと。

さやうにぞ。京に迎へる事を明
石上に約束された。

只かばかりぞ。女としては只そ
れだけがありがたい仕合として
思ひあきらめたらとまで思はれ
もしようが。

は、「あなにく。例の御癖ぞ」と、見奉りむつかるめり。「月頃は、
つゆ人に氣色見せず、時々かいまぎれなどし給へ。るつれなさ
を、此頃、あやにくになかくの人の心づくしに」と、つきし
ろふ。少納言・しるべして聞え出でし初めの事などささめき
あへるを、ただならず思へり。

明後日 あさてばかりになりて、例のやうに、いたうも更かさで渡りた

まへり。さやかにもまだ見給はぬかたちなど、いとよし／＼し

うけだかささまして、めざましうもありけるかなと、見捨てが

たく口惜しうおぼさる。さるべきさまに・て迎へむとおぼしな

りぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。男の御かたち有様、はた更

にもいはず、年頃の御行ひに、いたく面瘦せ給へるしも、いふ

かたなくめでたき御有様にて、心苦しげなる・氣色にうち涙ぐ

みつつ、あはれに深く契り・給へるは、只かばかりをさいは

ひにてもなごかやまざらむ、とまでぞ・見ゆめれど、めでた

人々
供入達

源氏の心

源氏の心

源氏の心

源氏の心

源氏の心

源氏の心

源氏の心

わが身の程を 自分に分際を思ふと物思は盡きない。
取り集めたる ままへ一つに集めたことの情景である。

このたびは 一度は別れてもやがて京へ迎へよう。「立ち」は「煙」の縁語。

かきつめての歌 色々思ふ事ほどございますが、詮ない事故、何も恨みも致しませんが、「おもひ」に「火」が、「かひ」に「貝」が「うらみ」に「浦」がひびかしてある。

さらば ではせめて形見として思ひ出して下さる種となる程の一曲をでも。

さし入れたり 娘の居る部屋の御簾の下に。
涙さへ 琴弾くことがそゝのかされるばかりでなく、涙までが。

明 石

ので却つて、
きにしも、わが身の程を思ふにも盡きせず。波の聲、秋の風にはなほ響きことなり。鹽焼くけぶりかすかにたなびきて、取り集めたる、所のさまなり。

源氏 旅がひびかしてある。
このたびは立ち別るとも藻鹽焼くけぶりは同じ方に靡かむと宣へば、
(女)

明石上 集めて
かきつめて蜚のたく藻の思にも今はかひなき怨みだにせじ

あはれにうち泣きて、
詞づくな
ことずくななるものから、さるべきふし

の御いらへなど、淺からず聞ゆ。
源氏が聞きたがる祭の音など
この常にゆかしがり給ふ物の

ねなど、更に聞かせ奉らざりつるを、
源氏が
いみじう恨み給ふ。明「さ

らば形見にも、偲ぶばかりのひとことをだに」と宣ひて、京より

もておはし・・・たりし琴の御こと・取りに遣はして、
特別面白い曲を
心殊なる

しらべを、ほのかに搔き鳴らし給へる、
深夜の静寂の中に見えるのは何ともいへない
深き夜の澄めるは、た

とへむ方なし。入道もえ堪へで、みづから箏の琴・取りてさし

入れたり。
明石上も
みづからも、いとど涙さへそそのかされて、とどむ

聞く人の心ゆき 聞く人の心も満足して。
かたちさへ 琴の音のよいばかりでなく容姿もめでたからう。

心やましき程に 源氏の心をじらす程度に弾きやめて。
琴は私の持参した琴は又来て弾くまでの形見に置いてゆかう。
等閑にの歌 あなたがよい加減に口がためしていらつしやるその一言を、私は始終泣きながら心にかけて思ひ出して居りませう。
逢ふまでの歌 再會までの形見として残しておく中の緒の調子も御身の愛情も變らざう。
中の緒 箏の十三絃の中、一より五までを大緒といひ、六より十までを中緒といひ、末の斗(ト)爲(キ)巾(キン)の三絃を細緒といふ。契るなかとひかけたのである。
この音たがはぬ先に この中の緒の調子の變らぬ内に屹度對面しませう。

べき方なきに、聞く氣にならるのであらう さそはるるなるべし、忍びやかにしらべたる程、いと上衆めきたり。上流らしい氣高きがある 入道の宮の御ことのねを、只今の又なきもの

に思ひ聞えたるは、今めかしうあなめでたと聞く人の心ゆきて、かたちさへ思ひやらるる事は、げにいと限りなき御琴のね

なり。明石上 これは飽くまで弾き澄まし、心にくくねた音がさえて奥床しくいまいしと思はれる程音色がよい(か) きねぞまされる。この御心にだに始めてあはれになつかしう(あはれに)、

だ耳馴れ給はぬ手など、心やましき程に弾きさしつづ、飽かずおぼさるるにも、月頃、など(て) 強ひても聞きならさざりつらむと、源氏心 くやしうおぼさる。心のかぎり、行く先の契りをのみし給ふ。

「琴は又掻き合するまでの形見に」と宣ふ。明石上 女、言に琴をひやかしてなる 等閑に頼めおくめる一ことを盡きせぬねにやかけて俣ばむ

いふともなき口ずさびを、恨み給ひて、

「逢ふまでの形見に契る中の緒の調べは殊に變らざらなむこの音たがはぬ先に必ずあひ見む」と頼め給ふめり。されど只

明石

別れむ程の折上のつらさを思つて、涙に咽んで居るのも尤である。

うち捨てて、あなたを残して去るのが悲しくて、歸京後の御身はどんなだらうと思ひやられる。「立つ」に旅立つ意が兼ねてある。

年經つるの歌 住み馴れたこの苦屋も、君なき後はいよ／＼荒れて私はつらい思ひをする事でせうから、寄る波の返る方に身を投げて死なうと思ひます。初句二句は「憂き」を生む序詞である。

年頃といふばかり 幾年といふ程長く住み馴れたのも、今を限りと思へば御落涙も尤だ。

されど何かはとてなむ 一々記すには及ぶまいと思つて省略する。

人々下の品まで お供の人々、下々の者に至るまで。

別れむ程のわりなさを思ひむせたるも、いとことわりなり。
立ち給ふ曉出發當日・は、夜深開港の家をう出で給ひて、御迎への人々も騒がしければ、心も空なれど、人まめをはからひて、

うち捨てて立つも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな
御返り、

年經つる苦屋も荒れてうき波の歸る方にや身をたぐへまし

と、うち思ひけるままなるを見給ふに、忍び給へど、ほろ／＼

とこぼれぬ。心知らぬ人々は、なほ斯かる御すまひなれど、年頃といふばかり馴れに・給へるを、今はとおぼすはさもある事

ぞかし、など見奉る。良清などは、あろかならずおも・ぼすなめ

りかしと、憎くぞ思ふ。嬉しきにも、「げに今日を限りに此の渚

を別るること」などあはれかりて、口々いひて・しほたれいひ

あへる事どもあん・めり。されど何かはとてなむ。入道、今日の

御設け、いといかめしう仕うまつれり。人々下の品まで、旅の

いつのまに、いつの間に用意した事かと思はれた。あまたかけさぶらはす、幾荷も

都のつと、都への土産。趣向して行届かぬ

寄る浪にの歌、私が裁つて縫ひ重ねた旅衣でございませう。涙に濡れて居つて著心事がわると仰しやつてお厭ひになる事

かたみにぞの歌、再會までには日数のある事故、私の中の衣を記念として、あなたの贈物の著物と着かへるべきです。中の衣

志あるまど、折角の御好意だから「隔てむ」は中の衣の縁語である。御身になれたる、今まで著馴れた著物を明石上に遣した。これに今ひとへはもう一つ

思ひ出の種を付け加へた形見であらう。かひつくる、世をかく。なつて長い間、俗界がいやになつて、矢張解脱の彼岸に達する事は出来ませぬ。これは表面の意味で、一方に娘に關する望みが達せられないといふ意といふ意とを離れてある。世を「はらうみ」の枕詞。

さ・うぞく、珍らしきさまなり。いつのまにかしあへけむと見えたり。御よそひはいふべくもあらず、御衣櫃あまたかけさぶらはす。誠の都のつとに、しつべき御贈物ども、ゆゑづきて思ひ寄らぬ限なし。今日奉るべき狩の御さうぞくに、

とあるを御覽じつけて、さわがしけれど、
かたみにぞかふべかりける逢ふ事の日數隔てむ中の衣を
とて、志あるを」とて奉りかふ。御身になれたるどもを遣
はす。げに今ひとへ偲ばれ給ふべき事を添ふる形見なめり。
えならぬ御ぞに匂ひの移りたるを、いか人が人の心にもしめざら
む。入道、「今はと世を離れ侍りにし身なれども、今日の御送り
に仕うまつらぬ事」など申して、かひつくるもいと
ほしなから、若き人は笑ひぬべし。

「世を海にこころ鹽じむ身となりて猶此岸をえこそ離れぬ
かたみにぞの歌、再會までには日数のある事故、私の中の衣を記念として、あなたの贈物の著物と着かへるべきです。中の衣は上下の衣を隔てる。だから「隔てむ」は中の衣の縁語である。御身になれたる、今まで著馴れた著物を明石上に遣した。これに今ひとへはもう一つ思ひ出の種を付け加へた形見であらう。かひつくる、世をかく。なつて長い間、俗界がいやになつて、矢張解脱の彼岸に達する事は出来ませぬ。これは表面の意味で、一方に娘に關する望みが達せられないといふ意といふ意とを離れてある。世を「はらうみ」の枕詞。

いとど感ひぬべく、今までも悟りきれずに居りますが、今後は一層子故の闇に迷ひませうか。おぼし出てさせ給ふ折、娘を思ひ出して下さればお便りを下さ

都出でし歌 永年住み馴れたこの油を去る秋の嘆きは、都を出た時の春の歎にも劣らぬ。

さうじみの心地は お別れの後の本人の明石上の悲しみは譬へやうがなくて。身の憂きをもとにて わが身の不遇が嘆きのもとと故仕方のない事だが。

たけき事とは 今の場合の最上の仕方としては涙に沈んで居るより外に道はない。

心の闇はいとど感ひぬべく侍れば、（ト）境までだに」と聞えて、（ト）入道

「すき、しきやうなれど、おぼし出でさせ給ふ折侍らば」な

ど御氣色賜はる。（ト）いみじう物をあはれとおぼして、所々うち

赤み給へる御まみのわたりなど、いはむ方なく見え給ふ。（ト）思

ひ捨てがたき筋もあめれば、今いと疾く見なほし給ひてむ。只

このすみかこそ見捨てがたけれ。いかがすべき」とて、

都出でし春のなげきに劣らめや年経るうらをわかれぬる秋

とて、押し拭ひ給へるに、いとど物覺えずしほたれまさる。立

ち居（ト）もあさましうよろぼふ。（ト）さうじみの心地は譬

ふべきかたなくて、かうしも人に見えしと思ひしづむれど、身

の憂きをもとにて、わりなき事なれど、うち棄て給へる恨みの

やるかたなきに、面影添ひて忘れがたき（ト）に、たけき事とは

只涙に沈めり。母君も慰めわびて、母「何に斯く心づくしなる事

を思ひそめけむ。すべてひがくしき人に従ひ（ト）ける心の

思ひ慰めて
以下明石上に向つていふ詞。

ひがめる心を入道の偏屈な心を誘ひあひながら。早くせひともいづしかいか。早くせひとも娘が本意の通りになるやうにと、望をかけたつ長の年月を過し、今初めてその宿望が達したと思つて源氏の君を頼みに思つて居つたのだ。縁組早々心苦し目にあつたものだ。

願はし申すべきよし。願ほどきの御禮まゐりする旨を。俄に罪がゆるされたので急に人々が追従するのである。急に所せうてお迎の人が多い故。

おこたりぞ」といふ。入道あなかまや。思し棄つまじき事戀姫の事も物し給ふめれば、源氏に何かお考があるたらうさりともおぼす所あらむ。と思ひ慰めて御湯などをだにまゐれ。泣くのは不吉だあなゆゆじや」とて、片隅に寄り居たり。乳母母君など、ひがめる心をいひ合せつつ、「いづしかいかで・思ふさまにて見奉らむと年月を頼み過ぐし、今や・思ひかなふとこそ頼み聞えつれ。心苦しき事をも物の初めに見るかな」とと歎くを見るにも、いとほしければ、いとどほけられて、晝は一日いそをのみ寝くらし、夜はすくよかに起き居て、「數珠の行方も知らずなりにけり」とて、手萬事忘却の體であるを押しすりて仰ぎ居たり。弟子どもに疎んじ勝られてあはめられて、月夜に出でて行道するものは、遣水やりみづに倒れ入りにけり。風流な庭石の片かどによしある岩の片そはに腰もつきそこなひて、やみ臥したる程になむすこし物物思ひを忘れたまざりける。君は、難波なにわの方に渡りて、御祓はらへし給ひて、住吉にも、たひらかにて色々の願願ははたし申すべきよし、御使して申させ給ふ。俄に所せうて、みづ

源氏

都の人も 都に居残つて居つた人も源氏にお供した人も。

所せかりし御髪 多過ぎた髪の毛が少し薄くなつたのも却つて美しいのであるが、今はかくて以後はかうして紫上と一緒に暮すのだと御安心なさるにつけても。

その人の事ども 源氏は明石上の噂などを紫上に語り始めた。身まば思はず 拾遺戀四「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」かつ見るにだに 今日の前に見て居てさへ見飽かぬ紫上だのに、どうしてあんなに長い年月の間見ずに居つた事だらうと、我ながら呆れる迄にお思ひになつて世の中が恨めしく思はれる。

からは、この度えまうで給はず、殊なる御道遙などなくて、急ぎ入り給ひぬ。二條の院におはしましつきて、都の人も御供の人も、夢の心地してゆきあひ、喜び泣きもゆゆしきまで立ちさわぎたり。女君も、かひなきものにおぼし捨てつる命、嬉しうおぼさるらむかし。いと美しげにねびととのほりて、御物思ひの程に、所せかりし御髪、すこしへがれたるしもいみじうめでたきを、今はかくて見るべきぞかしと、御心・おちるにつけては、又かの飽かず別れし人の思へりしさま、心苦しうおぼしやらる。なほ世と共に斯かる方に、て御心のいとまぞなきや。その人の事どもなど聞えいで給へり。おぼし出でたる御氣色浅からず見ゆるを、ただならずや見奉り給ふらむ、わざとならず。「身をば思はず」などほのめかし給ふぞ、をかしうらうたく思ひ聞え給ふ。かつ見るにだに飽かぬ御さまを、いかで隔てつる年月ぞと、あさましきまでおもほすに、取りか

もとの御位あらたまりて、以前の参議大將の官が改まつて員外の權大納言に昇進される。

召しありて、朱雀院から召があつて源氏は参内された。

恥かしうさへ、源氏に對面される事を。

御心地例ならず、朱雀院は長い間御不例に渡らせられたから。

かきくづし、ぼつくくと。

遊び、管絃の御遊。
昔聞きし物のね、源氏の奏した樂の音。

へし世の中もいと恨めしうなむ。程もなくもとの御位あらたまりて、かすよりほかの權大納言になり給ふ。以下の入々もつきくくの人も、さるべきかぎりは、もとの官かへし賜ふ。世に許さるる程、枯れたりし木の春にあへる心地して、いとめでたげなり。召しありてうち参り給ふ。朱雀院のお前にさぶらひ給ふに、ねひまさりて、源氏のさまいかでさる物むつかしきすまひに年經給ひつらむと見奉る。朱雀院が源氏を女房などの、院の御時よりさぶらひて、老いしらへるどもは、悲しくて、今更に泣き騒ぎめで聞ゆ。朱雀院うへも恥かしうさへおぼめ・されて、御よそひなど、殊に引きつくるひて出でおはします。御心地例ならず日頃經させ給ひければ、いたう衰へさせ給へる。主上の御さまを、昨日今日ぞすこしよろしうおぼされける。御物語しめやかにありて夜に入りぬ。十五夜の月面白う靜かなるに、昔の事かきくづしおも・ぼし出でられて、しほたれさせ給ふ。物心細くおぼさるるなるべし。朱雀遊びなどもせず、昔聞きし物のねなども

わたくし海に三年立つては須磨明石に沈
 日本紀斐斐歌大江朝綱一かぞい
 るは哀と見ずや蛭の子は三年に
 なりぬ足立たずしての歌を踏
 宮柱の歌 再會の機があつたの
 だから、先年の春都を去つた折
 の怨みを忘れて下さい。諸冊二
 神が天の御柱をめぐつて相會ひ
 給ひし故事によつて「宮柱」を
 ひてある。めぐりあひける」の枕詞に用
 院の御ために 桐壺院追善の爲
 御八講 法華八講會の事。一日
 に朝座夕座の二座に法華經一卷
 づゝを講じ八卷を四日で終る法
 會。 冷泉院。
 御さえ 御學才も上達せられ
 歸る波につけて 源氏を送つて
 來た使の歸るのに託して。「波の」は
 「よる」の枕詞。いかに「波の」は
 歌きつつの歌 歎きながら明石
 の浦に立つて我が去つたあとを
 ながめくちしてゐるだらうと氣
 は毒に思つてゐる。「歎き」は「立
 つ」の枕詞。「朝霧の」は「立
 つ」の枕詞。この歌は傳人磨の
 霧の鳩のくくと明石の浦の朝
 ふ」の言葉によつてとりなして
 ある。

聞かで久しうなりにけるかな」と宣はするに、

わたつ海にしなへうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は經にけり

と聞え給へば、いとあはれに心恥かしうおぼ・・されて、

宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな

いとなまめかしき御有様なり。

院の御ために御八講行はるべき事、まづ急かせ給ふ。春宮を見

奉り給ふに、こよなくおよづけさせ・給ひて、珍らしうおぼし

喜び給へるを、かぎりなくあはれと見奉り給ふ。御さえも・

こよなくまさらせ給ひて、世を保ち給はむに憚りあるまじく、

かしこう見えさせ給ふ。入道の宮にも、御心すこししづ

めて、御たいめん程にも、あはれなる事どもあらむかし。ま

ことや、かの明石には、歸る波につけて・御文つかはす。引き

隠して・こまやかに書き給ふめり。波のよるいかに、

歎きつつあかしの浦に朝霧の立つやと人を思ひやるかな」

まくなき作らせて 誰からとも
 いはずに只目で相圖させて手紙
 を置いて來させた。須磨の浦で
 尋ね申上げた後ずつと君を思ひ
 續けて涙に腐らせたわが袖をお
 目にかけてはの歌 却つて私の方
 かへりては不平を申した爲に君
 磨で手紙を貰つたなかつたから
 飽かずをかしと嘗て源氏は五
 節を美しい女だと思つた事故は
 されども、此頃は浮氣沙汰は
 居るやうだ。記憶を呼びさま
 ず、花散里などにも、只御せう
 只御せうそこばかりにて 源氏
 御歸京が嬉しう思つて居るとか
 恨めしく思つて居るとか

かの帥そらのむすめごせまの五節源氏が鬱京した故、あいなく人知れぬ物思ひさめぬる心地

して、まくなき作りらせてさしおかせけり。

須磨五節の浦に心を寄せし船人五節自身の事のやがて朽たせる袖を見せばや

手などこよなくまさりにけりと見おほせ給五節の文と見定めてうてつかはす。

かへりては託言かたごやせまし寄せたりし名残に袖の干難ひがたかりしを

飽かずをかしと思しし名残なれば、おどろかされ給ひて、いと

どおぼし出づれど、此頃はさやらの御振舞更あるきせでに、つつみ給ふめ

り。花散里などにも、只御せうそこばかりにて、おぼつかなく

らで、なか／＼恨めしげなりとなむ世に知らず物憂くてとぞ。

さやかに見え給ひし夢ののち、院の御門の御事を心にかげ聞え
 夢に御會ひ三日の夜に桐壺院と
 いかでかの沈み給ふらむ罪
 お救ひ申上げたる佛事を營まうと
 お救ひ申上げたる佛事を營まうと
 石巻に源氏の夢の中であるが、明
 一我は位にありし時あやまつ事
 なかりければ、その罪を終ふる程
 眠りなくしてと仰せられた。六七

この人をえ消たず、到頭源氏を
 屈服させる事が出来なくて残念
 だ。
 院の御遺言 賢木卷に「侍りつ
 る世に變らず大小の事を隔てず
 何事も御後見と思せ」とあつた
 事。卷一三九八頁。とあつた
 物の報いありぬべく、主上は、
 源氏を苦しめ給へた爲に何かの應報
 がありさうに氣遣はれたので。
 なほし立て 配處から呼戻して
 舊位に復せしめ給うたので。

落 標

はつきりと さやかに見え給ひし夢ののち、院の御門の御事を心にかげ聞え
 給ひて、いかでかの沈み給ふらむ罪救ひ奉る事を。せむと。
 心のうち。おぼし歎きけるを、かく歸り給ひては、その
 の御爲にする供養の準備
 御いそぎし給ふ。神無月には御八講し給ふ。世の人靡き仕うま
 つること、昔のやうなり。大后なほ御なやみおもくおはします
 うちにも、遂にこの人をえ消たずなりぬる事、と心やみ。お
 ぼしけれど、御門は院の御遺言を思ひ聞え給ふ。物の報いあり
 ぬべく。おぼしけるを。なほし立て給ひて、御心地
 涼しくなむおぼしける。時々おこりなやませ給ひし御目も
 さわやぎ給ひぬれど、大方世にえ長くあるまじう。心
 細き事とのみ。久しからぬ事を。おぼしつ、常に召しありて、
 源氏の君は参り給ふ。世の中の事。なども、隔てなく宣はせ
 などしつ、御本意のやうなれば、大方の世の人あいなく嬉
 しきことに喜び聞えける。

おりみなむの 朱雀院の御讓位の御心構へが近づくとつけて

おとど 臘月夜の父二條太政大臣、明石巻に薨去。

わが世の私之餘命も幾程もな
いやうな氣がする。あなた
は打つて變つた哀の有様であ
昔より人には以前からあなた
は私を源氏よりも軽く見て居
れたが、私のあなただけに對
類の愛情が癖になつて、あな
立ちまさる人が不便に思は
たので、本望通りに源氏と結
おろかならぬ志はしも並々
いとお私ぬ愛情にはくらべ
思ふ。思ふその點までも心苦

よろづの罪忘れて 主上は臘月
夜の源氏との間の都合な事を
も忘れて。なせあなた
は皇子をお生みにならな
か。残念です。宿縁の深い源
の爲には問もなく子を持た
事だらうと思ふと残念だ。併
身分には限りなくお育てに
事では臣下としてお育てに

ありぬなむの御心づかひ近くなりぬるにも、内侍のかみの心
細げに世を思ひ歎き給へる。朱雀院御心にいとあはれにおぼされけり。朱雀
「おとど・亡せ給ひ、大宮も頼もしげなくのみあついで給へるに、
弘敷殿も重懸でいらせられる上にわが世の残りすくなき心地するになむ、いとほしうなりイ。
名残なきさまにてと・まり給はむとすらむ。昔より人には思ひ
おとし給へれど、みづからの志の又なきならひに、只御事の臘月夜の事のみみ
なむあはれに覺えける。立ちまさる人、又御本意ありて見給
ふとも、おろかならぬ志はしも・なずらはざらむと思ふさへ
こそ・心苦しけれ」とて、うち泣き給ひぬ。女君、顔は
いとあかくにほひて、こぼるばかりの・愛敬にて、泪もこぼれ
ぬるを、よろづの罪・忘れて、あはれにらうたしと御覽せら
る。朱雀「なか御子・をだに持給へるまじき。口惜しうもある
かな。契り深き人のためには、今見出で給ひてむと思ふも口惜
し・や。限りあれば、ただ人にてぞ見給はむかし」など、行末朱雀院御

限りなき御志の 臘月夜に對する限りなき御愛情が年月と共に深まりゆくやうにお仕向け下さるのに。
めでたき人なれど 源氏は美しい方だが、それ程自分を愛しては居なかつた態度や氣持などが、臘月夜も次第に物が分つてくるにつれて。
わが心の若く 若い幼稚な無分別から源氏と契りを結んで。
さる騒ぎ 須磨引退の事。

明くる年 源氏二十九歳。
春宮 後に冷泉院と申す。

いとまばゆきまで まぶしい程冷泉院と源氏とが輝きあつて居られるさまを、世間では結構な事と噂して居るけれども。

いみじう傍痛く 藤壺はそれを心疾しく思つて、何もならぬ事に御心をお痛めになる。

後の御事 臘月夜の心
の事をさへ宣はするに、いと恥かしうも悲しうも覺え給ふ。御
院は (のいと) かたちなど (のいと) なまめかしう清らにて、
に添ふ (へてまさる) やうにもてなさせ給ふに、めでたき人なれど、
さしも思 (う給) へらざりし氣色心ばへなど、 (やうく) 物思ひ知ら
れ給ふままに、などてわが心の若くいはけなきにまかせて、さ
る騒ぎをさへ引きいでて、わが名をば更にもいはず人の御ため
さへ、などおほし出づるに、いと憂き御身なり。
明くる年の二月に春宮の御元服のことあり。十一になり給へ。
ど、程よりおほきに大人 (々々) しう清らにて、ただ源氏の大納言
の御顔を、二つにうつしたらむやうに見え給ふ。いとまばゆき
まで光りあひ給へるを、世人 (ほ) めでたきものに聞ゆれど、母宮
は、いみじう傍痛きことにあいなく御心を盡し給ふ。うちにも
め (いと) めでたしと見奉り給ひて、世の中譲り聞え給ふべきことな
ど、なつかしう聞え知らせ給ふ (けり)。おなじ月の廿餘日、御國

さるためしも 致仕の人が講政したといふ前例もあつたので、辭退が出来ず。

世の中すさまじきにより 此の大臣の引退は、老年の故もあつたが、一つは弘徽殿方の横暴の爲世の中が面白くなくて籠居されたのであるのに。

御子どもなど 子息達も今迄は官途が滯滞して零落の有様であつたが。

宰相の中將 葵上の兄、もとの頭中將。右大臣の女で頭中將の本妻。

高砂うたひし君 賢木卷の事で、後一、四四一頁。頭中將の子で後に紅梅右大臣。

腹々に 頭中將には、妻妾達の腹に子供が澤山次々と生れて賑かきうで源氏は羨しがる。

大殿腹 葵上の腹。

故姫君 葵上。又更に 若君の殿上なさるにつけて。よろづもてなされ 萬事源氏の榮光に引立てられて。年頃おぼし沈みつも 左大臣は今迄悲境に沈んで居つた跡形も無いまでに家門は光彩に満ちてゐる。

番 標

給は、^(五)むに、更に答^(六)あるまじうおほやけ私定め^(七)くらる。さるためしもあ^(八)りければ、すまひ果て給はで太政大臣になり給ふ。^(九)御年も六十三にぞなり給ふ。世の中、すさまじきにより、御子どもなど、沈むやうに物し給へるを、皆、浮び給ふ。取分きて宰相の中將、權中納言になり給ふ。かの四の君の御腹の姫君十二^(一〇)になり給ふを、内に參らせむとかしづき給ふ。かの高砂うたひし君も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり。腹々に御子どもいとあまた次々に生ひ出でつつ、にぎははしげなるを、源氏のおとどは羨み給ふ。大殿、腹の若君は、人より殊に美しうて、うち春宮の殿上し給ふ。故姫君の亡せ給ひし歎きを、宮おとど、又更にあらためておぼし歎く。されどおはせぬ名残も、只このおとどの御光によろづもてなされ給ひて、年頃おぼし沈みつる名残なき

なほ昔に源氏は、今も昔の儘に左大臣家に對する好意は變らず、時折訪問したりして。

皆さるべき事に、皆適當な機會のあるごとに、便宜を取計らつてやらうと源氏が考へて居られ多くなる事だらう。

同じごと源氏の歸京を待つて居つた女房達をば左大臣邸の人々と同じやうに殊勝な者と思召して、長い間へて居た胸のすくやうにしてやらうと思召すから。

院の御そうぶんと桐壺院が形見として源氏に遺された御殿におぼしあてて誰をどの部屋に住ませようかと豫定して。

おほやけ私冷泉院の御元服や御國譲り其他源氏一身上の多忙に取紛れて。お産は今頃かと思ひやると。

まで榮え給ふ。なほ昔に御心ばへ變らず、折節ごとに渡り給ひなどしつ。若君の御乳母たち、さらぬ人々も、年頃の程まかで散らざりける。は、皆さるべき事に觸れつ。よすがつけむ事を。おぼしおきつるに、さいはひ人多くなりぬべし。二條の院にも、同じごと、待ち聞えける人。を。あはれなるものに思して、年頃の胸あくばかりとおぼせば、中將中務やうの人々には、程々につけつ。なさを見え給ふに、いとまなくて、ほかありきも。し給はず。二條の院のひんがしなる宮、院の御そうぶんなりしを、二なく改め造らせ給ふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなどおぼしあててつくろはせ給ふ。

まことや、かの明石に心苦しげなりし事はいかにか、とおぼし忘るる時なけれど、おほやけ私。いそがしき紛れに、えおほすままにも。とぶらひ給はざりけり。三月ついたちの程、此

其他の女房達も

源氏の里邸

共斎氏の侍女で愛人

東院

處分

明石上院の事

珍らしきさまにて源氏には女
の子が初めて生れたのであるか
ら。
おろかならず 源氏の満足は一
通りでない。

宿曜 宿曜道ともいふ。陰陽道
と佛敎と混じた宗教のやうなも
ので二十八宿七曜九曜等の
星辰の運行を見て人の運命や
日蝕月蝕等を占ふ。

みこ三人 夕霧、冷泉院、明石
中宮。

御門后 冷泉院と明石中宮。
中の劣り 明石上の腹。

さしてかなふなめり 一々の中
して實現するのであらう。

大方かみなき位に 惣じて源氏
が帝位にのぼり天下を統治する
事について、あれ程すぐれた
相人達が口を揃へて保證したの
に、今迄は不遇故に皆否定して
居られたが。

當代 冷泉院。
もて離れ給へる筋は 断念して
あられる帝位の事は。桐蔭院が
数多の皇子達の中で、特に自分
を御寵愛になつたが、臣下に降さ
れた御寵慮の程を思ふと皇位に
は御縁がなかつたのである。

頃やとおぼしやゝるに、人知れずあはれにて、御使あ
り。疾く歸りまゐりて、使者が明石から十六日になむ女にて。平らか
に物し給ふ」と告げ聞ゆ。珍らしきさまにてさへあなるを
おぼすに、おろかならず。などて京に迎へて斯かる事
をもせさせざりけむと、口惜しうおぼさる。宿曜に、「みこ三
人、御門后必ず並びて生れ給ふべし。中の劣りは太政大
臣にて位をきはむべし」とかんがへ申したりし、「中の劣
り・腹に女は出で來給ふべし」とありし事、さしてかなふ
なめり。大方かみなき位にのぼり、世をまつりごち給ふべ
きこと、さばかりかしこかりしあまたの相人どもの聞え。集
めたるは、年頃は世の頃はしさに皆おぼし消ちつるを、
當代のかく位にかなひ給ひぬる事を、思ひのごと嬉しとおぼ
す。みづからは、もて離れ給へる筋は、更にあるまじき
事とおぼす。あまたの御子たちのなかに、すぐれてらうた

うちの斯くて、冷泉院が帝位におはします事を、その眞相は誰にもはつきりと分る事ではないが、相人の言は誤ではないと源氏は心中に思召した。
相人のこと 宿曜師の言。
あらましごと 將來多分かうあらうと推測される事柄。

ひがくしき ひねくれた。
及びなき心を 過分な望を抱いて居つたのだらう。
さるにては それにしては將來后に立つべき人が隣な田舎にお生れになつたといふ事は。

さる所に 明石のやうな田舎にはしつかりした乳母もあるまいと思召して。
故院にさぶらひし 系圖は次に宮内卿宰相

宣旨 一むすめ(小少將)

かすかなる世に 心細い生活をして居たが。

きものに、おぼしたりしかど、ただ人におぼしおきてける御心をおもふに、宿世遠かりけり。うちの斯くておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人のこと、空しからずと、御心のうちに、おぼしけり。今、行末のあらましごとをおぼすに、住吉の神のしるべ、誠にかの人も、世になべてならぬ宿世にて、ひがくしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にもなるべき人の、あやしき世界に生れたらむは、いとほしう、忝くもあるべきかな、この程過ぐして、ひんがしの院に迎へてむ、とおぼして、ひんがしの院急ぎ造らすべきよし催し仰せ給ふ。さる所にはかくし源氏の配屬き、人もありがたからむをおぼして、故院にさぶらひし桐壺院女房名 宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりし人の子なりしを、身分低い男との間に子を生んだと母なども亡せて、かすかなる世に經けるが、はかなきさまにて子生みたりと聞召しつけたるを、宣旨のむすめを知るたよりありて、事のつい

さるべきさまに乳母として明石に下るやうにと約束なさつた。まだ若くて、その娘のさま。

さは聞えながら、娘は明石に参りますと返事はしたものの、どうしたのかと迷つてゐたが、このあたりがたい御志にすべてを思ひ慰めて。

怪しう思ひやりなき御身を田合に遣すのは、妙に同情のない仕打のやうだが、特別な事情があつたので、私でさへ思ひがけぬ。住居を考へて、當分辛抱して下さい。前例を考へて、當分辛抱して下さい。うへの宮仕時々々、この女は主上附きの御奉公を時々した事がある。あつたのだが、お逢ひになる折も

標 標

源氏に
でにまねび・聞えける・人召して、さるべきさまに宣ひ契る。
まだ若くて何心もなき人にて、あけくれ人知れぬあばらやに眺
むる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりの事を
ひとへにめでたう・思ひ聞えて、参るべきよし申させたり。
源氏心
いとあはれにかつは思して、いだし立て・給ふ。物のついで
に、いみじう忍びまぎれてあはしまいたり。さは聞えながら、
いかにせましと思ひ亂れけるを、いと忝きによるづ思ひ慰めて、
女「ただ宣はせむさまに」と聞ゆ。よろしき日なりければ、いそ
がし立て給ひて、怪しう思ひやりなきやうなれど、思ふさま
殊なることにてなむ。みづからも、覺えぬすまひにむす
ぼほれたりしためしを思ひよそへて、しばしは念じ給へ」など、
事のありさま・委しう語らひ給ふ。うへの宮仕時々々せしかば、
見給ふ折もありしを、いたう衰へにけり。家のさまもいひ知ら
ず荒れまどひて、さすかに大きななる所の、木立などうとましけ

宮内卿宰相の舊邸故に

人さま若やかに この女の有様。

取返しつべき 昔の關係を引きもどしたいやうな氣がする。

豫てよりの歌 以前から心までも許してもらつた覺えはないけれども、やはり別れは惜しい。慕ひやせまし 一緒に行かうかしら。

うちつけの歌 別が惜しいと仰しやるのは當座のかこつけで、思ふお方の所へおいでなりたいのでございませう。にいたしとおぼす 氣の利いた返歌だと源氏は思召す。いと親しき人 源氏が肥近の人を乳母に附添はせて。

御はかし 守刀。

こまやかなる御いたはり 懇切なる御心添へ。多くの品々を賜ふ事。

只この事の 姫君の事のみが御心にかかるのも源氏の御寵愛が浅くないからである。

に^(なり)、いかで過^(こ)ぐしつらむと見ゆ。^(見) うへの宮仕時々せしかは見給^(給)ふ折^(折)もありしをいたく衰^(衰)へにけれど人^(の)さま若^(若)やかにをかしければ、御覽^(御覽)じ放^(放)たれず。とかくたはぶれ宣^(給)ひて、取返^(取返)しつべき心地こそすれ。いかに」と宣ふにつけても、げに同じうは御身^(の)近くもつかうまつり馴^(ら)れば、憂^(憂)き身も慰^(ん)みなましと見奉る。

「豫^(源氏)てより隔てぬ中と習はねど別は惜しきものにぞありける慕^(慕)ひやせまし」と宣へば、恥^(う)ぢらひて、うちつけの別を惜しむかごとにて思はぬ方に慕ひやはせぬ

乳母 乳附を寄す

明石上の事

・馴れて聞ゆるを、いたしとおぼす。車にてぞ京の程は行き離れける。いと親しき人さし添^(給)へて、夢^(に)漏^(漏)らすまじく口

がためて遣はず。御はかし、さるべき物など、所^(所)せきまでおぼしやらぬ限なし。乳母にも、ありがたうこまやかなる御いた

はりの程淺からず。入道・思^(思)ひかしづき思^(思)ふらむ有様おもひや

るも、ほほゑまれ給ふ事多く、又あはれに心苦しくも、只この

いづしかももの歌 天津少女が未
長羽衣を撫でる岩のやうに長
引取つて愛つたつ姫君を早く手許に
が代は天の羽衣まれにきて撫つ
とも盡きぬいはほなるらむの
歌を踏む
かしこまり聞ゆる 御禮を申上
げる

いよくいたはしう ますく
姫君を大事にする氣になつて

ちご 明石姫君。

げにかしこき御心に 源氏があ
りがたい御心遣ひで姫君を大事
に養育しようと思つて居られる
のも成程道理だと乳母は思ふに
つけて

あやしき道に 自分がこんな不
思議な旅に出かけて来て、夢見
る心地のした歎も消えてしまつ
た

子持の君 明石上。
源氏御歸洛の後は一と

いとど 源氏御歸洛の後は一と
この御心おきての 源氏の有難
い御配慮で少しは物思ひも慰め
られるので
御使 乳母に附添つて来た使
者
になきさまの 優遇し澤山の贈
物を與へる事。

語 標

事の・御心にかかるも、浅からぬにこそは。御文源氏からの文にも、「おろ

かにもてなし給ふまじ(思)・事(き)と、かへすく(注)いましめ給へり。注意せられた

源氏 いづしかも袖打掛けむ少女(こ)が世を経て撫でむ岩のおひ先(づる)

津の國までは船にて、それよりあなたは馬にて急ぎ(ゆき)・つきぬ。乳母の下の道のさま

入道待ち取り、喜びかしこまり聞ゆること限りなし。源氏の御志を感謝してそなたに京の方へ

向きてをがみ聞えて、ありがたき御心(おの)ばへを思ふに、いよく

いたはしう、怖ろしきまで思ふ。ちごの・・・いとゆゆしき(おそろしい程)

まで美しくおはする事(か)たぐひなし。げにかしこき御心(源氏の)に・・か

しづき聞えむとおぼしたるはうべなりけり、と見奉るに、あや(乳母の心に)

しき道に出で立ちて、夢の心地しつる歎(か)き・・もさめにけり。(乳母の心に)

いと美しうらうたくお・ぼえてあつかひ聞ゆ。お世話申上げる子持の君も、月

頃物をのみ思ひ沈みて、いとど弱れる心地に、生きたらむとも

覺えざりつるを、この御心おきての、すこし物思ひ慰めらるる(ま)

にぞ頭・・もたげて・・御使にも、・になきさまの志を盡(世)

思ふ事とも 意中を手紙に書いて。

一人しての歌 私一人で姫君を
愛撫するのには私の袂が狭すぎ
ますから、蔽ふに足る程の廣
袖で君が蔽つて下さるのを待
ちます。
女君には 紫上には明石の事
が他から聞込まれないが、紫上
困ると源氏は思つて、紫上
さこそあんなれ 意地わらいふ
のですね。子があつてほしいと
思つてゐる人には生れさうにも
ななくて、思ひも寄らぬ所に出来
たのが残念で、
女にてさへあなれば 女子を入
内させてそれによつて權勢を得
ようとするのが、當時の公卿の
念願であつた。だから男子より
も女子の生れるのが望ましかつ
たから、外で生れた兒はおまけ
に女であつたので、非常にと不
愉快だといつたので、紫上の手
前をとりつくりつたので、
尋ね知らずとも 構ひつけずにお
うほつたらかしてもおけないの
です。
あやしう常に 妙に私の心がか
な事を誠めて頂きます。嫉妬な
ながら愛相が過ぎます。嫉妬な
ぞよ、そりや又嫉妬をする。誰
が嫉妬をし馴れさせたのでせ

す。疾くまゐりなむ」と急ぎ苦しがれば、思ふ事
どもすこし聞えつづけて、

明石上

一人して撫づるは袖の程なきに覆ふばかりの蔭をしぞ待つ

と聞えたり。あやしきままで御心にかかり、ゆかしうおぼさる。

女君には、ことにあらはしてをさく聞え給はぬを、聞き合せ

給ふこともこそとおぼして、

ぢけたるわざなりや。もあはせなむと思ふあたりには心

もとなくて、思ひのほかに口惜しくなむ。女にてさへあな

れば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべき事なれど、

さはえ思ひ捨つまじき。わざなりけり。呼びにやりて見せ

奉らむ。憎み給ふなよ」と聞え給へば、おもてうち赤みて、

「あやしう常にかやうなる筋宣ひつくる心の程こそ、我ながら疎

ましけれ。物憎み。はいつ習ふべきにか」とぞんじ給へば、

いとよくうちゑみて、たがならはしにかあらむ。思

年頃 源氏須磨引退の間。
 よろづの事 紫上は源氏引退中
 文通の戀しなく思つて居つた事や
 した源氏の存過ぎないのふと
 嫉妬を否定する氣になる。だと
 まだきにあまり早く話すと誤
 解ならぬ。明石上の人柄に心ひか
 れたのせう。場所の關係であつた
 あはれなりし夕べのけがり
 石巻に藻鹽焼く煙は同じに隣
 るかむと詠んだ事や、それに対
 する明石上の返歌など、さだか
 かではなないが、その夜の顔を
 の見た事も、琴のねのつぼか
 やうな事、何れも忘れがたい
 悲はまたなくこそ私には無上の
 我は、愛情を二つに分けてゐら
 れた。後撰戀三「現にて誰契
 我は我後撰戀三「現にて誰契
 りかは一夢なき夢路に迷ふ我は
 我かは一夢なき夢路に迷ふ我は
 うな心持だの意。そのまに閉きす
 たの出来ずの心持だの意。そのまに閉きす

はずにくくぞ見え給ふや。人の心よりほかなる思ひやりごとし
 て、物ゑんじなどし給ふよ。思へば悲し」とて、はては
 めたまち 涙が 涙ぐみ給ふ。年頃飽かず戀しと思ひ聞え給ひし御心の内
 ども、折々の御文のかよひ。などおぼし出づるには、よ
 ろづの事すさびにこそあれと、思ひ消たれ給ふ。明石上
 かうまで思ひやり言問ふは、なほ思ふやうの侍るぞ。まだきに
 聞えば、又ひが心得給ふべけば」と宣ひさして、源「人がらのを
 かしかりしも、所がらにや。珍らしう覺えきかし」
 など語り聞え給ふ。あはれなりし夕べのけがり、いひし事など、
 隔てなく給え給ひてまほならねどその夜の。かた
 ち。ほの見し、ことのねのなまめきたりしも、すべて心
 とまれるさまに。宣ひいづるにも、我は又なくこそ悲し。
 ・と思ひ歎きしか、すさびにても心を分け給ひけむよと、ただ
 ならずおもひつづけられて、源「我は我」とうち背きながめ。

あはれなりし世の 二人の仲は
こまやかなものであつたやう
な。

思ふどちの歌 「煙は同じ方に靡
かむ」と仰しやる、さういふや
うに睦しく消えてゆく事は出来
ないまでも、その消えてゆく煙
よりも先に私が死んでしまひさ
うだ。

誰により 誰故に私は須臾
明石と流浪して世のつらさに沈
れつづける涙の中を浮沈して來
ついでに海にひかけた枕詞と
いかにか見え奉らむむむむむ
私の本心をお見せしたいもの
だ。

命こそ 長い間には私の眞意も
思ふまらうけれども、命は自分
わからぬうちに死んでしまふか
も知らぬの意に死んでしまふか
はかなき事にて つまらぬ事
人から悪くおぼはれまいと苦心
するの、あなたを思ふ一事か
らです。

かの手で あつたりけむも 明石上
が上手であつたといふのがいま
くしいのか。

いか 明石姫君生後五十日。五
十日には祝餅を生兒に含めて祝
ふ。

て、^紫「あはれなりし世の有様かな」と、獨りごとのやうにうち
歎きて、

思ふどち 靡く方にはあらずとも我ぞけぶりに先立ちなまし
^{何と仰しやる}「何とかや。・・心憂や。」
^{源氏}誰により世をうみ山に行きめぐり絶えぬ涙に浮き沈む身ぞ

いでや、いかでか見え奉らむ。命こそかなひがたかべいものな
めれ。はかなき事にて・人に心・おかれじと思ふも、只一つ故
ぞや」とて、箏の御こと引寄せて、^只搔合せ^{許り引き}・・・すさび給

ひて、^{紫上に箏を}そそのかし聞え給へど、かのすぐれたりけむもねたきに
や、手も觸れ給はず。^{紫上のさま}いとあほどかに、美・し・う・た・を・や・ぎ・給・へ・
^{おはす}・・・るものから、さすがにしふねき所つきて、^{執念}物・え・ん・じ・し・給

へるが、なかく愛敬づきて腹立ちなし給ふを、^{へるも}を・か・し・う・見
所ありと^{そをかしう}・・・あぼす。

五月五日にぞいかに^{五十日}は當るらむと人知れずかぞへ給ひて、ゆか
^{源氏の心中に}

さる所にしも あんな片田舎に
氣の毒な生れかたをしたものだ
と源氏は思召す。

忝ういとほしう 姫君なればこ
そ後には后にも勿體なくも又
かはゆくも思はれて、自分の一
生に流調と思はれて、印したの
も、この姫君が生れる爲であつ
たのだと思はれた。
その日たがへず 五十日の祝の
當日に間違なく先方に到着せ
よ。
おぼしやれる事も 源氏からの
お心づけの品々も世にも稀な結
構な有様で、中には實用向の贈
物もある。

海松やの歌 始終田舎に住んで
居るあなた方には、五十日の祝
も常の日と變りはない事だら
う。「海松は海邊の松、「や」は
軽く添へた感動助詞、「いかに」
に五十日をひかす。
心のあくがるまで 心の落着
かぬ程そちらの事を思つてゐま
す。
生けるかひも 生きて居つたか
つてもあつたか、べそがひを作つ
てゐるのも無理ない事と思はれ
る。

しうあはれにおぼしやる。何事もいかにかひあるさまにもて
なし、嬉しからまし、口惜しのわざや、ありくさる所にし
も、心苦しきさまにて出で來たるよ、とおぼす。男君な
らましかば、かうしも御心にかへ給ふまじきを、忝ういと
ほしう、わが御宿世も、この御事につけてぞかたほなり
ける、とおぼさるる。御使いたし立てらる。源「必ずその日た
がへずまかり著け」と宣へば、五日にいき著きぬ。おぼしや
る事もありがたうめでたきさまにて、まめくしき御とぶ
らひもあり。
海松や時ぞともなき蔭にゐて何のあやめもいかにわくらむ
心のあくがるまでなむ。此儘では居れないから上落しなさい
ひ立ち給ひね。さりともうしろめたき事は「よも」と
書い給へり。入道、例の喜び泣きしてゐたり。かかる折は、生
けるかひも作り出でたる、ことわりなりと見ゆ。

よろづ 萬事仰々しくお祝の準備をして居つたので。圖の夜にて 甲斐のない事。古今秋下「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」

まさしく劣らぬ人も この乳母にあまり劣らぬ女房をも、父入道が縁を辿つて京から迎へて明石上に附添はせてあるが、それですつかり老い衰へた宮仕人など山住でもしようと思つて居つたなどが偶々此處へ落著いたのなどである。

げにかく 成程斯様に源氏が思ひ出して下さる程の形見の姫君を生んだ自分も果報者だと明石上は次第に思ふやうになつた。

御文諸共に 乳母は明石上と一緒に源氏の御文を読んで。

御返しには 明石上から源氏への返歌には。

明石でも、此處にも、よろづ所せきまで思ひ設けたりければ、この御使な
くば、闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。乳母も、この女
君のあはれに思ふやうなるを語らひ人にて、世の慰めにしけり。
のきはをさく劣らぬ人も、類に觸れて迎へ取りてあらす
れど、こよなく衰へたる宮仕人などの巖のなか尋ぬる
が落ちとまれるなどこそあれ、これはこよなう子めき思ひあが
れり。聞きどころある、世の物語などして、あとの君
の御有様、世にかしづかれ給へる御覺えの程も、女心地に
まかせて限りなく語り盡せば、げにかくおぼし出づばかり
の名残とどめたる身も、いとたけくやう思ひなりけり。御
文・諸共に見て、心のうちに、あはれかうちこそ思ひのほか
にめでたき宿世はありけれ、憂きものはわが身にこそありけれ、
と思ひ續けけれど、「乳母の事はいかに」など、こまやかにとぶ
らはせ給へるも忝く、何事も慰めけり。御返しには、

數ならぬの歌 數ならぬ私に育てられたる姫君を、今の五日の祝の日に君の外にはありませぬ。如何にと尋ねてくれる方はいかに。かくたまさかの斯く稀々の御慰問につなぎゆく私の命もはかないのでございます。お申越の通り、姫君を死んで先立つにも安心して死んでいける方法も存じて居ります。

浦よりをちに 伊勢集・六帖三
一み熊野の浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな私をのけものになさるといふ意に斯くまで本気で斯うまで氣をまはすのです。これは只これだけの感情です。これは只ようこそ よくも聞き流さないで。

斯かれば これ程上手だからこそ源氏の寵愛が厚いのだと紫上は思ふ。

おほやけごとども 公事が頻繁で、所せき御身に 源氏は内大臣で出あるきも自由には出来ぬのである。

「^{明石上}數ならぬみ鳥隱がくれに鳴く鶴たづを今日もいかにととふ人ぞなきよろづに思ひ給へむすばほる有様私のを、かくたまさかの御慰めにかへ侍る命の程も、はかなくなむ。げにうしろやすく思ひ給へおくわざまがな」と、^{長歎息の意}まめやかに聞えたり。^{源氏がこの文を}うち返し見給ひつづ、酒「あはれ」と長やかに獨りごち給ふを、^{紫上}女君尻目に見おこせ、て、^遠浦よりをちに漕ぐ舟の」と、^{いと}忍びやかに獨りごちながめ給ふを、^誠に・斯くまでとりなし給ふよ。こは只かばかりのあはれぞや。^{明石の景色などを思ひやる時々に}所のさまなどうち思ひやる時々、^{今迄の事も}きし方の事・忘れがたき獨りごとを、^{うこそ}聞き過ぐい給はぬ」^{手紙の上包}など恨み聞え給ひて、^{紫上に}うはづつみばかりを見せ奉らせ給ふ。^{深味があつて}手などのいと故づきて、^{身分のある人もひげ目を威じさうな}やんごとなき人苦しげなるを、^{ばなめり}斯かれはなめり・と・おぼす。^{紫上の機嫌を}かくこの御心取り給ふ程に、^か・花散里を・^な・^ど・^は・^む・^ひ・^じ・^離・^か・^れ・^果・^て・^給・^ひ・^ぬ・^る・^こ・^そ・^い・^と・^ほ・^し・^け・^れ・^お・^ほ・^や・^け・^ご・^と・^{ども}・^繁・^く・^所・^せ・^き・^な・^る

珍らしく源氏を驚かす程の消息
あつた。限りは訪問なさらぬので

おぼし起して 進まぬ氣を取直
して。

よろづにおぼしやり 花散里は
君が始終氣にかけてお世話なさ
るのを力にして暮して居られる
所故。

女御の君 花散里の御姉。

西の妻戸 花散里の住む方。
いとど艶なる 臚の月影で見
源氏の態度は一層艶麗で、一體
どこまで花やかなのだらうと驚
かされる。
いとどつつましけれど 花散里
は非常に恥しくおもはれるが、
今迄端近の所で眺めて居つた姿
勢の儘で。直前に「いとど艶な
る」とあるから、こゝは河内本
に「いと」とあるのに従ふべき
である。
水鶏だにの歌 こんなあばら屋
は水鶏でも鳴いてくればば屋
どうして源氏(月)を迎へること
が出来る。
いひ消ち 源氏の來訪は自分故
でないやうに歌つて源氏の愛
情ありげに見せかけた來訪をく
さす意。

御身に、思し憚るに添へても、珍らしく御目おどろく事のなき
出あるきを遠慮なさるにつけて。

程、おもひしづめ給ふなりけり。五月雨のつれづれなる頃、
(心)

おほやけ私物しづかなるに、おぼし起して渡り給へり。
番殺して 花散里の方へ 通つて行かぬ

がらも、明暮につけて、よろづにおぼしやりとぶらひ給
にして。

ふを頼みにて過ぐい給ふ所なれば、今めかしう心にくきさまに
輕薄に陥てがましくすねて恨むといふ事がないから

そばみ恨み聞え給ふべきならねば、心やすげなり。年頃に、い
花散里部のさま

よくあ・れまさり、すぐげにておはす女御の君に御物
(心) 麗景殿

語聞え給ひて、西の妻戸に夜更かして、立寄り給
(心) 西の妻戸には

へり。月あぼろにさし入りて、いとど艶なる御振舞、盡きもせ
源氏の

ず見え給ふ。いとどつつましけれど、はし近うながめ給ひけ
美しく

るさまながら、のどやかにて物し給ふけはひ、いと目やすし。
あてないで

水鶏のいと近う鳴きたるを、
水鶏

水鶏だに驚かさずばいかにして荒れたる宿に月を入れまし
花散里

いとなつかしういひ消ち給へるぞ、とりくに捨てがたき世か
源氏の心

かの院 二條の東院。

あて／＼に 分擔して工事に當らせる。

懲りずまに 性懲りもなく又もとの關係に立返らうとするお心もあるが。
女 臘月夜。

なか／＼所せう 赦免後の今日は却つて世の中を窮屈な淋しい事だと源氏は思はれる。

院は 朱雀院は御護位後氣樂におなりなされて。

春宮の女御 春宮の御母承香殿

かく引きたがへ 今は昔に變つて結構な御仕合で、院の御側を離れて春宮にお付き申して居られる。
御宿直所 源氏の禁中における宿直所。

にかしづき給ふべき人も出で物し給はば、さる人の後見にもとおぼす。かの院の・・・造りざま、なか／＼見所おほく今めいたり。よしある受領などをえり・・・て、あて／＼に催し・給ふ。
臘月夜
内侍のかんの君を、猶えおもひ放ち聞え給はず、懲りずまに立ちかへる御心ばへもあれど、女は憂きに懲り給ひて、昔のやうにもあひしらへ聞え給はず。なか／＼所せう、さう／＼しう世の中をおぼさる。

院は・・・世の忠のどやかにおぼしなり・・・て、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします。女御、更衣皆例のごとさぶらひ給へど、春宮の御母女御のみぞ・・・取り立てて時めき給ふ事もなく、かんの君の御覺えに押し消たれ給へりしを、かく引きたがへめでたき御さいはひにて、離れいでて宮に添ひ奉り給へる。このおとどの御宿直所は、昔・・・の淑景舎なり。梨壺に春宮はおはしませば、近隣の御心寄せ

入道後の宮 藤壺。

御位をあらため 藤壺は入道故
今更皇太后になられる筈のもの
でないから。上皇の封戸は二千
戸。封戸。上皇の封戸は二千
さまことに 出家の御身だから
様子は違つてゐるが威儀も具は
つて。年頃世に懼りて 藤壺は今迄弘
徽殿方に遠慮して宮中の出入も
難く、冷泉院に御對面の出来ぬ
事を氣が、りに思召したが。

いと恥かしげに 源氏は外の見
る目も恥かしく、おもはれる程
親切にお世話申上げ、おはれる程
なかく思はれる程で、弘徽殿には心
苦しう思はれる程で、弘徽殿には心
世人もこれを知らぬ瀬して受け
てある法はないといふやうに大
后を惡しざまに評した。
兵部卿のみこ 紫上の父君。

なべての世には 源氏は世間一
般に對しては、兵部卿宮の御結
構にお方だが、兵部卿宮の御結
門に對しては、兵部卿宮の御結
にもか、はらず、近しい姻戚である
ない仕打もなさるので。

に、何事をも聞え通ひて、宮をも後見奉り給ふ。入道後の宮、
御位を改め給ふべきならねば、太上天皇にならずらへて、御封
賜はり、院司どもなりて、さまことにいつくしう、御行
ひ、功德の事を常の御營みにておはします。年頃世に懼りて、
出で入りも難く見奉り給はぬを、いぶせくおぼしけるに、
ぼすさまにて參りまかで給ふ。もいとめでたければ、大后は、
憂きものは世なりけり、とおぼし歎く。おとどは、事に觸れ
ていと恥かしげに仕うまつり、心寄せ聞え給ふも、なかくい
とほしげなるを、人もやすからず聞えけり。兵部卿のみこ、
年頃の御心はへのつらく思はずにて、ただ世の聞えをのみおぼ
し、懼り給ひし事を、おとどは憂きものに思しおきて、昔のやう
にもむつび聞え給はず。なべての世にはあまねくめでたき御心
なれど、この御あたりは、なかくなさけなきふし、
もうちませ給ふを、入道の宮は、いとほしう本意なき事

世の中のこと 天下の政事は、折半して太政大臣と源氏とお二人の自由である。
權中納言の御むすめ 昔の頭中将の御娘、母は右大臣の四の君いふ。
冷泉院 入内して弘徽殿女御といふ。

太政大臣——權中納言
右大臣——四の君——弘徽殿
冷泉院

おほちおとど 祖父太政大臣。おとどは中君が人より幸運であるやうにとは思つて居なかつた。

願ども果たし 願が叶つてお禮参りする事。報賽（かへりまうし）

年ごとの例にて 毎年の恒例として住吉詣をするのだが。

去年今年さはる事ありて 懷妊の爲に。参詣を怠つたお詫を怠りける。参詣を怠つたお詫をかねてお詣りに出かけた。

いづくしき神寶を いかめしい奉納品を捧げて列をなしてゐる。
十列 東遊の舞人、十人で社頭で東遊を奏し馬場で競馬をする。

に見奉り給ふ。世の中のこと、只なかばを分けておほきおとど

此のおとどの御ままなり。權中納言の御むすめ、その年の八月はつきに参らせ給ふ。おほちおとど居立ちて、儀式などいとあら

まほし。兵部卿の宮の中の君も、さやうに心ざしてかしづき給

ふ（なるが）。名高きを、おとどは、人よりまさり給へとしもおほ

さずなむありける。いかがし給はむとすらむ。

その秋住吉にまうで給ふ。願ども果たし給ふべければ、いか

めしき御ありきにて、世の中ゆすりて、上達部殿上人、我も我

もと仕うまつり給ふ。折しもかの明石の人、年ごとの例の事に

て仕うまつるを、去年今年さはる事ありて、怠りけるかしこま

り取りかさねて、思ひ立ちけり。舟にてまうでたり。岸にさ

しつくる程見れば、ののしりて詣で給ふ人のけはひ、渚に満ち

て、いづくしき神寶をもて續けたり。樂人十列など、装束

を整へ給へり、かたちをえらびたり。明石「たが詣で給へるぞ」

奏上の父太政大臣

はつき

人内の

人内させる積り

（は）

兵部卿宮はどうなるお積りか

（想ぐわん願ほどきなざる積り故

）

（お供する）

（ふし）

（ごぞことし）

（に）

（明石上の人を）

（なまき）

（かた）

（ふ）

げにあさましよう。ほんとうに呆れた事だ。外にいくらも月日はあるのに生憎な折に來合せたものだ。源氏の有様を遙に見ては、身分の相違を見よかつたられて、参詣しなければよかつたら却て、参詣した事が残念に思はれる。かけ離れ奉らぬ。姫君をまうけた事。

色ふしに思ひたるに 名譽と心得て居るのに 斯かりける御響きをも 源氏の御参詣の騒ぎをも知らずに出かけて來た事だらう。しほたれけり 鹽垂の意で海の縁語。うへのきぬ 袍。袍は官位の高下によつて色の種類及濃淡を異にする。六位のなかに 六位藏人は四人あつて、最古参者即ち極蔭は天子着御の山鳩色の御袍即ち麴塵の御袍を賜はつて着用する。かの賀茂の瑞垣 須磨卷に源氏が北山の御陵参拜のお供をしまして打連れて葵かさししそのかみ詠へばつらし賀茂の瑞垣かみ靱負 衛門府の事。衛門府を靱負府ともいふ。

落標

と問ふめれば、下都内のおほい殿の御願果たしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、つらぬ身分の下衆はかなき程のげすだに、心地よげに打笑ふ。(右)げにあさましよう。(明石上心)月日もこそあれ、なか／＼この(御)有様を遙に見奉るに、身の程口惜しうおぼゆ。さすがにかかけ離れ奉らぬ。(宿志)宿世ながら、(また)何事も知られ奉るまじき際とかく口惜しき際(賤の男)の者だに、物思ひなげ(き)にて、仕うまつるを(い)色ふしに思ひたるに、(み)何の罪深き身にて、(心)心にかけて覺束なう。(の)思ひ聞えつつ、斯かりける御響きをも。(た)知らで立ちいでつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。松原の深緑なるなかに、花紅葉をこぎ散らしたると見ゆるうへのきぬ(と)の、濃き薄き(は)の、(ぢ)數知らず(多)の。六位の中にも藏人は青色しるく見え、かの賀茂の瑞垣恨みし右近のじ(左)ようも靱負(右)になりて、事々しげなる隨身具したる藏人なり。良清も同じすけにて、人より

立ちまじり この大騒の間に入つて、数ならぬ身で僅ばかりのし向をした所で、神も相手にはして下さるまい。

中空 おちつかぬ。気がすまぬ。

夢にも知り給はず 明石上の来て居る事をば。

きし方の御願にも 最初願を立てる時に誓つておいた事以上の願解をした。

あからさまに 源氏が一寸奥から出て來られた所へ近寄つて、

大の歌を詠んであげた。すみよしの歌 住吉に詣でて

昔須磨明石に沈淪して居つた當時の事を胸にうかべて考へて見ると、まづ何よりも先に悲しく

思はれます。荒かりしの歌 「浪のまよひに忘れぬから、あの荒浪の騒ぎの爲に

「まよひ」といふ意味になる。かきよやといふ意味になる。か

「は」心にふけてゐる意。この響きに神の靈驗。源氏參詣の騒ぎに

歴せられて參詣もせずまよひになつてしまつた。

例の大臣などのまゐり給ふよりは、殊に世になく仕うまつれり

けむかし。いとほしたなければ、明石（明石上の心）・（數ならぬ身の）立ちまじり、

數ならぬ身のいささかの・事せむに、神も（心に目を）・見入れかずま

へ給ふべきにもあらず。歸らむにも中空（なかぞら）なり。今日は難波に舟

さしとめて、祓（はらへ）をだにせむ」とて、漕（こ）ぎ（寄せて）・わたりぬ。君は（源氏）

夢にも知り給はず、夜一夜（よひとよ）いろくの事（神事）をせさせ給ふ。まこと

に神の喜び給ふべき事をしつくして、さし方の御願（ごんげん）にもうち添

へ、ありがたきまで遊びののしりあかし給ふ。惟光やうの人は、

心のうちに、神の御徳（ごとく）をあはれにめ（うれ）でたしと思ふ（て）。あからさま

に立ちいで給へる（所）にさぶらひて聞え出でたり。

すみよしのまつこそ物は悲しけれ神代の事をかけて思へば（思ひいづれ）

げにとおぼし出でて、

「荒（源氏）かりし浪のまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする

しるしありな」と宣ふも、いとめでたし。かの明石の舟、この

神の御しるべ 神の御引合せ。源氏が明石上と契を結ぶに至つた事や今日此處で邂逅した事など。おろかならねば 明石上との間はおろそかには思はれない。なかくに 明石上が源氏を見うと却つて思ひ思つて居るだらうと源氏は思召して。七瀬の難波七瀬といつて難波に今被の場所が七箇所あつた。今はた同じ拾遺戀二一わびぬれば今もあはんとぞおもふ。さる召しもやと、さうした御用でもあらうかと、いつもの習慣になつて懷中に用意して居つた柄の短い筆などを。

みまつくしの歌 身を盡して戀も來てめぐりあつて此處まで深いなあ。かしの心知れる 惟光が明石上方の事情を知つてゐる下部を呼んでこの歌を明石上に遣した。落標は難波江の名物だから江の縁語。「深し」も江の縁語。

響きに押されて過ぎぬる事も聞ゆれば、知らざりけるよと
 ・あはれにおぼす。神の御しるべ。おぼし出づるもおろかな
 ・ねば、いささかなる御消息をだにして、心・慰めば
 や、なかくにおもふらむかし、とおぼす。御社立ち給ひて、
 所々に逍遙を盡し給ふ。難波の御祓など、殊に七瀬によそほし
 う仕うまつる。堀江のわたりを御覽じて、「今はた同じ難波なる」
 と、御心にもあらでうちずし給へるを、御車のもと近き惟光、
 承り・やしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懷に設けた
 る柄みじかきふんでなど、御車とどむる所にて奉れり。をかし
 とおぼして、
 ・疊紙に、
 源氏 身を盡しに落標がきかせてあるし
 みをつくし戀ふる證に爰までも廻りあひけるえには深しな
 とて賜へれば、かしの心知れる下人・してやりけり。駒な
 べてうち過ぎ給ふにも、心のみ動くに、露ばかりなれど、いと
 あはれに忝く覺えて、うち泣きぬ。

惟光が源氏に

源氏心

（事）

（おぼされ）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

（おぼす）

（を）

（明石上を）

敷ならての歌 私などつまらぬ
 身分で何事にも甲斐のない身で
 身分な高貴の方を思ひそめた事
 せう。「かひなき」に貝がきか
 語。浮標、貝共に難波の縁
 御祓のものを 御祓に用ひた木綿
 奉つた。この消息を結び付けて源氏に
 入江のたづも 古今雜上・神樂
 歌難波湯一難波湯しほみちくら
 しあま衣田蓑の鳥にたづ鳴き渡
 露けさの歌 私の旅衣は涙の
 露に濡れて居りますので、田蓑と
 いふ名はあつても、それを着て
 も何にもなりません。

いてや 以下源氏の心。いやど
 じる事も面白く思ふ事も物哀を感
 のだらう。假令どうでもよいか
 うな事柄には心少く軽薄らしく見
 ける事柄には心少く軽薄らしく見
 ける事柄には心少く軽薄らしく見
 ける事柄には心少く軽薄らしく見

帯標

明石上 難波に何がきかせてある。
 敷ならでなにはの事も効なきになど身を盡し思ひそめけむ
 田蓑の鳥に・みそぎ仕うまつる・御祓のものにつけて奉る。日、
 暮れがたになりゆく。夕潮みち来て、入江のたづも聲惜しまぬ
 程のあはれなる折からなればにや、人目も・つつまらず・あひ
 見まほしくさへおぼさる。

源氏 露けさのむかしに似たる旅衣たみの鳥の名にはかくれず
 道のままに、かひある・逍遙・遊びののしり給へど、御心には
 なほかかりておぼしやる。遊びどものつどひ參れるも、上達
 部と聞ゆれど、若やかに事好ましげなるは、皆目とどめ給ふべ
 かめり。されど、いでや、をかしき事も物の哀も、人か
 ら・こそあんべけ・れ、なのめなる事をだに、すこしあはき方
 に寄りぬるは、心とどむるたよりのなきものを、とおほすに、
 遊女共が愉快さうに
 おのか心をやりて・よしめきあへるも、うとましうおほ
 しけり・・・。

かの人は、明石上は源氏をやり過ごして、その翌日が日柄がよかつたので相吉の神に御幣物を捧たげ、身に相應しいかす願の解など懇にすませた。

今や京に今頃は御着京になつたらうと思ふ程の日數もたぬ内に御使が來た。

いざや、どうかなあ、この浦を離れて都へ行つたら、どちらつかずで心細い事はなからうか。

明石上かの人は過ぐし聞えて、又の日ぞよろしかりければ、御幣たてまつる。程につけたる願どもなど、かつく果たしける。又なかく物思ひ添はりて、あけくれ口惜しき身を思ひ歎く。今や京におはし著くらむと思ふ日かずも經ず御使あり。此頃の程に迎へむことをぞ宣へる。いと頼もしげにかずまへ宣ふめれど、

いざや、また島漕ぎ離れ、中空に心細きことやあらむ、と思ひ煩ふ。入道も、さていだし放たむ。はいとうしろめたう、さりとて、かく埋もれて過ぐさむを思はむも、なかくきし方の年頃よりも心づくしなり。よろづにつつしましう、思ひ立ちがた

き事を聞ゆ。まことや、かの齋宮もかはり給ひにしかば、御息所のぼり給ひてのち、變らぬさまに何事もとぶらひ聞え給ふ事は、ありがたきまでなさを盡し給へど、昔だにつれなかりし御心ばへの、なかくならむ名殘は見じと。思ひ放ち給へ

あなたがちは無理に御息所を動かして見た所で、どう變心するか自分の心が自分で分らないか。かづらはむ御ありきとやかくと女にはかかはりのある忍びあるきも今では窮屈を感じる身になつたので御息所に強ひていひ寄る事もなさらない。齋宮をぞ、秋好は十四で下向今年二十、六條の齋宮を御息所は六條京極の舊邸を修理したので。

すいたる人の好色男共の寄合所で。河内本「すきはめた人の」は本の儘。

罪深きところ、齋宮は神宮に奉仕して居つて、佛や經を一切近づけてぬから斯くいふ。かけぬくしき懸想といふ方がかではないが、然るべき相談相手と思つて居つたのに。

へれば、渡り給ひなど(給ふ事)は殊になし。あなたがちに動かし聞え給ひても、(猶)わが心ながら、(も)知りがたく、(う)とかくかかづら、(給)はむ御ありきなども、所せう、(今は)おぼしなりにたれば、しひたるさまにもおはせず。齋宮をぞいか、(やう)にねびなり給ひぬらむと、(さすがに)ゆかしう思ひ聞え給ふ。なほかの六條の舊宮を、いとよく(修理)し繕ひたりければ、みやびかにて住み給ひけり。よしづき給へることふりがたくて、よき女房など多く、(見え聞)すいたる人のつとひ所にて、物淋しきやうなれど、心や(え)、(きはめた)人のつとひ所に、物淋しきやうなれど、心や(満足して)れるさまにて經給ふほどに、俄に、(いと御息所が)おもく煩ひ給ひて、物のいと心細くおぼされければ、罪深きところに年經つるも、いみじうおぼして、尼になり給ひぬ。(源氏が)おとど聞き給ひて、かけしき筋にはあらねど、なほさる方の物をも聞え合せ人に思ひ聞え、(給)つるを、(發心した事を残念に思ふので)かくおぼしなりにけるが口惜しう覺え給へば、驚きながら渡り給へり。飽かずあはれなる御とぶらひ聞え給ふ。

近き御枕上に、御息所の枕元に源氏の御座席を設けて、絶えぬ志の程は、今も變らぬ愛情の程を見せる事が出来ないうで終るのかと源氏は残念に思つて。かくまで、これ程まで自分を思つて居つてくれた事を御息所は嬉しく思つて。

又見ゆづる人もなく、君の外に誰にもお世話を頼む人もなく、又とない哀な身の上なのでございませう。かひなき身ながらも、詰らぬ私生活に居られると思つて、その間は「思ひのとむる程は」は「見奉らむ」につづく。かかる御事、こんな御遺言がなかつても、おつてお苦もありませんに、まじ御依頼を受けられたら、心は心の届く限り世話する積りです。いと難き事、それはほんといつつかしな事です。眞實頼るべきつかの父親などであつて、それに娘の世話を託して、女親の手から離れた娘は可愛さうなものです。女親、湖月抄には「めおや」と訓じてあるが、諸本には「女おや」とある。或は「をんなおや」と讀むべきか。

近き御枕上に御座よそひて。御息所が脇息におしかかりて、御返りなど

聞え給ふ。いといたう弱り給へる。御けはひなれば、絶えぬ志の

程は見え奉らでやと、口惜しうて、いみじう泣い給ふ。か

くまで思しとどめたりけるを、女もよろづにあはれにおぼして、

齋宮の御事をぞ聞え給ふ。源氏に御息心細くてと、まり給はむを、必ず

事に觸れてかずまへ。思ひ聞え給へ。又見ゆづる人もなく、たく

ひなき御有様になむ。かひなき身ながらも、今暫し・世の中を

思ひのとむる程は、とぎまかうざまに物をおぼし知るまで、見

奉らむとこそ思ひ給へつれ」とても、消え入りつつ泣き給ふ。

かかる御事なくてだに、齋宮を思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、

まして心の及ばむに従ひては、何事も後見聞え・むとなむ思

ひ給ふ。更にうしろめたくな思ひ聞え給ひそ」など聞え給へ

ば、御鳥いと難き事・。誠に打頼む・べき親などにて見譲る

人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなる事にこそ侍るめれ。

まして思ほしまして君が齋宮を我が子のやうに取扱つて下さるにつけても、詰らぬ嫉妬沙汰も起り、他の婦人達から疎外もされませう。
うたてあるいやな案じすごしですが、決してそんな愛人風な氣をおこして下さるな。不幸な自分に願ひて見ましても。

いかで齋宮をも是非そんな男女關係には觸れさせずにおきたいと存じます。

あいなくもつまらぬ事をいふものだと源氏は思つたが。
年頃よろづ私も數年來何かと分別も出来ましたのに、昔の浮氣心がまだ残つて居るやうに仰しやられるのは不本意です。
まあそのうちに分ります。

もしもやともしか御息所母子が見えはせぬかと思はれて、綻外を見る爲帷子の縫合はさずにある部分。

帳 御帳臺。
しどけなく亂雑に引きのけられてある隙間から。

まして思ほし（お）人めかさむにつけても、あぢきなき方（おもしろくない、唯）や打ちまじり、人に（も）心もおかれ給はむ。うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな。憂き身をつみ侍るにも、女は思ひのほかにて、物思ひを添ふるものに（て）なむ侍りければ、いかで（か）さる方（む）をもて離れて見奉らむと思ひ給ふ（へ）る」など聞え給へば、あいなくも宣ふかな、とおぼせど、年頃（い）よろづ思ひ給へ知りにたるものを、昔のすき心の名殘ありがほに宣ひなすも本意（あ）なくなむ（か）。よしおのづから」とて、外は暗（く）うなり、内（の）は大殿油（御とのあぶら）。ほのかに物よりとほりて見ゆるを、もしもやとおぼえ（も）て、やをら御几帳（はこらび）の綻（あ）より見給へば、心（こゝろ）もとなきほどの火影に、御髪（みげ）いとをかしげに、花やかに（はな）そぎて寄（よ）りぬ給へる、繪にかきたらむ（ゐ）さまして、いみじうあはれなり。帳の東面（ひんがし）に添（ひ）ひ臥し給へるぞ宮（みや）ならむかし。御几帳（みげ）のしどけなく引きやられたるより御目（みま）とどめて見とほし給へ

ひもぢかに 小柄で。
心もたなく 人にとられはせぬ
かと、ほつておけないやうに思ふ事。

さばかり宜ふものを 御息所が
あれ程心配していはれたのだも
のをと源氏は思ひ返した。
忝きを 失禮があつては畏れ多
いから早くお歸り下さい。
よろしうおぼされば すこし
も快方ならば嬉しからうに。

いと怖ろしげに 瘦せ衰へてあ
る姿を恥ぢた言葉である。
亂り心地の 病氣の臨終の折に
お訪ね下さいましたのは、浅か
らぬ御志と存じます。

さりとも いくら何でも粗略
にはお思ひ下さるまいと心強く
存じます。

斯かる御遺言の 御遺言を承る
人の仲間私をお入れ下された
のも一入悉く存じます。
うへの 故院が齋宮を御子達同
様に取扱はれたから、私も妹と

れば、頼杖つらづえつきて、いと物悲しとおぼいいたるさまなり。は一つか
なれど、いと美しげならむと見ゆ。御髪みかみのいかりたる程、
頭つきけはひ、あてにけだかきあてなるものから、ひぢあちかかに
なるさき。
・・・愛敬たづき給へるけはひひきしるく見え給へば、心も源氏の心にとなく
ゆかしきにも、さばかり宜ふものとおぼし返す。御息いいと苦し
さまさり侍り。忝あきを、はや渡りらせ給ひね」とて、人しにこかき
臥せられ給ふ。酒酒近く參り來たるしるしに、よろしうもおぼさ
れば嬉いしかるべきを、心苦しきわざかな。いかにおぼさるぞ。
とて、の御息所の病床をぞき給ふ氣色なれば、御息いいと怖ろしげに侍りや。亂り
心地のいと斯く限りなり侍なる折程しも渡らせ給へるは、誠に
浅からずなむ。思ひ侍る事をすこしも聞えさせつれば、さりと
もと頼もしくなむ」など聞えさせたまふ。酒酒斯かる御遺言のつ
らにおぼしけるもをないとどあはれになむ。故院の御子達源氏の兄弟達あま
た物し給へど、親源氏と仲よくしてくる人は始どないにしくむつびおぼすもをさくなきを、うへの
桐齋院

あつかふ人も 世話すべき子供
もないから。

御とぶらひ 源氏は今までより
も一層懇切に度々御慰問申され
る。あへなう 源氏は張合なく思召
すにつけても。

とかくの御事など 葬送や佛事
などお指圖になる。又頼もしき人も
源氏以外に

女別當 齋宮寮の官女。

人々召しいてて 源氏が御息所
方の人々を。いと頼もしげに 源氏が力にな
つて下さるので、今迄の冷淡な
お心向けも、償ひが出来さうに
思はれる。いといかめしう お葬式を立派
になさつて二條院に居る人々を
澤山會葬させなされた。

同じ御子達のうちにかずまへ聞え給ひしかば、さこそは頼み聞
え侍らめ。すこし大人しき程になりぬる齡ながら、あつかふ人
もなければ、いとさうくしきを」など聞えおきて、歸り給ひ
ぬ。御とぶらひ、いますこし立ちまさりてしばく聞え給ふ。
七八日ありて亡せ給ひにけり。御息所逝去あへなうおぼさるるに、世もい
とはかなくて、物心細うおいとぼされて、うちへも参り給はず、
とかくの御事などおきてさせ給ふ。又頼もしき人も殊におはせ
ざりけり。ふるき齋宮の宮司など、仕うまつり馴れたるぞわ
づかに事どもさだめける。御みづからも渡り給へり。宮に御消
息聞え給ふ。善「何事もおぼえ侍らでなむ」と、女別當して女別當
聞え給へり。源「聞えさせ宣ひおきし事ども侍りしを、今は隔て
なきさまにおぼされば、いと嬉しくなむ」と聞え給ひて、人々
召しいてて、あるべき事ども仰せ給ふ。源氏のさまいと頼もしげに、年
頃の御心ばへ取りかへしつべう見ゆ。いといかめしう、殿の

みづからも 齋宮自身も源氏に御返事申される。

忝し 人傳ての返事は畏れ多い。

降り亂れの歌 雪や雲のひまな
く降り亂れておる中を、亡き御
母君の御霊が居られる事だか
ねて天がけつて悲しい。四十九日
までには亡魂が家の棟を離れぬと
いふ佛説によつてよんだもの。
空色曇り日の空色即ち鈍色の
紙を用ひたのは喪中だからであ
る。

人々かずもなう仕うまつらせ給へり。あはれにうち眺めつつ、

御さうじにて、御簾おろしこめて行はせ給ふ。宮には常にとぶ

らひ聞え給ふ。やうく御心しづまり給ひては、みづからも

御返りなど聞え給ふ。つつましう思したれど、御乳母など、

「忝し」とそそのかし聞ゆるなりけり、雪霰かきみだれ荒る

る日に、いかに宮の御有様かすかに眺め給ふらむ、と思ひやり

聞え給ひて、御使奉れ給へり。只今の空を、いかに御覽ずら

む。

源氏 降り亂れひまなき空に亡き人の天翔るらむ宿ぞかなしき

空色の紙の曇らはしきに書い給へり。若き人の御目にとどま

るばかりと、心してつくろひ給へる、いと目もあや

なり。宮はいと聞えにくくし給へど、これかれ、「人づてにて

びんなき事」と責め聞ゆれば、鈍色の紙のいとかうばしう

艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

消えがてにの歌 悲しみに心も
暗にくれて、我身で我身とも思
はれぬやうな世の中に、なほも
どざいます。

なほあかず 齊宮を伊勢へくだ
すのは惜しいと思つて居られた
のに。今は心に掛けて、今では懸想し
て言ひ寄らうと思へば言ひ寄ら
れるのだと思ふ。それには例の毒
だ。故御息所が不安に思つて居
られたのだもの、その心配も道
理だ。お世間の人、自分も齊宮
を只に、お世間の人、自分も齊宮
を想像し、さうな事であるので、そ
うの裏を、かいて潔白で世話しよ

昔の御なごりに 私を故母君の
代りと思召して親しくして下さい
るなら本望です。

消えがてに降と懸ふるぞ悲しき搔暗し我身雲がひびかしてあるそれとも思ほえぬ世に

つつましげなる書きざまにて、いとおほどかにて御手もすぐれ

てはあらねど、らうたげにあてはかなる手筋(なり)すぢに見ゆ。伊勢にくだり給

ひし程よりなど、なほあかずおぼしわ・たりしを、今は心にか

けてともかくも聞え寄らりぬべきぞかし、とおぼすには、例の引

きかへし、いとほしくこそ。故御息所の、いとうしろめたげに

心おき給ひしを、いとことわりなれど、世の中の人もさやうに

思ひ寄りぬべきことなるを、引きたがへ心清くてあつかひ聞え

む、冷泉院がもうすこし物心のつく年頃になられたらうへの今すこし物おぼし知るよはひにならせ給はひなば、齋

ちずみせさせ奉りて、自分も子がなく淋しいから世話する種にしようさうくしきにかしづきぐさになどこ

そ、はとおぼしなる。源氏が齊宮をいとまめやかにねんごろに聞え給ひて、

さるべき折々は渡りなどし給ふ。かう申しては失禮ですが運かたじけなくとも、昔の御

なごりにおぼしなぞずらへて、けどほからくずもてなさせ給はまば

なむ本意なる心地すべき」など聞え給へど、齊宮の性質わりなく物恥ぢを

奥まりたる 内氣な性質で。

かかる御心ざまを 齋宮の引込
思案の性質を。

あるは離れ奉らぬ 或は齋宮に
縁續きの王孫などで才覺ある婦
人達が多い事であらう。
この人知れず思ふ方の 源氏が
内々計畫してゐる宮仕をおさせ
申しても、齋宮は他の女御達に
劣る事はあるまい。

かく思ふといふ事も 源氏は齋
宮を入内せようといふ考を誰
にも漏らさない。

御わざ 故御息所の追善供養。

いとど淋しく 齋宮の御所のさ
ま。
下つかたの京極 齋宮のお邸は
下京の京極邊故。拾遺哀傷「山寺
の入相の鐘の聲ごとに今日も暮
れぬと聞くぞ悲しき」

し給ふ奥まり(給)たる人ざまにて、ほのかにも御聲など聞かせ奉
らむは、いと世(世)になく珍らかなる事(事)とおぼしたれば、人々(侍女達も)
お勤めするの(に)困つても聞えわづらひて、かかる御心(心)ざまをうれへ聞えあへり。女(何れ)

別當(も齋宮の侍女達)内侍などいふ人々、あるは離れ奉らぬわかんどほりな
どにて、心ばせある人々多かるべし、この人知れれず思ふ方(方)

のまじらひをせさせ奉らむに、人に(は)劣り給ふまじかめり(る)

、いかでさやかに御かたちを見(奉り)てしがな、と思すも、

うちとくべき御親心にはあらずやありけむ、わが御心も定めが
たければ、(ま)たき(ま)かく思ふといふ事(事)も人にも漏らし給はず、

御わざなどの御事も、取りわきてせさせ給へば、ありがたき御
心(心)を、宮人も喜びあへり。

はかなく過ぐる月日に添へて、いとど淋しく心細きことのみ
まさるに、さぶらふ人々も、やうくあかれゆきなどして、下(し)

つかたの京極わたりなれば、人げ遠く、山寺の入相(の鐘)の聲々

今まで居た侍女達も

暇を取って退散し

源氏自身の心も

皇族の血統

あながちにいざなひ 齋宮が無
理に母君をお誘ひ申したのに
死出の道にはお供せずしにま
た事を、涙の乾く間もなくお歎
きになつてゐる。

心にまかせたる事 勝手な手引
するやうな事をしてくれるなど
親のやうな態度で申されるの
いと恥かしき 大變氣のはる源
氏だもの不始末は聞きつけられ
たくない。
かのくだり給ひし日 賢木巻に
あつた。卷一、三九六頁。
いつくしかりし 莊殿であつ

齋院 朱雀院の皇妹。權齋院と
は別人。
御はらからの宮々 朱雀院の御
兄弟の皇子皇女達と同様にし
て
官中においでなさい。

に添へても、齋宮のさまね泣きがちにてぞ過ぐし給ふ。同じき御親と聞え
しなかにも、故御息所は片時のまも立ち離れ奉り給はでなはし奉り給ひ
て、齋宮にも親添ひてくだり給ふ事は例なき事なるを、伊勢にあなが
ちにいざなひ聞え給ひし御心に、死出の旅路限りある道にては、母御息所にたぐひ聞
え給はずなりにしを、涙のひるまなうおぼし歎きたり。待女達を橋渡しにさぶらふ
人々につけて、齋宮に心かけ聞え給ふ人、もよるたかきいやしきもあま
たあり。されど、も源氏が齋宮の乳母達に、「心にまかせたる事、
引きいだし仕うまつるな」など、親がり申し給へば、「いと恥か
しき御有様に、びんなき事聞召しつけられじ」といひ思ひつつ、
源氏の事はかなき事のなさけも更につくらず。朱雀院院にも、伊勢下向の日かのくだり給ひ
し日、大極殿のいつくたはしくかうぐ。しかりし儀式に、梅ろしい程美しくゆゆしき
まで見え給ひし御かたちを、忘れがたうおぼしおきこければ、
朱雀參り給ひて、齋院の宮たち前齋院などの御はらからの宮々おはしますたぐひに
てさぶらひ給へ」と、故御息所にも聞え給ひにき。朱雀院にされどやん

かずくなる 多くの後見がな
くは困らうと遠慮して。こゝ
は河内本に従ふべきものであら
う。

又物思ひや 御不幸でもあつて
はとの懸念である。

今はまして 御息所逝去の今は
まして誰が齋宮を世話して院に
差上げるものがあらうぞ、と人
人が思つて居るのに、院は熱心
に入内をお勧めになつた。
引きたがへ 朱雀院の方を辭し
て主上の方へ入内させる事。

かうくの事を 齋宮について
これくの事を心配して居るの
ですが。

憂きものに いやな男と怨まれ
たまふになつた事を衷心氣の毒
に思つて居ます。

さも聞きおき さては御息所は
私を後事を託するに足る者と人
から聞きおき又御自身も、一
切を打明けて依頼するに足るも
のであらうと思ふにつけても

ごとなき人々さぶらひ給ふに、女御更衣達 何のかずくなる御後見もなく

てやとあ（も）ばしつづみ、朱雀院（の）うへはいとあつしう（病氣がちに）あはしますも

怖ろしう、又物思ひや加へ（は）り給はむと、憚りて（つ）過ぐし給ひし

を、今はまして誰かは仕うまつら（り）給はむと人々思ひた（聞）るを、

ねんごろに院にはあ（朱雀院）ばし宣はせけり。あ（運）とど聞き給ひて、院よ（に）

り（御所望があるのに）・御氣色あらむを、引きたがへ横取り給はむ（聞）を忝き事とおほ

すに、齋宮の人の御有様のいとらうたげに、（思）ふさまなるを、見放たむ

は又口惜しうて、藤壺入道の宮にぞ聞え給ひける。齋宮入内の事運（も）かうくの事

をなむ思ふ給へ煩ふに、（故）母御息所いとあもくしく心深きさ（高）

まに物し侍りしを、私のつまらぬ好色心からあちきなきすき心にまかせて、けしからぬ浮名をさるまじき

名をも流し、（長）き世に憂きものに思ひおかれ侍りにしをなむ世

にいとほしう思ひ給ふる。この世にてその怨みの心解けず過（逝）ぎ

はべりにしを、臨終の折に今はとなりてのきはに、この齋宮の御事をなむ

・（還）・（ナ）・（く）・（運）言された物せられしかば、さも聞きおき、心にも（ら）のこすまじう（く）

心苦しき事は、氣の毒な事は、見捨て聞き捨てにはならぬのに。

すこし物の心知れる、多少分別のある女御が附添つて居られてもよからうかと思ふのですが、その邊は御判斷にまかせますが、暗に齋宮(今年二十)の事をいつてゐるのである。大層結構な思付です。院にも、朱雀院の思召が、成程長多くもあり、お氣の毒でもあり、朱雀院から御所遺言を口實に、知らぬ風をして宮を主上におあげなさい。今はたさやうの事、今では朱雀院はそんな事には特にお氣にとめられぬので、齋宮の冷泉院から聞え給ふ、勤行が故、朱雀院は何とも思召すまい。さらば御氣色ありては、あなたから宮の方に御沙汰して、女御の候補者にして下さるならば、私には入内をお勤めするだけの口添へをするにとどめておきませう。かくまで、以上の如き私の意向をこゝまで申上げたのですが、世間では何といふか心配です。

こそはさすがに見あき給ひけめと思ひ給ふるにも、忍びがたう。
大方の世につけてだに、心苦しき事は見聞き過ぐされぬわ

ざに侍るを、いかで亡き蔭にても、かの恨み忘るばかりと思ひ

給ふるを、うちにも、さこそおとなびさせ給ひた。れど、

いときなき御よはひにおはしますを、すこし物の心知れる人は、

さぶらはれてもよくやと思ひ給ふるを、御定めになむ」と聞

え給へば、藤壺「いとようおぼし寄りけるを、院にもおぼさむ事は

げに忝ういとほし。かるべけれど、かの御遺言をか

こち。て、知らずがほに。参らせ奉り給へかし。今はた

さやうの事わざともおぼしとどめず、御行ひがちになり給ひて、

かう聞え給ふを、深うしもおぼしとどめじと思ひ給ふる。」

。さらば御氣色ありて、かずまへさせ給はば、催しばかりの

言を添ふるになし侍らむ。とさまかうさまに思ひ給へ残すこと

なきに、かくまでさばかりの心構へもまねび侍るに、世の人や

げに知らぬやうにて 入道宮の
仰せの通り何も知らぬ顔で宮を
二條院に引取らうかと思はれ

匿らひ聞えて お話相手になつ
て暮すにはよ 間柄でせう。紫
上二十一、齋宮二十。
齋宮引取りの準
備。齋宮引取りの準

入道の宮には 藤壺は、兵部卿
宮が姫君を早く 入内させようと
駭いで居られるが、宮と源氏と
不和の間柄故、源氏が邪魔で
もせぬかと心苦しく思召す。
權中納言 昔の頭中將。葵上の
兄。

おほい殿の御子にて、權中納言
は太政大臣の御子で、この姫君
を綺羅びやかにお世話なさる
うへも 主上御十一、弘徽殿十
二。
宮の 兵部卿宮の中君も主上と
同年輩故、雑遊のやうな気がし
て、年長のお世話役のやうな事
は嬉しい事です。
さる御氣色 齋宮入内の事を藤
壺が主上に申上げる。

いかにとこそ憚り侍れ」など聞え給ひて、のちにはげに知らぬ
やうにて此處にわたし奉りてむ、とおぼす。女君にも、
なむ思ふ。語らひ聞え、
あはひならむ」と聞え知らせ給へば、嬉しき事におぼして、御
渡りの事をいそぎ給ふ。入道の宮には、
いつしかとかしづきさわぎ給ふめるを、
にて、いかがもてなし給はむと、心苦しくおぼす。權中納言の
御むすめは、弘徽殿の女御と聞ゆ。おほい殿の御子にて、いとよ
そほしうもてかしづき給ふ。うへも、よき御遊びがたきにおぼ
いたり。藤壺宮の中の君も同じ程におはすれば、うたて雑遊の心
地すべきを、あとな、しき御後見、はいと嬉しかるべきこと
とおぼし宜ひて、さる御氣色聞え給ひつつ、
づに、あほしいたらぬ事なく、
は、あけくれにつけて、
いかにとこそ憚り侍れ」など聞え給ひて、のちにはげに知らぬ
やうにて此處にわたし奉りてむ、とおぼす。女君にも、
なむ思ふ。語らひ聞え、
あはひならむ」と聞え知らせ給へば、嬉しき事におぼして、御
渡りの事をいそぎ給ふ。入道の宮には、
いつしかとかしづきさわぎ給ふめるを、
にて、いかがもてなし給はむと、心苦しくおぼす。權中納言の
御むすめは、弘徽殿の女御と聞ゆ。おほい殿の御子にて、いとよ
そほしうもてかしづき給ふ。うへも、よき御遊びがたきにおぼ
いたり。藤壺宮の中の君も同じ程におはすれば、うたて雑遊の心
地すべきを、あとな、しき御後見、はいと嬉しかるべきこと
とおぼし宜ひて、さる御氣色聞え給ひつつ、
づに、あほしいたらぬ事なく、
は、あけくれにつけて、

萬事に投目なく、
政治上の補佐は勿論
日常の私向の事につけても、
主上に對する懇なる御心向け

齋宮引取

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

審りなど 藤壺が参内などなさ
 れても、主上の御側で氣樂にし
 ておいでになる事もむつかしい
 事故、すこし長のお側におい
 た。世話、是非必要なわけであつ

見え給ふを、(も) 頼藤壺が源氏の信頼してもしきものに思ひ聞え給ひて、藤壺の病氣がちな事いとあつしくの
 みおはしませば、参りなどし給ひても、心(のどか)やすく・さぶらひ給
 ふ事も難きを、すこしおとなびて添(ひ給)ひさぶら・はむ御後見(じ)
 は、必ずあるべき事なりけり(とな)。

裏鹽垂れつつ 源氏が須磨明石
 行平「わくらには問ふ人あらば
 須磨の浦に藻鹽垂れつつわぶと
 答へよ」
 おぼし歎く人 歎いて居られる
 婦人達
 さてわが身の 保障の 婦人は
 生活上の 源氏の左遷に
 一方の 思ひこ 失つたといふだけ
 の 點で 苦痛は 感じたが
 竹の 何おひ出らん竹の子のうき
 ふし 繁き世とはしらずや」この
 歌の 語によつて 書いてある「竹
 の」は 竹の子の から「此の」とい
 ひかけた 枕詞
 憂きふしを 此の言葉は、上の
 「御よそひを」と對におかれて
 あるのだから、河内本の「憂き
 ふしを」とあるのに從はなけ
 ればならぬ。即ち「…御よそ
 ひを、…憂きふしを」と時
 々につけてあつかひ聞え給」と
 つづくのである。
 なかくそのかずとも 源氏が却
 たら疎に愛されなかつた爲に、
 つて源氏の愛人とも知られず
 御退京當時の有様をも餘處事
 御心に思ひやつて居る方々が多
 内心色々歎いて居る方々が多
 ある。
 又思ひあつかふ 他に心につ
 とて世話のしる 源氏の身
 とがらひ聞え給ふ 源氏が末摘
 花の生活上の世話をしたであ
 待る事が絶えなかつたのだが
 見て居る末摘花の貧しい生活から

遷 生

藻鹽垂れつつわび給ひし頃ほひ、都にも、さま、おぼし歎く
 人・多かりしを、さてわが身(御有様)のよりどころあるは、一方
 の思ひこそ・苦しげなりしか、二條の上などものどやかにて、
御身イ
須磨の旅の御すみかをも、おぼつかかなからず聞え通ひ給ひつつ、位を
無教の野衣を調進し
 去り給へるかりの御よそひをも、竹のこの世の憂きふしを、
無教の野衣を調進し
 時々につけてあつかひ聞え給ふに・慰め給ひ(ふ)・事もあり
 かくそのかずとも人にも知られず、立ち別れ給ひしほどの御
 有様をも、よその事に思ひやり・給ふ人々の、したの心・碎
(を)
 き給ふたぐひ多かり(けせ)・常陸の宮の君は、父みこの亡せ給ひ
本摘花
常陸宮
 にし名残に、又思ひあつかふ人もなき御身にて、いみじう心細
 げなりしを、思ひかけぬ御事の出で来て、とぶらひ聞え給ふ事
源氏が通ひそめた事
 絶えざりしを、いかめしき御いきほひにこそ、事にもあらずは
源氏の巨大なる富の力からしては
そんな世話は物の数でもなく、す
 かなき程の御なさげばかりとおぼしたりしかど、待ち受け給ふ
 御袂のせばきには、大空の星の光を盥(たらい)の水にうつしたる心地し

わざと 格別情愛の深からぬ女の事は忘れやうな形になつて、須磨へ行つてからは、わざとわざと音信もなさらぬ。

その名残に 末摘花は源氏のお世話を受けた名残で。

古き女ばら 末摘花の老侍女達。

斯かるよすがも 人には斯うした縁邊が出来たものであつたと、世にも珍らしい事のやうに思つて居つたのに。
大方の世の事とは 不幸に沈む事も世の常とはいひながら、外に頼るすべのない姫君の御身の上が悲しい。
さる方に さいうした點即ち貧乏に馴れきつて居つた過去の數年は、すこし世づきて 源氏のお蔭で近年は多少、人並の生活をし馴れて來た爲に、却つて今は餘計に堪へがたく歎いてゐられるやうだ。
すこしも すこしでも物の役に立ちさうな女房達は皆あとから立離れ散つてしまつた、源氏が世話を散つてしまつた、源氏が豊かであつた爲に、自然、居ついてもゐたけれども。

て過ぐし給ひし程に、須磨引退の事かかる世のさわぎ出で來て、源氏の心になべての世憂くおぼし亂れしまぎれに、わざと深からぬ方の志は、うち忘れたるやうにて、須磨へ遠くおはしましにしのち、わづらふりはへてしもえ尋ね聞え給はず。その名残に、暫しは泣くくも過ぐし給ひしを、年月ふるりゅうじ・ままに、衰れに淋しき御有様なり。古き女ばらなどは、「いでや、いとこころ・口惜しき御宿世本摘のなりけり。覺えず神佛のあらはれ給へらむやうなりし御心源氏のばへに、斯かるよすがも人は出でおはするものなりけりと、ありがたう見奉りしを、大方の世の事とはいひながら、又頼むかたなき御有様こそ悲しあ・けれい・と、つぶやき歎く。さる方にそ・ありつきあ・たりしあなたの年頃は、いふかひなき淋しさに目馴れて過ぐし給ひしを、なかくすこし世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ歎くべし。すこしもさてありぬべき人々は、あつたがら參りつきてありしを、皆次々に隨ひていさ散りぬ。女ば

上下の人 末摘花の侍女達で身分の高下の人々。

うとましろ 氣味のわるい、人げを離れてゐる木立の中に。

人げにこそ 以前には人げがあつたので。

木魂 樹木の靈。以下は現在の有様をいふ。

ずりやう 受領。地方長官。

放ちたまはせてむや このお邸をお賣り下さらぬか。ほとりにつきて 手菓を求めて申込んでくる。

あないみじや まあひどい事を。人の手前もある。

ら(などは)命堪へぬもありて、月日に隨ひて、上下の人(を)かずす
くなく(う)なりゆく。もとより荒れたりし宮(邸内)のうち、いとど狐のす
みかになりて、うとましろ(げ)うけどほき木立(こ)に、梟(ふくろふ)の聲を朝夕に耳
馴らしつつ、人げ(せ)に(か)れて(こ)こそさやう(狐や鳥なども)のものもせかれて影か
くしけれ、木魂(こだま)など(い)ふ(ふ)な(な)き(き)けしからぬ物(もの)も(も)ど(ど)も(も)所(ところ)を得
て、やう(ま)か(た)ち(ち)をあらはし、物わびしき事(こと)のみか(ま)ず(か)ら(ら)ぬ
に、まれく残りてさぶらふ人(侍女達)は、「なほいとわりなし。此頃ず
りやう(ら)どもの面白き家造り好むが、この宮の木立(を)に心をつけて、
『放ちたまはせてむや』と、ほとりにつきてあ(案内)ないし申さする
を、さやう(ま)に(ま)せ(せ)させ給ひて、いとかう物怖ろしからぬ御すま
ひに思し移ろは(ま)なむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へが
たし」など聞ゆれど、末摘(ま)あ(あ)ないみじや。人の聞き思はむ事もあ
り(る)。生(る)ける世(を)に、しか名残(親の世の名残なき)なきわざ(を)は(を)いか(か)が(が)せむ。かく怖ろ
しげに荒れ果てぬれど、親の御影(み)とまり(れ)たる心地する舊(ま)きすみ

御調度どもも御道具類も、時代がついてゐる。それが古風な作りで、きちんとして居る。なまじか研究して見ようと考へてゐる人が、さうした物をほしがつて、わざとその人かの人故宮がわざと名工の誰彼に注文して作らせたのだと聞き出して賣却方を申したむにも、自然かうした貧家のと見かけて、輕蔑して言つてく

いかがはせむ 致方がございませぬ。窮しては傳來の家寶を賣取りまぎらはし、人目に立たないやうにとりからはからつて。

見よと思ひ給ひて、父宮は私に使用せよとの思召で造りおかれ

御兄の禪師 醍醐の阿闍梨。

かと思ふに慰みてこそあ・れ」と、打泣き・つ・つ・つおもほし
 もかけず。御調度どもも、いと古代になれたるが、昔やうにて
 うるはしき・を、なま物の故知らむと思へる人・、さ
 るものえうじて、わざとその人かの人にせさせ給へる・と尋ね
 聞き、案内するも、をのづからかかる貧しきあたりと思ひあ
 なづりていひくるを、例の女ばら、「いかがはせむ。そこそは世
 の常のこと」とて、取りまぎらはしつ・つ・目に近き今日明日の
 見苦しさをつくろはむとする時もあるを、いみじういさめ給
 ひて、見よと思ひ給ひてこそしちかせ給ひけめ。などでか
 かる・しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意・たが
 はむがあはれなること」と・宣ひて、さるわざはせさせ給は
 ず。はかなき事にて、とぶらひ聞ゆる人は・なき御身なり。
 只御兄の禪師の君ばかりぞ・稀にも京に出て給ふ時はさしのぞ
 き・給へど、それも世になきふるめき人にて、

御殿を賣る事を

（給ひ）

（た）

（な）

（さういふのが）

（さし當つての生活苦を）

（又）

（未摘花が）

（父宮）

（た）

（常陸宮に）

（なま）

（聞き）

聖 聖僧。

淺茅 たけの低い茅。

葎 雑草。むぐら。蔓莖を有する刺ある雜草。

頼もしけれど 葎がまとひついて戸締をしてくれるから。

めざましき けしからぬ。

下の屋 下屋。召使達の住む建物。

ひたぶる心あるもの 向ふ見ずの一徹者。
ふよう 不用。用のないものと

蓬 生

同じき法師といふなかにも、たづきなく、この世を離れたる聖（ひじり）に物し給ひて、繁き草蓬をだに、かき拂（ふ）はむものともおもひ（ほ）寄り給はず。斯かるままに、淺茅は庭の面も見えず繁り、蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西ひんがしの御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど、くづれがちなるめぐりの垣を、馬牛（うまご）などの踏みならしたる道にて、春夏（と）になれば、放ち飼ふあげまきの心さへぞめざましき。

八月野分（はづきのわか）あらかりし年、廊（りやう）どもも倒れ臥し、下の屋（しも）どものはかなき板葎（いた）なりしなどは、骨（ほね）のみわづかに残りて、立ちとまるけすだ（衆）になし。煙絶えて、あはれにいみじき事多かり。盗人などいふひたぶる心あるものも、思（推）ひやりの淋しければにや、この宮をばふよう（え）のものに踏（思）み過（捨）ぎて寄りこざりければ、かくいみじき野ら藪なれども、さすがに寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひ變らず。つややかにかい掃（ひ）きなどする人もなし。塵はつ

繪る事なき 立派さは塵の爲にも見えなくはならない。

古歌物語 古歌の面白いのを拔出して書いたり、物語を讀んだりして。

心おそく 鈍くて興味を持たない。

親のもてかしづき 姫君は父宮のお躰けになつた御趣旨を守つて。

唐守菟姑射の刀自 何れも古物語で今傳はらない。竹取物語。かくや姫の物語。

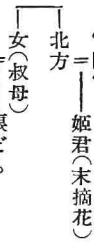
かむやがみ 京都の紙屋川の御用製紙場で漉いた紙。この紙や陸奥紙は儀式はつてゐて、風流な場合には適しないのである。

もれども、紛るる事なきうるはしき御すまひにて明し暮し給ふ。
 はかなき古歌物語などやうのすさびごとにてこそ徒然をも紛ら
 はし、斯かるすまひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうの事に
 も、心木棉花の性質おそく物し給ふ。わざと好ましからねど、おのづから又
 急ぐ事なき程は、心の合つた同志交通してこそ同じ心なる文通はしなどもうちし。
 若き人は木草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかし
 づき、給ひし御心おきてのすまひに、世の中をつつましきもの
 におぼして、稀にも、（睡まじう）音聞すべきことかよひ給ふべき御あたりを
 ども、更に馴れ給はず、ふるめきたる御厨子あけて、
 唐守、菟姑射の刀自、かくや姫の物語の繪にかきたるをぞ、
 時々（は）のまさぐり物にし給ふ。古歌とても、をかしきやう
 にえり出で、題をも讀人をもあらはし心得たるこそ見どころも
 ありけれ、うるはしきかむやがみ、陸奥紙などのふくだめ
 るに、（だてたる）古歌の神髓なのを書いたのなどはふることどもの目馴れたるなどはいとすさまじ

立派な
紙屋紙
（古への）
みちのくにがみ
殺風景

經うち讀み紫式部日記や枕草子などに讀經し歌うたひとある。經文の句に節をつけて誦するので、當時の人々の一般の趣味であつた。

年頃あくがれ出てぬ多年暇も貰はずに仕へて居つたが。
通ひ参りし齋院末摘花卷にて
一侍従は齋院に参り通ふ若人に卷一、二五五頁
この姫君の母北の方系圖参照
常陸宮



むげに知らぬ所よりは侍従は自分の親達も出入りして居つたのだからと思つて、受領邸に時時往復してゐる。
おのれまばおとしめ給ひて故宮は私が受領の妻になつたので輕蔑なきつて、つらよごしたのやうに思つておいでになつたから、今姫君がお世話してあげないひ聞かせつつ
受領の北方が侍従に。

蓬生

げなるを、姫君のさませめてながめ給ふ折々は、引きひろげ給ふか。今
の世の人のすめる經うち讀み、行ひなどいふ事は、いと恥かし
くし給ひて、見奉る人もなければ、數珠すずなどは取り寄せ給はず。
かやうに矯正うるはしくぞ物し給ひける。

侍従などいひし御乳母子おんめのとごのみこそ、年頃あくがれ出でぬものに
てさぶらひつれど、通ひ参りし齋院も・亡せ給ひなどして、いと
堪たよりへがたく心細きに、この姫君の御・母北の方ははらから、世に
あちぶれて、ずりやうらの北の方になり給へるありけり。むすめ
どもかしづきて、よろしき若人どもあ・・・、むげに知らぬ所
よりは、親ども母親(など)も受領邸にまうで通ひしをと思ひて、時々い・・・かよふ。
末摘花

この姫君は、斯く人な・うちとき御癖なれば、睦まじくもいひ通ひ
給はず。叔母あのをばおとしめ給ひて、面伏おもてがせにあぼしたりしか
ば、の・姫君の御有様の心苦しげなるを、見とぶらひ聞えず
など、なま憎げなることばどもいひ聞かせつつ、時々末摘に聞えけり。

もとよりありつきたる もともと生れついで の、さうした卑しい人は、却つて身分ある人の眞似をして、氣を張つて高くとまつてゐるのも多いが。

わが斯く劣りの 自分が斯く零落の境遇にあつて、今迄輕蔑の目で見られたのだから、姫君の家運の衰へた今こそ、姫君を自分の娘達の召使にした いものだ。心ばせなどの 氣風は舊式な所もあるが、安心な附添人ではあらう。

御ことのねも承らまほしがる人 叔母の娘達の事。

人に挑む心には 人にさからふのではないが。

心細き御有様の 心細い御生活を、今迄始終お見舞することとごさいませんでしたが、御近所に居たから、さあといふ時、それは何時でも駆付けられると、それが心強く思つて居つたので、すが、これからは遠方に行きますから、誠に心懸りです。

世上一般の人の事をいふ もともよりありつきたるさやうのなみく／＼の人は、なか／＼ 身分あよき人のまねに心をつくろひ、思ひあがるも多かるを、やんごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心すこ

しなほく／＼しき御叔母・にぞありける。わが斯く劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかでか斯かる世の末に、

この君をわがむすめどもの使人に・なしてしがな、心ばせなどのふるび・たる方・こそあれ、いとうしろやすき後見ならむ、

と思ひて、叔母時々此處に渡らせ給ひて、御ことのねも承らまほし・がる人・なむ侍る」と聞えけり。この侍従も常にいひ催

せど、人に挑む心にはあらで、只・こちたき御物づつみなれば、さも睦び給はぬを、ねたしとなむ思ひける。

かかる程に、かの家あるじ大貳になりぬ。娘ども、あるべきさまに見おきてくだりなむとす。この君をなほもいざなはむの心

深くて、叔母「遙にかくまかりなむとするに、心細き・御有様の

ゑんじうけびり 怨みのろつ

我もいかで 自分が深い情誼を
寄せてゐるといふ事を源氏に認
めて貰ひたいと争つてゐる男女
について、貴賤いづれを問はず、
その人々の心持を源氏が觀察し
て見られると、愆の爲と愛の爲
と、それと分つてくるにつけ
て、感慨にふけられると、さ
ま一とは愆と愛との二つを指し
た語。
かやうにあわただしき程に源
氏は、姫君の事を思ひ出される
様子も見えずに、月日が過ぎる
たびしかはらなど、まて下賤の
者共までがお悦び申してゐる源
氏の官位昇進などをさへ、自分
は餘處事として聞かねばならぬ
し、かつた折の愛は、隠退といふ
自分一人の爲に出来てゐる愛は
ひ甲斐もない世の中だなあ。思

蓬生

常にしもとぶらひ聞え、ねど、近き頼み・侍りつる程こそあれ、
いとあはれにうしろめたくなむ」などことよがるを、更（うまい事をいふ）に承け
引き給はねば、（叔母）あな・・・にく・・・事々しや。（えらさうな）・・・心一つにお
ぼしあがるとも、さる藪原に年經給ふ人を、（源氏も大切には思召すまい）大將殿もやんごと
なくしも思ひ聞え給はじ」など、ゑんじうけびり。さる程に
げに世の中に許され給ひて、都（源氏が）に歸り給ふと、天の下の喜びに
て立ちさわく。我もいかで人より先に深き志を御覽ぜられむと
のみ思ひきほふ男女につけて、高きをもくだれるをも、人の心
ばへを見給ふに、（源氏が）・・・あはれに・・・あ・・・ぼし知る事さま
なり。かやうにあわただしき程に、（未摘花を）更に思ひいで・・・給ふ氣色
見え・・・で月日經ぬ。今は限りな・・・りけり・・・年頃あらぬさまな
る御・・・さまを、悲しういみじき事を思ひながら・・・・・萌
えいづる春にあひ給はなむと念じわたりつれど、（下賤の者共の事）たびしかはら
など、まで喜び思ふなる御位・・・あらたまりなどするを、よそにの

わが身一つのために 古今雜下
「世の中は昔よりやは憂かりけむ我身一つの爲になれるか」

さればよ 思つた通りだ、あんな貧しく醜い人を相手にするものぞ 佛や聖でも罪障の輕い人を濟度し易く思召すのだ、あんな哀な様子でありながら、えらさうに思つて、父宮や母北居などの御存命時の儘の癖で居られるあの慢心が可愛さうだ。かかる御有様にて あんなざまでもえらさうにかまへて、父宮や母君の居られた時から癖になつてあるまゝに高慢ちなのが氣の毒だ。世の憂き時は 古今雜下「世の憂き目見えぬ山路に入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」むたがるに人わろげ 不體裁づくひめとふやうな待遇は決して致しませぬ。

み聞くべきなりけり、悲しかりし折のうれはしさは、只わが身一つのためになれると覺えし・かひなき世かなと、心碎けてつらく悲しければ、人知れずねをのみ泣き給ふ。大貳の北の方、さればよ、まさに斯くたづきなく人わろき御有様を、かずまへ給ふ人はありなむや、佛聖ひじりも、罪かろきをこそ導きよくし給ふなれ、かかる御有様にて、本捕がごんに茶落しながら・たけく世（中）を おぼし、宮（の）母・うへなどのおはせし時のままにならひ給へる御心おごりのいとほしき事、と、いとどをこがましげに思ひ（いひ）て、叔母なほも思し立ちね。世の憂き時は、見えぬ山路をこそ尋ぬ（る）人こそあなれ。田舎など・はむつかしきものと（に）人ほおぼしやるら（べ）か・め（れ）ど、ひたぶるに人わろげにはよももてなし聞えじ」など、いとことよ（うまい事を）くいへば、むげにくし（果ご）にたる女ばら（は）、「さも靡き給はなむ。たけき事もあるまじき（か）め（る）・御身を、いかにおぼして（か）・斯く立（さ）たる御心ならむ」ともどきつぶやく。侍従も、かの大貳の甥だ

とどむべくも侍従を都に残して行きさうもないので、不本意ながら下向の準備して。見奉りおかむが末摘花をあとに残して下るのが心苦しうございますから。

さりともいくら何でも、これからさき年数は立つても源氏がい苦はない。あはれに心深きあれ程情をこめてお約束なさつたもの、これら身の不束からこんなにも忘れたら、きつと尋ねに來て下さるだらう。

心強く志操堅固に昔の儘に辛抱し通して居られるのであつた。

山人 山がつ。赤き木實 末摘花の鼻の赤いのを形容したのである。

つ人・語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、（捨て）見奉りおかむがいと心苦しき（かるべき）を」とて、末摘に下向を、そのかし聞ゆれど、本摘はなほ斯くかけ離れて久しうなり給ひぬる人に頼みをかけ給ふ。本摘の御心のうちに、さりとも、あり經てもおぼし出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをし給ひしに、わが身の憂くて、源氏からかく忘られたるにこそあれ、風がつてにても、わが斯くいみじき有様を聞きつけ給はば、必ずとぶらひ出で給ひてむと・年頃お・ぼしければ、大方の御家居も（も）・ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもなど取り失はせ給はず、心強くおなじさまにて念じ過ぐし給ふなりけり。本摘のさまね泣きがちに、いとどおぼし沈みたるは、ただ山人の赤き木實一つを顔に放たぬと見え給ふ御そば目などは、普通の人のおぼろげの人の見奉り許すべきにもあらずかし。くはしくは聞えじ。いとほしう物いひさがなきやうなり。

故院の御ために 桐壺院追善の御八講は「標卷」とあつた。一〇五頁。八講し給ふ。

いとかしかう 大變ありがたくても、この世ながらの極樂の裝飾にも劣らず、莊嚴且面白さの極致を盡されました。「かしかう」は河内本の如く「かしこう」がよい。

五つの濁り深き世 五濁惡世。煩惱、衆生濁の五つ。命濁、煩

さてまかばかり こんなに不幸な私をほつたらかして置かれるのは、いやな佛菩薩だと源氏の事が恨めしく思はれるので。

冬になりゆくままに、いとど搔き附かむ方なく悲しげに（こ）なが
め過（こ）ごし給ふ。かの殿には、故院の御ために御八講、世の中ゆ
すりてし給ふ。殊（殊）に僧などは（殊）なべてのは召さず、ざえす（學才勝れ）ぐ
れ行ひにしみ、尊き限りをえらせ給ひければ、この禪師の君も、
參り給へりけり。歸りざまに立寄り給ひて、禪師（禪師の所へ）しかう（こ）、
權大納言殿の御八講にまゐりて侍りつるなり。いとかしかう、
生ける（世）・淨土の飾りに劣らず、いかめしう面白き事どもの限
りをなむし給ひつる。佛（ほ）ぼさつ（ら）の變化（へん）の身にこそ物し給ふめれ。
五つの濁り深き世になどて（かりにも）・生れ給ひけむ（ほ）と（かり）い
ひて、やがて出で給ひぬ。ことずくなに、世の人に似ぬ御あは
ひにて、かひなき世の物語をだにえ聞え合せ給はず。さても（具）・
かばかりつたなき身の有様を、あはれに覺束なくて過（ぎ）し給ふ
は、心憂の佛（源氏の事）ほさつやとつらう覺ゆるを、げに限りなめりとや
う（ほ）もひなり給ふに、大貳の北の方、にはかに來れり。例

未摘方に

これきりの縁たらうと

口數すくなく

兒妹仲で

人わろく淋しきこと 常陸宮の
邸内の有様。

共のことも 叔母の車副の下部

いづれかこの 淋しい邸にも、必ず踏み分けた足跡のある三つの徑がある筈だが、それはどこかと辿りあるく。文選陶潜歸去來辭「三徑就荒、松菊猶存」三徑とは河海に「門」に行く道、井へ行く道、厠に行く道也」と註す。

取りかへつべく見ゆ 取換へようと思へば取換へられさうに見える。

出て立ちなむ事ま 出發の事を考へて居るもの。見捨て奉りがたきま 餘情を残して省筆したものである。御みづからこそ 末摘花御自身こそ一寸でも私末摘花御自身にせめて此の侍従をだけでも連れて行く事を許して頂きたいと存じまして。

はさしも睦びぬを、さそひ立(奉)てむの心にて、奉(本摘花に)るべき御装束な
ど調(てう)じて、よき車に乗りて、おももち氣色ほこりかに、物思(得意さうに)ひ
な(き)げなるさまして、ゆく(たしぬげに)りもなく走り來て、門(かど)あけさするより、
人(る)わろく淋しきこと限りなし。左右の戸(ひたりみぎ)も、よろほひ倒れにけ
れば、をのことも助(多く)けて、とかく(助けて)あけさわぐ。いづれか
この淋しき宿にも、必ず分けたる跡ある三つの道とたど(さ)る。
わづかに南面(みなみおもて)の格子あげたる間に寄(ま)せられたれば、いとど(無作法だと姫君は)はしたな
し(思ったが)と思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍
従(北方に對面)出で來たり。かたちなど衰へにけり。年頃いたうつひえたれ
ど、なほ物清げによしあるさまして、忝(侍従と姫君とを)くとも、取りかへつべ
く見ゆ。叔母(叔母)出で立ちなむ事を思ひながら、心苦しき御有様(本摘の)の見
捨て奉りがたきを。侍従の迎へになむ參り來たる。心憂くおほ
し(を)隔て給ひて、御みづからこそあからさまにも渡らせ給はね(おほ)。
め、侍従(侍従)この人をだに許させ給へとてなむ。など斯(か)うあはれげなる

行く道に榮轉の道だから、それに氣を慰めて。

年頃も何かは 今迄も何で私が粗略に思ひませう。

睦び聞えさせむも 親しくして頂くのも遠慮される點が多くて今に及んだのです。
世の中の斯く 世は無常で榮枯も不定のもの故、賤しい私共は結局氣樂でした。

近き程は 近所に住んで居る間には知らず、無沙汰してもいつでもお目にかかれるとおもふと氣もせかず力づよくも思つて居たのに。

世に似ぬさまに 世間並でもな處で死んで了はうと思つて居ます。

・・・さまには」とて、うちも泣くへきぞかし。されど行く道叔母は
 に心をやりて、いと心地よげなり。叔母「故宮おはせし時、あのれ
 をば面伏せなりとおぼし捨てたりしかば、うとくしきやうに
 なりそめにしかど、年頃も何かは。やんごとなきさまに思しあ
 かり、大將殿などおはしまし通ふ御宿世の程を・・・忝く思ひ給
 へられしかばなむ、睦び聞えさせむも憚ること多くて過ぐし侍
 りつるを、世の中の斯く定めもなかり・・・ければ、か
 ずならぬ身は、なかく心やすく・・・侍・るものな
 りけり。及びなく見奉りし御有様のいと悲しく心苦しきを、近京
 き程はあつた姫君の御境遇が、のどかに頼もしくなむ侍りけるを、
(七) 筑紫に 斯く・遙にまかりなむとすれば、うしろめたくあはれに・・・覺
 え給ふ・」など語らへど、心とけてもいらへ給はず。未捕「いと嬉
とほ しき事なれど、世に・似ぬさまにて何かは。かうながらこそ・
 朽ちも失せ・めとなむ思ひ侍る」とのみ宣へば、叔母「げにしかな

大將殿の源氏がこのお邸に手
入して造り磨かれたならに
打つて變つて玉の臺のやうにも
改まる事と頼もしくは存じます
が、只今は禁上より外には愛を
分ける女もないのです。

昔より源氏は昔から色めかし
性から慰み半分に通つて行
ひ切つて居られます。

ましてかう、まして斯く見る影
もない有様で、草原に住んで居ら
れる人をば、身を潔白に保つて
自分一人を頼りにして來たと思
つて尋ねて下さる事はなからう
と存じます。

侍従をだに侍従なりともつれ
て行きませう。

さらばまづ、ではとにかく今日
からは北方の申す所も道理です
せう。御君の迷つて居られるの
御尤、故中に立つ私はずらうご
ざいます。

蓬生

むおぼさるべけ、れど、生ける身を捨てて、斯くむくつけき
なすすまひするたぐひは侍らずやあらむ。大將殿の造りみがき
給はむにこそは、引きかへ玉の臺にもなりかへらめと
は頼もしうは侍れど、只今は兵部卿の宮の御むすめよりほかに
心わけ給ふかたもなかりけり。昔よりすきくしき御心にて、
なほざりに通ひ給ひける所々、皆おぼし離れにたなり。まして
かう物はかなきさまにて、藪原に過ぐし給へる人をば、心清く我
を頼み給へる有様と尋ね聞え給ふ事、いと難くなむある
べき、などいひ知らするを、げにとおぼすもいと悲しくて、つ
くくと泣き給ふ。されど動くべうもあらねば、よろづ
にいひ頼ひ暮して、さらば侍従をだに」と、日の暮るるま
に急げば、心あわただしくて、泣くく、侍従さらばまづ今日は
まづかう責め給ふ送りばかりにまうで侍らむ。かの聞え給ふも
すがじ、ことわりなり。又おぼし頼ふも、さる事に侍れ

玉置の歌 今お別れ申しても、君をお見捨て申す事ではございませぬ。その事に行く道々の道祖神も證人に立てて誓ひませう。いづら さあ。侍従を促がす言葉。

世に用ひらるまじき 物の役に立ちさうもない老女房までが。出て行くのも當然だ。年若い侍従がおの身々につけたる 自分自分についた縁者を思ひ出して出て行かうと工面して居るのを姫君は聞いてきまりわるく思つてゐられる。

越の白山 古今離別「君が行く越の白山知らねども雪のまにまに跡は尋ねむ」

蓬 生

言・は更にも聞えさせず。年頃の忍びがたき世の憂さを過ぐし（九ヶ辛抱して）侍りつるに、かく覺えぬ道にいざなはれ・・・て蓬・・・にまかりあくがる事」とて、

「玉鬢絶えてもやまじゆく道のたむけの神もかけて誓はむ（侍従）命こそ知り侍らね」などいふに、叔母・・・いづら、暗うなりぬ（目暮れ）と・つぶやかかれて・、心も空にて引出づれば、かへり見のみ（心）・せられけり。年頃わびつつも行き離れざりつる人の、かく別

れぬる事をいと心細う思すに、世に用ひらるまじき老人・・・さへ、「いでやことわりぞ。いかでか立ちとまり給はむ（おいびと）。我等もえこそ念じ果つまじ・・・けれ」と、おのが身々・・・につけたるたよりども・思ひ出でて・・・とまるまじう思へ（心）るを、・人わろく聞きおはず。霜月ばかりになりぬれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日夕日を防ぐ蓬（常陸宮のさま）葎（むぐら）の陰に深う積りて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出

かの殿には 源氏は久々で紫上にあつた珍らしさに、一入大駱を御寵愛なさる状態だからあまり重んじておいでにならぬ婦人達の所には。

年かはりぬ 源氏二十九。

御暇聞えて お暇乞をして。

で入る下人だになくて、つれづれとながめ給ふ。はかなき事を聞え慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなく、夜も塵がましき御帳の内も、傍淋しく物がなしくおぼさる。

かの殿には、珍らし人に、いとど物騒がしき御有様にて、いと

やんごとなくおぼされぬ所々には、わざともえおとづれ給はず。

ましてその人はまだ、世にやおはすらむとばかりおぼし出づる

折もあ、れど、尋ね給ふべき御志も急が、であり経るに、年

かはりぬ。

卯月ばかりに、花散里をおもひ、出で聞え給ひて、忍びて、對の

上に御暇聞え、て、出で給ふ。日頃降りつる名残の雨す

こしそそぎて、をかしき程に月さし出でたり。昔の御ありさあ

ぼし出でられて、艶なる程の夕月夜に、道のほどよろづの事お

ぼし出でておはするに、かたもなく荒れたる家の、木立繁く森

源

そこはかとなき どこからともなく一面に匂ふよい薫りである さし出て給へるに 源氏が車から

おくれねば お供を缺かした事がないから、お供して居つた。

此處にありし人 末摘花。

とぶらふ 河内本に「ととふ」とあるは本の儘。 よく尋ね寄りてま 十分確めた上で口をきけ。

いとどながめまさる 侍従の去つた後で一人物思に沈んで居る折柄で、屈託の内に日を送つて居られたのだが。

のやうなるを過ぎ給ふ。大きな松に藤の咲きかかりて月影に
・・・靡きたる、風につきてさと匂ふが・・・なつかしく、そこは
かとなきか なよびイ をりなり。・・・橋には・・・變りてをかしければ、
し出で給へるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、
れ伏したり。見し心地する木立かなとおぼすは、はやう此の宮
なりけり。いとあはれにて、押しとどめさせ給ふ。例の惟光は、
斯かる御忍びありきにおくれねば、さぶらひけり。召寄せて、
「ここは故常陸の宮ぞかしな」。惟光「しか侍り」ときこゆ。此
處にありし人は、まだやながむ・らむ。とぶらふべきを、わざ
と物せむも所せし。斯かるついでに入りて消息せよ。よく尋ね
寄りてを打出でよ。人たがへしてはをこならむ」と宣ふ。此處
には、いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、
晝寝の夢に故宮の見え給ひければ、さめていと名残悲しくおぼ
して、漏り濡れたる庇の端つかたを押しのごはせて、此處彼

例ならず世づき給ひて、いつになく、人並の氣持になつて。
 亡き人ぞの歌 故宮を慕ふ涙で
 袂の乾くひまもないのみか、軒の
 零までが降り添うて、杖は一
 入濡れるのも、いぢらしく思は
 れる際であつた。「ありける」と
 ある河内本に従ふべきである。

格子二間 間とは柱と柱との間をいふ。

名のりして 惟光は我名を告げて。

おぼし分くまじき 侍従と同じに思つて頂いてもよい女が居ります。これが侍従の伯母少將である。

處の御座引きつくるはせなどしつ、例ならず世づき給ひて、
 亡き人を戀ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふ
 も・心苦しき・程になむあめりける。惟光入りて、めぐる
 めぐる、人の音する方や・と見るに、いささか人げもせず。
 さればこそ、行き來の道に見入る・れど人住みげもなき
 ものを、と思ひて、歸り參る程に、月あかくさしいでたるに見
 れば、格子二間ばかりあげて、簾垂動く氣色なり。わづかに見
 つけたる心地、怖ろしくさへ覺ゆれど、寄りてこわづくれれば、
 いと物ふりたる聲にて、まづしはぶきを先に立てて、老女かれは
 たれぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、並侍従の君と聞えし人
 にたいめん賜はらむ・といふ。老女それ
 はほかになむ物し給ふ。されどおぼし分くまじき女なむ侍る
 といふ聲、いたうねび過ぎたれど・と聞き知り・たり。内には、思ひ
 ・と聞きし老人・と聞き知り・たり。内には、思ひ

忍びやかに 人目を忍ぶ風情で
やさしい物ごしだから。
見なはず 男など久しく見馴
れなくなつた目から見ては。

尋ね聞えさせ 殿もお尋ねして
あげようといふ御好意は始終持
つて通りましたか。お立寄りにな
つたのです。何と返事ませう
か。御心配には及びませぬ。

變らせ給ふ御有様ならば お心
變りなさる姫君ならば、こん
浅茅原を移轉しないであらうし
やれませうか。御推察の上申上
げて下さいます。浅茅は長けの低
茅。人もおとづれない草原の中
の意。年経たる人の心にも、年寄つた
私共の心にも、かうした類はま
たあるまいと思ひながら、珍
らしい御夫婦仲をけふまで傍
らして参りました。段々ぼつば
つ話し出して。

蓬 生

寄らず、狩衣姿なる男の、忍びやかにもてなしてなごやかなれ

ば、見なはずなりにける目にて、もし狐などのへんげにやと

おぼゆれど、近う寄りて、（水）「たしかになむ承らまほしき。變（変）

らぬ御有様ならば、（水）尋ね聞えさせ給ふべき御志も絶えずなむお

はしますめるかし。今宵もゆきすぎがてに、（立）とまらせ給へる

を、（源氏に）「いかが聞えさせむ。うしろやすくを」といへば、女ども

うち笑ひて、「變らせ給ふ。御有様ならば、かかる浅茅が原を

移ろひ給はでは侍りなむや。ただ推し量りて、（を）聞えさせ給へか

し。年経たる人の心にも、たぐひあらじとのみ珍らかなる。

の御。世をこそは、（たぐひな）見奉り過ぐし侍れ」と、ややくづし出

で、（た）事、問はず語りもしつべきがむつかしければ、（を）「よし

よし、まづ斯くなむと聞えさせむ」とて参りぬ。（源氏に）「などかいと

久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のしげさかな」と

宣へば、（惟）「しかくなむたどり寄りて侍りつる。侍従が伯母の

變らぬ有様ならば 昔の處で居られるなら會つて見よう。成程さうもあらうと(昔のまゝだからと) おもはれる人柄だからね。

ふと入り給はむ事 末摘花を信じながらも猶どうかと疑はれて不意にはひつて行くことも。

たづねてももの歌 道もない深い蓬原で誰も尋ね訪ふ人もないが自分こそ訪ねて姫君の昔ながらの深い心を慰めてあげよう。

少將といひ侍りしおい人なむ、昔ながらの變らぬ聲にて侍りつる」と有様聞ゆ。(いと) 源氏の心
 ・・いみじうあはれに、斯かるしげき・なかに、本捕が何心地して過ぐし給ふ・らむ・、(と)今まで訪はざりけるよ、とわが御心のなさけなさも思し知らる。源「いかがすべき。斯かる忍びありきも難かるべきを、今晩のやうな機會でなければ斯かるついでならではえ立寄りらじ。變らぬ有様ならば。げにさこそはあらめと推し量らるる人ざまになむ」とは宜ひながら、ふと入り給はむ事・、(は)なほつつましう思さる。故ある御せうそこもいと聞えまほしけれど、以前通つて居た當時の口重見給ひし程の口おそさもまだ變らずば、御使の立ちわづらはむ・もいとほしう、あぼしとどめつ。惟光も、「更にえ分けさせ給ふまじき蓬の露けさになむ侍る。露すこし・・拂はせてなむ入らせ給ふべき」と聞ゆれば、(おほし類ひこ)、

源氏 たづねても我こそ訪はめ道もなく深きよもぎのもとを
 と獨りごちて、車からなほあり給へば、源氏の止先の御さきの露を馬のむちして・(打)

あまそそぎ 催馬樂東屋「東屋のまやのあまそそぎ、われ立ち濡れぬそのとんのどひらかせ。かすがひも、とざしもあらばこそ、そのとんのどわれさゝめ、押しひらいて來ませわれや人妻」
御笠ぶらふ 古今東歌「みさぶらふ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

むとく 荒廢して、見るかげもない。

さりともと お見捨てなさいくら何でも自分と今迄待つて居られた豫想が當つて。

奉りおきし御ぞども 前に「さそひ立てむの心にて、奉るべき御裝束など調じて」とあつた。一六三頁。

さしもおどろかい給はぬ 格別お手紙も下さりなかつた根柢しさに、今迄お心をためたて居たのですが、しるしの杉ならぬ通りの木出が目に根氣負けて立寄つたので。

蓬 生

拂ひつつ入れ奉る。 雨の聲 あまそそぎもなほ秋の時雨めきてうちそそ

げば、惟光御笠さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりて」と聞ゆ。

・源氏のさま御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。常陸宮のさま昔だにあるかなきか

なりし中門など、ちのうもんましてかたもなくなりて、跡形入り給ふにつけ

ても、いとむとく無徳なるを、ともかくも立ちまじり見る咎むべき人

・なきぞ・なかく心やすかりける。

姫君は、さりともと待ち過ぐし給へる心もしるく、あはれなる嬉しけれど

・ものからいと恥かしき御有様にて、たいめんせむいとつ

ましく思したり。大貳の北の方の奉りおきし御ぞどもをも、心

ゆかずとおぼされしゆかりに、お召にならなかつたが見入れ給はざりけるを、この

人々の香の御唐櫃かうびつに入れたりけるが、いとなつかしき香か・にしし

たるを奉りければ、仕方なくていかがはせむに、て著かへたまひて、かの煤すす

けたる御几帳引き寄せておはす。源氏入り給ひて、源年頃の隔てに

も、心ばかりはこころ變らずなむ思ひやり聞えつるを、さしもあ

夢のやうなる左遷などの事
で源氏の身上に變化のあつた事。

藤波の歌 松に咲きかゝつて
る藤がそのまゝ通りすぎかね
るやうに見えたのは、やはり松
がお宿の目せしだつたので
す。お寄りせずにおられたらな
つたのは、あなたが待つて居つ
て下さったからです。「打ち」は
藤波の縁語。
別れに衰へし 年月が。
居つた當時の物語も申上げ
まして居る。古今雜下「思ひきや
の別に衰へて蟹の繩たぎいさり
せむとは」私の外には訴へる人
もなからうかと。
うらもなく心からたよつてあ
られるものやうに。
年を経るの歌 待つ甲斐もない
私の花をお尋ね下さつたのは、
藤の花を見る序にお立寄りなさ
れただけの事なのですか。

軒のつまも残りなければ 朽廢
して軒先も無くなつてゐるか
ら。

蓬 生

月の程もあはれに、夢のやうなる御身の有様もあばしつづけら
る。

源氏

松に符をかねた語

「藤波の打過ぎ難く見えつるはまづこそ宿のしるしなりけれ
かぞふれば、こよなう・積りぬらむかし。都に・變りにける事
の多かりけるも、さま／＼あはれになむ。今のど・かにぞ鄙の
別れに衰へし世の物語も聞えつくすべき。又年経給ひつらむ春
秋の暮しがたさなども、誰にかはうれ給はむとすらもなく覺
ゆるも、かつは怪しうなむ」など聞え給へば、

木摘花

待に松をかねた語

年を経たまつしるしなき我宿を花のたよりに過ぎぬ許りか
と忍びやかにうちみじろき給へるけはひも、袖の香も、昔より
はねびまさり給へ・るにやと思さる。月入りがたになりて、
西の妻戸のあきたるより、さはるべき・渡殿だつ屋もな
く、軒のつまも残りなければ、いと花やかにさし入りたれば、
あたり／＼見ゆるに、昔に變らぬ御しつらひ・のさまなど、

一七一

忍草にやつれたるしのぶぐさ 古今秋上
一君しのぶ草にやつれる古里は
松虫のねぞ悲しかりける忍草
が生えて見苦しくなつてゐる
その外見よりは御部屋飾りの
さまがみやびやかに
たう毀ちたる「帳」は河内本
の如く「丁」は河内抄
によれば昔小大輔といふ直女
が几帳の帷子を着物に仕立直して
着たといふ話が桂中納言物語
といふ古物語にあつたといふ。

あざやかに 目立つて當世風
など華美な事をせぬところだ
から、そこを見ただでは格別な
ともないで、常陸宮の缺點も
餘程隠れて分らなかつた。

祭御輿 賀茂祭、齋院の御輿。
御いそぎどもに その準備にか
こつけて。
さるべき限り 然るべき愛人だ
けに厚意を表せられる。

睦まじき人々に 源氏が親しく
召使つて居る家來衆に。

忍草にやつれたるうへの見る目よりは、みやびかに見ゆるを、
昔物語に、たう毀ちたる人もありけるをおぼし合するに、同じ
さまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるに物づつみした
るけはひの、さすがにあてやかなるも心にくくおぼされて、さ
る方にて、忘れじと心苦しう思ひしを、年頃さまの物思ひ
に、ほれしくして隔てつる程、つらしと思はれつらむとい
とほしく思す。かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花
やぎ給はぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れに
けり。
祭、御禊などの程、御いそぎどもにことつけて、人の奉りたる
物、いろくに多かるを、さるべき限り御心加へ給ふ
なかにも、この宮にはこまやかにおぼし寄りて、
睦まじき人々に仰せごとたまひ、下部どもなど遣はして、
蓬拂はせ、見苦しきに、板垣といふもの

二條の院いと近き所 二條院の
東の院の事 東の院造營の事は
松風卷二〇五頁にも見える 源
氏が六條院を造つて移り住むま
では花散里などもこの東の院に
住んで居つたし

なげの 源氏は、假初の戯れ事
でも貸さず、世間では多少この女
耳と思はれ且つ我が心を惹き付
ける點のある女を捜し寄るお方
だと誰も知つて居たのに。
かく引きしたがへ かう見當違ひ
にも足らぬお方を引立てられる
のはどうした料簡なのか。

蓬 生

うち堅めつくろはせ給ふ。 源氏が未摘を かう尋ね出で給へりと (入) 聞き傳へ
むにつけても、わが御ためめんぼくなければ、 本摘方に 渡り給ふ事 (は) な
し。御文いとこまやかに書き給ひて、 源文 二條の院いと近き所を
造らせ給ふを、そこになむ渡し奉るべき。よろしきわらはべな
ど求めてさぶらはせ給へ」など、 侍女達の身の上まで 人々のうへまで思しやりつつ
お世話なされるので とふらひ聞え給へば、かくあやしき蓬のもとにはおきどころな
き (く) まで女は (女房達) 空を仰ぎてなむそなたに向きて (なむ) 喜び聞えけ
る。なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば、目と
どめ耳立 (悪ひ寄り) て給はず。世にすこしこれは (や) とおもほえ心にとま
るふしあるあたりを尋ね寄り給ふものと人の知りたるに、かく
引きたがへ、何事もなのためにだにあらぬ御ありさまを (も)、物め
かし出で給ふは、いかなりける御心にかありけむ。これも昔の 前世の宿縁
契りなめりかし。今は限りとあなづり (聞え) 果てて、 われがちに さま (こ) にき
ほひ散りあかれし上下の人々、 うへしも 我も (も) 参らむと争ひいづる人 (こ)

心やすくならひて吞氣解がついて。生受領の家に奉公してゐるの義。心やすくならひてゐる人」とついで。
 殊なる事なき。格別な事もなかつまらぬ受領などの家に奉公して居る女は。今迄かうならはずはしたなき。今迄かうした経験も持たないで間のわるい氣持にする者もあつて、當座の目見えに來ては歸つてゆく。こまやかに、懇切に未摘を世話されたので。 常陸宮も活氣づいて來て。

かく「遣水かき拂ひなどして」を受けた話で「追従し仕らまつ御心とどめて」源氏が深く未摘を取つて、源氏の御機嫌を取りながら、姫君に御追従をする。この東院宮常陸宮の舊邸。東院宮末摘花が二條東院に移り住んだのはいつで、少女卷に六條院が竣工してないが、人々は皆そこに移り住んだが、未摘花だけは長き此處に居残つたらしい。はなつた折にも、何かの序においてに

もあり。心姫君の性質はばへなどはたうもれいたきまでよくおはする御有様に、(何事も)心やすくならひて、殊なる事なきなますりやうなどやうの家(など)にある人は、ならはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心見えに參り歸る。君は、いにしへにもまさり(源氏)たる御いきほひの程にて、物の思ひやりもまして添ひ給ひにければ、こまやかに(も)おぼしおきてたるに、匂ひいでて、宮の内やうく人目見え、木草(草木)の葉も、ただ凄くあはれに(心)見えなされしを、遣水下家司がかき拂ひ、前栽根ぎはのもとだちもすしうしなしなどして、殊なる覺えなき下家司(など)の殊に仕へ(まつら)まほしき(さ)は、かく、御心とどめて思さるる事なめりと見取りて、御氣色賜はりつつ追従つらとまうし仕らまつる。二年ばかりこの舊宮ふるみやにながめ給ひて、ひんがしの院といふ所になむのちには渡し奉り給ひける。たいめんし給ふ事などは、いと難けれども、近きしめの程にて、(は)大方にも渡り給ふ(ついで)に、さしのぞきなどし給ひ

いとあなづらはしげにもさう
い。輕んじたやうにもあつかはれな
い。嬉しきものの姫君の幸福を嬉
しくは思ひながら。

つつ、いとあなづらはしげにももてなし聞えたまはず。かの大
貳の北の方上落のぼりて驚き思へるさま、侍従はが嬉しきものの、今
暫し待ち聞えざりける心淺さを恥かしう思へる程などを、今作者が
こし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさく物憂
ければな・ん、今又もついであらむ折に、思ひ出でてつ・聞ゆべき
とぞな・ん。

伊豫介 空蟬の夫。
故院 桐壺院の崩御は賢木卷四
〇〇頁。
須磨の御旅居も 源氏が須磨に
謫居して居る事をも常陸から遙
に聞いて。

筑波根の山を 常陸から京に往
復する人も稀にはあるが、それ
に託するもの不安な気がして。
古今東歌一甲斐が根を根越し山
越し吹く風を人にもがもやこと
づてやらむ」

常陸はのぼりける 常陸介は任
滿ちて上洛した。
關入る日しも 丁度常陸介が逢
坂の關を越す日に。
御願果たし 須磨での立願が叶
つてのお禮詣。

道の程 途中で出遭つては混雑
だらうと心配して、まだ暗い中
から急いで來たのだが、
所せうゆるぎくるに 所せばし
と悠々と來るので。
御ぜんの人々 源氏の前驅の人
々。
道もさりあへず 道もよけきれ
ぬ程、大勢なだれ込んで來たの
で。

關山 關所のある山を一般にい
ふ。

伊豫介といひしは、故院(の御門の)、かくれさせ給ひて又の年、常
陸(任國に)になりてくだり(七)。しかば、かの帚木(空蟬も常陸に)もいざなはれにけり。須
磨(おほじたがら)の御旅居も遙に聞きて、人知れず思ひやり聞えぬにしも
あらざりしかど、傳(源氏に)へ聞ゆべき(便宜)すがだになくて、筑波根の山
を吹越す風も浮きたる心地して、いささかのつたへ(三とづこ)。だになく
て年月かさなりにけり。限れることもなかりし御旅居なれ(りしむ)。
ど、京(源氏が)にかへり住み給ひて又の年の秋ぞ常陸はのぼりける。關
入る日しも、この殿(源氏)・石山(石山に)に御願(か)・果たしにまうで給ひけり。
京より、かの紀(常陸介の子)の守などいひし子ども、迎(關迎へに)へに來たる人々、こ
の殿(源氏)かくまうで給ふべしと告げければ、道の程(常陸の用意)さわがしかりな
むものぞとて、まだ曉より急ぎけるを、女車(れど)多く、所せりゆる(三)
ぎくるに、日たけぬ。打出(うちいで)の濱くるほどに、殿(源氏)は栗田山越え給
ひぬとて、御ぜん(さき)の人々、道もさりあへず來込みぬれば、關山(常陸の一)
に皆ありゐて、ここかしこの杉のしたに車どもかきあろし、木
行(は)

源眷族。

漏りいてて 下簾垂の下から。

旅姿 源氏一行の。
櫻狩襖ともいふ。狩衣の事。
表は布で裏は絹。縫模様や絞染
などを施す。
昔の小君 源氏を空蟬に媒ちし
た。
今日の御關迎へは 今日わざわざ
ざ御關迎に参つた私の志は、知
らぬ顔は出來ますまい。
おほぞうにて 一通りの傳言故
何の甲斐もない。

隠かくれに居ゐ居かしこまりて過すぐし奉たる。車くるまなど、かたへは一部は後方におくらかしおくらかし
先まにたてなどしたれど、なほ類廣く見ゆ。車くるま十じばかりぞ袖そで口ぐち物もの
の装の色合色いろ合あひあつたりて見えたる、田い舎いびずよしありて、齋い宮みや
の群行おくだり・何なにぞやうの折まの物見み車くるまおぼしいでらる。殿とのも、斯しか
く世に・・榮さかえ出で給ふ珍らしさに、かずもなき御ぜんども、
皆みな目めとどめたり。九な月つき晦つごもり日ひなれば、紅べ葉はのいろくこきまぜ、
霜しも枯かの草むらくをかしう見えわたるに、關せき屋やよりさとはづれ
出いでたる旅姿さどもの、いろくの襖あをど・・のつきくしき縫ぬい物もの、
くくり染のさまも・・、さるかたにをかしう見ゆ。御ご車くるまは源氏の簾すだ垂た
あろし給ひて、かの昔むかしの小君きみ、今いまは右衛門の佐すけなるを召よ寄よせて、
源源氏への傳言「今日けふの御關せき迎むかへは、え思ひ捨てたまはじ」など源氏の宣のたまふ。御ご心こころの
うち、いと空蟬をあはれにおぼしいづ・事こと多おほかれど、おほぞう
にて・・かひなし。女むすめも、人ひと知しれず昔むかしの事忘わすれねば、取とりか
へして物あはれなり。

ゆくとかととせきとめ難き涙をや絶えぬ清水と人は見るらむにも、せきとめ難く流れる私の涙を、絶えず湧き出る關の清水と思ひちがひなさるでせう。

一日 常陸の入洛の日。まかり過ぎしお目に懸つたでけでお供しなかつたお詫を申上げらる。

この御徳 源氏のお蔭を蒙つたのに。

紀の守 常陸介の子。

先妻 紀伊守(河内守)

常陸介 右近將監

空蟬

小君(右衛門佐)

一日は 先日お目に懸つたのは深い因縁と私には思はれたがあなたもさうお分りになつたらうか。

空蟬

暮きに關を

ゆくとかととせきとめ難き涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ心に思ふ歌故源氏は御存じあるまいと思ふとつまらないに、いとかなし。

源氏行山下の迎に

石山より出で給ふ御迎へに、右衛門の佐まゐれり。一日まかり

過ぎ(C)・しかしこまりなど申す。昔わらはは小君といふ童でいていと睦まじうらう

たきものにし給ひしかば、かうぶりなど得しまで、この(おほ)・御

徳(徳)に隠れたりしを、覺えぬ世のさわぎありし頃、物の聞えに憚

りて、常陸にくだりしをぞす源氏に今迄多少恨んで居られたがこし御心おきて年頃はおぼしけれ

ど、顔色色にもいだし給はず。昔のやうにこそあらねど、なほ親し

き家人のうちにはかぞ(すま)へ給ひけり。紀の守といひしも今は河

内の守にぞなりにける。その弟の右近(右)の尉(ぞう)とけて御供にくだ

りしをぞ取りわきてなし出で給ひければ、それにぞ誰も思ひ知

りて、なごてすこしも世に隨ふ心をつかひけむ、など思ひ出で

ける。佐召寄せて御消息あり。今はおぼし忘れぬべきことを、

心ながくもおはするかな、と思ひ居たり。源文源氏「一日は契り知られ

わくらばにの歌 たましく行き
逢つて頼もしく思つたもの
對面も出來ず何の甲斐もありま
せんでせね
年頃のとだえも あまり長く無
沙汰して手紙をあげるのもきま
りかゝるは、心には始終思ひ續
けつて居る、遠い昔の事です。今
の事、やうに思はれる程です。今
すき／＼しう好色めかしくて
し。層憎まれるでせう。河内本惡

昔にはすこし源氏は昔よりは
すこしは私を疎んじて居られよ
うかと心配してゐましたが、相
變らずの懐しい御心であられる
のが一入ありがたい事です。

珍らしきにや 源氏の手紙が珍
らしく思はれて返事せずには居
られなかつたのか。私との對面は
逢坂の對面なので、かう繁き
敷の中を往來しなければならな
いでせう。君と私とを共に忘
れ得ぬ種として君に思ひ込まれ
て居つた女故。

しを、さはあぼし知りけむや。(め)

源氏 行き會ふ路に近江路を
わくらばにゆきあふみちを頼みしも猶かひなしや潮ならぬ海

關守の、さも羨しく、めざましかりしかな」とあり。年頃の

とだえもうひくしくなりにけれど、心にはいつとなく只今の

心地するならひになむ。すき／＼しういとど憎まれむや」と

て賜へれば、忝くてもていきて、なほ聞え給へ。(何かは昔の

・ヤ・にもあらす) 昔にはすこしおぼしにく事・あらむと思ひ給ふるに、

同じやうなる御心・のなつかしさなむいとどありがたき。すさ

びごとぞようなき・事と思へど、えこそすくよかに聞えかへさ

ね。女にては負け聞え給へらむに、罪許されぬべし」などいふ。

今はましていと恥かしう、よろづの事うひくしき心地すれど、

珍らしきにや、え忍ばれざりけむ。

「逢坂の關やいかなる關なれば繁きなげきの中を分くらむ

夢のやうになむ」と聞えたり。あはれもつらさも、忘・れぬふ

常陸の守 常陸は親王が大守として任ぜられる國故、正しくは介といふべきであるが、俗には斯くいふ。
子ども 紀伊守や、右近將監など。

命の限りあるものなれば 以下常陸介の心中。
この人 空蟬の爲にわが魂を死後に残しておきたいものだ。

心にえとどめぬものにて 命といふものは思ふやうに止められぬもので。
暫しこそ 當座の間こそ子供達も、父上があんなに仰しやつたものをなどと情ありがほするけれども。

しとおぼしおかれたる人なれば、折々はなほ宣ひ動かしけり。
空蟬をそのかされた

かかる程に、この常陸の守、老のつもりにや、惱ましうのみし

て物心細かりければ、子どもに、只この君の御事をのみいひお

きて、常陸よろづの事、只この御心にのみまかせて、わがありつ

る世に變らで仕うまつれ」とのみ明けくれいひけり。女君、心

憂き宿世ありて、この人にさへおかれて、いかなるさまにはふ

れ惑ふべきにかあらむ、と思ひ歎き給ふを見るに、命の限りあ

るものなれば、惜しみとどむべきかたなし、いかでかこの人の

と、うしろめたう悲しき事にいひ思へど、心にえとどめぬもの

にて、亡せぬ。暫しこそ、「さ宜ひしものを」などなさけづく

れど、うはべこそあれ、つらき事多かり。とあるもかか

るも世のことわりなれば、身一つの憂き事にて歎きあかし暮す。

只この河内の守のみ、昔よりすき心ありて、すこしなさけが

いとあさましき心繼母に戀する如き大それた料簡。憂き宿世ある身にて 自分は不遇な身の上で。

ある人々 附添ふ女房達。

あいなのつまらぬ賢女ぶりをしたものだなどと世間で評判してゐるやうだ。

ける。河内あはれに宣ひおきしを、つまらぬ私ですが數ならずとも、お(も)ぼし疎ま
で(何事を)・宣はせよ」など、追つゐるそうし寄りて、いとあさまし
き心(ほ)・の見えければ、空疎の心憂き宿世ある身にて、かく生きとまり
て、はてくは珍らしき事どもを聞き添ふるかな、と人知れず
思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、河内守尼になりにけり。ある
人々(も)、いふかひなしと思ひ歎く。守もいとつらう、河内あなれ
を厭ひ給ふ程に、残りの御よはひは多く物し給ふらむ、いかで
か過ぐし給ふべき」などぞ。あいな(も)のさかしらやなどぞ侍るめ
る。

前齋宮 六條御息所の女で秋好(あきこのむ)と申す。御年二十

二。中宮 藤壺は賢木卷に入道して薄雲女院と申したが、今も昔の儘に中宮と申すのである。中宮がこの入内に同意の事は浮標卷の末にあつた。

大源院 源氏。源氏朱雀院の御耳にはひるのを御心のあつた事も浮標の末にあつた。

親めき聞え給ふ 親代りになつてお世話申される。

御せうそこなど 以前から齋宮へ御消なども絶えて居つたのだ

うちみだりの箱 巾箱の事。もと櫛笥に添へた手拭入であつた

れるやうになつた。百歩のほかを 薫衣香。遠くまで匂ふ

意。名香に百歩香(ハクブネウ)があるからそれをきかしてある

わざとがまし ありあはせでなく、特に調製されたやうに見える

殿も その贈物が届いた時は丁度源氏も来合はせて居られた時

女別當 齋宮の女官。髮梳用の差櫛 髪に飾る櫛で、髮梳用の

心葉 飾花。

秋好 冷泉院の女御に人内の事。藤壺 前齋宮の御参りのこと、中宮の御心に入れて催し聞え給ふ。こ

に渡し奉らむことをも、このたびはおぼしとまりて、只知らず

がほにもてなし給へれど、大方の事どもは、取りもちて親めき

聞え給ふ。院はいと口惜しく思召せど、人わろければ、御せう

そこなど・絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそ

ども、御櫛の箱、うちみだりの箱、香壺・の箱ども世の

常ならず。くさくの御たきものども、くぬえかうまたなきさ

まに、百歩のほかを多く過ぎ匂ふまで、心殊にととのへさせた

まへり。おとど見給ひもせむにと、かねてよりやおぼし設け

む。いとわざとがましかめり。殿も渡り給へるほどにて、かく

なむと女別當御覽ぜさす。只御櫛の箱の片つ方を見給ふに、盡

きせずこまかになまめきて、珍らしきさまなり。差櫛の箱の心

葉

花

飾

花

飾

別路にの御歌 伊勢下向の折に
 再び京に歸り給ふなといつて別
 實の御櫛をさしてあげた言葉は口
 を止めて神があなたと私との仲
 をだててなさるのか。
 わが御心ならひの 無理な戀へ
 熱中する自分の生憎な癖を考へ
 かのくんだり給ひし 賢木卷三九
 七百參照。
 かう年經て、かく數年後に齋宮
 が歸京して、朱雀院の戀も遂げ
 られる時になつて、かうした齋
 齋のある事を院が何と思召すだ
 らう。

我になりて 我身になつて考へ
 て見ても心の動搖しさうな事だ
 と、源氏はそれからそれへと考
 へて見るとお氣の毒で。

つらしとも 源氏が朱雀院に對
 して。

この御返りは 源氏が女別當を
 以て齋宮に申す詞。この御返歌
 はどんな風になさるお積りでせ
 う。この御歌以外に院からお手
 紙はなかつたか。

葉に、

別路朱雀院に添へし小櫛をかごとにて遙けきなかと神やいさめし
 ちとどこれを御覽じつけて、おほしめぐらすに、いと忝院に對してくいと
 ほしくて、わが御心ならひのあやにくなる身をつみて、かのく
 だり給ひしほど、御心院のにおもほしけむ事、かう年經て歸り給ひ
 てその志御をもとげ給ふべき程に、かかるたがひ目のあるを、
 いか院の御心にに思すらむ、御位帝位を退き閑散な御身分故を去り物しづかにて、世を恨めしとやあ
 ぼすらむなど、我になりて心動くべきふしかな、とおぼしつ
 づけ給ふに、いとほしく、何に斯くあながちなる事を思ひはじ
 めて、心苦朱雀院をしくおぼし惱ますらむ、つらしとも思ひ聞えしかど、
 又なつかしくあはれなる御心院のばへを、など思ひ亂れ給ひて、と
 ばかりうちながめ給へり。源源この御返りは、いかやうにか聞え
 させ給ふらむ。又御せうそこもいかか「など聞え給へど、いと
 傍痛ければ、御文院からの御文はえう取出さないはえ引き出でず。宮齋宮はなやましげにおぼして、

いとあるまじき御返事なさらぬは宜しからぬ事です。

古へ 伊勢下向の當時。

故御息所 御母六條御息所。

わかるとての歌 お別の際に、
再び歸京するなと仰せられた御
詞も、その折は祝の言葉とばかり
つらき今になつてしまふ、悲しき
を味はつてゐます。(賢木卷三九
七頁参照)
御返りまいと この御返歌を見
たくお思ひになるけれども、さ
うとはえう仰しやらない。
齋宮二十 朱雀院三十四
かく引きたがへ かういふや
に捻ぢまげたがへは縁組をさ
せる事を、齋宮が内心不快に思
ひはせぬか、氣をまはさ
ぬでもいふ事までも氣をまはさ
まはして、心配なさるが。

繪 合

御返りいと物うくし給へど、「聞え給はざらむもいとなさけなく

忝かるべし」と、人々女房達そのかし煩ひ聞ゆるけはひを聞き給ひ

て、形式だけ「いとあるまじき御事なり。しるしばかり聞えさせ給へ」

と聞え給ふも、いと・恥(ど) 齋宮の心にかしけれど、古へ・おぼし出づるに、

いと院の御さまなまめき清らにて、いみじう泣き給ひし御さまを、そこは

かとなくあはれと見奉り給ひし御を齋宮のさな心(地)も、只今の事とお

ぼゆるに、故御息所の御事なども、かきつらねあはれにおぼさ

れて、ただ斯く、

わかるとて遙にいひしひとこともかへりて物は今ぞ悲しき

とばかりやありけむ。(御)御使の祿しなく、に賜はず。源氏おとどは

御返をいとゆかしうおぼせど、え聞え給はず。朱雀院院の御有様は、

女女であつて院を見奉つたならどなたに美しく見えるだらうの義 齋宮も不都合ではないにて見奉らまほしきを、この御けはひも似げなからず、いと

よき御あはひなめるを、冷泉院うちはまだいといはけなくおはします

めるに、かく引きたがへ聞ゆるを、人知れず物しとやおぼすら

程よりは お年に比しては大層 氣轉がきいて 大人らしくいらせられた。 氣のおける方。 齋宮が年長であるからいふ。

いとまかしと 大變興味をおひ きになつた。

弘徽殿 權中納言(昔の頭中將)と四君との間の姫君。一九七頁系圖参照。 御覽じつつけたれば 主上は弘徽殿とは既にお馴染になつていら せられるので。

權中納言 弘徽殿の御父。昔の頭中將。

院には 朱雀院は齋宮からの一別るとして云々の返歌を御覽になつたにつけても齋宮を諦め つた。 おしまひになる事は困難であ

程よりは はいみじうされおとなび給へり。 宮も、「かく恥かしき人 中宮藤登 參り給ふを、御心づかひして見え奉らせ給へ」と聞え給ひけり。 冷泉院に

人知れず、大人は恥かしうやあらむ、とおぼしけるを、いたく 冷泉御心 夜ふけてまうのぼり給へり。 齋宮が いとつつましげにおほどかにて、 齋宮のさま

しけり。弘徽殿には御覽じつつけたれば、むつまじうあはれに心 冷泉御心 ささやかにあえかなるけはひのし給へれば、いとまかしとおぼ 小柄で華奢な様子

やすくおもほし、これは人ざまもいたうしめり恥かしげに、 齋宮 とどの御もてなしも、やんごとなくよそほしければ、あなづり 落着いて氣のおける上 油斷が出来ないやうに 弘徽殿と齋宮と にくくおぼされて、御宿直などは、ひとしくし給へど、うちと

けたる御わらは遊びに、晝など渡らせ給ふことはあなたがちに 弘徽殿女御の御方がち あはします。權中納言は、思ふ心ありて聞え給ひけるに、かく 後には后にも心ざして入内させたのに

參り給ひて、御むすめにきしろふさまにてさぶらひ給ふを、 齋宮が入内して たぐに安からずおぼすべし。 何か

院には、かの櫛の箱の御返り御覽ぜしにつけても、 いとど 御心

立てて 好きといふ事を標榜して。
二なく 二人となく上手に。

添ひ臥して 前屈の姿勢で。
とかく筆うちやすらひ 繪の趣向を考案してゐるさま。
ありしよりけに 今迄より一段御愛情が深まつた由を権中納言が聞かれて。
飽くまで 飽くまで新で圭角があつて負けざらひで新らしいがりの御性質故。
いみじう戒めて 人にけどられないやうに嚴戒を加へて。
物語繪 物語中の人物事件等を繪にかいたもの。

捨てじ、とぞ待ち過ぐし給ふ。二所の御覺えども、とりぐに
いどみ給へり。

冷泉院

うへは、よろづの事にすぐれて繪を興あるものにおぼしたり。

立てて好ませ給へばにや、二なく書かせ給ふ。齋宮の女御、い

とをかしう書かせ給ひければ、これに御心うつりて、渡らせ給

ひつつ書きかよはせ給ふ。殿上の若き人々も、この事まねぶを

ば御心とどめてをかしきものにおもほしたれば、ましてをか

げなる人の、心ばへあるさまにまほならず書きすさび、なまめ

かしう添ひ臥して、とかく筆うちやすらひ給へる・さま・らう

たげさに御心・しみて、いと繁う渡らせ給ひて、ありしよりけ

に御思ひまされるを、権中納言聞き給ひて、飽くまでかどく

しく今めき給へる御心にて、われ人に劣りなむや、と思ひ勵み

て、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじう戒めて、又

なきさまなる繪どもを、二なき紙どもに書き集めさせ給ふ。権中「物

主上の
題あるさまに書き流し
秋好
冷泉院の愛情が盛んに
繪をかく事
美しい齋宮が
昔の頭中將
齋宮の御方に
権中納言の性格
負けぬ氣を出して

月次の繪 年中毎月の行事を主題とした繪。

心やすくも 權中納言は容易に取出して主上にお目にはかけず秘密にして主上が齋宮の御方持參なさうとするのを惜しんで獨占して居られるの

古代の 古風な御繪が手許にございますからこれを差上げませ殿 二條院。

女君 紫上。

長恨歌 長恨歌や王昭君などを主題とした繪は。王昭君の事は四四頁参照。事のいみあるは縁起のわるい事を書いた繪は今回は奉るまい。かの旅の御日記の箱をも取出して。

語繪こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」とて、面白く心極味ばへある限りをえりつつ書かせ給ふ。例の月次つきなみの繪も、見馴れ見ある物語繪のみを選択して

ぬさまに言の葉を書きつづけて御覽冷泉院にせさせ給ふ。わざとをかし念を入れて面白くかいてあるので

うしたれば、又こなたにてもこれを御覽するに、心やすくも取主上が弘徽殿方で

り出で給はず、いといたく秘めて、この御方齋宮の御方にもて渡らせ給ふ

を・惜しみ源氏らうじ給へば、おとど聞き給ひて、源源なほ權中納言

の御心の若々しさこそ改まりがたか昔の儘に「めれ」など笑ひ給ふ。源源あ

ながちに隠して、心やすくも御覽主上にせさせず惱まし聞ゆる、いと

めけしからぬざましや。古代の御繪更どもの侍る、參らせむ更に只今の上手

どもに劣らぬすこし侍らむも」と奏し給ひて、殿に舊もき・新しき

・繪ども入りたる御厨子みづしども開かせ給ひて、女君と諸共に、今

めかしきはそれくとえり整へさせ給ふ。「長恨歌、王昭君など

やらの・繪は、面白くあはれなれど、事のいみ思あるは、こ・たの

みひは奉らじ」とえりとどめ給ふ。かの旅の御日記にきの箱をも取り

知らずに見む人だに事情を知らず今初めて見る人でも。

獨居ての歌 一人京に居残つても物思ひ沈んで居つたが、それよりも須臾に下つて蟹生活の繪でも書いて心を慰めて居る方が宜しうございました。「かた」は形に涙をきかしてある。

うきめ見しの歌 此の繪を見ると、今日は又過去に立返つて、つらい目を見た當時よりも多く涙が流れます。「かた」は方に湯がひやかしてある。また涙に波をひやかして「かへる」の縁語としたものである。「うきめ」に海布がきかしてある。露骨にあらずがに戀生活の露骨にあらずがに明石の家などは含まれた景色の圖をといふ意。

繪 合

いさせ給ひて、このついでにぞ女君（葉上）にも見せ奉り給ひける。
・・・知らで今見む人だに、すこし物思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたくその世の夢をおぼしさます折なき御心（源氏と葉上との）どもには、取りかへし悲しうおぼしいでらる。
今まで見せ給はざりける恨みをぞ聞え給ひける。
（葉上）

「獨居てながめしよりは蟹の住むかたをかきてぞ見るべかりける（葉上）さうすれば頼りない氣持は紛れたでせうに
おほつかなさ（葉上）は慰みなましものを」と宣ふ。いとあはれとおぼして、

源氏
うきめ見し其折よりも今日は又過ぎにしかたにかへる涙か
この繪日記は藤壺にたけはお目につけなければならぬものだ
中宮ばかりには見せ奉るべきものなり。かたはなるまじき一帖
内容の見苦しからぬ縁に關係のない
づつ、さすがに浦々の有様さやかに見えたるをえり給ふついで
にも、かの明石の家居ぞまづいかにとおぼしやらぬ時の間もなき。
かゝる繪ども集めらると聞き給ひて、權中納言いとど心をつくし
氣を採んで

軸 繪卷物の心木。
表紙 卷物の。

節會どものひまなれば 正月の節會は過ぎ、四月の祭までは少暇がある。

此方彼方 弘徽殿方と齋宮方と。さま／＼繪が種々あつたといふ意味ではない。兩家それ／＼にの意。
梅壺の御方 齋宮女御の事。梅壺は源花合ともいひ、宮中五舎の一。

よしあるかぎり 趣味を解した者ばかりが集まつて。

捨てがたく お好きでいらせられる道の事として、世を捨てても、こればかりは捨てかねて、御勤行も懈怠しいく御覽になる。

て、軸、表紙、紐巻物の紐の飾り、いよく整へ給ふ。三月まひの十日のほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、物面白き折なるに、うちわたりもさるべき節會どものひまなれば、只かやうの兼中造事どもにて御かた／＼暮し給ふを、同じくは、御覽じどころもまさりぬべくて奉らむの御心つきて、いとわざと集め參らせ給へり。此方彼方・とさま／＼・多かり。物語繪は、こまやかに上品でなつかしきさまさるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語・、名高く故あるかぎり、弘徽殿は、その頃世に珍らしくをかしき限りをえりて、かかせ給へれば、一寸見の當世風な花やかさの點は弘徽殿の方がまさつて居る。うち見る目の今めかしき花やかさは、いとこよなくまされり。主上附の女房うへの女房なども、よしあるかぎり、「これはかれは」など定めあへるを、此頃の事にすめり。繪の巧拙を中宮も禁中にまゐらせ給へる頃にて、かた／＼御覽じて、捨てがたくおもほす事なれば、御行ひも怠りつつ御覽ず。この人々・と女房達り／＼に論ずるを聞召して、ひだり右と方わかたせ給ふ。梅壺齋宮

平内侍のすけ 以下六人は皆主上附の女房。

有職 物識り。

竹取の翁に 竹取物語の翁の繪と宇津保物語の俊蔭の繪とを番はせて優劣を争ふ。竹取物語はふる物語で、誰も見ふるしてゐるから、興あるふしもないが、志操を高く通に思ひのぼれる目ざした宿縁持して遠く月界を目ざした宿縁は高遠で、神代の昔話故、今の世の淺墓な女には目も及ばぬ事でせう。

一つ家の 成程我家一軒の内だけはあかるくした事でせうが、百敷の主上の事を御光といひそれに並ばずとは后妃とはならなかつた事。竹取物語に「安倍なあへなし」を含めて「あへなし」とある。それを此處に用ひたのである。誠の蓬萊の 誠の蓬萊山中に深く分け入れとは姫に深い心あつたの難題とは知りながら、

の御方左方には平内侍平内侍のすけ、侍従の内侍、少將の命婦、右には大弘敷殿方貳の内侍のすけ、中將の命婦、兵衛の命婦を、只今は心にくき有職中宮どもにて、心々に争ふ口つきどもをかしと聞召して、まづ物語のいできはじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて争ふ。年梅燈方の自撰の詞なよ竹の世々にふりにけること、をかしきふしもなけれど、かぐや姫の、この世の濁りにもけがれず遙に思ひのぼれる契り高く、神・世現世のことなめれば、あさはかなる女、目・及ばぬならむかし」といふ。右は、私私敷殿方敷殿方は、げに及ばぬ事なれば誰も知りがたし。この世の契りは竹のなかに結びければ、くたれる人の事とこそ見ゆめれ。一つ家の内・は照しけめど、百敷のかしこき御光には並ばずなりにけり。安倍のおほしが、千々千金を投じて火鼠の姿を買つた切なる思ひのこがねを捨てて、火鼠の思ひ、片時に消えたるもいとあへなし。車持の皇子の誠の蓬萊の深き心も知りながら、偽りて、玉の枝えだに環きずをつけたるをあやまちと

繪は巨勢の相覽竹取物語の。巨勢の相覽 金岡の子。讃岐少目從八位下。錦に似て薄いもの。かむはた。錦に似て薄いもの。

唐土實は波斯國であるけれども、それを唐土の名で代用したラだらうといふ。波斯國は今のスマトラ

常則須磨卷三七頁參照。道風醍醐朱雀村上の三朝に歴任し、書道の名手である。佐理行成と共に三蹟と稱せらる。左梅壺方にはこの反駁が出なくて負けた。正三位今傳らぬ。今ある正三位は岩清水物語と同じ。

伊勢の海の歌伊勢物語の奥儀も詮議もせず、舊い小説だとけなし去るべきものでせうか。心には水底の意があつて、海の縁語。

なす。繪は巨勢の相覽あふみ、手は紀の貫之書けり。かんや紙紙屋紙に唐の綺きを裏打してばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常表裝のよそひなり、俊蔭は、烈しき波風におぼほれ知らぬ國波斯國に放たれしかど、なほさして行きける方の志もかなひて、遂に人異朝のみかどにもわが國にも、ありがたきざえの程を廣め、名を残しける古き心をいふに、繪のさまざま、唐土もちじと日本ひのもととを取り並べて、面白き事どもなほ並びなし」といふ。白料紙はき色紙しきし、青き表紙、黄なる玉の軸なり。繪は常則、手は道風小野氏なれば、今めかしうをかしげに目も輝くまで見ゆ。・左にはそのことわりなし。次に伊勢物語に正三位上をあはせて、又・定めやらす。これも右は面白く賑はしく、うちわたりより・はじめ、近き世の有様を書きたるは、をかしう見どころまさる。・平内左方侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだごと 世間並の色事を繕ひ飾つたつまらぬ物語に歴倒されて

雲のうへへの歌 兵衛の大君が正三位の戀を退けて雲の上を目ざした高い理想心から見ると、伊勢物語にも深意はありませうがそれも遙か低く見下される。雲上と伊勢海とを對比させてあやなした歌。
兵衛の大君 正三位物語中の人物。
みるめこそその歌 伊勢物語は一見見すばらしくもあらうが、古來の名聲をけなし去る事は出来ませぬ。見るめに海松布が、うらぶれに浦がきかしてあり、沈めむは海の縁語。伊勢をの「を」は接尾辭で意味はない。「を」を一巻に盡してそれでも決してかぬてゐる。
死にかへり 死に入る程堪へられぬ事。
うへのも宮のも 主上附の女房も中宮附の女房も。

御前 冷泉院の御前。

なかにも殊なるは 中にも傑作と思ふものはこの繪合には選り残して置かれたのだが。

正三位物語の事
世の常のあだごとの引きつくろひ飾れるにおされて、業平が名をやくたすべき」と、争ひかねたり。右のすけ大貳の内侍のすけ

雲のうへに思ひのぼれる心には千尋の底もはるかにぞ見る

藤壺「兵衛の大君の心高さは、げに捨てがたけれど、在五中將の名

をば・えくたさじ」と宣はせて、宮、

みるめこそうらぶれぬらめ年經にし伊勢をの蜚の名をや沈めむ

かやうの女ごとにて亂りがはしく争ふに、一巻に言の葉をつく

して、えもいひやらす。只あさはかなる若人どもは、死にかへ

りゆかしがれど、うへのも宮のも片端をだに・え見ず、いと

たう秘めさせたまふ。

源氏
おとど参り給ひて、かくとりくくに争ひさわぐ心ばへども、を

かしくおぼして、源「同じくは御前にてこの勝負定めむ」と宣ひ

なりぬ。かかる事もよとかねておぼしければ、なかにも殊なる

はえりとどめ給へるに、かの須磨、明石の二巻は、おぼす所あ

紙繪 絹繪に對す。

今あらため書かむ。今更改めて書くのはつまらない。只持ち合せのものだけを。

又わが御世の朱雀院がわが御治世中の出來事をかき加へさせ給うた卷の中に。大極殿の儀式。齋宮下向の折は大極殿に於て主上御みづから別殿の齋宮の額に加へ給うて、再び京に歸り給ふなど仰せられたる。賢木卷三九七頁にあつた。公茂 金岡の孫、公忠の子。

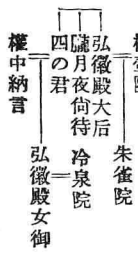
院の殿上にも禁中と院の殿上に兼任して奉仕してゐる。

りて取りませさせ給へりけり。中納言も、その御心劣らず。此頃その敷の中に加へておいたの世には、只かく面白き紙繪をうとこ・・・整ふる事を天の下いとなみ(あひ)・・・たり。源今あらため書かむことは本意なきことなり。只ありけむ(る)限りをこそ」と宣へど、中納言は人にも見せて、わりの部屋を設けて窓をあけてかかせ給ふめるを、院朱雀院にもかかる事聞かせ給ひて、梅壺秋好に(も)御繪ども奉らせ給へり。年その繪のさまの内の節會せらみどもの面白く興あるを、昔の上手どものとりく(と)に書けるに、延喜(えき)の御手づから事その繪の意味をの心かかせ給へるに、又わが御世の事(と)もかかせ給へる卷に、かの齋宮の下りくだ給ひし日の大極殿だいごくでんの儀式、御心にしみておぼし(めし)・・・ければ、かくべきやう委しく仰せられて公茂きんもちが仕うまつれるがいとみじきを、奉梅壺にらせ給へり。艶えんに透透影きたる沈げんの箱に、同じき心葉のさまなど、いと今めかし。御消息は只朱雀からの言葉にて、院の殿上にもさぶらふ左近の中將を御使にてあり。繪の場面である。かの大極殿の御輿寄せたる所のかうくしきに、

身こそかく、身こそ仙洞に居りますが、下向の折の大極殿に於ける心の中は今も忘れませぬ。しめは領有の意。注連がきかしてある。

しめのうちは禁中の有様は朱雀院御在位當時と變つたやうな氣がして、昔の事が戀しく思はれます。

きさいの宮より 朱雀院の御繪は母后弘徽殿太后から妹の四の君を経て弘徽殿女御に傳はつてゐる。



女房のさぶらひに女房の詰所なる臺盤所に主上の玉座を設けさせて。

繪 合

朱雀院 身こそかくしめの外なれそのかみの心の内を忘れしもせずとのみあり。聞え給はざらむもいと忝ければ、苦しくあ。ぼしなから、昔の御かんざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ戀しきとて、標の唐の紙に包みて參らせ給ふ。御使の祿などいとなまめかし。院の御門御覽するに、限りなくあはれとお。ぼすにぞ、御在位の當時 ありし世を取返さまほしくあ。ぼしける。おとどをもつらしと

思ひ聞えさせ給ひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。院の御繪は、きさいの宮より傳はりて、あ的女御の御方にも多く參るべし。内侍のかんの君も、かやうの御好ましさは人に

め。給ふ。すぐれて、をかきさまに取りなしつつ集

その日と定めて、俄なるやうなれど、をかきさまにはかなしなして、ひだり右の御繪どもまゐらせ給ふ。女房のさぶらひ

左は紫檀の箱に一番下に紫地の唐の錦の敷物を敷き、その上に蘇芳木の花足を据ゑ、それを蒲萄染の唐の打敷で覆ひ、その上に繪巻の入つた紫檀の箱を載せたのである。
 卓そく 脚を花形に彫刻した
 襦袢 表は白、裏は赤又は蒲萄染、蒲萄染は薄紫の上に着る服。
 汗衫 表は薄紫、裏は萌黄。
 足結の組 打敷が取れぬやうに打敷の四方にうはざしを、その餘りを四方に垂れて四足に結びつけた組紐。
 柳 表白、裏青、夏は卯の花といふ。
 山吹 表薄朽葉、裏黄なるを山吹といふ。
 花山吹 表黄に裏紅なるを裏山吹といふ。
 前後と 前後二列に並び、装束の色合で左方右方を分けてある。
 帥の宮 螢兵部卿宮。

判 繪合の判者の役。
 四季の繪 四季の行事を主題とした繪で、前に月次の繪とあつた。これは朱雀院が梅壺に「年の内の節會どもの面白く興ある」繪を贈られたそれであらう。

におましよそはせて、北側と南側とに女房達が分れてさぶらふ。殿上人は後涼殿の簀子に、各自思ふ方に最良しながら見物するおの心寄せつつさぶらふ。左は紫檀の箱に蘇芳の・けそく、敷物には紫地の唐の錦、打敷は蒲萄染の唐の綺なり。童六人、上衣の色赤色に櫻襲の汗衫、あこめ袖は紅に藤襲の織物なり。姿用意などなべてならず見ゆ。右は沈の箱に淺香の下机、打敷は青地の高麗の錦、足結の組、花足の心ばへなどいと今めかし。わらは、青色に柳の汗衫、山吹襲の袖・著たり。皆主上の御前にかき立つ。うへの女房・前後とさうぞきわけたり。召しありて内のおとど源氏權中納言源内參り給ふ。その日帥の宮も參り給へり。いとよしありておはするなかに、繪をなむ立てて、好み給へば、源氏が内々帥宮におとどのしたに勧め給へるやうやあらむ、ことし表立つたお召ではなしにしき召しにはあらで、殿上にさぶらひ給ふを、主上の仰せごとありてお前御に參り給ふ。この判仕はんうまつり給ふ。いみじうげに書きつくしたる繪どもあり。更にえ定めやり給はず。例の四季の繪も、いにし

紙繪は限りありて、紙繪といふものはある程度以上には巧にかき得ぬもので。

あな面白と 嗚呼面白と感ぜられる點は却つて古畫よりまさつてゐるから。

朝餉 清涼殿の朝餉の間。

時々さしいらへ 源氏が時々詞を添へられるところは理想的である。
左なほ數一つ もう一番で勝負がすむといふ最後の時に、左方の須磨の繪卷が出て來たので。

への上手どもの、面白き事どもを選びつつ、筆滯らず書き流し興味ある畫題を

たるさま、譬へむ方なしと見るに、紙繪は限りありて、山水の右方

を寫し盡せないのが常故、ゆたかなる心ばへをえ見せ盡さぬものなれば、ただ筆の飾り人右方の紙繪は筆先の技巧や描く

人の構想に修飾されてゐる故、今のあさはかなるも、昔の跡に恥ぢな今時の深みのない繪ではあるが

く賑はしく、あな面白と見ゆる筋はまさりて、多くの争ひど古人の名畫に對しても遜色がな

も、今日はかたんに興ある事どもおほかり。朝餉の御障子をあさかれひ

あけて中宮もおはします。深く知ろしめしたらむと思ふに、中宮が繪の事に精通して居られるからうと思ふので

おとどもいと優におぼえ給ひて、所々の判ども、心もとなき折胸に落ちぬ折

折に、時々さしいらへ給ひけるほど、あらまほし。定めかねてよ

夜に入りぬ。左なほ數一つあるはてに、須磨の卷出で來た右方

るに、中納言の御心さわぎにけり。あなたにも心して、はての名作を

卷・は心殊にすぐれたるをえりおき給へるに、かかるいみじき(七)

物の上手の、心の限り思ひすまして靜かに書き給へるは、譬ふ源氏の事

べきかたなし。みこよりはじめ奉りて、涙とどめ給はず。その帥宮

心苦し懸しと、京に居る人々が
 氣の毒だ悲しい事だと同情した
 よりも、この繪を見ると佗住居
 の有様や御感想などが、今現に
 目前に見て居るやうに感ぜられ
 る。草假名を平假名の所々にまぜて
 書いたもの。

御かはらけなど、源氏が盃を傾
 けられる序に。

此の道 學問の道。

世に心苦し悲しとおぼしし程よりも、おはしけむ有様、御心に
 あ・ばしけむ事ども、只今のやうに見ゆ。（その地の風致）所のさま、おぼつか
 なき浦々、磯の隠れなく書きあらはし給へり。草の手にかな
 の所々に書きまぜて、まほのくはしき日記にはあらず。あはれ
 なる歌などもまじれるたぐひゆかしう、誰も・異事おぼさず。
 さまぐの御繪の興、これに皆移り果てて、あはれに面白し。
 よろづ皆おしゆづりて、左勝つになりぬ。（梅盛方）
 夜明けがた近くなる程に、物いとあはれにおぼされて、御かは
 らけな・ど參るついでに、昔の御物語ども出で来て、（私は幼少時代）私いはけ
 なき程より、學問に心を入れて侍りしに、すこしもざえなど附
 きぬべくや御覽じけむ、院の宜はせしやう、『才學といふもの・
 世にいとおもくするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人
 の、命、幸と並びぬるはいと難きものになむ。（高貴の身分に生れ）品高く生まれ、
 さらでも人に劣るまじき程にて、あながちに此の道な深く習ひ

（善命と幸運と兼備の人）
 それ程でなくとも人に劣らぬ身分では

（世間で重んずる爲か）

（院が）

（梅盛院）

（さいかく）

（は）

（御盃）

（梅盛方）

（須磨の繪日記に）

（私は幼少時代）

（高貴の身分に生れ）

（品高く生まれ）

（習ひ）

太才 政治上の學問。

怪しく「思ふ折々」にかゝる。いかにしてかは、どうしたら満足に行く程に畫けようかと思ふ折々がありました。四方の海の あらゆる海の深遠な趣を實際に見ましたので、精道については氣附かぬ所なく、精通しはしては、この繪日記も、私心よりは、この實際の出来がまづいやに思ひましたが、機會もないのにお目にかけるべきではありませんで、この次に今までは發表しなかつたといふ意味の文が省かれてゐる。心より放ちて 精神(後に「魂」といふ)の「心」と同義)を捨ておいて手先きだけの稽古といふ事はないけれども。

繪 合

『と諫めさせ給ひて、本才のかたゝの物の教へさせ給ひしに、拙き事もなく、又取り立てて此の事と心得る事も侍らざりき。繪かく事のみなむ、怪しく、はかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり書きて見るべきと思ふ折々侍りしを、あほの事えぬ山がつになりて、四方の海の深き心を見しに、更に思ひ寄らぬ隈なくいたられにしかど、筆の行く限りありて、心よりは事ゆかずなむ思ふ給へられしを、ついでなくて、御覽ぜさすべきならねば。かうすきくしきやうなるのちの聞えやあらむ』とみこに申し給へば、帥宮「何のぞえも、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、まねびどころあらむは、事の深さ淺さは知らねど、あつから寫さむに跡ありぬべし。筆執る道と碁打つことと、ぞ怪しう魂のほど見ゆるを。深き勞なく見ゆるおれものも、さるべきにて書きうつ。たぐひも出でく。れど、家の子のなかには、なほ人に抜けぬる人の、何事をも好

さま／＼親王達と内親王とそれなかに大勢の中で故院が特別の御注意を以て源氏に御傳授になり源氏はそれを御習得なさいます以下甲斐があつて、**文才まほ**は文學上の藝能は勿論のこと源氏は文學上の藝能は勿論のこと

一のさえ 第一の技倆で。

まさなき おとなげない。素人がこんななまで書くのはおとなげないの意。この語の次にお書きになるといふ意味の語が省かれてある。
古への 昔の墨繪書きの名匠達も逃げ出してしまひさうな優れた技倆を持つて居られるのは、

こなたはまだ 清凉殿の西廂であるから月影はまださし込まぬのである。
御こと 御彈物。
書司 後宮十二司の一で、後宮の書籍文具樂器等を掌る。
和琴 六絃で、大和琴ともあづまごとともいふ。

み得けるとぞ見えたる。院桐壺院のお前にて、親王達内親王、いづれかはさま／＼とり／＼のさえ習はせ給はざりけむ。そのなかにも、取り立てたる御心に入れて傳へうけと・・らせ給へるかひありて、『**文才**をばさるものにていはず、其他の藝道さらぬ事のなかには、**琴**弾かせ給ふ事なむ一のさえにて、次には横笛、琵琶、箏のこ横笛とを・なむ次々に習ひ給へる』と故院うへもお・ぼし宣はせき。世の人・しか思ひ聞えさせ・たるを、繪はなほ筆のついでにすさびさせ給ふ餘技あだごととこそ思ひ給へしか。いとかうまさなきまで。古への墨書すみかきの上手ども跡をくらうなしつべかめるは、却りてけしからぬわざな・り・と、墨の雑語うち亂れて聞え給ひて、酔つばらつて泣なみにや、院桐壺院の御事聞えいでて、昔うちしほたれ給ひぬ。
 廿餘日の月さしいでて、こなたはまださやかならねど、大方の空をかしき程なるに、ふんのつかさ書司の御こと召出でて、おこさん・・・權中納言・和琴賜はり給ふ。福中納言がさはいへど人にはまさりてかき立て給へり。

上人 殿上人。

拍子賜はず 拍子とる笏を下される。

かさねて賜はり給ふ 繪合の判者を勤めた上に笏を彈じたから。浦々の巻 須磨の繪日記。

かうもてなし聞え 源氏が梅壺に最厚されるので。なほ覺え壓さるべきにやとわが姫君(弘徽殿)の御寵愛が奪はれるのではなからうかと不快にお思ひになる。さるべき節會どもにも 源氏は然るべき節會の折にも、冷泉院の御代に創始されたものであると後人の言ひ傳ふべき新例を作り加へようとお思ひになり。

繪合

帥宮 みて箏の御こと、源氏あとど琴、琵琶は少將の命婦仕うまつる。上

人のなかにすぐれたるを召して拍子賜はず。いみじう面白し。

明け果つるままに、花の色も人の御かたちどももほのかに見えて、鳥の囀る程、心地ゆきめでたき朝ぼらけなり。祿どもは中

宮の御方より賜はず。みこは御ぞ又かさねて賜はり給ふ。

その頃の事には、この繪の定めをし給ふ。酒かの浦々の巻は

中宮にさぶらはせ給へ」と聞えさせ給ひければ、これが初め、

また残りの巻々ゆかしがらせ給へど、酒「今次々に」と聞えさせ

給ふ。うへにも御心ゆかせ給ひて思召したるを、嬉しく見奉り

給ふ。はかなき事につけても、かうもてなし聞え給へば、權

中納言は、なほ覺え壓さるべきにやと、心やましうおぼさるべ

かめり。うへの御志は、もとよりおぼししみにければ、なほこ

まやかにおぼしたるさまを、人知れず見奉り給ひてぞ、頼

もしくさりともおぼされける。さるべき節會どもにも、この

御代 御時よりと末の人のいひ傳ふべき例を添へむとおぼし、私向の殿初の

遊戯も珍らしい趣向に工夫されての斯かるはかなき御遊びも、珍らしきすぢにせさせ給ひて、い

おとぞと感じて。源氏は人生は無常だと感じて。

世を背きなむと 出家してしまはうと。

この御世には今の世に於て、寵遇が身の程に過ぎてゐる。

御堂 嵯峨野の御堂の事は松風巻に見える。二〇九頁。佛經の佛像や經卷の準備をも同時になさるやうだが。

みじき・さかりの御世なり。おとぞどなほ常なきものに世をお

ぼして、今すこしおとなびおはしますと見奉りて、なほ世

を背きなむと深くおもほすべかめる。昔のためしを見聞くにも、

齡足らで官位高くのぼり世に抜けぬ人の、長くはえ保たぬわ

ざなりけり、この御世には、身の程覺え過ぎにけり、中頃なき

へになりて沈みたりし憂へにかはりて、今までもながらふるな

り、今よりのちの榮えは、なほ命うしろめたし、靜かに籠り居

て後の世の事を勤め、かつは齡をも延べむ、とおぼして、山里

ののどかなるを占めて、御堂・造らせ給ふ。佛經のいとなみ

・添へてせさせ給ふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづ

き出だして見むと思召すにぞ、疾く捨て給はむ事は難げなる。

いかにおぼしおきつるにかといと知りがたし。

一體どういふお積りでお寺を建てられるのかと

源氏が

源氏

冷泉院の御成人を見届け申した上で

若年にして

つかさ

流儀の輩

への代儀に

おぼし

おぼし

はとけきやう

幼少な皇子風女達を

を

ひんがしの院 蓬生卷の末に
「二條院いと近き所を造らせ給
ふ」とあつた。政所司など、あるべきさまにしよか
せ給ふ。東の對は明石の御方とおぼしおきてたり。北の對は殊
に廣く造らせ給ひて、假にてもあはれと思して行末かけて契り
頼め給ひし人々つどひ住むべきさまに、隔てしつらはせ給
へるしも、なつかしう見どころありてこまかななり。寢殿はふ
たげ給はず、時々わたり給ふ御すみどころにして、さる方なる
御しつらひどもしおかせ給へり。

隔てしつらひどもしおかせ給へり。寢殿はふ
たげ給はず、時々わたり給ふ御すみどころにして、さる方なる
御しつらひどもしおかせ給へり。

こよなく、自分とは段違ひの尊
い身分の愛人達でさへ、明石に
對する態度のやうに愛するでも
なく、遠のきもなさらぬ源氏の
つれない態度を見て居つては、
却つて餘計に物思をしさうだと
噂に聞いて居るのだもの。

この若君の京に出たならば姫
君のつらよごしに卑しい身分が
舞臺するだらう。

二條院の東院

東院に

ひんがしの院造りたてて、花散里と聞えし、うつろはし給ふ。
西の對渡殿などかけて、政所家司など、あるべきさまにしよか
せ給ふ。東の對は明石の御方とおぼしおきてたり。北の對は殊
に廣く造らせ給ひて、假にてもあはれと思して行末かけて契り
頼め給ひし人々つどひ住むべきさまに、隔てしつらはせ給
へるしも、なつかしう見どころありてこまかななり。寢殿はふ
たげ給はず、時々わたり給ふ御すみどころにして、さる方なる
御しつらひどもしおかせ給へり。

※任事に獲してある

（モ）

休息所としての設備を

明石には御消息絶えず。今はなほのほり給ひぬべき事をば宣へ

明石上

ど、女はなほわが身の程を思ひ知るに、こよなくやんごとなき

際の人々だに、なかく、さてかけ離れぬ御有様のつれなきを見

つつ、物思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりの覺えなり

とてかさし出でまじらひ、この若君の御面伏に、數ならぬ身

の程こそあらはれめ、たまさかに這ひわたり給ふついでを待つ

稀に源氏が見に来られる序をまつて差ふといふ事

で

人笑へにははしたなき事 嘲笑
的となつてきまりのわるい事
はどんなものだらうと。
かかると。 姫君がこんな田
舎に生長して。

ひたすらにも 源氏の招勧めを
一途に恨み退ける事も出来な
い。
なかく 上落はうれしいが、
その心配で却つて。
中務の宮 中務卿親王。

明石入道 六十三
= 明石上 = 源氏
= 明石上 = 源氏
中務宮一父一尼君 二十二

末の世に 晩年になつて思ひも
寄らぬ事が起つて。
俄にまばゆき 急に晴れがまし
く。 人中に出るのはきまりがわる
く。
舊き處尋ねてと 先祖傳來の土
地を探して其處に住まうと思ひ
ついた。

さるべきものは 造作に要する
費用はこちらから送らう。
預かり 留守番。
らうずる人 持主。

事にて、人笑へ(はれ)にははしたなき事、いかにあらむと思ひ亂れて

も、又さりとて、かかる所にておひ出で、人から頼みられないのもかすまへられ給はざ

らむもいとあはれなれば、ひたすらにも、え恨み背かず。人道夫妻親たち

も、げにことわりと思ひ歎くに、なかく、心も盡き果てぬ。昔

母君の御祖父おほち中務の宮と聞えけるがらうじ給ひける所、大井

川のわたりにありけるを、中務宮の子孫その御のちはかく、しう相繼ぐ人も

なくて年頃荒れまどふを思ひ出でて、明石入道夫妻がかの時より傳はりて、宿

守のやうにてある人を呼ひ取りて語らふ。入道が世の中を今はと思

ひ果てて斯かるすまひに沈みそめしかども、末の世に思ひかけ

ぬ事出で来てなむ更に都のすみか求むるを、俄にまばゆき人中

いとはしたなく、田舎じみた氣持も落着くまいから田舎ひにける心地も静かなるまじきを、舊

き處尋ねてとなむ思ひ寄る。さるべきものはあけ渡さむ。京に送らう修理

などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」とい

ふ。預かり、頭「この年頃らうずる人も物し給はず、あやしき藪草敷に

に

靜かなる御希望ならば、其所は御
いとの御希望ならば、其所は御
希望に反しませう。實はかの大
何か御庇護を受けたと思ふ下
臣もあつて。この次に「却て望
ましく思ふ」といふやうな意味
の語が省略されてある。こゝは
河内本によらなければならぬ。

かごかなる習ひにて 閉靜なの
が常ですから。

さるべき物など 相當の代價を
差上げて自分の所有として耕作
して居ます。

つなしにきく づめたい憎た
らしい顔付。ふくれ面して
はちぶきいへば。當方では何も
ここに知るまじ。土地所有の證券。
問題にしようと思はぬ。

なりて侍れば、下屋私にぞ繕ひて宿り侍るを、この春の頃より、

内源氏のおほ殿(大との)の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむいと人げ

さわがしうなりにて侍る。いかめしき御堂ども建てて、多くの

人なむ造り營み侍るめる。靜かなる御本意ならば、それやたが

ひ侍らむ。入道源氏「何か。それもかの殿の御蔭に片掛けてと思ふと

ありて。あのづから追々に内内部のこまなくした手入の事どもはしてむ。まづ急ぎて大

方の事どもを物せよ」といふ。預かり預「みづかららうずる所に侍ら

ねど、外外に管理する人もないからに知り傳へ給ふ人もなければ、かごかなる習ひにて、年

頃隠ろへ侍りつるなり。御庄みさうの田畑はたけなどいふ事(いたづらに)の荒

れ侍りしかば、故民部みまぶの大輔の君に申し賜はりて、さるべき物

など奉りてなむ、らうじ作り侍るを。なんど、そのあたりの貯

へはせぬかと心配しての事どもを危げに思ひて、鬚がちにつなしにくき顔を、鼻な

どうち赤めつつはちぶきいへば、入道今迄通りと思つてゐてくれ「更にその田などやうのこと

は、ここに知るまじ。ただ年頃今迄通りと思つてゐてくれのやうに思ひて物せよ。券けんなど

大體のけはひを 入道が源氏の
 ことを匂はせるやうな口のき
 方をするので。かやうに思ひ
 道が上洛の計畫を寄らむとも
 源氏は御存じなく。源氏が
 著君のさして暮して居る事
 田舎で淋しく暮する事を
 後に人々が姫君の噂する場
 合せたといふ事(謹慎中に)を
 れる所へ。かと心配して居ら
 たり果ててぞ 大井の舊邸の修
 理が出来たあとで。明石上人
 に出る事をいやがつて居るの
 こんな計畫があつたからだ
 氏は合點した。源氏の忍び
 例の忍ぶ道は 源氏の忍び
 ありきにはいつも世話を焼く
 だから。「例の」は本の佛。

あたりをかしうて 大井の邸は
 周囲の景色が宜しくて。

さやうのすまひに さいした住
 居にうつらないではなからう。

はここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年頃と
 どうなつてゐるやら打捨てある
 もかくも尋ね知らぬを、その事も今くはしくしたためむ」など
 いふにも、大殿のけはひをかくれば、煩はしくて、そののち、
 入道から條料を受取つて
 物など多く受取りてなむ急ぎ造りける。かやうに思ひ寄るらむ
 とも知り給はで、のぼらむ事を物憂がるも心得ずおぼし、若君
 のさてつくくと物し給ふを、のちの世に人のいひ傳へむ、今
 一際人わろき。にやとおもほすに、造り果ててぞ、「しかく
 の所をなむ思ひ出でたる」と聞えさせける。人にまじらはむ事
 を苦しげにのみ物するは斯く思ふなりけり、と心得給ふ。口惜
 しからぬ心の用意の程かな、と思しなりぬ。惟光の朝臣、例の
 の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば、遣はして
 さるべきさまに此處彼處の用意などせさせ給ひけり。惟「あたり
 をかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむ侍りける」と聞
 ゆれば、さやうのすまひに、よしなからずはありぬべし、とお
 明石は似合はし

整理しよう

田かりの心に

入道から條料を受取つて

源氏は

京に

明石上人が

源氏の心に

明石権者

ひときは

(ま)ま

源氏が

入道から源氏に

(い)い

源氏が

明石の海岸に似て居る所です

大井に

源

瀧殿 瀧に臨んだ建物。

これは 明石上の邸は。
川づらに 大井の河岸に。

内のしつらひ 室内の設備。

くだし遣はず 明石上を迎への
爲に。のがれがたくて 是非もなく
今はいよく上落と思ふと。

など斯く どうしてこんな物
思をする身に生れついた事かと
かういふ身の上でない人が却つ
て羨しく思はれる。露のか
露の「かゝらぬ」の枕詞。惠の
露のかゝるの意味がひびかしてあ
る。

あひ見て 明石上と顔を合せず
に月日を送るつらさがたまらな
く悲しいので。

氏の心にばす。造らせ給ふ御堂は、大覺寺の南にあたりて、瀧殿の心ば

へなど、劣大覺寺に劣らずらず面白き寺なり。これは川づらに、えもいはぬ松

かけ(せ)に、何無造作に建てたのいたはりもなく建てたる寢殿の事そぎたるさまも、

おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで源お
ぼし兵が寄る。

親しき人々、いみじう忍びてくだし遣はず。明石にのがれがたくて、

今はと思ふ(も)に、年經つる浦を離れなむことあはれに、入道の心

細くて一人とまらむ事を思ひ亂れて、よろづに悲し。すべて、

などかく心づくしになり始めけむ身にかと、露のかからぬたぐ

ひ羨しくおぼゆ。親入道と尼君たちも、かかる御むかひ(こ)にてのぼる幸は、

年頃寝てもさめても願ひわたりし志のかなふと、いと嬉しけれ

ど、あひ見で過ぐさむいぶせさの、堪へがたう悲しければ、夜

晝おもひほれて、おなじ事をのみ、「さらば若君明石権君をば見奉らでは

侍るべきか」といふよりほかの事なく、母君も、いみじうおは

年頃だに今迄さへ夫の入道とは別居して居つたのだから、娘が上洛しては、まして誰を頼りに此の浦に居残らうぞ。

みなれそなれて 古歌「みなれ木のみなれそなれて別れば戀しからむや戀しからじや」もてひがめたる 自分からすねてゐる。

あり果てぬ命を 古今雜下「あり果てぬ命待つまの程ばかり憂き事繁く思はずもがな」若き人々の 京から来た若い女房達で、此の田舎住居を辛氣に思ひ嘆いて居つた人達は。

密する波に 渚に寄せ返る波のさまを見るにつけても。

例の後夜より いつもの後夜の勤行の時刻よりも早く起きて。後夜は二一三頁頭註参照。言はずれどめでたい門出の折故不吉の言葉は漏らすまいとし

れなり。年頃だに同じ庵にもすまずかけ離れつれば、まして誰によりてかはかけとどまらむ。ただあなたに打見る人のあさはかなる語らひに、だに、みなれそなれて別るる程は、ただならざめるを、ましてもてひがめたる頭つき心おきてこそ頼もしげなけれど、又さるかたに、これこそは世を限るべきすみかなめれと、やがては盡きる壽命の最後迄もと思つてあり果てぬ命を限りに思ひて、契りすくし來つるを、には

かに行き離れなむも心細し。若き人々のいふせう思ひ沈みつるは、京へ歸り上るのは嬉しきものから、見捨てがたき濱のさまを、又來て眺める事は出來まい又はえしも歸らじかしと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。(3)秋の頃ほひなれば、物のあはれ取りかさねたる心地して、一語に集まつたやうな氣がしてその日とある曉出發當日の朝方

・、秋風涼しくて、蟲のねも取りあへぬに、明石上のさま海のかたを見いだして居たるに、入道例の後夜より夜深く深う起きて、泣くさま鼻すすりうちして、行ひいましたり。いみじう言忌すれど、誰もくいと忍びがたし。若君はいともく美しげに、入道の心に夜光りけむ玉の心地して、

がたし。若君はいともく美しげに、夜光りけむ玉の心地して、

がたし。若君はいともく美しげに、夜光りけむ玉の心地して、

がたし。若君はいともく美しげに、夜光りけむ玉の心地して、

見馴れて 入道に馴染んで側に引付けておく姫君の心根などを入道自身は、おそろしい程人と違つた我身を厭はしく思ひながら一寸の間も見ずには居られないと。「心ざまなど」は下の「片時見奉らでは」に続く。

行く先老の歌 今別れて京に上り行く姫君の將來の幸福を祈るお目出度い時におさへきれないものは老の涙であつた。

もろとも一の歌 都を出る時はあなたと一緒にしたが、今度は一人で出る旅だから、野路にまごつく事でせう。

かう浮きたる事を こんな不確かな事を當にして一度捨てた都に歸つて行くのも。

いきて又の歌 今別れて行つては、無常な浮世に生きて又いつ二度逢へる事を期待しませう。送りだに せめて私達を見送つて、京まで一緒においで下さい。

姫君を
袖よりほかに放ち聞えざりつるを、見馴れてまつはし給へる心
君の
ざまなど、ゆゆしきまでかく人にたがへる身をいまくしく思
ひながら、片時見奉らではいかでか過ぐさむとすらむと、つづ
みあへず。
「行く先をはるかに祈る別れ路に堪へぬは老の涙なりけり
不吉な涙だ
いともゆゆしや」とて、おしのごひ隠す。尼君、
もろともには都は出できこのたびや獨り野中の道にまどはむ
とて泣き給ふさま、いとことわりなり。こころ契りかはして積
りぬる年月のほどを思へば、かう浮きたる事を頼みて、捨てし
世にかへるも、思へばはかなしや。御かた、
「いきて又あひ見む事をいつとてか限も知らぬ世をば頼まむ
送りだに」とせちに宣へど、かたぐににつけて、えさるまじ
き由をいひつつ、さすがに道の程も、いとうしろめたき氣色
なり。入道、世の中を捨て始めしに、かかる人の國に思ひくんだり侍

入道
度の旅をきかせてある
尼君の心
長い年月
源氏の御志を危むのである
明石上
知らぬ田舎に

契りことに覺え給へば、姫君は格別の因縁ある方とおもはれるから。

見奉らざらむ心惑ひはしづめがたけれど、この身は長く世を捨て

世を照し給ふべき光しるければ、

前「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

「君だちは云々」を修飾する挿入句。

ど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かか

る渚に月日を過ぐし給はむもいと忝う、契りことに覺え給へば、

見奉らざらむ心惑ひはしづめがたけれど、この身は長く世を捨

てし心はンベりき。君だちは、世を照し給ふべき光しるければ、

暫し斯かる山賤の心を亂り給ふばかりの御契りこそはありけめ。

天に生るる人の、あやしき三つの道に歸るらむ一時に思ひなず

らへて、今日長く別れ奉りぬ。命盡きぬと聞召すとも、のちの

事おぼしいとなむな。さらぬ別れに御心動かし給ふな」などい

ひ放つものから、入道臨終の際までけふりともならむゆふべまでは、若君の御

事をなむ、六時の勤めにもなほ心ぎたなくうちませ侍りぬべき」

とて、これにぞうちひそみぬる。御車は數多續(き)けむも所せく、

心澄みはつまじく、聖心がつかぬといふ意に、住みとほせ(明石に)ないといふ意がきかしくこら年を経て、多年此處に住み馴れて。

かの岸に、浮土の彼岸を希求して尼になつた私が、背き捨てた都に又歸つて行く事であるよ。

巖返り 私は幾年この浦に住み馴れて今はかかない浮木(舟)に乗つて都に歸り行く事でせう。「浮木」にあてにもならぬ不確實の意がきかしてある。

まだこまやかなるには、まだ巨細にわたつて十分設備は出来て居らないが、住み馴れたら相當住みつかば、住み馴れたら相當親しき家司である。源氏は親しく召使ふ家令に命じて安着の祝宴を催させた。

いと物がなしくて、入道は、心澄み果つまじくあくがれてながめ居たり。こころ年を経て今更に歸るも、なほ思ひ盡きせず尼君は泣き給ふ。

尼君 かの岸に心寄りにしあま舟のそむきしかたに漕ぎ返るかな御上、御かた、
巖に尼をきかしてある

幾返りゆきかふ秋を過ぐしつ浮木に乗りてわれ歸らむ

順風が吹いたので豫定の日を送へず入浴した思ふかたの風にて、限りける日たがへず入り給ひぬ。人に見咎

められじの心もあれば、道の程もかるらかにしなしたり。家の

家のさま 面白うて、年頃經つる海づらに覺えたれば、所かへたる

心地もせず。昔の事思ひいでられて、あはれなる事おほかり。

造り添へたる廊など故あるさまに、水の流れもをかしうしなし

たり。まだこまやかなるにはあらねど、住みつかばさてもあ

りぬべし。親しき家司に仰せ給ひて、御まうけの事せさせ給ひ

けり。渡り給はむ事は、とかうおぼしたばかり程に日頃經ぬ。

なかく折角上落したのに源氏が来てくれないから却つて。かの御形見の琴源氏が明石から歸洛の折に「琴は又掻きあはす迄の形見に」といつて残しておいた事が明石巻にある。おしたなく人里は離れて油断して、聞く者もなからうと油断してゐたところが松風がきいてきて、まり調子を合はせて吹くのできまりわるく思ふといふ意。

身をかへての歌出家して生れ變つたやうな氣で而も夫に別れて一人歸つて來たこの山里に明石で聞き馴れたやうな松風が吹いてくる。

ふる里に明石で親しくした人達の戀ひしさにたまらないで、明石の鬘の子がおしやべりするお話を調子外れの彈物を誰が聞きわけてくれるでせうか。

かくなむと紫上には、明石上の上洛の事をまだはつきりとは知らせておかなかつたから、他から聞き込まれたはわるいと思つて、お知らせなさつた。

明石上の心
なかく物思ひつづけられて、捨てし家居も戀しうづれく、なれば、かの御形見の琴をかき鳴らす。折のいみじう忍びがたければ、人はなれたるかたに打解けてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君物がなしげにて寄り臥し給へる。起さあがりて、

尼君
身をかへて一人歸れる山里に聞きしに似たる松かぜぞ吹く御かた、

ふる里に見し世の友を戀ひわびて轉ることを誰か分くらむ

かやうに物はかなくて明し暮すに、あとどなかしくしづ心なく

おぼさるれば、人目をもえ憚りあへ給はで渡り給ふを、女君に

は、かくなむとたしかに知らせ奉り給はざりけるを、例の聞き

もやあはせ給ふとて、せうそこ聞え給ふ。桂に見るべき事侍

るを、いさや、心にもあらで程經にけり。とぶらはむといひ

し人さへかのわたり近く來居て待つなれば、心苦しくてなむ。

桂の院紫上は桂の院と大井の邸とを同處と誤り考へて居るのである。

斧の柄さへ二三日の滞在といふのが、斧の柄をすげかへるまでになりはすまいか。待遠い事。述異記「信安郡石室中、晋時樵者王質、途二童子棋、與三質一物、如棗核、食之不飢、置斧于坐、而觀童子曰、汝斧柯爛矣、質歸、鄉閭、無復時人。」

狩の御ぞに明石で狩衣のやつれ姿でおいでなかつた時でさへまだ見たこともない。美しさと明石上は思つたのに。

今まで隔てける今まで明石上には逢はずに居つた年月さへ。大殿腹の君、左大臣の女、奏上の腹に生れた夕霧。

嵯峨野の御堂にも、飾りなき佛の御とぶらひすべければ、二二二日

日は待りなむ」と聞え給ふ。紫上心桂の院といふ所俄に造らせ給ふと

聞くは、そこにすゑ給へるにや、と思すに、心づきなければ、

「斧の柄さへあらため給はむほどや待ちどほに」と、心ゆかぬ

御氣色なり。櫻權が取りにくい例のくらべぐるしき御心かな。「いにしへの有様

名残なし」と世の人もいふなるものを」と、何やかやと御心取

り給ふ程に、日たけぬ。忍びやかに、御前ぜんうときはませで、御

心づかひして渡り給ひぬ。大井へ

たそがれ時におはしつきたり。明石上の心狩の御ぞにやつれ給へりしだに、

世に知らぬ心地せしを、ましてさる御心して引きつくるひ給へ

る御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思明石上は

むせびつる心の闇も晴るるやうなり。源氏の心珍らしうあはれにて、若

君を見給ふも、いかが浅くはおぼされむ。今まで隔てける年月

だに、あさましくくやしきまでおぼす。おほいどのほら大殿腹の君を、美し

なほ時世によれば、畢竟人の心は權勢に附くのが常だから、さう思ふだけなのだ。かくこそは、將來美人となる人の生立は今から一目で分るのだと。「かくこそは」は「しるのかりけれ」につづく。かういふやうにはつきりわかつてゐる。六帖「秋霧の立ちまふ嶺の山口はかねてぞしるきうつるはむとて」

ここにも「渡らむこと」にかゝる。

かの本意ある所 二條院の東

うひくしき程 上落したばかりで所馴れず萬事につつましい當座。

つくろふべき所 大井邸の修理すべき箇所を、その管理人や今度新に加へた家令等に命ずる。

前裁どもの 大井邸の。

げなりと世人もて騒ぐは、なほ時世ときよによれば、人の見なすなりけり、かくこそはすぐれたる人の山口はしるかりけれ、と、うちみたる顔の何心なきが、愛敬づき匂ひたるを、いみじうらうたしとおぼす。乳母の、くだりし程は衰へたりしかたち、ねびまさりて、月頃の御物語など馴れて聞ゆるを、あはれにさる鹽屋のかたはらに過ぐしつらむことを思し宣ふ。源「ここにも、いと里ばなれて、渡らむことも難きを、なほかの本意ある所に移ろひ給へ」と宣へど、明石「いとうひくしき程過ぐして」と聞ゆるも、ことわりなり。夜一夜、よろづに契り語らひあかし給ふ。つくろふべき所、所のあづかり、今加へたる家司けいしなどに仰せらる。桂の院に渡り給ふべしとありければ、近き御庄の人々、參り集まりたりけるも、皆たづねまゐりたり。前裁どもの折れ伏したるなど、つくろはせ給ふ。源「ここかしの立石たていしどもも、皆まろび失せたるを、なさけありてしなさば、をかしかりぬべ

風情あるやうに繕へば

桂の院に

大井邸に

源氏が前に桂の院に行く積りだと仰せられたので

訪ねて来る事も困難故

私の企望してゐる處

源「ここにも、大井の山里にも、

源氏の心

今は

かかる所を 居を念入に手入するの詰らぬ事だ。こんな一時の假住でも過ぐし果てねば 手入した處で此儘いつまでも住むのではないから。この後に「つまらぬ」といふ意の語が省かれてある。立つ時物憂なく 出立の時つらくて心残りするのが、明石から歸洛した時にもつらかつた。「苦しかりき」と過去にいつてある點に注意しなければならぬ。

關伽の具 佛に奉る水を入れる道具。

いとしどけなき姿 源氏が直衣をぬいで桂姿で居る作法を謝するのである。

き所かな。かかる所をわざとつくろふも、あいなきわざなり。さても過ぐし果てねば。立つ時物憂く心とまる、苦しかりき」など、明石にての事きし方の事ども宣ひいでて、泣きみ笑ひみ打解け給へる、いとめでたし。尼君、のぞきて見奉るに、老も忘れ物思ひも晴るる心地して、うちゑみぬ。ちんがし東の渡殿のしたより出づる水の心ばへ、つくろはせ給ふとて、いとなまめかしき桂姿、うちとけ給へるを、いとめでたう嬉しと見奉るに、關伽あかの具などのあるを見給ふに、あほし出でて、源みなも「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣禮儀深いさま召しいでて奉る。尼君の傍へ源氏が几帳のもとに寄り給ひて、源姫君を立派に養育した事「罪かろくあほし立て給へる人の故は、御行ひの程あはれにこそ思ひなし聞ゆれ。いといたく思ひすまし給へりし御すみかを捨てて、憂上流した心の程があったいき世に歸り給へる志あさからず。又かしこには、いかにとまりて思ひあこせ給ふらむと、さまざまになむ」と、いとなつかしう宣ふ。尼こころの事を「捨て侍りし世を、今更に

今頼もしき 今では將來屹度
幸福にならざるものだが、何
お祝ひ申して居るの、どうが、何
分種姓が卑し、あれこれと氣が揉め
事やらと、あれこれと氣が揉め
てなりませぬ。
昔物語に 尼君の祖父折有餘
此處に住んで居られた折有餘
などをお聞きの昔に、尼君に
語らせし歌 昔に、尼君に
住み馴れし歌 昔に、尼君に
自分こそ却つて昔の事を忘れて
たどくしうございませぬ。
も、遺水の方が宿の主人顔を
て昔の事を物語つてゐます。
いひつけさま 自分は王孫など
いふ尊い身分でないといふこと
を忘れた體にございませぬ。
たの者を正面から否定してしまつ
我が者の種姓をくさすとほめた
のである。
小井はの歌 源氏の歌。遺水は
昔の事を忘れる事もあるまい
かとはつて、明石時代の馴染を忘
れて、種姓を打明けても下さら
ないのだらうか。昔は飲用水は
流れのついでに井と井とてゐた。
月ごとの 毎月十四日に行はれ
る普賢講、十五日の阿彌陀講は
晦日の釋迦の念佛の三昧は勿
論の事。

立ちかへり思ひ(結)・・亂るるを、推し量らせ給ひければ、命長さ
のしるしも思ひ給へ知られぬる」と、うち泣きて、尼君の事「荒磯蔭に
心苦しう思ひ聞えさせ侍りし二葉の松も、今は頼もしき御生先
と祝ひ聞えさするを、淺き根ざしゆゑいかかと、かたぐ心
つくされ侍る」など、聞ゆる尼君の様子はひよしなからねば、昔物語に
みこの住み給ひける有様など語らせ給ふに、手人された遺水の音つくろはれたる水
の音なひ、こゝろに昔の姿の變つたのも源氏の爲たといつてをるやうにかことかましう聞ゆ。
住み馴れし人は却りてたどれども清水ぞ宿の主人がほなる
わざとはなくていひつけさま、みやびかによしと聞き給ふ。源氏が
「小井は早くの事も忘れじをもとのあるじや面變りせる
あはれ」と打眺めて立ち給ふ姿匂ひ(を)、世に知らずとのみ思ひ尼君の
心にきこゆ。
嵯峨野の御堂御寺にわたり給ひて、月ごとの十四五日つごもりに・行はるべ
き普賢講、阿彌陀、釋迦の念佛の三昧をばさるものにて、また

めぐらし仰せらる人々に觸れ
まはしとお命じになる。
歸り給ふ御堂から大井邸に。
あり夜の事明石の岡邊の宿
機を逸せず。君が思ひ出される

まだ調べも變らずまだ調子も
あの時の儘であるので。

契りしに昔の約束通りこの琴
の調子が變つて居ない事によつ
て、私の變らぬ心の程が分りま
したか。「絶えぬ」は糸の縁語。

變らじとの歌變らぬとお誓ひ
なされた一言を頼りにして、私
は松風に泣く音を添へて参りま
した。君待ちわびて泣く音を。

隠ろへたる此姫君が日蔭者で
育つのが氣の毒で紫上の子
二條の院に渡して紫上の養子
にしたい意のちの覺えも
のちの覺えも後に入内などす
る折にも卑しい腹の子を差上げ
ると源氏は思ふが。

また加へ行はせ給ふべき事定めおかせ給ふ。堂の飾り、佛の御
具など、めぐらし仰せらる(給うて)。月のあかき(程)に(又)歸り給ふ。あ
氏の心にりし夜の事おぼしいでらるる折過ぐさず、かの琴きんの御ことさし
いでたり。そこはか源氏の心となく物あはれなるに、え忍び給はで掻き
鳴らし給ふ。まだ調べも變らず、引きかへし昔に立返つてその折今の心地し
給ふ。

給ふ。

源氏 契りしに變らぬことのしらべにて絶えぬ心の程(は)を知りきや
明君 女、

變らじと契りしことを頼みにて松松に待の心をの響きに音を添へしかな

と聞えかはしたるも、似源氏に不都合でないのはげなからぬこそは身にあまりたる有様

なめれ。こよ源氏心なうねび明石上のさままさりにけるかたちけはひ、えおもほし

捨つまじう、若君姫君はた盡きもせず見まらるまもられ給ふ。いかに源氏心せまし、

隠ろへたるさまにて生ひ出でむが心苦しう口惜しきを、二條紫上の手許にの

院つれていつてに渡して、心のゆく限りも世話したならばてなさば、のちの覺えも罪まぬか

又思はむ事 明石上が何と思ふかとそれが氣の毒で。

又の日は 翌日は京へお歸りになる豫定だから。
やがてこれより 大井から眞直に歸る積りであつたが。

見ては 此の子を見ずには苦痛でありさうだとは現金な心だ。
いと里遠しや 元眞集「里遠みいかにせよとか斯くのみは暫しも見れば戀しかりむ」
遙に思ひ給へたりつる 遠い明石浦で思ひ歎いて居りました。今手がぬけるやうでは氣の採める事でございます。河内本「思ひ給へたへつる」は本の儘。

松 風

れなむかし、とち(も)・ほせど、又思はむ事いとほしくて、源氏は言ひ出えうち

出しかねて給はで、泪ぐみて見給ふ。姫君はをさなき心地に、すこし恥ぢら

ひたりしが、源氏にやうく打解けて、物いひ笑ひなどしてむつれ給

ふを見るままに、匂ひまさりてうつくし。源氏が姫君を抱きておはするさま、

見るかひありて、姫君の幸福は此上もない宿世こよなしと見えたり。

又の日は京へ歸らせ給ふべければ、すこし大殿籠り過(ご)して、

やがてこれより出で給ふべきを、源氏がゐられるかと思つて桂の院に人々多く参りつどひ

て。大井ここにも殿上人あまた参りたり。源氏は御装束などし給ひて、誰にも見つけられない隠家だと思つて居つたに「い

とはしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」

とて、さわがしきに引かれて出で給ふ。明石上に氣の毒故心苦しければ、さりげ

なく紛らはして、立ちとまり給へる戸口に、乳母、若君いだし

てさし出でたり。源氏のさまあはれなる御氣色にかき撫で給(たま)ひて、源「見で

はいと苦しかりぬべきこそいとうちつけなれ。いかがすべき。

いと里遠しや」と宣へば、乳母「遙に思ひ給へたりつる年頃よりも、

いづら さあ。促がす言葉。
さらばこそ さうして貰へば一人前の氣持もしように。

なか／＼ 逢つて見ると却つて。
あまり上衆めか しとあまり上衆らしい態度だと源氏はお思ひになつた。

帷子引きやりて 源氏は几帳の垂布を引きかけてこま／＼と話しして歸りかけて。
さこそしづめつれ 明石上は先刻まであれ程落着いて動かなかつたのだが。

今からの御もてなしの覺東なう侍らむは心づくしに」など聞ゆ。若君手をさしいでて、源氏の立ち給へるを慕ひ給へば、源氏はつゐる給ひて、源「怪しう物思ひ絶えぬ身にこそありけれ。しばしにても苦しや。いづら。なぜ姫君と一緒に見送つて別れを惜んでは下さらぬなどもろともに出でては惜しみ給はぬ。さらばこそ人心地もせめ」と宣へば、乳母がうち笑ひて、明石上に女君に斯くなむと聞ゆ。
明石上のさまなか／＼物思ひ亂れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めか じやうずしとおぼしたり。女房達も源氏の手前をわがるから人々も傍痛がれば、明石上はしぶ／＼にゐざり出でて、几帳にはたかくれたるかたはらめ、いみじうなまめいて、よしあり かたびらをやぎたるけはひ、内親王達といつてもよい位であるみこたちといはむにも足りぬべし。帷子引きやりて、あゆこまやかに語らひ出で給ふとて、とばかりかへり見給へるに、さこそしづめつれ、見送り聞ゆ。
源氏のさまいはむ方なき盛りの御かたちなり。背がすなりとしてゐられたがいたうそびやぎ給へりしが、縦横が釣合ふ程にすこしなりあふ程になり給ひにけり。(さ)御姿など、かくてこそ物物しかりけれと、御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ

あながちなる 強ひて見る慾目
であらう。

靱負の尉にて 衛門尉を兼任し
て今年従五位下に叙せられた。

御佩刀 源氏の御佩刀を。

人影を見つけて 明石で見知つ
て居つた女房を見つけて。

浦風覺え侍る 明石の浦風に似
てゐるやうな大井の曉の寢覺の
折にも 御消息申上げるつてき
へなく。 氣色ばむを 意味ありげにいふ

鳥隠れ 古今集の例の「ほのぼ
のと明石の浦の朝霧に鳥かくれ

ゆる舟をしぞおもふ」の歌。 松も昔の
知る人にせむ 古今雜上「誰をかも

ならなくに」 高砂の松も昔の友

こよなしや これは飛んでもな
い事をいふ。 靱負尉は嘗て明石

上を戀した事があるからその意

味でいつたのに、女房はそれ

自分の事と心得て返事したから

うちけざやぎて はつきりした
態度で。 未練氣なしの意。

出づるぞ、あながちなる見なしなるべき。かの解けたりし藏人復讐した

もかへりなりにけり。靱負ゆげひの尉じようにて、今年叙爵かうぶり得てけり。

昔にあらため、心地よげにて、御佩刀はかし取りに寄り來たり。人影

を見つけて、靱負あきし方あの物忘れし侍らねど、かしこければ、え

こそ。浦風覺え侍るさの曉のねざめにも、驚かし聞えさすべきよ

すがだになくて」と氣色ばむを、女房大井の事八重立つ山は、更に鳥隠れ

にも劣らざりけるを、松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人も

物し給ひけるに、頼もしな・・・」などいふ。こよなしや、我も

思ふひ・なきにしもあらざりしを、など、あさましうおぼゆれど、

「今殊更又改めてお助けしますに」と、うちけざやぎて參りぬ。いとよそほしくさし

歩み給ふほど、かしがましう追ひ拂ひて、御車の尻に頭中將、

兵衛督乗せ給ふ。源源氏がいとかる大井邸の事しき隠れが、見あらはされぬ

るこそねたう」と、いたうからがり給ふ。頭中將頭中將よべの月に、口

惜しう御供におくれ侍りにけると思ひ給へられしかば、今朝、

小鷹に小鷹狩をして居つたの
ですが。小鷹は、はやぶさ、は
いたか、このり、つみ等小形鷹
類の總稱。

海人のさへづり 須磨卷五〇
頁。

酔ひにまぎれて 人々は酔ひの
爲に諸事を忘れて終日遊び暮さ
れた。

彈物 絃樂器。

うへにさぶらひけるをこの四
五人は主上の御前に伺候して居
たのだが。

霧をわけてまゐり侍(三)。山の錦はまだしう侍りけり。野邊の
花さかりですこそさかりに侍りけれ。なにかしの朝臣の、小鷹か、つてゐてにかかづら
ひて、立ちおくれ侍りぬる、いかがなりぬらむ」などいふ。「今
日はなほ桂殿桂殿で遊ぼうに」とて、そなたさまにおはしましぬ。俄急な御馳走に驚きなる御
立立てあるじしさわぎで、鶺鴒鶺鴒ども召したるに、海人のさへづりおぼ
し出でらる。野昨夜姫籠野に泊った人々にとまりぬる君たち、小鳥しるしばかり引きつ
けさせたる萩をぎの枝など、つとにして參れり。大御酒おほみきあまたたび
ずん流順ぐりに飲んでれて、川のわたりあやふげなれど、酔ひにまぎれておは
しまし暮しつ。おのく絶句ぜなど作りわたして、月花やかにさ
しいづる程に大御遊おほみあそび始まりて、いと今めかし。彈物ひきもの(ほ)・琵琶、
和琴わごんばかり、笛(七)ども上手の限りして、折にあひたる調子吹き立
つるほど、川風(八)・吹(九)きあはせて面白きに、月高くさしあがり、
よろづの事澄める夜のやや更くる程に、殿上人四五人ばかりつ
れてまゐれり。うへにさぶらひけるを、御遊びありけるついで

いとま聞えし お約束の暇乞の
日限が過ぎたので。二一六頁に
「二三日は侍りなむ」とあつた。

例の心解けず 紫上の様子が例
の如く不機嫌さうに見えるが。
なずらひならぬ 比較にもならぬ
卑し、明石上を、御自分と比
べてお考へになるのはよくない
事です。

そば目こまやかに わきから瞥
見するに、こま／＼と認めて居
られるらしい。
御達など 紫上の女房達は。

解けざりつる 直らなかつた紫
上の機嫌取りに。

風の吹きおほふかと思ゆ。ののしりて歸らせ給ふ響きを、大井
には物隔てて聞きて、名残淋しうながめ給ふ。御消息をだにせ
に歸るのかと源氏も気がかりに思召した。
と、と おととも御心にかかれり。

殿におはして、とばかり打休み給ふ。山里の御物語など聞え

給ふ。酒いとま聞えし程・過ぎつれば、いと苦しうこそ。この

すきものどもの尋ね来て、いといたう強ひとどめしに引かされ

て、今朝はいとなやまし」とて、大殿籠れり。例の心解けず見

え給へど、見知らぬやうにて、酒「なずらひならぬ程を、おぼし

くらぶるも、わろきわざなめり。我は我と思ひなし給へ」と教

へ聞き給ふ。暮れかかるほどに、うちに參り給ふに、引きそば

めて急ぎ書き給ふは、かしてへなめり。そば目こまやかに見ゆ。

うちささめきして遣はすを、御達など憎み聞ゆ。その夜はうちに

もさぶらひ給ふべけれど、解けざりつる御氣色取りに、夜更け

ぬれどまかで給ひぬ。ありつる御返りもてまぬれり。え引き隠

・明石上の方

明石上に宿息をさへ遣さず

（ひこ）

例の（ひ）

明石上の事

（こ）

物蔭に引寄せて香

紫上に隠す蔭に行

斯かる物の こんな女文などが
そこに散らばつて居るのも。

せめて見隠し給ふ 強ひて見ぬ
風をなさるその目付が私には氣
になる。

まことは 實は可愛い姫君もあ
るので浅い縁とも思はれません
が、といつてそれを大切らしく
扱ふのも憚り多いので、思ひ惱
んで居ます。

此處にて育み あなたのお手で
育てては下さらんか。
經の子がよはひ 三歳の事。神
代紀上「次生三蛭子」雖「三歳」
脚猶不立「日本紀竟冥和歌」か
ぞいるは哀と見ずや蛭の子は三
年になりぬ足立たずして「朗詠
集には上句「かぞいるはいかに
哀と思ふらむ」 裳着をさせて
いはけなげなる 裳着をさせて
下つ方も 思つて居ますが。

かなくて
し給はで御覽ず。殊に憎かるべきふしも見えねば、葉上「これ、や
り隠し給へ。むつかしや。斯かる物の散らむも、今はつきなき
見るも氣持がわるい
程になりけり」とて、御脇息に寄り居給ひて、御心のうちに
は、いとあはれに戀しうおぼしやられるれば、源氏のさま
殊に物も宣はず。文はひろごりながらあれど、女君見給はぬや
うなるを、源氏の「せめて見隠し給ふ御まじりこそ煩はしけれ」とて、
うちぞみ給へる御愛敬、所せきまでこぼれぬべし。葉上のそばに
ひて、源「まことは、らうたげなるものを見しかば、契り淺くも
見えぬを、さりとして、物めかさむ程も憚りおほかるに、思ひな
む煩らひぬる。私と一緒に思案しておなじ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給
へ。いかががすべき。此處にて育み給ひてむや。蛭の子がよはひ
にもなりにけるを、罪のない効な立ちであるにつけても罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ。い
はけなげなる下つ方もまぎらはさむなど思ふを、けしからぬと思はずばめざましとお
ぼさずば、裳の腰を引きゆひ給へかし」と聞え給ふ。葉上「思はずにのみ取

いはけなからむ 私は小さい人
にはお氣にかなふでせう。

年のわたりには 年に一度の機
棚の上は叶はぬましまし
るものは、秋上玉かづら
い。後撰秋上玉のわたりは
只一夜のみ

あなただの他人行儀な態度を
りなし給ふ御心の隔てを、強ひて知らぬやうな風をしたり打解けたりするでもあるまいと思つてすなへとも見ましたせめて見知らずうらなくやはとてこ

そ。いはけなからむ御心には、いとよらかなひぬべくなむ。い

かになほゆい年頃でせう 源氏心
かにうつくしき程に」とて、すこしうちゑみ給ひぬ。 源氏は子供を無闇ちごをわ

りなうらうたきものにし給ふ御心なれば、得て抱きかしづかば 源氏を引取つて

やとおぼす。いかにせまし、迎へや 源氏をせまし、とおぼし亂る。

大井に行く事は困難である
渡り給ふこといと難し。嵯峨野の御堂の念佛など待ちいでて、

月に二たびばかりの御契りなめり。年のわたりには立ちまさり

ぬべかめるを、明石上の心に及びなき事と思へども、なほいかが物思はしか

らぬ。

前靈宮 六條御息所の女梅盛。
秋好。今年二十二歳。紫上は二十
十三歳。

おぼろげの 並大抵の因縁では
ない。人の御有様も 紫上の人柄も多
くの婦人達の中ですぐれて居ら
れたからだ。自分如きつま
らずならぬ身の 寵愛でもないの
に。紫上が如何に思ふや
うなる人であつても、自分が、
出しやばつたら、さすがにの義。
「めざましとおぼす」を修飾する
語。人もめざましと 紫上も自分を
けしからぬと思召す事もあら
う。とてもかくても どちらにして
も現状と廻りはない。姫君がまだ物心
のつかぬ内に紫上に渡してしま
はう。譲り聞え 河内本「譲りき聞え」
は本の儘。

齋宮のおとなび物し給ふをだにこそ、
あながちにあつかひ聞ゆ
めれば、まして斯く憎みかたげなめる程を、
あろかには思ひ放
つまじき・心ばへになむ」
と、女君の御有様の思ふやうな
る事・も語り給ふ。

明石上心 げに古へは、いかばかりの事に定まり給ふべきにかと、つてに
もほの聞えし・御心の、名残なくしづまり
給へるはおぼろげの・御宿世にもあらず、人の・御有様も、
こころの御なかにすぐれ給へるにこそはと、思ひやられて、か
ずならぬ人の・並び聞ゆべき覺えにもあらず、さす
がに立ちいでて、人もめざましとおぼす事やあらむ、わが身は
とてもかくても同じこと。生ひ先遠き人の御うへも、遂にはか
の世話にならねばならぬのたう
の御心にかかるべきにこそあめれ、さりとならば、げに斯う何
心なき程にや譲り・聞え・まし、と思ふ。又、手を放ちてうし
らめたからむ事、つれづれも慰む方なくては、いか・が明し暮

たまさかの稀々の源氏の御來訪も絶えよう。

あぢきなし それは詰らぬ事です。

深くおぼして源氏もい加減な考で仰しやるのではあるまい。母方からこそ母方の種姓により皇子でも差等があるのです。故大納言の父君より身分が一段低かつた爲に源氏が更衣腹と人々にて賤しまれた、その差別によるのです。ましてただ人は帝の御子でもさうだ。まして普通の家では比較にもならない。

又みこたち大臣の親王達や大臣の女の腹に生れた子供でもさしあたり落ちぶれた家に生れた者は、尼君は中務卿宮の孫女である、それを含んでいつてゐるのである。この釋諸註皆誤つてゐる。程々に子供といふものは身の程相應に親からも大事にされる子供こそ他人からも輕蔑されぬ初めとなるのです。

すべからむ、何につけてかたまさかの御たちよりもあらむ、など、さまざま思ひ亂るるにも、身の憂きこと限りなし。尼君、

思ひやり深き人にて、思あぢきなし。見奉らざらむことは、いと胸痛かりぬべけれど、遂にこの御ためによかるべからむ事をこそ思は

め。浅くおぼして宣ふ事にはあらず。只うち頼

み聞えて、渡し奉りたまひてよ。母方からこそ御門の御子も

きはくにおはすめれ。このおとどの君の、斯く世に二つなき

御有様ながら、世に仕へ給ふは、故大納言の、今一

きざみなりおとり給ひて、更衣腹といはれ給ひしけぢめにこそ

おはすめれ。ましてただ人は、なずらふべき事にもあらず。又

みこたち大臣の御腹といへど、なほさし向ひたる劣りの所に

れたるは、人も思ひおとし、親の御もてなしも、えひとしか

らぬものなり。ましてこれは、やんごとなき御方々に斯かる人

出で物し給はば、こよなく消たれ給ひなむ。程々につけて、親

もてなし給はむ どんなお扱ひをなさるかその様子を聞いて御覽なさい。

殿も 源氏も姫君を引取る方がよいとは思ひながら、明石上の心中が氣の毒で。

よろづの事 萬事取るに足らぬ私の手許に姫君を置いては。

立ちまじりて 姫君が人中に出ては、どんなに笑ひものになります事やら。

放ち聞えさせむ 明石上は姫君を手放す事をやはり可愛さうに思ふけれども。

乳母までも 乳母は姫君と一緒にあちらに行くからその乳母と別れる事も。

にも一ふしもてかしづかれぬる人こそ、やがておとしめられぬ初はじめとはなれ。御袴著の程(など)も、いみじき心を盡すとも、かかるみ山隠れにては、何のはえかあらむ。只まかせ聞え給ひて、もてなし(聞き)・給はむ(御)・有様をも聞き給へ」と教ふ。さかしき人の心のうらどもにも、物間はせなどするにも、「なほ渡り給ひてはよいまさるべし」とのみいへば、思ひ弱りにたり。殿もしかおぼし源氏ながら、思は(ふら)む所のいとほしさに、強ひてもえ宣はで、御袴著のこと、いかやうにか」と宣へる御返りに、明石「よろづの事(い)・かひなき身にたくへ聞えては、げに生ひ先もいとほしかるべく覺え侍るを、立ちまじりて(も)、いかに人笑へにや」と聞えたるを、いとあはれにおぼす。日など取らせ給ひて、忍びやかなるにさるべき事など宣ひおきてさせ給ふ。放ち聞えさせむことは、なほいとあはれに覺ゆれど、君の御ためによるべき事をこそは、と念(思ひ)ず。「乳母をも引き別れなむこと、あけくれの物思

姫君引取の用意

(ども)

吉

吉

吉

吉

吉

吉

源氏は

(も)

源

源

源

源

源

源

明石上からの返事

(お)

明

明

明

明

明

明

知恵深い人の意見を聞いても

姫君が源氏の方へ行くのが

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

全迄は

全

全

全

全

全

全

全

いとどたづきなき事をその乳母まで居なくては入頼りなさまで附け加はつて悲しく思はれる事だらう。

打絶え これぎりになる事はよもやございませぬ。

遂にはと 結局御前様もあちらにお移りになつて又お側に居られることと當てにはして居ます

なよやかなる 糊氣のない。糊氣があるとごはくして寒いからである。
かぎりなき人と どんな貴人でもこれ位のものだらうと思はれる。

はし(き)さ、つれづれをもち語らひて慰めならひつるに、いとどたづきなき事をさへ取添へ、いみじう(き)覺ゆべき事」と(き)君も泣く。乳母も、「さる(終あつて)べきにや、覺えぬさまにて見奉りそめて、年頃の御心ばへの忘れがたう戀しう(き)覺え給ふべきを、打絶え聞ゆる事はよも侍らじ。遂にはと頼み(聞えさせ)ながら、暫しにてもよそくに(き)思ひのほかのまじらひし侍らむが、安からずも侍るべきかな」など、打泣きつつ過ぐす程に師走にもなりぬ。雪霰がちに(明石上心)心細さまさりて、あやしくさまく(き)に物思ふべかりける身かな、と打歎(痛問なく)きて、常よりもこの君を(姫君)・(目放たむ)・撫でつくろひつつ(見)・ゐたり。雪かきくらし降り積(みち)るあした、きし方ゆく先の事残らず思ひ續けて、例は殊に(はぢむ)端近なるいで(出)ゐるなどもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣(きぬ)どものなよやかなる・數多著て、眺めた(居給)・る容體、頭つき、うしろでなど、かぎりなき人と聞ゆとも、かうこそ(は)・おはすらめと見ゆ。落つる涙を

かやうならむ日 姫君の居なく
なつた後の事を想像していふの
である。

雪深き 明石上歌。いつまでも
文通を絶やさないで下さい。

ゆきまなき 乳母の歌。心の通
ふ跡は絶えずに始終御音信上
げます。古今誹諧歌の「もろこ
しの吉野の山にこもるともおく
れんとおもふ我ならなくに」の
意味で吉野山を用ひてゐる。即
ち如何に人里遠い山奥でもの
意。王朝時代には吉野山を深山
と考へてゐたと考へられる事實
は多い。と考へられる事實は
さならむと 姫君お迎への爲だ
らうと思ふから。 姫君をやる
わが心こそ 姫君をやるやら
ぬは自分の勝手なのだ。 今更
かろくしきやうなりだ と強ひ
變する事は輕率なやうだと強ひ
て思ひ返す。 姫君がか
はとうつくしげにして 明石上の側
はいつくしき姿をして 源氏が御覽にな
つて。

よその物に こんな美しい子
他人の物にして案じ暮す 明石上
の親心を御推察なさると。

かい拂ひて、^(き) 明石^{こんな妻の日} かやうならむ日、ましていかに覺束なからむ
と、らうたげにうち歎きて、

雪深き^(こ)み山の道は晴れずともなほふみかよへ跡絶えずして
と宣へば、乳母^(いみじ) 打泣きて、

ゆきまなき^{雪の晴れない}吉野の山をたづねても心のかよふ跡絶えめやは
といひ慰む。

この雪すこし解けて渡り給へり。例は待ち聞ゆるに、^(を) さならむ
と思ふ事により、^{源氏が明石上方に} 胸うちつぶれて、^{源氏を} 人やりならず覺ゆ。わが心^{自業自得と後悔される}

にこそあらめ、いなび聞えむを強ひてやは、あぢきな、^{イイ} と覺ゆ
れど、^(こ) かるくしきやうなりと、せめて思ひ返す。いとうつく^{姫君のさま}

しげにて前に居給へ^(す奉りた) 見るを見給ふに、^{源氏心} おろかには思ひ難かり
ける人の宿世かなとおもほす。この春よりおほす御髪、^{みぐし} 尼そぎ

の程にて、ゆらくとめでたく、つらつきまみの^(うき) かをれる程
など、いへば更なり。よその物に思ひやらむ程の心の聞推し量

何か どうぞ致しまして。身分卑しい人の娘だと輕蔑して下さらないなら結構でございます。

すゑ遠きの歌 行末久しい幼少の姫君に別れていつその御成人の姿を見る事が出来よう。姫君を小松に譬へたのはその將來を祝福したもの。「引き」は小松の縁語。

生ひそめしの歌 深い因縁あつて生れた姫君だから貴女と姫君と未長く同棲させませう。花鳥餘情に「武隈の松は二本なれば

明石と紫上の二人に諭たるべし、さきの卷にあさき根ざしゆまいかゞと尼君のいひしをなぐさめて根もふかければと讀給へり」とある。

どかにを 氣長に構へておいでなさい。さる事とはいづれ又同棲が出来るだらうと胸をおさへてゐるもの。

天兒 守刀。ねりの絹で人形を縫ひ、綿を入れたもの。仙源抄に「三歳まで用之」とある。諸事凶事これにおぼする也」とある。明石上の事。

とまりつる人 明石上の事。

り給ふに、いと心苦しければ、源氏心 打返し宣ひあかす。明石上 何

か。只かく口惜しき身の程ならずだにもてなし・給はば」と聞

ゆるものから、念じあへず打泣くけはひ、あはれなり。姫君は

何心もなく、御車に乗りむ事を急ぎ給ふ。寄せたる所に、母

君自ら抱き・出で給へり。片言の聲は、いとうつくしうて、袖

をとらへて、乗り給へと引くもいみじう覺えて、

すゑ遠き二葉の松に引きわかれいつか木高き陰を見るべき

えもいひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦し、と思して、

「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べむ

・・・のどかにを」と慰め給ふ。さる事とは思ひしづむれど、

えなむ堪へざりける。乳母、少將とてあてやかなる人ばかり、

御劍天兒やうの物取り・て乗る。人だまひによろしき若人わ

らはなど乗せて御送りに參らす。道すがら、とまりつる人の心

苦しさを、いかに罪や得らむとおぼす。

暗うおはしつきて、暗くなつてから二條院に著いて。暗くなつてはしたなくてや、きまりわるい思ひをしながら奉公する事かと思案じたのであるが、君は姫君の爲に西向き部屋を特に設備されて。

やうく、姫君があたりを見廻して、母君の居られぬのを探して、次第に泣きだされるので。

山里のつれなく、大井の山里は姫君が居られないので、ましてどんなに寂しからうと。

いかにぞや人の思ふべき、他人の非難するやうな缺點のないか、うした子供が禁上の腹に生れないか、と源氏は残念に思ふ。

暗うおはし(まじ)つきて、御車寄す(せち)るより、花やかにけはひ異二條院のさま

なるを、田舎びたる心地どもは、はしたなくてやまじらはむと侍女達の

思ひつれど、西面を殊にしつらはせ給ひて、ちひさき御調度ど姫君に相應しいやうに

も、美しげに整へさせ給へり。乳母の局には、西の渡殿の、北

に當れるをせさせ給へり。若君は道にて寢給ひにけり。抱きお車から

ろされて(起き給へれど)泣きなどはし給はず。こなたにて御茶上の部屋でお菓子を差上げた

たもの参りなどし給へど、やうく見めぐら(か)して、母君の見明け上

えぬをもとめて、らうたげにうちひそみ給へば、乳母召しいで泣顔をされるので

て、慰めまぎらはし聞え給ふ。山里のつれなく、ましていかに源氏の心に

とおぼしやるはいとほしけれど、あけくれ思すさまにかしづき姫君を

つつ見給ふは、物あひたる心地し給ふらむ。いかにぞや人の思源氏心

ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせで、と口惜しく茶上の性質

おぼさる。暫しは人々もとめて泣きなどし給ひしかど、大方心姫君は

やすくをかしき心ざまなれば、うへにいとよくつきむつび聞え茶上

又やんどなき 別に又身分のある女で乳の多く出るのを乳母の中に加へてお抱へになつた。御しつらひ 袴着の日の設備。

参り給へる 祝賀の當日参會のお客達は、平素と一寸も變りがないので、あながち目立ちもしなかつた。

襷引きゆひ 宇津保藏開上に「捨の袴襷がけにて」又同國讓下に「襷がけの御袴」と見え、枕草子にも「うつくしきもの」の條に「襷がけにゆひたる腰」とある。這ひあるく兒の袴の落ちぬやうに、紐を背で十文字のやうである。源語秘訣や貞丈の説などは信ぜられない。

身の怠りを 姫君を手放した我身の過失を。さこそいひしか 姫君を養女にやる事を勧めたもの。何事もか あんなに何もかも行届いた處へなまなか何を開つてあげられよう。

御方の人々に 姫君付の侍女達に待遠ならむも 明石上に待遠しがらせるのは、案の如く姫君を渡してからは足遠くなつたと思はうのが氣の毒故。

給へれば、榮上心 いみじううつくしきもの得たりとあぼしけり。他事とくなく抱きあつかひもてあそび聞え給ひて、乳母もあ**の**づから近榮上う仕うまつり馴れにけり。又やんどなき人の乳ある、添へてまゐり給ふ。

御袴着は、特別の準備といふ事はないが 何ばかりわざとあぼし急ぐ事はなけれど、いと氣色

殊なり。御しつらひ、雛遊びの心地してむかしう見ゆ。入々の

・参り給へる客人・ども、只明暮のかはるけぢめしなれば、

あながちに目も立たざりき。ただ姫君の襷引きゆひ給へる御懸胸

つきぞ、うつくしげさ添ひて見え給へる。明石上方大井には、盡させず

戀しきにも、身の怠りを嘆き添へたり。さこそいひしか、尼君

もいとど涙もろなれど、かくもてなしかしづかれ給ふを聞くは

・・・・・嬉しかりけり。何事をか・なかくとぶらひ聞え給は

む。ただ御方の人々に、乳母よりはじめて、世になきかさね色

合を・思ひ急ぎてぞ贈り聞え給ひける。待遠ならむも、いとど

思ふらむ事の源氏は、明石上が悲しがつてゐるのが氣の毒故、絶えず消息を遣して慰めておられる。可愛い姫君に免じて咎めだてはなさらなかつた。

年も返りぬ 源氏三十二、紫上二十四。明石上二十三。

七日の御よろこび 正月七日に年賀に來られたのである。

うはへは 内心には私の不満もあらうが、朝廷に對する公の不平はないので、表面は満足さう對の御方 花散里。

近きしるしは 二條院の近所に住んで居るお蔭で。

さればよと思はむに、いとほしければ、年の内に忍びてわたり給へり。明石上方の様子いと淋しきすまひに、あけくれのかしづきぐさをさ

へ。引離れ聞えて、思ふらむ事の心苦しければ、御文なども絶

間なく遣はず。女君も、今は殊に多上じ聞え給はず、うつくし

き人姫君に罪許し聞え給へり。

・年（その）も返りぬ。うららかなる空に、思ふ事なき（所）御有様は

いとどめでたく、二條院の體みがき改めたる御よそひ（なる）に、參置に來られる人の中參りつどひ

給ふめる人の大人しきほどのは、七日の御よろこびなどし給ふ、

・（おの）引きつれ給へり。若やかなるは、何ともなく心地よげ

に見えたり。（給ふ）つぎく（おの）の人も、（なべての世の氣色）心のうちには思ふ事も

やあらむ、うはへはほこりかに（おの）見ゆる頃ほひ

なりかし。二條院の東院の西對に居る人ひんかしの院の對の御方も、有様は好ましうあらま

ほしきさまに、侍女達や寵女のさぶらふ人々わらはべの姿など、打解けず心づ

かひしつ過ぐし給ふに、近きしるし（は）はこよなくて、源氏の（おの）のど

こめきて、こせくしないで、かばかりの花散里はこれだけの運命を持つた我身なのであらうと諦めて。

折節の源氏からの時折の御心附なども紫上と格段の差をつけず待遇なまつて。

同じごとと紫上方と同様に。べたう花散里方の別當。別當は家司と同様家政を司どる人。

櫻の御直衣 櫻は表白に裏赤花。又裏は紫とも二藍とも。まかり申し 紫上に暇乞をされる様子。ただならず 気がかりに。

薄雲

かなる・御いとまの隙すまなどには、ふと這こひわたりなどし給へど、夜立ちとまりなどやうに、わざとは見え給はず。只御心ざまのおいらかにこめき・て、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかに物し給へば、さる方のありがたきものに思ひ聞え給へり・さるべき事・折節の御心おきてなども、こなたの御有様・に劣るけぢめこよなからずもてなし給うて、あなづり聞ゆべうはあらねば、同じごと人も参り仕うまつりて、べたうども・も事怠らず、なか／＼亂れたる所なく、めやすき御有様なり。山里大井のつれ／＼をも絶えずおぼしやれば、おほやけ私物さわがしき程過ぐして、渡り給ふとて、常より・殊にうちけさうじ給ひて、櫻の御直衣にえならぬ御ぞ引きかさねて、かたはなるま・たきをしめさうぞき給ひて、まかり申し給ふさま、の限なき夕日に、いとどしく清らに見え給ふを、女君紫上、ただならず見奉

外にも 簾の外。

明日歸りこむ 催馬樂櫻人「櫻町作れる見とめ島つ田を、十よや、あす歸りこむやそよや、二段、ことをこそ明日ともいひめ、遠方に、妻さるせなは、明日もさね來じや、そよや」

舟とむるの歌 源氏を引止める明石上があちちに居なければ、わが夫は明日歸り來る事と待つても居ませう。櫻人の言葉で歌つてある。

行きて見ての歌 とにかく一寸行つて見て明日にも必ず歸つて來ませう。なまじ訪ねながら歸りをいそぐ爲に、あちちの人が氣をわるくしようとも。櫻人の言葉でよんだ歌。

遠方人のめざましきも 明石上に對する不快な念も我懐が出来た。いかに思ひおこすらむは此姫君をどんなに氣遣つて居る事だらう、自分が明石上の位置であつたら、戀しい姿であるの程のかはいらしいでたまらぬと。紫上には何で子がないのか、同じ事なら實子であるのでか、同じ事なら實子であるのでか、どうも世の中は思ふ儘にならぬものだ。

り送り聞え給ふ。姫君はいはけなく、御指貫の裾にかかりて慕^慕ひ聞え給ふほどに、外にも出で給ひぬべければ、立ちとまりていとあはれとおぼしたり。姫君を
と口ずさびて出で給ふに、渡殿の口^{中將の君が}に待ちかけて、中將の君して聞え給ふ。

舟とむる遠方人のなくばこそ明日歸りこむせなと待ち見め

いたう馴れて聞ゆれば、いと匂ひやかにほほゑみて、

行きて見て明日もさねこむなかくに遠方人は心あくとも

何事も聞きわかでざれありき給ふ人を、うへはうつつくしと見

給へば、遠方人のめざましきも、こよなくおぼし許されにたり。

いかに思ひおこすらむと、我に・・て・いみじう戀しかりぬべ

きさまをと、うちまもりつつ、懐に入れて、・・うつくしげな

る御乳をくくめ給ひつつ、たはぶれ居給へる御さま見どころ多

かり。お前なる人々は、「などか。同じくは。いでや」など語ら

強飯 粥に對するもので今の普
近き御寺柱殿などに 源氏は壁
峨野のお寺や柱殿などに來るや
うな類して大井に來られて。

いとけざやかに さう際立つて
無愛用な並々の待遇はなさらない
おぼろげに 並々ならず高貴な
婦人達の處でさへ、源氏はこれ
程まで打解けられる事もなく、
け高い態度をくづされないと
いふ事を前以て聞いて居つたか
ら。

ふりはへ給へるこそ わざぐ
おいで下さる方が自分にはその
明石よりも。 明石に居る入道の
所からも。

語り給ひつつおはす。
(聞入給ふ)

大井は淋しい所だが
こころは斯かる所なれど、かやうに立ちとまり給ふ折々あれば、
はかなき・くだもの強飯ばかりは聞召す時もあり。近き御寺、
(御) 菓子 桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには亂れ給はね
すつかり打解ける事はなさらないが

ど、又いとけざやかに無愛相にはしたなく、おしなべてのさまにはもて
なし給はぬなどこそは、いと覺え殊には見ゆめれ。女も斯かる
源氏の 御心の程を見知り聞えて、
過分だと源氏が思ふやうな事は明石上はしない 過ぎたりとおほすばかりの事はし出
でず。又いたく卑下せずなどして、御心おきてにもてたがふ事
(三) なく、いと目やすくぞ・ありける。おぼろげにやんごとなき
(二) 所にてだに、かばかりも打解け給ふ事なくけだか・・・・・き
二條院の東院に移つては 御もてなしを聞きおきたれば、近き程にまじらひては、なかな
かいと目馴れて、人あなづられなる事どもぞあらまし、たまさ
かにて・・・かやうにふりはへ給へるこそたけき心地・すれ、と
思ふべし。明石に・も、さこそいひしか、この御心おきて有様

源氏が
御心の程を見知り聞えて、
過ぎたりとおほすばかりの事はし出
でず。又いたく卑下せずなどして、御心おきてにもてたがふ事
なく、いと目やすくぞ・ありける。おぼろげにやんごとなき
所にてだに、かばかりも打解け給ふ事なくけだか・・・・・き
御もてなしを聞きおきたれば、近き程にまじらひては、なかな
かいと目馴れて、人あなづられなる事どもぞあらまし、たまさ
かにて・・・かやうにふりはへ給へるこそたけき心地・すれ、と
思ふべし。明石に・も、さこそいひしか、この御心おきて有様

源氏が
御心の程を見知り聞えて、
過ぎたりとおほすばかりの事はし出
でず。又いたく卑下せずなどして、御心おきてにもてたがふ事
なく、いと目やすくぞ・ありける。おぼろげにやんごとなき
所にてだに、かばかりも打解け給ふ事なくけだか・・・・・き
御もてなしを聞きおきたれば、近き程にまじらひては、なかな
かいと目馴れて、人あなづられなる事どもぞあらまし、たまさ
かにて・・・かやうにふりはへ給へるこそたけき心地・すれ、と
思ふべし。明石に・も、さこそいひしか、この御心おきて有様

人は通はしつづ 入道から京に
使を遣して。 姫君を繁上に渡し
胸つぶるる。 と聞いて。

太政大臣 葵上の父。今年六十
六歳。

暫しこもり 賢木巻に春の初
頃、致仕の表を奉つて籠居して
居つた事。卷一、四三七頁。

御門 冷泉院。御年十四。

誰に譲りてかは 誰にこの御後
見を譲つたら佛道専念の素懐が
遂げられようぞと思ひになる
と。 御子ども 太政大臣の子息や孫
達より以上に源氏が懇に佛事を
督まれた。

をゆかしがりて、覺束なからず。（程）人は通はしつづ、（入道の心に）胸つぶる
る事もあり、（明石上が寵愛を受けてゐる事を聞いて）又おもだたく嬉しと思ふことも多くなむありけ
るし。

その頃太政大臣亡せ給ひぬ。（一世の重鎮としておいでになつた方故）世のおもしろとおはしつる人なれば、

おほやけにもおぼし歎く。（辭表を出して籠居して居つた時さへ）暫しこもり給へりし程をだに、天の

下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり。（御）源氏のお

とども、いと口惜しう、（政事を）よろづの事押し譲り聞えてこそ、いと

ま（の）も（ひ）もありつるを、心細く、事繁くもおぼされて、歎きお

はす。御門は、（大人々々しく）御年（の）よりはこよなう大人々々

しうねびさせ給ひて、世のまつりごと（見奉）も、うしろめたく思ひ

聞え給ふべきにはあらねども、又取り立てて御後見し給ふべ

き人もなきを、誰に譲りてかは静なる御本意もかなはむと思す

に、いと飽かず口惜し。（孫後の供養）のちの御わざなどにも、御子ども（孫）もうま

ごに過ぎてなむこまやかにとぶらひあつかひ聞え給ひける。

大方世の中 世間一帯に疫病が流行し。

雲のたたずまひ 雲の形。
道々のかんがへぶみ 天文や陰陽の道々の博士の勘文。

入道後の宮 藤壺。

いといはけなくて 桐壺院の崩御は賢木巻の冬で、その時冷泉院は御年五。

おどろくしき さう大しい氣分悪くもありませんでしたので、豫て死期を知り顔な風をするのも、人がいやに仰々しく思ひませうかと遠慮致しまして。

その年、大方・世の中さわがしくて、おほやけさまに物のさとし繁くのどかならで、天つ空にも、例にたがへる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろく事多くて、道々のかんがへぶみども奉れるにも、怪しう世になべてならぬ事どもまじりたり。内のおとどのみなむ、御心のうちに煩はしくおぼし知らるる事ありける。入道・後の宮・春のはじめより惱みわたらせ給ひて、三月にはいと重くならせ給ひぬれば、行幸などあり。院に別れ奉らせ給ひしほどは、いといはけなくて、物深くもおぼされざりしを、いみじうおぼし歎きたる御氣色なれば、宮もいと悲しくおぼしめさる。藤壺「今年は必ずのがるまじき年と思ひ給へつれど、おどろくしき心地にも侍らざりつれば、命の限り知りがほに侍らむも、人やうたて事々しう思はむと憚りてなむ、功德のことなども、わざと例よりも取分きてしも侍らずなりにける。参りて心のどかに昔の御物語も、

やんごとなき人の限り 太政大臣や藤壺女院など貴人ばかりが引續いておかくれになるのを。

年頃おほし絶えたりつる 多年断念して居つた思慕の情をさへもう一度打明けずにしまふのが残念で。

御ありさまなども 御容體などを女房にお尋ねになると。

親しき限り 藤壺が親しく召使つてゐられる女房達だけが。

月頃なやませ 長い間御病氣の中を、御勤は一刻も懈怠なさらなかつたその御無理が積つて。

院の御遺言に 桐壺院の御遺言通りに、主上の御後見をしく下さる事に、ついでには今迄感謝して居る事が澤山にございます。

すがに心苦しう見奉らせ給ひて、これのみぞうしろめたくむすばほれたる事におぼしおかるべき心地し給ひける。あとどは、源氏おほやけがたざまにても、斯くやんごとなき人の限り打續き亡公の情としてもせ給ひなむことを、人知れずおほし歎く。人知れぬあはれはた限りなく、御祈りなどおぼし寄らぬ事なし。年頃おぼし絶えたりつるすぢさへ、今一たび聞えずなりぬるがいみじく思さるれば、病床近き近き御几帳のもとに寄り、御ありさまなどもさるべき人々に問ひ聞き給へば、親しき限りさふらひて細かに聞ゆ。女房、月頃、なやませ給へる御心地に、御行ひを時の間もたゆませ給はずせさせ給ふ積の、いとどいたうくづほれさせ給へるに、此頃となりては、柑子など、頼みどころなくならせだに、召しりなさらず觸れさせ給はずなりにたれば、頼みどころなくならせ給ひにたる事。と、泣き感ふ人々多かり。藤壺院の御遺言にかなひて、冷泉院うちの御後見、仕うまつり給ふ事、年頃思ひ知り侍

何につけてかは 何のついでに、あなたに對して格別の好意を持つてゐることをお漏らししようかと、機会を待ちつつ暢氣に構へて居りましたが。

ほの／＼聞ゆるに、取次の女房に語る藤壺の聲が、几帳の外に居る源氏にかすかに聞えるのである。

大方の世につけても 自分に特別關係のない人として見ても、世間一般の立場から見ても。

世の中心あわただしく 又公務が殖えて氣ぜはしく感じました。又斯くおはしませば、又藤壺が重體でいらつしやるから。

ること多かれど、何につけてかはその・心寄せ殊なるさまをも漏らし聞えむとのみのどかに思ひ・侍りけるを、今なむあはれに口惜しく」と、ほのかに宣はするもほの／＼聞ゆるに、御いらへも・聞えやり給はず、泣き給ふさまいとみじ。など斯うしも心弱きさまにと、人目をあぼしかへせど、古へよりの御有様を、大方の世につけても、あたらしく惜しき人の・さまを、心にかなふわざならねば、かけとどめ聞えむ方なく、いふかひなくあぼさること限りなし。源はかくしからぬ身ながら、昔より、御後見仕うまつるべきことを、心の至るかぎりは、あろかならず思ひ給ふるに、あほきおとどのかくれ給ひぬるをだに、世の中心あわただしく思ひ給へらるるに、又斯く・おはしませば、よろづに心亂れ侍りて、世には・べらむ事も残りなき心地なむし侍る」と聞え給ふほどに、ともし火などの消え入るやうにて果て給ひぬれば、いふかひなく悲しき事をおぼし

(御)

(聞え)

(ふ)

(泣)

(い)

(さ)

(ま)

(い)

(と)

(ど)

(め)

(き)

(を)

(を)

(を)

(御)

(侍)

(り)

(け)

(る)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(御)

(心)

(寄)

(せ)

(殊)

(な)

(る)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

(を)

御心ばへなどの宮は御性質な
 情深く世の人に對して一様に愛
 を笠に著て下々の迷惑となる振
 舞なども往々ありがちである
 なく、人が奉仕しようとする事
 制止になる。世間の迷惑となる事
 がうけ家。又高家。「蒙家。有千
 冠人徳謂家。史記註、徳千
 人者謂之蒙、徳百人者謂之英也」
 とある。權門だてすること。

只もとよりの所有の寶物や頂
 戴する管の年官年爵及び封戸の
 中で、使つても差支ない分だけ
 を使つて、本當に有りがたい佛
 事のありたけをしておかれたか
 ら。

なべて一つ色に 皆一様に喪服
 をつけて。

今年ばかりは 古今哀傷一深草
 の野邊の櫻し心あらば今年ばか
 りは墨染に咲け

歎く。かしこき御身の程と聞ゆるなかにも、御心ばへなどの、
 世のためにもあまねくあはれにおはしまして、かうけに事寄せ
 て、人のうれへとある事などもおのづからうちまじるを、いさ
 さかもさやうなる事の亂れなく、人の・仕うまつる事をも、
 世の苦しびとあるべき事をばとどめ・給ふ。功德のかたとて
 も、勸むるにより給ひていかめしう珍らしうし給ふ人など、昔
 のさかしき世にも皆ありけるを、これはさやうなる事なく、只
 もとよりの・寶物、・得給ふべきつかさかうぶり、御封の
 物のさるべき限りして、まことに心深き事どもの限りをしおか
 せ給へれば、何と分くまじき山伏などまで、惜しみ聞ゆ。をさ
 め奉るにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。殿上人
 など、なべて一つ色に黒み渡りて、物の・はえなき春の暮な
 り。二條の院のお前の櫻を御覽じても、花の宴の折などおぼし
 出づ。今年ばかりは、と獨りごち給ひて、人の見咎めつべ

源氏のまよ

花の色も

上達部

群送

見給ひ

藤徳は

佛會などの事も

みふ

高貴な

はれ

まね

運

給ふ

功徳

かた

殿

さ

せ

思

人

な

し

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

入日さすの歌 夕陽のさしてゐる峯に棚引く薄雲のうす黒いのは悲しんでゐる私の喪服の色に似せてゐるのであらうか。

おほやけにも 主上も厚く御信仰になつて。
いかめしき御願ども 重い勅願を數多起して。

宮の御事によりて 藤壺の御病氣平癒の祈禱の爲に。

ければ、御念誦堂に籠り居給ひて、日一日泣きくらし給ふ。夕日花やかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何事も御目とどまらぬ頃なれど、いと物あはれにおぼさる。

源氏 入日さす峯にたなびく薄雲はものおもふ袖に色やまがへる

（など獨りごち給ふも）人・聞かぬ所なれば、かひなし。

御わざなども過ぎて、事どもしづまりて、御門、物心細くお

ぼし・たり。この入道の宮の御母后の御世より傳はりて、

（つきくのイ）御祈りの師にてさぶらひける。僧都、故宮

にもいとやんごとなく親しきものにおぼしたりしを、おほやけ

にもおもき御覺えにて、いかめしき御願ども多く立てて、世に

かしこきひじりなりける。一年七十ばかりにて、今は終りの行ひ

をせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、

うちより召しありて、つねにさぶらはせ給ふ。此頃は猶もとの

参りさぶらはるべきよし御持 御持
 僧として宮中に候すべき由を
 源氏も勧めになるので。
 夜居 終夜加持祈禱して護身す
 清涼殿の二間に何候すといひ
 ふるき御志を添へて 藤壺の母
 以来の御法志をも合せ考へま
 して。

知ろしめされぬに主上 主上が御存
 じないのに、罪障が重くて、天
 の照覧も怖ろしく思つてをりま
 す事を心の中で泣いてゐるばか
 りでそのまゝ告白する事も出
 来ないで死にましたらば何の役
 に立ちませう。それでは佛も私
 を腹黒く思召す事でございませ
 う。「罪重くて」は「命終り侍り
 なば」にかゝる。罪が重い爲に
 告白しようとしてもその機を得
 ないで命が終るといふ意。

忍び破されたる 私に隠してい
 ひ残された事のあるのが恨めしい

如く参りさぶらはるべきよしとども勸め宜へば 勸め宜へば、僧都、今は夜居
 など、いと堪へがたうく 覺え侍れど、仰せごとの畏き物此の至さに 小の畏きそ 小の
 り、ふるき御志を添へて」とてさぶらふに、静なる曉に、人も
 近くさぶらはらず、あるはまかでなどしぬる程に、古代にうちし
 はぶきつつ、世の中の事ども奏し給ふついでに、僧都いと奏し
 がたくて、却りては罪にもやまかり當らむと思ひ給へ憚る事多
 かれぶらぶらど、知ろしめされぬに、罪重くて、天のまな
 こ怖ろしく思ふ給へらるる事を、心にむせび侍りつつ命終り侍
 りなば、何の益かははべらむ。佛も心ぎたなしと思召さむ
 とばかり奏しさして、え打出でぬ事あり。いといたく思ひ煩ふ
 うへ、何事ならむ、この世に恨み残るべく思ふことやあらむ、
 法師はひじりといへども、あるまじき横さまのそねみ深
 く、うたてあんななるものを、とほしおぼして、いはけ
 なかりし時より、隔て思ふことなきを、そこには、かく忍び

更に佛のいさめまもり給ふ
が秘するやうに禁じておかれた
眞言の秘法をさへ決して隠す事
なく御傳授申上げたのでござい
ます。

すべて却りて却つて宜しから
ぬ結果となつて世間に漏れ傳は
る事でございませう。
たとひ憂へ侍りともこれを申
上げた爲に災難が降りかかつて
参りましたも。

故宮 藤壺。

法師の心に拙僧のやうな坊主
の心には何の意味か分りませ
ん、僧に縁のない男女の間の事
であるから。
御祈りども 玉體安穩の御祈
禱。
御位につき 冷泉院の御即位ま
で引續き御祈禱に奉仕して参り
ました。

・残された・る事ありけるをなむつらく思ひぬる」と宣はす
れば、僧部あなかしこ。更に佛のいさめまもり給ふ眞言の深き道
をだに、隠しとどむる事なく、廣め仕うまつり侍り。まして心
に隠したて限あること何事に・か侍らむ。これはきしかた行く先の大
事と侍る事を、おかくれになつた過ぎおはしましに院桐壺院と藤壺。后の宮、只今世をまつ
りごち給ふおとどの御ため、すべて却りてよ・からぬ事にや
漏り出で侍らむ。かかる老法師の身には、今は限りの道にはた
とひ憂へ侍りとも、何の悔い・か侍らむ。佛天の告げあるに
よりて・奏し侍るなり。冷泉院わが君孕まれおはしましたりし時
より、故宮の深くおぼし源氏との御事歎くことありて、御祈り仕うまつらせ
給ふゆゑなむ侍りし。くはしく・法師の心にえ悟り侍らず。事
のたがひ目ありて、源氏おとど・横さまの罪に當り給ひし時、いよ
いよおぢ思召して、かさねて御祈りども承り侍りしを・藤壺が
おとども聞召してなむ又・更（殊）に事・加へ仰せられて、御位につ

その承りしやう。私が御祈禱を仰せつかつた仔細は。

煩はしう思ひて 當惑して。

又この事を 御身の外にこの事を知つて他に漏らし傳へるやうな人はあるか。

いとぎなく 主上が御幼少で御分別もないお年頃ならばとにかく

きおはしまししまで、仕うまつる事ども侍りし、その承りしや
 うどもとて、くはしく奏するを聞こしめすに、あさましう珍ら
 かにて、怖ろしうも悲しうも、さまぐに御心さままぐ。亂れけ
 りひて。主上は暫く御返事もないので
 とばかり御いらへもなければ、僧都、進み奏しつるを不都
 合合に思召すのかとに思召すのかと、煩はしう思ひて、やをらかしこまりてま
 退出
 かくるを、召しとどめて、冷鼻この大事を心に知らで過ぎなましかば、後
 の世までの咎めあるべかりける事を、今まで忍びこめられたり
 けるを（事）なむ却りてうしろめたき（なじ）心なり（ける）と思ひぬる（さて）。
 ・又この事を知りて（世の中）漏らし傳ふるたぐひやあらむ」と
 宣はす。僧都僧都更になにがしと王命婦とよりほかの人、この事の氣
 色見たる（たぐひ）侍らず。さるによりなむいと怖ろしう侍る。天
 變（べん）しきりにさとし（しゆく）、世の中しづかならぬは、このけなり（焉）。
 いとぎなく物の心（を）知召すまじかりつるほどこそ侍りつれ、や
 うく御（けい）よはひ足り（らひ）。おはしまして、何事もわきまへさせ給ふ

思ひ給へ消ちてし一度は口外すまいと決心致しました事を又あらためて奏上致すのでございます。

かくなむと 主上御不快の由を源氏がお聞きになつて。

式部卿のみこ 桃園式部卿宮。源氏の御弟で權齋院の父宮。

里 二依院。

べき時にいたりて、とがをも示すなり。よろづの事、親の御世より始まるにこそ侍るなれ。何の罪とも知召さぬが怖ろしきにより、思ひ給へ消ちてしことを、更に心よりいだし侍りぬること」と、泣くく聞ゆるほどに、明け果てぬればまかでぬ。

冷泉院 この一大事を

うへは、夢のやうに、いみじき事を聞召して、いろくにおぼ

し亂れさせ給ふ。故院の御ためもうしろめたく、おとどの斯く

ただ人にて世に仕へ給ふも、あはれに忝かりける事、かた

がたおぼしなやみて、日闌くるまで出でさせ給はねば、かくな

むと聞き給ひて、おとども驚きて参り給へるを、御覽するにつ

けても、いとど忍びがたく思召されて、御泪のこぼれさせ給ひ

ぬるを、大方故宮の御ことをひる世なく思召したる頃なればな

めり、と見奉り給ふ。その日式部卿のみこ亡せ給ひぬる由、奏

するに、いよく世の中の騒がしきことを嘆きおぼしたり。斯

かる頃なれば、あとは里にもえまかで給はで、つとさぶらひ

世は盡きぬるにや。私の壽命も盡きてしまふのかしら。

故宮のおぼさむ所に、故母宮の思召を憚つてこそ帝位を譲る事も遠慮して居つたのですが、今は氣樂に暮したいもので、世の中湖月本は「世間」と書いて「よのなか」と傍訓を施してある。唐土にも、河海「堯湯自洪水大旱之責、高宗成王有德、後漢皇朝、雖有小異不失大德、周公奔楚（史記）貞觀政要曰、昔黃帝與蚩尤七十餘戰、其亂甚矣、既勝之後、便致太平、九黎亂德、顛頊暴虐、而湯放之、不失其治、桀為無道、武王伐之、即致太平、亦致太平、本朝延喜聖代之代、遷事以下歟、和漢先蹤不可勝計、

年頃御鏡にも、主上も今迄に御鏡を御覽になつても氣附いて居られた事實だが。

給ふ。しめやかなる御物語のついでに、冷泉院と源氏と

らむ、物心細く例ならぬ心地のみなむするを、天の下も斯くのどかならぬに、よろづ・あわただしくなむ。故宮のおぼさむ所

によりてこそ世の中のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ。と語らひ聞え給ふ。悪いとあ

るまじき御事なり。世の静かならぬことは、必ず政事のなほく、ゆがめる。にもより侍らず。さかしき世にしもなむよからぬ

事どもも侍りける。ひじりの御門の世にも、横さまの亂れ出でくる事、唐土にも侍りける。わが國にもさなむ侍る。ましてことわりの齡どもの、時至りぬるをおぼし歎くべき事にも侍らず」など、すべて多くの事どもを聞え給ふ。片端まね

ぶもいと傍痛しや。常よりも黒き御よそひにやつし給へる御かたち、たかふ所なし。うへも、年頃御鏡にもおぼし寄る事なれど、聞召しし事ののちは、又こまかに見奉り給ひつつ、

さすがにはしたなくも何といつても源氏がきまりわるくお思ひになりさうな事なので。

いと斯くさだくとかうまで確かにこの秘密を聞召しておいでならうとは氣附きなさらなかつた。

しか忍び給ひけむ事故母宮が秘して居られた事を聞き知つてしまつたと王命婦にも思はれたくない。

唐土にはあらはれても河海抄「秦始皇は莊襄王の子として位に即位し、雖も實は始皇の母太后に毒を飲ませ、呂不韋といふ臣下に密通して所生云々(見史記傳)」日本には日本ではさういふ例をかかつて御發見なさる所がない。

殊(い)にいとどあはれに思召(れ)さるれば、いかでこの事をかすめ聞え(源氏に)ばやとおぼせど、さすがにはしたなくもおぼし(め)・ぬべき事なれば、若(ま)き御心地(ま)に・つつましく、ふともえ打出で聞え給はぬほどは、只大方の事どもを、常より殊になつかしう聞えさせ給ひ、うちか(ま)しこまり給へるさまにて、いと御氣色殊なるを、かしこ(源氏)き人の御目には、怪しと見奉り給へど、いと斯くさだくと聞召したらむとはおぼさざりけり。

うへは、王命婦に委しき事・問はまほしう思召せど、今更にし(源氏)か忍び給ひけむ事・知りにけりとかの人にも思はれじ、只おとどにいかでほめかし問ひ聞えて、さき・斯かる事の例はありけりやと聞か(ま)むとぞ・おぼせど、更についで(の)もなければ、いよく御學問をせさせ給ひつつ、さま(の)にふみどもを御覽ずるに、唐土には、あらはれても忍びても、亂りがはしきこといと多かりけり。日本には、更に御覽じ得る所なし。

一世の源氏 皇族で源姓を賜はつて巨籍に下つたその第一世の人。
更にもこにもなり 是忠親王、兼明親王、盛明親王、等がその例である。
位にもつき給へるも 光仁天皇、桓武天皇、光孝天皇、宇多天皇など。

秋の司召 京官任官式。

御門おぼし寄するすぢの事 御門が考へてゐられる筋、即ち源氏に帝位を譲らうとの思召。

故院の御志 故院の御心持も、数ある皇子のうち、わけて私を御寵愛遊ばしたが。

今すこしの 少し年を取りましたら、引籠つて心靜かに佛道を勤めたいと思つて居ります。

たとひあらむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか。
・・・傳へ知る事もあらむとする。一世の源氏、また納言、
大臣になりて後に、
更にもこにもなり、位にもつき給へるも、
あまたの例ありけり、人がらのかしこきにことよせて、さもや
譲り聞え・ましなど、よろづにぞおぼしける。
秋の司召に、太政大臣・・になり給ふべきこと、うちく・に
定め申し給ふついでになむ、御門おぼし寄するすぢの事・漏
らし聞え給ひけるを、おとどいとまばゆく・・怖ろしうお
ぼし・・て、更にあるまじき由を申し返し給ふ・・故院の御
志、あまたの御子たちの御なかに、取りわきて思召しながら、
位を譲らせ給はむことを思召し寄らずなりにけり。何か、その
御心・改めて、及ばぬきはにはのぼり侍らむ。只もとの御あき
てのままに、おほやけに仕うまつりて、今すこしの齡かさなり
侍りなば、のどかなる行ひに籠り侍りなむと思ひ給ふる」と、

桐燈院の御指圖の通りに臣下

帝位を

源氏の御兄弟

源氏

内々

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

源氏

暫しと、もう暫く元の儘にと御
 斟酌なきる仔細があつて只位階
 だけ昇進して。親王や攝關など
 牛車許されて、親王や攝關など
 門まで牛車の宣旨を賜はれば、建禮
 出来る。牛車の儘で出入する事が
 みこになり給ふべき。皇子も親
 王宣下があつて親王となられ
 世の中の御後見。今は御門の後
 見すべき人がない。
 權中納言 奏上の兄、昔の頭中
 將。今一きは、權中納言がもう一階
 昇進した曉に一切の政事を讓つ
 てしまはう。

故宮の御ためにも、主上がこの
 秘密を御存じとすれば、藤壺の御
 爲にも氣の毒であり、又主上が御
 斯く煩悶するのも長多いので、御
 覽になるのも長多いので。
 命婦は、王命婦は、御匣殿が交迭
 した跡に引移つて、そこに局を
 戴いて主上に奉仕して居つた。
 案内し給へど、尋ねて見られた

薄雲

常の御言の葉に變らず奏し給へば、いと口惜しうなむおぼし。
 帝御心
 ける。太政大臣になり給ふべき定めあれど、暫しとおぼす所
 源氏は
 ありて、ただ御位添ひて、牛車・許されて參りまかでし給ふを、
 うちくるまを
 御門・飽かず忝きものに思ひ聞え給ひて、なほみこになり給ふ
 親王
 べき由を。給ふべき人なし、權中納言、大納言になり、て右大
 源氏の心甲
 將かけ給へるを、今一きはあがりなむに何事も讓りてむ、さて
 飛任
 のちに、ともかくも静かなるさまに、とぞおぼしける。なほお
 源氏の思案
 ぼしめぐらすに、故宮の御ためにもいとほしう、又うへの斯く
 藤壺
 おぼしなやめるを。見奉り給ふ。も忝きに、たれ
 斯かる事を漏らし奏しけむと、怪しうおぼさる。命婦は
 思ひめぐらし給ふ
 御匣殿のかはりたる所に移りて、曹司賜はりて參りたり。
 源氏の
 とどたいめんし給ひて、この事を、もし物のついでに、と、案内し給へ
 源氏の
 露ばかりにても漏らし奏し給ふ事やありし」と、案内し給へ

かけても藤壺は主上が一寸でもこの秘密を聞召す事を大變な事と思召して、又一つにはこの事に對して親子の禮を失する佛心配しておいでになりまし

一方ならずあれやこれやと故宮の用心深かつた事を源氏が限なく追慕せられる。

おぼしもしるき源氏が豫想した通りの主上のよいお世話役で、落標卷の末に秋好を内相せる事について藤壺と源氏と相談される所に「すこし大人びて添ひさぶらはむ御後見は、必ずあるべき事なりけり」とあつた。一四五頁。

今はむげの親さまに源氏は今は全く親といふ態度で梅壺を世話される。

こまやかなる 色の濃い。

世の中の騒がしき世の中の平穩ならぬ事などを口實になさつての精進であるから。

ど、命（命）更に、かけても聞召さむことを、いみじき事に思召して、かつは罪得る事（事）にやと、うへの御ため（事）を（事）、なほ思召し歎きたりし（事）と聞ゆるにも、一方ならず心深くおはせし（おほせ）御有様など（を）、盡きせず戀ひ聞えさせ給ふ。

齋宮梅壺即ち秋好の女御は、おぼしもしるき御後見にて、やんごとなき御（主上の御寵愛が厚い）覺えなり。御用意有様なども、思ふさまにあらまほしう見え給へれば、忝（主上が梅壺を梅壺が里下りされた）きものにもてかしづき聞え給へり。秋の頃二條の院

に（梅壺が里下りされた）まかで給へり。寢殿の御しつらひ、いとど輝くばかりし給ひ（な）て（へり）。今はむげの親さまにもてなしてあつかひ聞え給ふ（へり）。

秋の雨いと靜かに降りて、お前の前栽（どの花）の（花）いろく（花）亂れたる露のしげさに、古への事（源氏は）もかきつづけおぼし出でられて、御袖も濡れつつ女御の御方に渡り給へり。こまやかなる鈍色（鈍色）の

御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことづけ給ひて、やがて御さうじんなれば、數珠引きかくして、御さまよくもてなし給

あさましうのみ 御息所が私を
あまりと思はれるほど恨みつめ
た儘で死なれた事が私に永劫の
悲しみの種と思はれたのです
が、あなたを斯う迄もお世話も
し親しくも思つて頂くので、それ
を慰めと思つて居ますが。

燃えし煙の 源氏に對する恨が
永久に解けずにある事。奥入一結
ばほれ燃えし煙もいかがせむ君
だにかけよ長き契もいかがせむ君
なほいげせう 御息所の後世の
障りにならうかと氣がかりで
す。身の無きに沈み 配所に沈淪し
て居つた時分。

おだしう 今は東院に引取つて
不自由なく暮して居る故私も安
心しました。我も人も私も外の人も花散里
の性質を見抜いて。

さしも心に さう深く嬉しいと
も思はず、色めかしい事はまだ
やめ得ずに居りますが、あなた
に對しても随分胸の思を抑へて
お世話をして居るのだとは御存
じでせうか。あはれと 同情しますとでも一
言仰しやつて貰はなけれど、ど
んなに張合のない事ではせう。

まづ一つは、この過ぎ給ひにし御事よ。あさましうのみ思ひつ
めてやみ給ひにしが、ながき世のうれはしきふしと思ひ給へ
られしを、かうまでも仕うまつり御覽ぜらるるをなむ慰めに思
う。給へなせど、燃えし煙のむすばほれ給ひけむは、なほいぶせ
うこそ思ひ給へらるれ」とて、今一つは宣ひさしつ。中頃身
の無きに沈み侍りし程、かたぐに思ひ給へしこと、片端
づつかなひにたり。東の院に物する人の、そこはかとなくて心
苦しう覺えわたり侍りしも、おだしう思ひなりにて侍り。心ば
への憎からぬなど、我も人も見給へあきらめて、いとこそ
さわやかなれ。かく立ちかへり、おほやけの御後見・仕うまつ
る喜びなどは、さしも心に深くしませず、かやうなる。
すきがましき方は、しづめがたうのみ侍るを、おぼろげに
思ひ忍びたる御後見とはおぼし知らせ給ふらむや。あはれ
とだに宣はせずば、いかにかひなく侍らむ」と宣ふ。

むつかしうて 不愉快な気がし
て。さりや やつぱり自分を嫌つて
られるのだ。程。思ふ事残さず 心残りのない

かずまへさせ給へ 遺族の者を
世話してやつて下さい。

聞きつきて 源氏はそれに聞き
取れて。はかしくしき方の 子孫繁昌の
望はさておき。前に「御門廣げ
させ給ひて」とあるのを受けた
文句。心のゆく事も 満足を感じる程
の事もして見たいものです。程
そのころの 色の別けの成程
と賛成の出来程はつきりした
判定はありませんが、河内本に
「そのいる」とあるのがよろしか
らう。

秋好心
むつかしうて、御いらへもなけれは、（聞え給はず） 源やつぱりさうだ さりや。あな心憂
とて、異事ことごとくにいひまぎらはし給ひつ。源「今はいかでのどやかに、
生ける世の限り（の世を）、思ふ事（を）残さず、のちの世の勤めも
心にまかせて、こもり居なむと思ひ侍るを、この世の思ひいで
にし（す）つべきふしの侍らぬこそさすがに口惜しう侍りぬべけれ。
數ならぬを（を）さなき人の侍る、生ひ先いと待遠なりや。忝くと
も、なほこの門廣げさせ給ひて、侍らずなりなむのちにも、か
ずまへさせ給へ」など（願もしゆじ）。聞え給ふ。御いらへはいとあ
ほどかなるさまに、からうじて一言ばかり（など）。かすめ給へるけ
はひ、いとなつかしげなるに、聞きつきて、しめ（しんみりと）と暮るる
までおはす。源「はかしくしき方の望み（を）はさるものにて、年の
内ゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆく事
もし侍りにしがな。春の花の林、秋の野のさかりを（なむ昔より）
とり（を）に人争ひ侍りける。そのころのげにと心寄るばか

唐土には文集三十春遊逢春
 不遊樂但恐是癡人莫入晉石
 季倫居金谷春花滿林作二
 五十里錦潭二
 秋のあはれを拾遺雜下「春は
 只花のひとへに咲くばかり春の
 哀は秋ぞまされる」萬葉一額田
 王「冬も鳥も春さりくれば、
 鳴かざりし、鳥も來鳴きぬば、
 かざりし、花も咲けれど、山を
 茂み、入りても取らず、草深み、
 取りても見ず、秋山の、木の葉
 を見ては、もみちをば、取りて
 ぞしぬぶ、青きば、置きてぞ
 歎く、そこし恨めし、秋山吾は」

まして春秋の優劣は源氏さへ
 判定出來ないのにまして私如き
 怪しと聞きし古今戀一「いつ
 とでも戀しからずはあらねども
 秋の夕べは怪しかりけり」秋の
 夕べがはかなく亡くなりたる母
 君に涙の露に縁があるやうに
 君は思はれまじ故に齋宮を秋好
 (あき)のむすとも申す
 君もさばあはれをかはせ人知れず我身にしむる秋の夕風
 のですからしみて哀と思つて居る
 は私の心に同情して下さい。源
 氏が秋好に對する思慕の意がこ
 もつてゐる。

り、あらはなる定めこそ侍らざんなれ、唐土には、春の花の錦
 に如くものなしといひ(侍)はンべめり。大和言の葉には、秋のあ
 はれを取立てて思へる、いづれも(捨てがたじ)時々につけて見給
 ふに、目移りて(つこ)、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへ侍らね。
 せばき垣根の内なりとも、その折々の心見知るばかり、春の花
 の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野
 邊の虫をも住ませて、人に(も)御覽せさせむと思ひたまふるを、
 いづかたにか御心寄せ侍るべからむ」と聞え給ふに、いと聞え
 にくき事とおぼせど、むげに絶えて御いらへ聞え給はざらむも
 うたてあれば、秋好(じ)「ましていかか思ひわき侍らむ。げにいつとな
 きなかに、怪しと聞きし夕(秋の夕)へこそ、はかなう消え給ひにし露の
 よすがにも(睦まじう)思ひ給へられぬべけれ」と、しどけなげに
 宣ひ消つともいとらうたげなる(御はげじ)に、え忍び給はで、
 「君もさばあはれをかはせ人知れず我身にしむる秋の夕風
 源氏

梅盛のさま

無難作に

御息所

忍びがたき あなたを戀ふる心

えこめ給はて 源氏は胸の思を包みきれないで。いつとうたてともいやな事だと思つて居られるのも尤の事だし。

物深う 源氏の歎きの一通りでないやうだの意。思慕の情も深やはらづつ 宮が少しづつ奥にはひつて行かれる様子なので。誠に心深き人は 本當に分別のある志の人といふものは、そんないやな仕打はしないものです。

柳の枝に 俊拾遺春上中原致時が「梅が香を櫻の花に匂はせて柳の枝に咲かせてしかな」
対 西の對なる紫上の方。

忍びがたき折々も侍りしか」と聞え給ふに、いづこの御いらへかはあらむ。心得ずと。おぼしたる御氣色なり。このついでにえこめ。給はて、恨み聞え給ふ事どもあるなし。今すこし。ひかがごともし給ひつべけれども、いとうたてとおぼいたるもことわりに、わが御心。も若々しうけしからず、とおぼしかへして、うち歎き給へるさまの物深うなまめかしきも、心づきならぞおぼしなりぬる。やはらづつ引き入り給ひぬる氣色なれば、あさましうもいとませ給ひぬるかな。誠に心深き人は、かくこそあらざんなれ。よし、今より。憎ませ給ふなよ。つらからむ」とて、渡り給ひぬ。うちしめりたる御匂ひ。とまりたるさへ、うとましくおぼさる。人々御格子などまゐりて、「この御いとねの移香、いひ知らぬものかな。いかで斯く取りあつめ柳の枝に咲かせたる御有様ならむ。ゆゆし」と聞えあへり。對に渡り給ひて、とみにも入り給はず。いたう眺めて、端

人々 女房達を。

かうあながちなる こんな無理な戀の爲に胸が一ぱいになる癖がまだ自分には残つて居るよと。

怖ろしく罪深き 過去の好色の段と甚だしかつたであらうが、それは佛や神もお許し頃の過失であらうと氣休めしてゐるにつけても。

なほこの道は 矢張戀路についてはもう分別が出来て来て心配はいらぬのだと自分ながら痛感される。

くやしう 秋の哀れを理解してゐるやうな口をきいた爲に、源氏もいやらしい「君もさほ」の歌を詠んだのである、だからなまじ知つたよかぶりなことを云はなかつたらよかつたとくやしう思ふ意。

いとすくよかに 生眞面目に何氣なく装つて、より一段と親らしい態度をして居られる。

御心とまるばかりの お氣に召すやうな遊びをしたものだ。

近う臥し給へり。燈籠遠くかけて、(戀) 近く人々(など) さぶらはせ

給ひて、物語などさせ給ふ。源氏の反省 かうあながちなる事に胸ふたがる

癖のなほありけるよ、とわれ(御身) ながらおぼし知(子) 知る。秋好を戀ふる これは

いと似けなき事なり、怖ろしう罪深きかたは多く(も) まさりけめ

ど、いにしへのすきは、思ひやりすくなき程のあやまちに、佛

神も許し給ひけむとおぼしさます(も) なほこの道はうしろや

すく深きかたのまさりけるかな、とおぼし知らせ給ふ。秋好 女御は、

秋のあはれを(思ひ) 知りがほにいらへ聞えけるもくやしう恥かし

と、御心一つに物むつかしう(も) なやましげにさへし給ふを、源氏 い

とすくよかにつれなくて、常よりも親がりありき給ふ。榮上 女君に

源 女御の秋に心を寄せ給へりしもあはれに、君の、榮上 春のあけほ

のに心(を) しめ給へるもことわりにこそあれ。時々につけたる木

草の花に寄せても、御心(を) とまるばかりの遊びなど(も) してし

がな。公私多忙なわが身が あほやけ私の營みしげき身こそふさはしからね。いかで

只御ため これも只あなたの爲
にお淋しからうと思ふのが心苦
しいのです。

山里の人 明石上。
所せさのみ 身分が一層高くな
つて自由には出かけられないの
世の中を 以下源氏の心。明石
上は世の中をつまらなくつらい
ものだと思つて居る様子だが、
何もそんなに思ふにも當らない
い。氣輕に京に出て来て、好い
加減な生活はしたくないと思つ
て居るのは身の程知らずだと源
例の不斷の 嵯峨野の御堂で催
される。

つらかりける御契りの 恨めし
い夫婦仲ではあるが流石に浅い
因縁ではない事を思つて見る
と、却つて悲しくて。

斯かるすまひに 私も須磨明石
で斯様な住居の経験があるが、
もしさうでなかつたら珍らしく
感じた事でせう。海邊の住居で
あつたから、「しほじむ(潮染
む)」といふ語を用ひたものであ

思ふこととしてしがなと、只御ため(にや)。さうくしくやと思ふこ
そ心苦しけれ」など語らひ聞え給ふ。

山里の人(を)様子はどうかといかになど絶えずおぼしやれど、所せさのみまさる

御身にて、渡り給ふこといと難し。世の中をあぢきなく憂しと

思ひし(め)。る氣色、などかさしも思ふべき、心やすく立ちいでて、

おぼぞうのすまひはせじと(なと深く)。思へるを(も)、おほけなし、とは

おぼすものから、(いと)いとほしくて、例の不斷(ふだん)の御念佛にこと

づけて渡り給へり。(大井に)住み馴るるすまに、いと(放深く)。心凄げな

る所のさまに、いと深からざらむ事にて、だに、あはれ添ひぬべ

し。まして見奉るにつけても、つらかりける御契りの、さすが

に淺からぬを思ふに、なかく(お)にて慰めがたき氣色なれば、こ

しらへかね給ふ。いと木繁(こ)きなかより、篝火(と)どもの影(と)の、

遣水の螢に見えまがふもをかし。源「斯かるすまひにしほじまざ

らましかば、珍らかに覺え(こ)まし」と宣ふに、

いさりせし影の歌、あの篝火を見
 と、明石の浦で苦しんでゐた
 時の漁火の影も思ひ出される、
 これは明石時代のつらさが私の
 跡を追つて來たのであらう。う
 跡を「憂き」といふ事をいふ
 代りに漁火の縁で舟を出したま
 思ひこそ、此處での物思ひも明
 石での物思ひも似たやうなもの
 でございませう。「思ひ」に火をひ
 びかしてあります。
 薄からぬの歌、私の深い心の底
 を御承知ない爲に嘆き悶えて居
 られるのでせうか。孟津抄「篝
 火の影となる身のわびしきは流
 れて下に燃ゆるなりけり、こは
 たの思ひは深きを、そなたは淺
 く思召して、心の騒ぎ給ふにや
 とよめり」
 古今戀一に見える
 たれ憂きもの六帖五「うたか
 たも思へば悲し世の中をたれ憂
 きもの知らせそめけむ」

「明石
 いさりせし影忘れぬ篝火は身の浮きに憂きをいひかけたものうき舟や慕ひ來にけむ
 思ひこそまがへられ侍れ」と聞ゆれば、

「源氏淺からぬしたの思ひを火をかけてある知らねばやなほ篝火の影は騒げる

たれ憂きもの」と、反對に源氏の方からあしかへし恨み給ふ。大方・物靜かにもおぼ

さるる頃なれば、源氏は尊き事どもに御心とまりて、例よりは日頃大井に長逗留經

給ふにや、明石上がすこし思ひまぎれけむとぞ。

齋院 桃園式部卿宮の姫君で、
 権齋院 申す。源氏が心をかけ
 てゐられた。源氏にも「式部卿」と
 宮の姫君に朝顔奉り給ひし」と
 あつた。卷一、七三頁。
 御服 父宮の御喪の爲に齋院を
 おりらに遷された。式部卿宮は薄雲卷
 宮の末に遷された。二五五頁。
 宮類前はしかりし事を權齋院
 は以前にも源氏の爲に迷惑した
 事かと思ひ出されるので。
 女五の宮 式部卿宮の御妹で權
 齋院の叔母。
 故院の 故院が女五宮などを特
 別大切に思つておいでになつた
 ので、源氏は今も親しくそれか
 らそれへと普つれて居られるの
 である。
 同じ寢殿の 桃園の宮の同じ寢
 殿の東の方には女五の宮、西の
 方には權が。

權

齊院は御服にてありぬ給ひにき^(一)か^(二)し。おとど、例のおぼしそ
 めつる事絶えぬ御癖にて、御とぶらひなど、いと繁う聞え給ふ
 宮、煩らはしかりし事を^(三)おぼせば、御返り^(四)も打解けて
 聞え給はず。いと口惜しとおぼしわたる。長月になりて桃園の
 宮にわたり給ひぬるを聞き^(五)て、女五の宮のそこにおはすれ
 ば、そなたの御とぶらひにことづけてまうで給ふ。故院の、こ
 のみこたちをば心殊にやんごとなく思ひ聞え給へりしかば、今
 も親しくつぎ^(六)に聞えかはし給ふめり。同じ寢殿の西東にぞ
 住み給ひける。程もなく荒れにける心地して、あはれにけはひ
 しめやかなり。宮たいめんし給ひて、御物語^(七)・聞え給ふ。い
 と舊めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。このかみにお
 はすれど、故おほと^(八)の宮は、あらまほしく古りがたき御有様
 なるを、もて離れ、聲ふつつかに、こちんしく覺え給へるも
 さるかたなり。女五院のうへかくれ給ひてのち、よろづ心細く覺

この宮さへ御兄式部卿宮まで
が墓去されたので。

かしこくもお氣の毒なほど年
寄られた事だ。

たま／＼偶召返されて朝廷の
要職に任ぜられてからは
取り亂り暇なくあれやこれや
政務多端の爲に。

いと／＼あさましく院の崩
御や源氏流諷の事など。

かくて世に立ちかへり又再び
歸京なさいました芽出度さを思
ふと、先年の流諷中に私が死ん
だしまひましたら残念な事だつ
たらうと存じます。
うちわななき聲をふるはし
て。

え侍りつるに、年の積るままに、いと涙がちにて過ぐし侍るを、
 この宮さへかく打捨て給へれば、いよ／＼あるかなきかにとま
 り侍るを、かく立寄り訪はせ給ふになむ、物忘れしぬべく侍る」
物思を忘れさうな氣がします
 と聞え給ふ。かしこくも古り給へるかな、と思へど、うちかし
女五宮を見ての源氏の心
 こまりて、運院かくれ給ひてのちは、さま／＼につけて同じ世
 のやうにも侍らず。覺えぬ罪にあたり侍りて、知らぬ世に惑ひ
須磨明石に
 侍りしを、たま／＼おほやけにかずまへられ奉りては、また取
女五宮の方に
 り亂り暇なくなどして、年頃も、参りて古への御物語をだに
 聞え承らぬを、いぶせく思ひ給へわたりつつなむ」など聞え給
無常な世の有様を
 ふを、女五いと／＼あさましく、いづかたにつけても定めなき
疎々と長らへて
 世を、同じさまにて見給へすぐす命長さの恨めしきこと多く侍
 れど、かくて世に立ちかへり給へる御喜びになむ、ありし年頃
 を見奉りさしてましかば、口惜しからましと覺え侍る」
思給へられけ
 と、
老いたるさま
 うちわななき・給ひて、女五いと清らにねびまさり給ひに
泣
源氏の美しさをほめるのである

ゆゆしく覺え、あまりの美しさに不幸な事でもありはせぬかと恐ろしくさへ思はれました。

殊に斯く、わざ／＼面と向つてはほめぬものだと源氏はをかしとお思ひになる。

怪しき御推し量り、とんでもない御推量です。

時々見奉らば、時々あなたに目にかかれば、残りずくない命も延びる事だ、せう。
三の宮、葵上の母宮。
さるべき御ゆかり添ひて、舞姑といふ縁ひの出来るのを羨しく思つて居ります。
さやうにこそ悔い給ふ、さう申してあなたを舞にしなかつた事を後悔。私が舞として陸じくして居りましたら。

榎

けるかな。 源氏が子供であつた頃 わらははに物し給へりしを見奉りそめし時、世に斯か

る光の出ではしたる事と、おどろかれ侍りしを、時々見奉る (と) だ・にゆゆしく覺え侍りてなむ。『内のうへなむいとよく似奉ら

せ給へる』と人々聞ゆるを、さりと 冷泉院が も劣り給へらむとこそ推し

量り侍れ』と、なが／＼と聞え給へば、殊に斯くさしむかひて

人のほめぬわざかな、とをかしく (と) おぼす。 須磨に下つて 山がつになりて、

すつかり源入りこんでしまつた數年の後 いたう思ひくづほれ侍りし年頃ののち、こよなく衰へにて侍る

ものを、 冷泉院 うちの御かたちは、古への世にも並ぶ人なくやとこそ

世にも類なく ありがたく見奉り侍れ。怪しき御推し量りになむ』と聞え給ふ。

女五「時々見奉らば、いとどしき命や延び侍らむ。今日は老いも忘

れ、憂き世の歎き皆さめぬる心地なむ』とてもまた泣い給ふ。

女五「三の宮羨しく。 源氏を舞にしてゐられるから さるべき御ゆかり添ひて、親しく見奉り給ふ

をうらやみ侍る。この亡せ給ひぬるも、 式部卿宮 さやうにこそ悔い給ふ

折々ありしか』と宣ふにぞ、 源氏 すこし・耳とまり給ふ。 (御) 源「さもさ

気色はみ聞え給ふ、意中をそれと知らせるやうな、氣を持たした口のきゝかたをなさる。

のどやかに、楳のさまを源氏が想像するのである。

かくさぶらひたる、折角参上した機会を失したるは、誠意が足りないうですから。

鈍色の御簾、喪中故に帽額や縁を鈍色にしたのである。

追風なまめかしく、薫物の香を吹送る風もなまめかしく。

すのこは、源氏の御座席が縁側では人前もわるいから。

宣旨、權齋院の侍女。

今更に、若々しき御簾の中に入外に置かれたは若者扱ひにされるやうな氣がします。

神さびにける、長い間あなたを爲に盡した骨折も数へて見れば澤山有るのですから、もう御簾の内外の出入もお許し下さる事だらうと當て居つたのである。

内外も、簾の内外も、婦人の居る部屋の中にも、男子は特別に深い關係がなければ入る事はない。

ありし世は、今までの生活は夢であつたとして。

ぶらひ馴れなましかば、いまに思ふさまに侍らまし。皆さし放たせ給ひて」と、恨めしげに、うち楳に心かかる故氣色はみ聞え給ふ。庭草の風情も珠に面白、

あなたのお前を見やり給へれば、枯れくゝなるせんざいの心ばへも殊に見わたされて、のどやかに、こゝ眺め給ふらむ御有様かたちもいとゆかしくあはれにて、なほこえ念じ給はで、源かくさぶらひたるついでを過ぐし侍らむは、志なきやうなるを、楳の君にも御挨拶しなればはなりませんあなた御とぶらひ聞ゆべかりけりとて、やがてすのこより渡り給ふ。

暗うなりたる程なれど、鈍色の御簾に黒き御几帳の透影あはれに、見渡されこ追風なまめかしく吹きとほし、たろけはひあらまほし。すのこは傍痛ければ、南の廂に入れ奉る。宣旨たいめんして、御消息、楳のこい聞ゆ。源今更に若々しき心地する御簾の前かせ給ひてむとぞ頼み侍りける」とて、飽かずおぼしたり。源ありし世は皆夢に、見なして、今こそその夢からさめて見ると、夢の昔と現の今といずれはかないのかと今なむさめてはかなきやと思ひ給

私を顧外されまして

人知れずの歌 あなたに逢つてもよいおふ神のお許しの出る時を内々お待ち申して暮した年月の長い事はよく辛抱の出来ました今日に於ては何の禁制にかこつけて私を遁れようとなさ

さま／＼流滴のなやみと僅に對するなやみと、それぞれになさるはいといたうでも、相當

年輩にはなられたが、内大臣といふ地位には釣合はぬ程若々しくお見えになる。

なべて世の歌 一通り世の哀を語りあふだけでも、私のやうに一度神に仕へた身は、それは誓を破るのだと、直様神からお

「からには」さうすると直に「の意。」吹くから秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふら

その世の罪は 齋院時代の罪は皆科戸の風につけて被ひのけてしまひました。科戸は風の神で

級長戸邊神の事。懺せじの御腹をみそぎも、懺せじの御腹を

けて誓つたためしがありませんか。伊勢物語「懺せじと御手洗川にせし御腹神は受けずもなり

けるかな」

菫

分別がつかぬかたの居ますので、御せの功勞の事などはちからゆつくり考へ定める事に致しませうへ定めかたく侍るに、らうなどは静かにや定め聞えさすべう侍

らむ」と聞えいだし給へり。源氏の心げにこそ定めがたき世なれと、は

かなき事につけてもおぼしつづけらる。

「人知れず神の許を待ちしまにこころつれなき世を過ぐす哉源氏

今は何の諫めに、(か)かこたせ給はむとすらむ。須藤引退の後なべて世に煩はし

き事さへ侍りしのち、いろいろ煩悶しましたさま／＼に思ひ給へ集めしかな。いかで

片端をだに」と、源氏のあながちに聞え給ふ御用意なども、昔よりも

今すこしなまめかしきけさへ添ひ給ひにけり。さるはいといた

う過ぐし給へど、御位の程にはあはざめり。

なべて世の哀ばかりをとふからに誓ひし事と神やいさめむ源

とあれば、源あな心憂。その世の罪は、みな科戸の風にたくへ

てき」と宣ふ愛敬もこよなし。源みそぎを神はいかが侍りけむ」

など、とりとめもない事をはかなき事を聞ゆるも、源まめやかにいと傍痛し。世づか

ぬ御有様は、年月に添へても、奥へくと引込んで物深くのみ引き入り給ひて、え

今ぞとだに 住吉物語「君が門今ぞ過ぎゆく出でて見よ戀する人のなれる姿を」

過ぎにし 過去の情感が蘇つて來てこの詞によつて齋院に度々音づれた事が知られる

心やましくて むしやくしや心地で歸られた事故。

けざやかなりし はつきりした(とりつきはのない)あしらひをを受けて。「ねたく」を修飾する。

聞え給はぬを、侍女達は當惑した見奉りなやめり。源色めいたお話のやうになりました「すきくしきやうになりぬ

るを」(とて)など、源氏が淺はかならず打敷きて立ち給ふに、源氏よはひの積年を取ると面目ない目

りには、にあふものでしたおもなくこそなるわざなりけれ。源氏自身の事世に知らぬやつれを、

今ぞとだに聞えさすべくやはもてなし給ひける」とて出で給ふ

名残、所せきまで例の聞えあへり。女房達が大方の空もをかしき程に、

木の葉の音なひにつけても、過ぎにし物の哀取り返しつづ、そ

の折々をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心源氏のばへなども

思ひ出で聞えさす。女房達の心に

心やましくて立ち出で給ひぬるは、源氏はまして寢覺めがちにおぼし

つづけける。朝早く疾く御格子まゐらせ給ひて、朝霧を眺め(給ふ)。枯

れたる花どものなかに、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あ

るかなきかに咲きて、匂色つやひも殊にかはれるを折らせ給ひて、權に奉

れ給ふ。源氏「けざやかなりし御もてなしに、人前のわるい人わろき心地し侍り

て。後姿うしろ手もいとどいかが御覽じけむとねたく。されど、

見し折の歌 以前にあな
見た折の事が少しも忘れ
見が、あの頃の盛の美しさは過
ぎはしないのでせうか。

秋果てての歌 秋も暮れて霧の
罩めて居る垣根に纏ひついであ
るかなきかに色あせてゐる朝顔
の花、それが私の姿でございま
す。

人の御程 一體贈答の消息など
は、その人の身分や書振などに
取違はれて、その爲にその當座
に、尤もしく語り傳へる場合に
は、その當時どほりになりかね
るやうに思はれるので、有りの
まゝには書かれない。ごまかし
て書きまぎらして、その爲に。

礎

見し折のつゆ忘れぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらむ

年頃の積りもあはれとばかりは、さりともあほし知るらむやと

なむ、かつは」など聞え給へり。大人び給へる御文の心ばへに、

あぼつかかなからむも見知らぬやうにやとあほし、人々も御硯取

りまかなひて聞ゆれば、

「秋果てて霧の籬にむすばほれあるかなきかにうつる朝顔

似つかはしき御よそへにつけても露けく」とのみあるは、何の

をかしきふしもなきを、いかなるにか・・・置きがたく御覽

ずめり。青鈍の紙のなよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆ

めり。人の御程、書きざまなどにつくろはれつつ、その折は罪

なき事も、つきくしうまねびなすには、ほほゆがむ事もあめ

ればこそ。さかしらに書きまぎらはしつつ、あぼつかなき事も

多かりけり。立ちかへり今更に若々しき御文書なども似げなき

事とあぼせど、なほかく昔よりもて離れぬ御氣色ながら、口惜

東の對 源氏が二條院の東院に人を避けておいでになつて。さしもあらぬ つまらぬ身分の男にも厭き易い女などは。

誰も思ひなかるべき 雙方共色めいた心などない筈の御年輩や地位で。はかなき本草の一寸した本草を外さずにするのも、それを人が輕難と思はれはせぬかと他人の非難を憚つて。舊りがたく 昔の儘相變らず。

世の中に漏り 權に源氏が懸想して居るといふ事が。前齋院に 源氏が權に懇に言ひ寄るので、女五宮などにおかせられても相當受入れて居られるのだ。さりとも いくら何でもそんな事があれば自分隠してお置かなる事はあるまいとは思つた

得ず過ぎた事を思ふと逆も思ひ切れぬ気がするので、
しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじくおぼさるれば、
さらかへりて、まめやかに聞え給ふ。
心に權に言ひ寄られる。

東の對に離れおはして、
宣旨を迎へつつ語らひ給ふ。
源氏の侍女
さぶらふ

人々の、さしもあらぬきはの事を、だに靡きやすなるなどは、
あやまちもしつべくめで聞ゆれど、
宮はそのかみだにこよなくお
問途にも引起しうに
源氏を
源は昔でさへ源氏から綺麗に遠のいて居つた事故

ぼし離れたりしを、今はまして、
誰も思ひなかるべき御よは
(おもりかた)

ひ覺えにて、はかなき本草につけたる御返りなどの折すぐさぬ
も、かるくしくや取りなさるらむなど、人のものいひを憚り

給ひつつ、
うちとけ給ふべき御氣色もなければ、
舊りがたく同
源氏に
源の
源氏の心に

じさまなる御心ばへを、世の人にかはり、
珍らしくもねたくも
思ひ聞え給ふ。世のなかに漏り聞えて、「前齋院に、
懇に聞え給へ
源氏と前齋院とは俱合の夫婦に

ばなむ女五の宮などによろしくおぼしたなり。
似けなからぬ御
源氏と前齋院とは俱合の夫婦に

あはひならむ」などいひけるを、
對の上は傳へ聞き給ひて、
暫
しは、
さりともさやうならむ事もあらば、
隔てては、
おぼし
内は
禁上
(よも)
初の

うちつけに 句を隔てて「例な
まめくしくがれたる心に續く。
まめくしくがれたる心を何類にな
らうとするのを何類化して居られ
たのだと紫上は考へて。

同じすぢには 権も自分も同じ
宮家の血筋ながら、権は世の名
望も重いので、源氏が以前から
重んじて居られたのだから、自
分は馬鹿な目を見る事だらう。

いと物はかなきさまにて 幼少
な時から見なれておられる親し
さの心やすだてから、自分を輕
く扱ふやうにならうも知れぬ。
さまふに 源氏の隔意と自分
の體面とそれによろしき事
の事なら嫉妬なども源氏は並大抵
をわるくしないやうに仰しやる
のだが、これは心から恨めしい
と思召すので。

氣色をだに それならさうと様
子にだけども句はして下されば
よいに。

權

たらじ、とおぼしけれど、うちつけに目とどめ聞え給ふに、御

氣色なども、例ならずあくがれたるも心憂く、まめくしくお

ぼしなるらむ事を、つれなくたはぶれにいひなし給ひけむよ、

と、(おほす)、同じすぢには物し給へど、覺え殊に、昔よりやんご

となく聞え給ふを、御心など移りなば、世間に對して氣まりわるからうはしたなくもあべいか

な、と、年頃の御もてなしなどは、立ちならぶ方なくさすがに

ならひて、人におし消たれむことなど、人知れずおぼし歎かる。

かき絶え名残なきさまにはもてなし給はずとも、いと物はかな

きさまにて見馴れ給へる年頃のむつび、あなづらはしきかたに

こそはあらめなど、さまふに思ひみだれ給ふに、よろしき事

こそうち^恐ぞじなど憎からず聞え給へ、まめやかにつらしとおぼ

せば、色にもいだし給はず。源氏の心あくがれたるさま端近うながめがちに、内裏住まひうちずみ繁

くなり。(たまご)、役とは御文を書き給へば、紫上心げに人のことは空し

かるまじきなめり、氣色をだにかすめ給へかしと、うとましく

ふゆつがた 薄壺の諒闇故、十一月であるけれども神事も停廢されるのである。

なれたる 糊氣の落ちて柔になつた。

心弱からむ人はいかが 氣の弱い女はどうして疎かずにゐられようやと見えた。
はた聞え給ふ 秘密にしてはゐられるとはいへ、柴上に仰しや

側目 横顔。

罪もなしや お叱りを受けるやうな過ちも私にはありません。
鹽焼き衣 伊行釋「須磨の壺の鹽焼衣なれければ疎くのみこそなりませりけれ」
馴れゆくこそ 新古今戀三微子女王「馴れゆくは憂き世なればや須磨の壺の鹽焼衣間遠なるらむ」

のみ思ひ聞え給ふ。

ふゆつがた、神事かんわざなどもとまりてさうくしきに、源氏はつれづ

れとおぼしあまりて、五の宮に例の近づきまゐり給ふ。雪うち

散りてえん地なるたそがれ時に、なつかしき程になれたる御ぞど

もを、いよ香をくたきしめ給ひて、心殊にけさうじ暮し給へれば、

いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。さすがに柴上に暇乞をまかり申し

はた聞え給ふ。『女五の宮のなやましくし給ふなるを、とぶらお見舞に

ひ聞えになむ』とて、つい居給へれば、柴上は源氏の方を見もやり給はず、若君

をもてあそびまぎらはしおはする側目えはめのただならぬを、源「怪し

く御氣色の變れる・頃かな。罪もなしや。鹽焼き衣のあまりあまり見馴れ過ぎて見はえなく思召す

目なれ見だてなくおぼさるるにやとて、とだえおくを、又いかどんな意味に

か」など聞え給へば、『馴れゆくこそげに憂き事多かりけれ』

とばかりにて、うちそむきて柴上を臥し給へるは、見捨てて出で

給ふ道・物憂けれど、女五宮に今晚訪問する目を告げてあるので宮に御消息聞え給ひてければ、出で給ひ

斯かりける こんな事も起る筈の仲であつたのに。
にびたる御ぞども 源氏の衣裳のさま。

誠にかれまさり 本當にこれ以上源氏が自分から離れて行かれたならば悲しからうと。
御前 前驅の人。

譲り聞えつるを 女五宮のお世話を任せ申しておいたのだが。
今は頼む 女五宮が私に、以後は宜しく頼むと仰しやるのも尤

宮には 桃園の宮の御所では。
入り給はむも 君はその人繁き門から入られるのも軽々しいと思はれたので。

極

ぬ。斯業上心かりける事もありける世を、
心心をゆるして過して来た事であるよをゆるして過して来た事であるよ、
うらなくて過ぐしけるよ、

と思ひつづけて臥し給へり。
鈍色鈍色のの

かさなり好ましくな鈍色ではあるがか、見えて、雪の光にいみじくえん艶なる

御姿を見いだして、誠業上心にかれまさり給はばと、忍びあへずおぼ

さる。御前ごぜんなど、忍びやかなる限りして、
源源「うちよりほかのありきは、物憂きほどになりけりや。」
女五宮

て物し給ふも、式部卿の宮に年頃は譲り聞えつるを、『今は頼む』

などおぼし宜ふもことわりいとほしければ』など、
女房達女房達はいひ繕はる人々にも

宜ひなせど、人々源氏の缺點だいでや、御すき心の舊ふりがたきぞあたら御疵きずな

める。かる嫉妬沙汰などがしき事も出で來なむ』などつぶやきあへり。宮

には、北面の人繁きかたなる御門は、入り給はむもかるし

ければ、西西面にあるのが大きい門ではあるがなるかことしきを、人入供人れさせ給ひて、宮女五の御

かたに御消息あれば、今日今日はまさかお出にはなままいと宮は思つて居られたのに日しも渡り給はじとおほしけるを、驚

きてあけさせ給ふ。御門守みかどもり、寒さむげなるけはひ、
慌慌てながらてなき出で來

昨日今日と細流「青表紙本みそとせのあなたとあり。私安そとせも然也。その故は源氏今年卅一歳也。我身昨日今日のわらはべと思ひしはや卅年さきに成ぬると身を觀し給ふ也。尤みそとせ可用也(天文三九月講也云々)湖月師説「これ式部卿宮のかくれ給ひて此御所のいつしかと荒れたるにつけて、光陰の移り易く、物の有様の變り易き世を見つとも猶發心もせで、あだなる色に迷ふと思す心也」花鳥源氏廿七歳須磨より都へ歸り給ふ。今年は卅一歳。今年五ヶ年なれどみとせのあなたは三とせと云たれど、猶久しき事には三とせのあなたとはいへる也。夕霧巻にも「昨日今日と思ふ程に、みそとせよりあなたたの事になる世にこそあれ」とある。

て、とみにもえあけやらず、この男の外には召使もないのたろうこれよりほかのをのこはたなきなるべし、ごほくと引きて、門番カウ錠のいといたくさびにければ、あかず」と憂ふるを、あはれと聞召す。昨日今日とおぼすほどに、みそとせのあなたにもなりにける世かな、斯かるを見つ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、木草の色にも心を移すよ、とおぼし知らる。口ずさびに、

いつのまに蓬がもととむすほほれ雪ふる里と荒れし垣根ぞ降に古がかけてある

やや久しくひこじろひあけて入り給ふ。宮の御方に、例の御物語聞え給ふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞え盡し給へど、御耳も驚かずねぶたきに、宮もあくびうちし給ひて、女五宮「宵惑ひをし侍れば、物もえ聞えやらず」と宣ふほどもなく、いびきとか聞き知らぬ音すれば、喜びながら立ちいで給はむとするに、又いと古めかしきはぶさうちして參りたる人あり。

聞召したらむと私がこのお邸に居る事はお聞きの事と信じて居りましたに。

おばおとど 祖母殿。奏巻に源氏が祖母殿と物語の上にかつたといふ。卷一、三六〇頁参照。

親なしに臥せる旅人 拾遺哀傷一しなてるや片岡山のいひに飢ゑて臥せる旅人あはれ親なしすげみたる 商が抜けてすばまつた口元の思ひやられる聲づかひでありながら 甘えた物言ひをし舌つきにて
いひこし程に 「身をうしと云ひ來し程に今はまた人の上ともなげくべきかな」(伊行釋所引)この歌によつて「あなたもお年を召しましたな」とふざけかゝつて來たのである。この語を引歌なしに説かうとする説もあるが、この語のさまは必ず本歌あるべきものである。
まばゆさよ 開いてゐられな
これもあはれなり この歌の歌つてゐるところも哀れ深いといつて昔さかえた女御達の衰へを數へた書き方である。
このさかりに 源内侍の女盛りの頃籠を競つた女御や更衣達。

權

きて居るものと、
るものともかずまへさせ給はぬになむ。院の上は、おばおとど
と笑はせ給ひし」など名のり出づるにぞおほし出づる。源内侍
のすけといひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にて
ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知り給はざりつるを、
あさましうなりぬ。その世の事は皆昔語りになりゆくを、は
るかに思ひ出づるも心細きに、嬉しき御聲かな。親なしに臥せ
る旅人とはぐくみ給へかし」とて、寄り居給へる御けはひに、
いとど昔思ひいでつつ、ふりがたくなまめかしきさまにもてな
して、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる聲づかひの、さ
すがに・舌つきにて、うちざれむとはなほ思へり。いひこ
し程に」など聞えかかるまばゆさよ。今しも來たる老いのやう
に、などほほゑまれ給ふものから、引きかへこれもあはれなり。
このさかりに挑み・し女御、更衣、あるはひたすらなくなり
給ひ、あるはかひなくて、はかなき世にさすらへ給ふもあべか

桐慶院

私を

源氏は

源氏の心

女五

(なん)

生きて居ようとも

故院の御代の事

親のない孤兒と思つて私を

物によりか、つてゐられる源氏の

世話して下さい

相變らすの

(若)

源氏の心 今念に年を取つたのでもあるまいに

その意味(年節)ではなしに

跡形もなしに世を去られ

(給)

生き甲斐もなく

心ばへなども心構なども頼りなげに見えた人が却つて生き残つて長閑に佛道修行をして月日を送つて居るとは、惣じて定めない浮世なのだと思ひにないにつけて。

心ときめきに内侍は源氏が自分と對する戀情の動きと感違をして。年經れどの歌親の親即ちお祖母さんといつて頂いた御一言もございませぬ。君との御因縁は幾年たつても忘れませぬ。拾遺下「親の親と思はましねばとひてまし我が子の子にはあらぬるべし」身をかへての歌生をかへてあ世で子からでも御覽下さい、このどにかと。

よからぬもの世間ではよからぬもの譬へにして居るとか聞かされて。何か典據のあること

めり、入道の宮などの御よはひよ、聖い御壽命よあさましとのみおぼさるる

世に、年餘からいへは餘命もすくなさうであるのに年のほど身の残りすくなげさに、心ばへなども物はかな

く見えし人の生きとまりて、のどやかに行ひをもちして過ぐ

しけるは、なほすべて定めなき世なりとおぼすに、感慨無量な物あはれな

る御氣色を、内侍は心ときめきに思ひて、若やく。

年經れどこのちぎりこそ忘れられね親の親とかいひし一こと言

と聞ゆれば、源氏心うとましくて、

「身をかへて後も待ち見よ此に子がかけてある此世にて親を忘るる例ありやと

頼もしき契りぞや。いづれにつくりお話しませう今のどかにぞ聞えさすべき」とて立ち給ひ

ぬ。源氏の嫌なうに見えても如何とて西面には、御格子まゐりたれど、厭ひ聞えがほならむもい

かがとて、ひととま一間二間はあろさず。月さし出でて、うすらかに積

れる雪の光にあひて、なか〜いと面白き夜よのさまなり。ありさつき

つる老いらくの心げさうも、よからぬもの世のたとひとか聞

きし、とおぼし出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやか

人づてならで 後拾遺戀三「今はただ思ひたえなむとばかりな」

故宮などの 故父宮などが私を源氏に縁づける御考であられたのを私とはとんでもない恥かしい事と思つて其儘になつて居つたのだもの。

心やましきや 却つてじれつた

つれなさの歌 昔ながらのあなたは無情に居る私に取添へて、我ながら怨めしく思ひます。

心づからず 我とわが心から苦しむのです。古歌「戀しきも心づからぬわざなれば置所なくもぞ煩ふ」

げに傍痛し 「げに」は前に「人づてならで」と源氏のいつた言葉を受けたものである。返事もよくないでほつておくのは人前もこの言葉で「改めて」の歌をよま

改めての歌 今更お目には懸られませぬ。他の女に對しても君はかうした心居りますか。あつたと聞いて居りますから。元心は改める

僅

に聞え給ひて、^源一言、憎しなども人づてならで宜はせむを、^{熱心}思ひ絶ゆるふしにもせむ」と、^{式部御宮}あり立ちて責め聞え給へど、^心むかし我も人も若やかに罪許されたりし世にだに、^私故宮などの心寄せおぼしたりしを、^{年もふけ不似合な年輩}なほあるまじく恥かしと思ひ聞えてやみにしを、^{晩年の今}世の末に、^{一言の返事も恥かしい}さだ過ぎつきなき程にて、一聲もいとまば

ゆからむとおぼして、更に動きなき御心なれば、^{源氏心}あさましうつらしと思ひ聞え給ふ。^{併し源氏に恥をかかせるやうに構ひつけずに置いたりなどはせず}さすかにはしたなくさし放ちてなどはあらぬ人づての御返りなどぞ心やましきや。夜もいたう更けゆく

に、風のけは^{しき}ひ烈しくて、^{源氏の心に}まことにいと物心細く覺ゆれば、さまよき程におしのごひ給ひて、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらさに添へてつられ^{源氏}心づから」と宣ひ^{しきりに仰しやる}すさぶるを、「げに傍痛し」と人々例の聞ゆ。

「改めて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心變りを昔に變る事はならず」と聞え給へり。

女房達 源氏びいきの意

いと斯く世間の物笑の種にも
なり下さるな。我身の上を、人に漏
して下さるな。
いさら川 古今東歌「犬上のと
この山なるいさや川いさと答へ
せちに河内本の如く「せんじ
に」とあるべきである。
なざけおくれて なぜつれない
お仕打をなさるのでせう。

げに 以下權の心。

物思ひ知るさまに 自分が君の
御情をありがたく思つて居る事
を知つて頂いた所で。

なつかしからむなざけも 君を
慕つて居るやうな氣持を示すの
もつまらぬ事だ。河内本に「い
と」とあるのに従ふべきである。

年頃沈みつる 今迄齋院として
佛から遠ざかつて居た罪障を贖
ふだけの勤行がしたいものだ。

源氏は いふかひなくて、いとまめやかに怒じ聞えて出で給ふも、いと

若々しき心地し給へば、源いと斯く世のためしになりぬべき有
様・漏らし給ふなよ。ゆめく。口どめするのなれくしすぎる申しやうですな
いさら川などもなれくしや」

とて、せち・にうちささめき語らひ給へど、何事にかあらむ。

人々も、「あなかたじけなせ・・・あながちになさけおくれても

もてなし聞え給ふらむ。かるくしく かるらかにおし立ちてなどは見え給は

ぬ御氣色を、心苦しう」といふ。げに 人の程のをかしきにもあ

はれにもおぼし知らぬにはあらねど、物思ひ知るさまに見え奉

る・とて、一般の女達が君をめで奉るのと同じに見られるだけの事だらう めで聞ゆらむつらにや思ひ

なされむ、かつはかるくしき心の程も見知り給ひぬべく恥か

しげなめる御有様を、權がと思せば、なつかしからむなざけもいと

どあいなし、よその御返りなどは打絶えで、おぼつかかなかるま

じき程に聞え給ひ、取次を以ての應答位は人づつての御いらへはしたなからで過ぐして

む・・・深くおほす、年頃沈みつる罪失ふばかり御行ひを、とはあ

俄に斯かる急に源氏との關係を打ち切りがほに見せるのも却て思はせぬるの新人のやうに「見え聞えて人の今手ならば」「人がさういふやうに解釋して」「源氏の目にも耳にもさういふやうに寫らない筈はない」といふ順序にいふところである。

御兄弟の君達 權の兄弟。

さばかりめでたき人の あんな立派な源氏が懇切に情意を盡されるので、
一つ心と見ゆ 源氏と同じ腹と思はれる。

げにはた人の御有様 源氏の人の柄や聲望が特に申分もなく、人の道理を深く辨へ、世の人の善悪の區別も聞き集めて、以前より居られるから、今更の浮氣沙汰は一方では世間の非難を擲りながらも「はた」は戀に負けるのもいまいしく、いつて今更浮氣沙汰でもあるまいの意。

ぼし立てど、俄權の心づかひに斯かる御事をしも、もて離れがほなにあらむも、なか／＼今めかしきやうに、見源氏にえ聞えて人の取りなさじやは、と世の人の口さがなさを思し知りにかば、かつはさ侍女達ぶらぶ人にもうちとけ給はず、いたう御心づかひし給ひつつ、やう／＼御行ひをのみし給ふ。御兄弟おんぼらからの君達あまた物し給へど、一つ御腹らならねばいと／＼しく、宮邸内がの内いとかすかになりゆくままに、さばかりめでたき人の懇に誠に御心を盡し聞え給へば、皆人邸内の人が皆源氏に負負してゐるのも、一つ心と見ゆ。
源氏 ひとつ心と見ゆ。 無情な權の懇
あとは、あながちにおぼしいらるるにしもあらねど、つれな度が心外なのでき御氣色のうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、げにはた源氏の人の御有様、世の覺え殊にあらまほしく、物を深くおぼし知り、世の人のとあるかかるとけぢめも聞き集め給たまひて、昔よりもあまた經へまさりておぼさるれば、今更の御あだげも、かつは世のもどきをもおぼしながら、む權を手に入れなければなしからむはいよく人笑へなるべ

たはぶれにくく古今誹諧「ありぬやと試みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ戀しき」

御髪を搔きやりつつ源氏が紫上

太政大臣葵上の父。薄雲卷(二四五頁)に恭亮見譲る人なき政事を委すべき人がなくて忙しい爲にあなたと一緒に居られないことも多いのです今はさりともこんな仲になつては、もう大丈夫だとやきもきしないやうにおとなび給ひあなたも年を取られたやうだが

斯くまでからまで紫上から分けへだてされるのもつまらぬ事だ。

し、いかにせむ、と御心動きて、紫上の方二條の院に夜がれかさね給ふを、紫上女君は、たはぶれにくくのみち(も)ぼす。紫上は忍び給へど、いかが涙のうちこぼるる折もなからむ。源「あやしく例ならぬ御氣色こそ心得がたけれ」とて、御髪みだを搔きやりつつ、いとほしとおぼしたるさまも、繪にかかまほしき御あはひなり。源「宮亡せ給ひてのち、冷泉院うへのいとさうくしげにのみ世をおぼしたるも心苦しう見奉る。(り)太政大臣おほきも物し給はで、見譲る人なきことしげ事繁さになむ。この程の絶間などを、今まで見なれない事と見馴らはぬ事におぼすらむもことわりにあはれなれど、今はさりとも心のどかにおぼせ。おとなび給ひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまに物し給ふこそらうたけれ」など、源にもつれたまろがれたる御額髪おんひたひがみ引きつくるひ給へど、いよく紫上はそむきて物も聞え給はず。源「いといたく聞きわけがないのは若び給へるは、たが習はし聞えたるぞ」とて、源氏心常なき世に、斯くまで心あかるるもあぢきなのわざや、源氏のさまとかつはうちながめ給

齋院に 權に私が何でも思ひ違ひを申上げるのを、もしや思ひ違ひか。して居られるのではありませぬか。

昔よりこよなう 權は昔から浮いた心のない人ですが、寂しい折に、何だかだまつてゐられなくなつて私がるさく文通しなす。

斯くなむ かうくだとなあなたに同情を求める必要もない。

松と竹とのけぢめ 雪は降りかくしてゐても松と竹とは識別がついて。

あやしう 雪は色もないのに、妙に身にしみついて、このしみては「染みて」である。すさまじきためしに 舊註には此語が枕草子に見え、註にはあるが今の本にはない。總角巻にも、狭衣にも、更級日記にも、算物語にも見えてゐるから、古い典拠があらう。

權

ふ。 齋院にはかなしごと聞ゆるや、もしおぼしひがむる方ある。それはいと 見當違ひですもて離れたる事ぞよ。 いづれ分りますおのづから見給ひてむ。

昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを、さうくしき折々、ただならで 手聞え惱ますに、 御も無聊に暮して居られるのでかしこもつれく 眞剣な感ではないのだからに物し給ふ所なれば、たまさかの御いらへなどし給へど、 眞剣な感ではないのだからまめくしきさまにも

あらぬを、斯くなむあるとしもうれへ聞ゆべき事にやは。うしろめたうはあらじとを思ひなほし給へ」など、日一 業上を日慰め聞え給ふ。

給ふ。

雪のいたう降り積りたる上に、今も 雪が散りつつ、松と竹とのけぢ

めをかしう見ゆる夕暮に、 源氏人の御かたちも光りまさりて見ゆ。

氏「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉のさかりよりも、

冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色な

きものの身にしみてこの世のほかの事まで思ひ流され、面白さ

もあはれさも 悉く感ぜられる。残らぬ折なれ。 冬の月を殺風景なもの例に、いひおいた昔の人は思慮が浅い。すさまじきためしにいひおきけむ

むせびて 凍つてさら／＼と流
れない事。流れの音が停滞しが
ちなこと。

大きやかに なりが大きく物馴
れてゐる童女。

袖 婦人や童女の身に近く著る
服。 婦人や童女の身に近く著る
亂れ着 着方の整頓してゐない
こと。

宿直姿 宿直の時の装束で、唐
衣や袴や裳はつけない略装であ
る。 ちひさきは 小さい童女は。

かたへは 他の人々は東の縁な
どに出て居て。

一年 先年。以下紫の上に語る
詞。

くはしき御有様を 源氏は藤室
に逢つた事を隠して居られるの
である。

人の心淺さよ」とて、御簾まきあげさせ給ふ。月は隈なくさし
いでて一雪も月も一色に白くつ色に見え渡されたる・に(庭)、しをれたる前栽の蔭心苦
しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごき
に、わらは童女を庭にはべあるして、雪まろばしせさせ給ふ。をかしげなる
姿、頭つきども月にはえて、大きやかに馴れたるが、さま／＼
のあこめ袖亂れ着、帯しどけなき宿直姿上のぬすがたなまめいたるに、こよなう餘
れる髪あこめの末、自き庭には、ま一段と引立つて見え居るのが實に鮮明である。してもてはやしたる、いとけざや
かなり。ちひさき(ど)もは、わらは子供らしくはげて喜び走るに、扇なども落
して、打解けがほ・い(ど)もをかしげなり。いと多(く)うまろばさむとふ
く張るがつけがれど、えも押し動かさでわふめり。かたへは一部分、東ひんがしのつ
まなどに出でゐて、心もとなげに笑ふ。一ひととせ年、中宮藤原のお前に
雪の山造られたりし、世に古りたる事なれど、なほ珍らしくも
つまらぬ事を珍らしくおもはせるやうに工夫なかつた
はかなき事をしなし給へりしかな。何の折々につけても、口惜藤原の
じき事が 飽かずもあるかな。いとけどほくもてなし給ひて、くはし私は藤原の姿

もて出て 見たところ功者らしい事はありませんでしたが、いふかひありて一寸した事柄をも申分なく取りまかなはれまして、相談甲斐がありました。

君こそは あなたは何といつても藤壺の姪だけあつてよく似て居られるが、すこし嫉妬の氣があつて、きかん氣の勝つて居られるのがつらい。「知らねども武藏野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」

私も心づかひせらるべき 相手がつかりしてゐるからである。

あさはかなる 軽々しい振舞などなさらぬ性分でしたのに。

權

しい様子を見た事はないが、御有様を見馴らし奉りし事はなかりしかど、紫中に居られた時分御まじらひの程に、うしろやすきものにはおぼしたりきかし。私は藤壺をうち頼み聞えて、

とある事かかる折につけて、何事も聞えかよひしに、もて出てらうくじうをかじき事も見え給はざりしかど、いふかひありて、思ふさまに、はかなき事わざをもしなし給ひしはや。嘆世

に又さはかりのたぐひありなむや。柔和でおどくしたところがあつたがやはらかにおひれたるものから、深深みがあつて極める點はうよしづきたる所の並びなくものし給ひしを、君こそ

は、さいへど紫の故こよなからず物し給ふめれど、すこし煩煩はしきけ添ひて、かどくしさの進み給へるや苦しからむ。前齋別段の用意

院の御心ばへは、又さま殊にぞ見ゆる。物寂しい折さうくしきに、何と

事はなくとも相談相手にしはなくとも聞え合せ、私も氣兼ねて居なければならぬ人は私も心づかひせらるべき御あたり、只こ

の一人だけ功者で、奥めかしいらうくじく故々しき方は人にまさり給へれ。あさはかなる筋など、御心であるのにもて離れ給へりける人の御心を、怪しくもありける事

いとほしく、臘月夜には氣の毒にもあり遺憾に思ふ事が少くない。まいて、臘月夜のやうな人さへさうだから、まして。

人よりは、私は普通の人よりは非常におちついてゐると自分で思つて居たのでさへこの通りだから。

山里の人 明石上。

人より異なるべき 受領風情の娘だから、外の人とは同列には出来ぬ管のこと故。

いふかひなき 取りえのないやうな女とはまだ關係した事はありませぬ。

古りがたく 相變らず。

さるかたにつけての ああした種類の女としては殊勝な氣立の女ととりあげて馴れ初めてから、今も初と同じやうに演ましている態度で暮して居ります。

どもかな」と宣へば、臘月夜の事「さかし。なまめかしうかたちよき女のためしには、猶引きいでつべき人ぞかし。さう思ふのに私も思ふに、いとほしくくやしき事の多かるかな。まいて、ひたくうちあだけすきたる人の、年つもりゆくままに、いかにくやしき事多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひしだに」など宣ひ出でて、臘月夜かんの君の御事にも、泪すこしは、落し給ひつ。運この、かずにもあらずあとしめ給ふ山里の人こそは、身の程にはやや打過ぎ、物が分る物的心など得つべけれど、人より異なるべきものなれば、氣位の高いのを見思ひあかれない風して居ります。

れるさまをも見消ちて侍るかな。いふかひなききはの人はまだ見ず。人はすぐれたるは難き世なりや。ひんがし東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。何といつても、決してあは出来ぬものだなさはた更にえあらぬものを、さるかたにつけての心ばせ人に取りつつ見そめしより、やがて。

••• 同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。何といつても今はたかたみに背くべくもあらず深うあはれと思ひ侍る」など、昔今の

こほりとぢの歌 石間の遣水は凍つて流れかねて居るが、空に澄む月の光はよどみなく流れていく。

かんざしおもやう 髪の様子や類立ち。

いささか分くる すこし様の方に引かれて居る愛情も引戻されさうである。

かきつめての歌 色々取集めて昔の事が戀しく思ひ出される此の雪の夜に、浮寝の鶯の鳴く聲が猶一層の哀を添へる。

漏らさじと 源氏が紫上に藤壺の噂をしたからの怨みである。

御物語に夜更けゆく。月いよく澄みて靜かに面白し。女君紫上

こほりとぢ石間いじまの水はゆきなやみ空澄む月の影ぞながるる外とを見出だして、すこしかたぶき給へるほど、似るものなくう

つくしげなり。かんざしおもやう（なご）の、戀ひ聞ゆる人の面影藤壺

にふと覺えてめでたければ、聊か分くる御心も取りかへしつべし。（似て）をしのうち鳴きたるに、（さね）
（發聲）

かきつめて昔戀しき雪もよにあはれを添ふるをしの浮寝か源氏入り給ひても、宮藤壺の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢藤壺の姿をともなく

ほのかに見奉るを、いみじく恨み給へる御氣色にて、藤壺（秘密を）漏らさじと宣ひしかど、憂（二六）き名の隠れなかりければ、恥（死後の今）かしう苦しき

目を見るにつけても、つらくなむ」と宣ふ。御いらへ聞ゆとおぼすに、おそはるる心地して、女君（紫上）の、「こはなど斯くは」と

宣ふに、おどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、おさへて、泪も流れいでにけり、今もいみじく濡らし

とけて寝ぬの歌 物思に安眠も
出来ず心さびしくうつら／＼
してある冬の夜に、気が／＼りな
夢のなんと短い事よ。(寝たり
覺めたりで、長く眠られないか
ら、夢も短いの意)

この世の濁りを 現世の濁りを
洗つて成佛する事も出来ずに居
られるのであらうと、物の道理
を深く考へて見られると。

何わざをして どんな事でもし
て、知人もない冥界にさまよつ
て居られるのを見舞に行つ
て、その罪障に代つてあげたい
ものなど。

同じ蓮にとこそは この句の下
に「念じ奉り給ひけれ」といふや
うな言葉が省筆してある。

添へ給ふ。女君、^{業上}いかなる事にかとおぼすに、^{源氏は}うちもみじろか
で臥し給へり。

とけて寝ぬ寝覺淋しき冬の夜に結ばほれつる夢のみじかさ

なか／＼飽かず悲しとおぼすに、疾く起き給ひて、^{誰の爲ともいはずに}さとはなく

て、所々に御誦經など、^(所々に)せさせ給ふ。^{夢の中の藤壺の詞}苦しき目見せ給ふ、

と恨み給へるも、^(ふ)さぞおぼさるらむかし。^{佛を念願なさつて}行ひをし給ひ、^(ふ)よろ

づに罪かるげなりし御有様ながら、^{例の秘密一つの爲に}この一つ事にてぞ、この世

の濁りをすすぎ給はざらむと、物の心を深くおぼしたどるに、

^{源氏の心に}いみじく悲しければ、何わざをして、しるべなき世界におはす

らむを、とぶらひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばや、な

どつく／＼とおぼす。^{藤壺の}かの御ために、^(と)取立てて何わざをもし給

はむは、人咎め聞えつべし、^{冷泉院}うちにも、^{氣が替めて思ひ當られる事もあらう}御心の鬼におぼす所や

あらむ、とおぼしつ々む程に、^{あみだほ}阿彌陀佛を心にかけて念じ奉り

給ふ。同じ蓮にとこそは、

なき人まの歌 亡き藤壺を慕ふ
て行つてにまかせて冥途に尋ね
くことだらう、三途の川でまごつ
藤壺の姿は見えないのだから。

僅

源氏
なき人をしたふ心にまかせても影見ぬ水のせにやまどはむ
とあぼすぞ憂かりけるとや。

年かはりて、源氏今年三十三。色あらたまりて。喪服を脱いで常服に著換へて。四月の中の酉の日に行はれる。二酉の月には後の酉の日に行はれる。

思ひいづる事ども 齋院當時の事を追懐して。大殿源氏。

いかにのどかに 齋院をおりた事故。かきやはの歌 時も一變して、あなたが齋院もおり、藤の衣にやつれておいでになつたその除服の被をなさらうとは思ひかけませんでした。「かけき」は波の縁語。

立文すくよかに きまじめな立文で立文は正式書狀の式でな流韻事などに用ひる式ではな

み、懷紙を堅に巻いて襪紙に包み、更に白紙に包んで上下端を折る。

ふち衣の歌 喪服を著したのは昨日の事と思つて居りましたに、昨日は一轉して今日はや除服のお祓をする日になりました。か

勢「飛鳥川瀬にもあらぬ我宿もせ」は古今雑下伊勢「瀬に變る」は古今雑下伊勢「飛鳥川瀬にもあらぬ我宿も

はかなく 歌の「變る世を」からいひつづけるやうに書かれてあるはかなく思ふの意。

院宣 権の侍女。

少女

年かはりて、藤原の御一周忌宮の御はても過ぎぬれば、世のなか色あらたまりて、四月一日衣かへの程なども今めかしきを、氣が浮きくするまして祭の頃は、ましこ

大方の空の氣色心地よげなるに、齋院の前齋院はつれくとながめ給ふ。木前なる桂の木下風なつかしきにつけても、藤の侍女達若き人々は

思ひいづる事どもあるを、おほいどの大殿より、「御禊の日はいかにのどかにおぼさるらむ」ととぶらひ聞えさせ給へり。源文「ごぞの」今日

かけきやは川瀬の波も立かへり君が御禊のふちのやつれを」賀茂の乱川の波も

紫の紙・立文すくよかに、葉の料紙に巻をもたせて藤の花につけ給へり。折のあはれなれば御返りあり。

「ふち衣着しは昨日と思ふまに今日は御禊の瀬に變る世を藤に瀧をかけてある。

はかなく」とばかりあるを、藤氏例の御目とどめ給ひて見あはす。

御ぶくなほしの程などにも、藤氏から纏着料の吉服を贈った宣旨のもとに、所せきまでおぼし

やれる事どもあるを、院は見苦しき事に、院はおもほし宣へど、

おほやけさまの折々の表向のお見舞などは例の事で真面目な手紙だから。

いかがは聞えも とうないやうに
にしがは聞えも とうないやうに
取りかくすことが出来ようと困
もてわづらふべし 取扱ひに困
つてゐるやうだ。

こなたの宮にも 女五宮が權に
對面の折は。

何か今始めたる なあに、今更
の懸想でもない。
故宮も 父宮もあなたが齋院に
立たれた爲に源氏を掣にしない
事を駄いては、私の意志に背い
たからだと仰しやつて。

故おほいどの姫君 奏上。

をかしやかに氣味ほめかした御文などのあらばこそかくも聞
えかへさめ、年頃もすくしくしうしない給ひて、おほやけさまの
折々の御とぶらひなどは聞えならはし給ひて、いとまめ
やかなれば、いかがは聞えも紛らはすべからむと、もてわづ
らふべし。女五の宮の御方にも、かやうに折過ぐさずとぶら
ひ。聞え給へば、いとあはれに、女五の君の昨日今日の兒と思ひ
しを、かく大人びてとぶらひ給ふこと。かたちのいとも清
らなるに添へて、心さへこそ人には殊に生ひ出で給へれ」と、
ほめ聞え給ふを、若き人々は笑ひ聞ゆ。こなたの宮にもたいめ
し給ふ折は、女五「このおとどの、かくねんごろに聞え給ふ
めるを、何か。今始めたる御志にもあらず。故宮も、筋
違ひなことに給ひて、世話が出来な見奉り給はぬ歎きをし給ひては、『思ひ立
ちし事を、強ちにもて離れ給ひし事』など宣ひいでつづ、く
やしげにこそ思したりし折々ありしか。されど故おほいどの

三の宮 葵上の母宮。女五宮の御姉君。

えさらぬ筋にて物せられし人
動きのつれぬけあひで正妻に
すわつておれられた。あなたはその
げになどてかはあなごの事
あとになほられてもわるい事
ありすまいと。源氏が元
さらがへりて源氏が元
つて、懇に仰しやつて下さるの
も。

しか心ごはきものに 強情者と
思はれとほして来たのですも
の。

強ひても 無理にお勧めもなら
ない。

宮人 邸内の人々。侍女達。
上下皆心かけ 誰も皆源氏最
の人々故、どんな間違が起ら
も知れぬと氣づかはないが、
かの御みづからは 源氏自身。
あながちなるさまに 無理わざ
はお思ひにならぬ。

少女

の姫君物せられし限りは、三の宮のおもひ給はむ事のいとほし
さに、^(何かと)とかく言添へ聞ゆる事もなかりしなり。今はそのやんご
となくえさらぬ筋にて物せられし人さへなくなられにしかば、
げになどてかはさやうにて、^(も)おはせましもあしからまし、と打
覺え侍^(り)・るにも、^(かく)・さらがへりて斯くねんごろに聞え給ふ
も^(あるは)、^(宿縁といふものでせう)さるべきにもあらむと思ひ侍る」など、いと古代
に聞え給ふを、^(は)心づきなしと思して、^(交宮)故宮^(など)にも、しか心
ごはきものにおもはれ奉りて過ぎ侍りにしを、今更に又世に靡^(源氏に靡くの)
き侍らむも、いとつきなき事になむ^(思ひ給へらるる)・・・と^(ほかり)聞え
給ひて、恥かしげなる御氣色なれば、^(え)強ひてもえ聞えおもむ
け^(聞き)・給はず。宮人も、上下^(なたかなた)・皆心かけ聞えたれば、世
の中いとうしろめたくのみ思さるれど、かの御みづからは、^(は)わ
が心を盡しあはれを見え聞えて、^(奉り)人の御氣色の、うちもゆる^(は)が
む程をこそ待ちわたり給へ、^(頼の聲く折を待ちこそすれ)さやうにあながちなるさまに御心

大殿腹の若君 葵上殿の夕霧。二條の院にてと 元服式を源氏の里邸二條院で挙げたいと源氏は思ふけれども。大宮 葵上の母、夕霧の祖母。右大將殿 大宮の居所三條殿。に右大將に昇進。伯父即ち葵上の兄。夕霧の伯父。あるじがたにも 主人側の三條殿でもとこれの伯父の君達が我も我もとそれ元服に關する相當なお世話をする。所せき「勢なり」を修飾する。大した。四位になしてむと 源氏は夕霧を四位にしようと思ひ。わが心にまかせたる 自分の思ひの儘の天下であつて、人の意表に出て 四位にするといふ事もありきたりのいき方だとあつて、源氏はそれを中止された。御對面ありて 源氏が大宮に對面されて。この事聞え給ふに 六位にしておく事の不平を申された所が。おひつかす 諸説あるが河海抄(或説に「老つ」は今よりおとなし)萬葉集并にこの物語に「おいつ早くから元服させたり叙官させたりしておとなしくさせないがよからうと思ふがの意。

やぶりに聞えむなどは、おぼさざるべし。
 大殿腹の若君の御元服の事おぼし急ぐを、二條の院にておぼせど、大宮のいこゆかしげにおぼしたるもことわりに心苦しげ
 思したれば、なほやがてかの殿にてせさせ奉り給ふ。右大將殿をはじめ聞えて、御をちの殿ばら、皆上達部のやんごとなき御覺え殊にてのみ物し給へば、あるじがたにも、我も我もとさるべき事どもとり、に仕うまつり給ふ。大方世ゆすりて、所せき御いそぎの勢なり。四位になしてむと
 おぼし、世の人もさぞあらむと思へるを、まだいとさびはなる程を、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりかなからむも、なか目馴れたる事なりと、おぼしとどめつ。浅黄にて殿上に歸り給ふを、大宮は飽かずあさましき事とおぼしたるぞことわりにいとほしかりける。御對面ありて、この事聞え給ふに、只今かうあながちにしも、まだきにおひつかすま

今二三年も、もう二三年は棒に振つた積りで、そのうちに朝廷のお役に立つ程になつたら出世も致しませう。今人となり侍りなむ、すぐに一人前になりませう。

お前に 相臺院のお側に。

かしこき御手より 桐壺帝から傳へた道でさへ。

廣き心を 廣い知識を持たなかつた間は學問を學ぶにしても、ね足らず 意味が明かでない。河内本に従つて「年足らず」としては益分らない。これは琴笛が直上にあるので、その方では音が十分でない、といつて、文才の不完全を兼ねたいひ方ではなはいかとおもふ。賢い子でもつまらぬ親にまさせる事はむつかしい事ですから。思ふ給へおきて 夕霧に學問させようと決心したのです。

さかりに 日常盛んで。學問などに 學問などで苦勞する氣にはならないでせう。

少女

じう侍れど、思ふやう侍りて、大學（あ）の道に暫しならはさむの本意侍るにより、今二三年をいたづらの年（ふたとせみとせ）に思ひなして、あづからおほやけにも仕うまつりぬべき程にもなら（り侍りな）ば、今人となり（らひ事もしなれ）侍りなむ。みづからは九重の内に生ひ出で侍りて、世の中の有様（を）も知り侍らず、夜晝お前にさぶらひて、わづかになむはかなきふみ（速籍）なども習ひ侍りし。只かしこき御手より傳へ侍りしだに、何事も（猶世の）廣き心を知らぬほどは、文才（もんざい）・まねぶにも、琴笛のしらべにも、ね・足らず、及ばぬ所の多（を）く（か）・わ（わ）・ぎ（ぎ）・ひ（ひ）・なむ侍りける。はかなき親に賢き子のまさるためしは、いと難きことになむはべれば、まして次々傳はりつつ、隔たりゆかむ程の行く先、いとうしろめたきによりなむ、思ふ給へおきて侍る。たかき家の子として、官位心（つかさかうより）にかなひ、世の中（の）・さかり（え）に驕り（驕る辨がつきまらずと）ならぬれば、學問などに身を苦しめむ事は、いと遠くなむ覺ゆべかめる。・・・たはぶれ遊びを好みて、心

くわんじやく官爵。
 時に隨ふ燃元につく人心で、
 蔭では嘲りながら、うはべは追
 從し機嫌を取つて服從してゐる
 間は。
 おのづから 自然人物らしく見
 えて。

大和魂 世才。

さし當りて 今の當座はもどか
 しいやうでも 將來大臣たるべき
 修養をして置く方が。

只今は 只今は碌に力になる事
 も出来ませんが、とにかく私が
 かうして世話して居れば。

げに斯くも 成程さういふやう
 に思ひ付かなければならぬので
 したに。
 この大將 大宮の子、昔の頭中
 將、かたぶき侍るめるを 非難して
 ゐるやうですが、夕霧の子供心
 にも残念がつて。

のままなるくわんじやくくわんじやくにのほりぬれば、時に隨ふよれる世の人の、
 下には鼻まじろきをしつつ、つるせうし、氣色を取りつつ従ふ
 ほどは、あめまじろきイのづから入ヒ人と覺えてやんごとなきやうなれど、
 時移り、庇護者にさるべき人に立ちあぐれて、世衰ふる末にはの齡ヒ、人に
 かるめあなづらるるに、頼りどころかかろどころなき事ためしになむ愛さ侍
 する。支那の學問を主業としてなほげさえをもととしてこそ大和魂の世に用ひらるる方も
 強う威に頼もしき方はは侍らめ。さし當りては心もとなきやうに侍り
 とも、遂の世のおもしとなるべき心あきてを習ひなば、侍らず私の死後
 なりなむのちの世もうしろやすかるべきによりなむ、只今はは源氏が
 かくしからずながらも、かくてはれぐみ侍らば、せまりたる窮した
 大學の衆とて、笑ひあなづる人もよも侍らじと思はう給ふる」な
 ど聞え知らせ給へば、うちなげき給ひて、大將六位とは人並外れのなかり方だげに斯くもおぼし
 寄るべかりける事を、この大將なども、「あまり引きたがへたる
 御ことなり」とかたぶき侍るめるを、この幼き心地にもいと口

大將左衛門督 共に奏上の兄。
大將は昔の頭中將。

いとおよずけても、それは本當
にこましくくれた恨みやうです
ね。

この人の程よ 夕霧の年輩では
無理もない。

字 河海抄「禮記云己冠而字之、
成人之道也」また花鳥餘情「學
生の入學の時、文章院の堂監が
書きくだす名簿にあざなを書き
也聖廟の御字は管三、三善清行
があざなは三耀といへり。夕霧
なり」
東の院 二條院の東院。

なだむる事なく 容赦なく嚴格
に事を行へ。河内本に「もの、
しふ」とあるは「ものくしう」
の誤寫か。借物の裝束の身に
家より外に、そがはず見にく
かたくなしき 河内本「かたく
あるしき」の「る」の傍に「な敷」と

少 女

惜しく、大將、左衛門督(など)の子どもなどを、我よりは下げ藤と
思ひおとしたりしだに、皆おののくく加階しのぼりつつこおよずけ
あへるに、夕霧が六位とはひびいと思つてゐるのが氣の毒淺黄をいとからしと思はれたるが心苦しう侍るなり」
と聞え給へば、源氏は打笑ひ給ひて、源いとおよずけても恨み侍る(な)
なりな。いと考が足りないはかなしや、この人の程よ」とて、いと源氏が夕霧をかはうつくし
とおぼしたり。源「學問などして、すこし物の心も得侍らば、そ
の恨みはおのづから解け侍りなむ」と聞え給ふ。字まぎつくる事は
東の院にてし給ふ。ひんがし東の對をしつらはれたり。上達部、殿上人、
珍らしくいぶかしき事にして、我もくくとつどひ参り給へり。
博士どもも、なか氣おくれするだらうく臆しぬべし。源「憚る所なく、例前例に従つてあらむに
まかせて、ものなだむる事なくしふきびしう行へ」と仰せ給へば、博士達強ひ
てつれなく思ひなして、家より外ほかに求めたるさうおぞくどもの、
打合はずかたくな(る)しき姿などを恥ぢなく、おももちこゑ聲づかひ、
うべ鹿爪らしく振舞つてかたくなるしきしくもてなしつつ、座ざに着き(こ)並び(居)たる(程)作法よりは

さるは 實は笑ひこけたりなど
 しないやうにと、年寄り出て落着
 きのある人々のみを選り出して
 お酌などもさせたのだが、何分
 儒者といふ風變りな席故、何分
 儒者す 河海抄に「おろすは盃
 をのみくたす也」流也」とある
 が、弄花抄に「おろすはおとろ
 かしいさむる也」とあるのに従
 ふべきである。こきおろす意
 「おほし」は「凡そ」である。弄花
 抄に「大饗などにも人数の外
 人の交はりたるを垣下の公達と
 云、あるじは饗也」とある。
 おほし、かゝいもとあるじ 一體相
 伴役の人達が甚だ無作法でござ
 る。このあたりは時勢にうとい
 學者の口物をそのまま寫してあ
 る。
 斯くばかりの 斯程の學問の効
 験によつて博士となつてゐる
 (學問の權化である)拙者を知ら
 ないやうな事で朝廷に御奉公が
 出來ますか。諸説あるが誤つて
 ある。
 をこなり 智慧が足りない。河
 内本「をこり」の「こ」と「り」の傍
 「に」な歟」とある。
 この道より 儒道出身の公卿達
 などは、
 斯かる方ざまを 源氏が學問の
 道を愛好されて夕霧を大學へ入
 れられた事を奇特の事と非常に
 敬服せられた。

じめ、見も知らぬさまどもなり。若き君だちは、え堪へずほほ
 ゑまれぬ。さるは物笑ひなどすまじく、過ぐしつ、静まれる
 限りをとえり出だして、へいじなども取らせ給へれど、筋異な
 りける。(方の) まじらひにて、右大將民部卿などの、あぶなあぶなかしい手附で盃を受か
 けて居られるのを見替めて、(E) あさましう咎め出でつつかあるす。博士(を)おほ
 はらけ取り給へるを、あさましう咎め出でつつかあるす。博士(を)おほ
 しかいもとあるじ(は)・甚だ非常ひざうにはべりたうぶ。斯くばかりの
 するしとあるな(拙者)にがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつ
 り給ふ、甚だをこなり(痛々しい)「などいふに、人々皆ほころびて笑ひ
 ぬれば、また、博士(痛々しい)鳴り高し。鳴りやまむ。甚だひざうなり。座
 を引きて立ちたうび(は)・なむ」など、おどしいふ(E)・もいとをか
 し(なれ)。見ならひ給はぬ人々は、珍らしく興ありと思ひ、こ
 の道より(なり)・出で立ち給へる上達部などは、したりがほにうち
 ほほゑみなどしつ、斯かる方ざまをおほし好みて心ざし給ふ
 がめでたきこと、と限りなく思ひ聞え給へり。いささか物いふ
博士達が制す。

けちえん 掲焉。はつきりきは
 だつ。さるがうがましく 道化じみて
 苦しげなのや、つらさうなのや、見
 けうさうし 王朝時代に於て、
 漢語が國語として用ひられた時
 は「ニ」を以て或は「ウ」を以て或
 は無文字で示されてゐた。こゝに
 湖月抄本に「けうさう」とあり、
 河内本に「けさう」とあるのも、
 共に「m」を表はす假名遣で、
 同じく「ケン」といふ音を寫した
 ものであらう。こゝは「暗」とい
 ふふ。即ち「席」に連なつた人も
 やかましく「まご」させられる
 ことだらう」の意とおもはれる。
 假粧と解すべきではなからう。
 河内本は傍に「けうまん敷」とあ
 る。

かず定まれる 座席が足らない
 爲に歸宅する大學の衆のある事
 を源氏が聞召して。

釣殿 寢殿造りの廊の南端で、
 池に臨んだ所に構へた建物。
 才人 詩文に堪能なる人。
 題の文字 花鳥・翰林の
 題をもつて、韻の字は切韻とて
 何字をもつて、韻の字は切韻とて
 五文字の中間の字を取りて題の
 とする事も有り。又何韻にても
 作者の心まかせて取る事もあ
 る也。

左中辨 河内本「右中辨」の「右」

少 女

をも制す。なめげなりとても咎む。かしがましうのしりをる
 顔どもも、夜に入りては、なか／＼今すこしけちえんなる火影
 に、さるがうがましくわびしげに人わろげなるなど、
 ざまに、げにいとなべてならず、
 おとどは、いとあざれかたくななる身に、けうさうしまど
 はされなむ」
 かつ定まれる座につきあまりて、歸りまかづる大學の衆
 どもあるを聞召して、釣殿のかたに召しとどめて、殊に物など
 賜はせけり。
 事果ててまかづる博士才人も召して、又々ふみ作らせ給
 ふ。上達部殿上人も、さるべき限りをば皆とどめさぶらは
 せ給ふ。博士の人々は、四韻、ただの人は、あとどを、始
 め奉りて、ぜく作り給ふ。興ある題の文字えりて、文章博士奉
 る。短き頃の夜なれば、明け果てぞ講ずる。左中辨講師仕うま

の字の傍に「左賦」とある。

観え心殊なる

左中辨は信望厚

窓の雪を

晋書「車胤字武子、南

不常得_レ油、夏月則_レ練囊盛_二數十

螢火_一以_レ照_レ書、以_レ夜繼_レ日焉

後官至_二尙書郎_一

孫氏世錄「孫康家貧

無_レ油、常映_レ雪讀_レ書、少小清介、

交遊不_レ雜、後至_二御史大夫_一」

親めき 親らしく切な愛情も巧
にあらはされてゐるので、感涙
を流して吟じ騒いだが、女の癖
に知りもせぬ事を並べ立てるの
は惜しい事であるからと、それが
いやさに此處にはそれを書き漏
らした。「さ」は言辭も優れて
をり、内容も優れてゐたといふ
意。

つる。 左中辨のさま かたちいと清げなる人の、こわづかひ物々しく らこわづか

ひ、神さびて讀みあげたる程、いと面白し。覺え心殊なる博士

なりけり。 夕霧をほめた詩の題 斯かる高き家に生れ給ひて、世界の榮花にのみたは

ぶれ給ふべき御身もちて、 晋の車胤の故事 窓の螢をむつび枝の雪を 晋の孫康の故事 馴らし給

ふ。 まき 志のすぐれたる よし さまを、よろづの事によそへなずらへて

こ、心々に作り集めたる、句ごとに面白く、 もうじ 「唐土にももて渡り

傳へまほしげなる世の 詩 ふみどもなり」となむその頃・世に は めで

ゆすりける。 源氏 あとどの御は 御詩は勿論 さらなり。親めき いと ・あはれなる事

まも さへすぐれたるを、泪おとして 誦 ずじさわぎしかど な ・女のえ知

らぬことまねぶは いと ・憎き事をと、うたてあれば漏らしつ。

うちつづき、 夕霧に 入學といふことせさせたまひて、 二條院の東院 やがてこの院の

歌間部屋 内に御曹司造りて、まめやかに 才 ざえ深き師にあつ 夕霧を け聞え給うて

ぞ・學問せさせ奉り給ひける。大宮の御もとにも、 ま をさ ま く ま

うで給はず。 大宮が夕霧を 夜晝うつくしみて、なほ ちこ 兒のやうにのみもてなし

かしこにては 大宮の許では勉強が出来まいと思つて。

つと夕霧はずつと籠居して居られて。

大方の人から 夕霧は一體が眞面目な人柄で。

寮試 大學寮の試験でこれに及第すれば擬文章生となる。擬進士ともいふ。史記中の難儀五條を試問して三條に通ずるを及第とする。

至らぬ隈なく 不明の處なく。かたぐいに 諸説を参照して。つまじるしのこらず 不審の箇處はなく。

少女

聞え給へれば、かしこにては、え物・習ひ給はじとて、靜なるところ(二)に籠め奉り給へるなりけり。月に三度ばかりを參り給へとぞ許し聞え給ひける。つと籠り居給ひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ひらるる人はなくやはある、と思ひ聞え給へど、大方の人から(物)・まめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべきふみども疾く讀み果てて、まじらひもし、世にも出で立たむと思ひ(は)・て、ただ四五月のうちに、史記などいふふみは讀み果て給ひてけり。今は寮試受けさせむとて、まづわが(瀧氏の)お前にて試みさせ給ふ。例の大將、左大辨、式部の大輔、左中辨などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受けむに、博士のかへさうべきふしぶしを引出でて、一わたり讀ませ奉り給ふに、至らぬ隈なく、かたぐいに通はし讀み給へるさま、つまじるしのこらず、あさ

さるべきにこそ これも天稟で
いらせられたのだと。

故おとど 大將の父。夕霧の祖
父。

人の上にて 人の上では見苦し
い事と見聞きして居つたので
が、子が大人びるのに親は反
に老碌してゆくのは、私など
だ。大した齡といふではあり
た。が、世間はかうしたもので
した。

世のひがものにて 大内記は天
下の變人で、學問のわりには世
に用ひられず。

大學にまゐり 夕霧が大學に寮
試を受けに參られる當日は。

ましきまでありがたければ、さるべきにこそおはし・・・けれど、
誰もく・(くも)・涙・(をぞ)・あとし給ふ。大將はまして、昔の頭中將「故おとどおはせ
ましかば」と聞えいでて泣き給ふ・(い)・殿も、え心強うもてなし
給はず。源人の上にてかたくななりと見聞きはべりしを、子の
大人ぶるに、親の立ちかはりしれゆくことは、(わぎ)いくばくならぬ
齡ながら、斯かる世にこそ侍りけれ」など宣ひて、涙をおしのごひ
給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり。大將盃さし
給へば、いたう酔ひしれてをる顔つき、いと瘦せく・・・なり。世
のひがものにて、ざえの程よりは用ひられず、人からかへ見られないですげなくて身貧
しくなむありけるを、源氏が見込んで御覽し得るところありて、斯く取りわき
召寄せたるなりけり。身にあまるまで・(の)御顧みを賜はりて、こ
の君の御徳に、氏のお蔭で忽に身をかへたると思へば、ましてゆくさきは、
並ぶべき人なき御覺え・(い)ぞあらむかし。
大學にまゐり給ふ日は、寮門に、上達部の御車ども數知らずつ

大方世に残りたる。此處に集まつて來ない人は殆どあるまいと思はれる有様であつたが。君わざの君。冠者の君。夕霧の事。

おろしのしる。此りわめく。儒者達がゐて不快ではあるが。

昔覺えて。今は昔の盛時も思ひ合される程、大學の榮える時代故。

文人。文章生即ち進士。

擬生。擬文章生。

しはて給へれば。夕霧がすべてた資格をすらくと得てしまはれたので。

ふみづくり。作詩の會が頻繁に催され。

少女

どひたり。大方世に残りたる人あらじと見えたるに、またなくもてかしづかれて、わざの君の君の御さま、げに斯かるまじらひには堪へず、あてにうつくしげなり。例の怪しき者どもの立ちまじりつつ來居たる座の末を、からしとおぼすぞいとことわりなるや。ここにても、又おろしのしる者どもありて、めざましけれど、すこしも臆せず讀み果て給ひつ。昔覺えて大學の榮ゆる頃なれば、上中の下の人、我もくとこの道に心ざし集まれば、いよく世の中にざえありはかしくしき人多くなむありける。文人、擬生などいふなる事どもよりうちはじめ、すがくしうしはて給へれば、ひとへに心に、入れて、師も弟子もいとどはげまし給ふ。殿にもふみづくり繁く、博士、才人ども所得たり。すべて何事につけても、道々の程あらはるる世になむありける。

后居給ふべきま 立後の儀がある筈だが。
齋宮の女御を 藤壺も生前に秋好を主上の御世話役にと頼んでおかれた事だからとの口實で源氏は秋好を後に推された。
弘徽殿の 弘徽殿女御が他の方々より先に入内されたのになぜ立后なきらないのだからう。

この御時には 冷泉院の御代には殊更主上の御信任も厚いお方だが、その方の姫宮が目的通り入内された。

王女御 皇族出の女御。

同じくは 同じ王女御を後に立てるならば、藤壺の姪で親しい間柄にある當方の姫君こそ藤壺のおいでにならぬ代理のお世話役といふ事を口實にして后に適當であらう。

斯く引きかへ 故母六條御息所はあんなに不幸な方であつたのに。

かくて后居給ふべきを、「齋宮秋好の女御をこそは、母宮藤壺も御後見（E）と譲り聞え給ひしかば」と、おとどもことづけ（開え）給ふ。源氏

源氏から鬮繁（なり）に居・給はむ事、世の人・許し聞えず。人々（も）弘徽殿（將の女）の、まづ人より先に參り給ひにしもいかが（氣をもんでゐる）など、うちく

に、此方彼方に心寄せ聞ゆる人々、おぼつかながり聞ゆ。兵部（兼）卿（兼）の宮と聞えし、今は式部卿にて、この御時には、まして（いと）

やんごとなき御覺えにておはする御むすめ、本意ありて參り給へり。同じ（秋好と同様）ごと王女御（わうにようご）にてさぶらひ給ふを、「同じくは、御母方

にて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの（御）後見にとことよせて、似つかはしかるべく」と、とりく（に）

おぼし争ひたれど、なほ梅壺居給ひぬ。御さいはひの、斯く引

さかへすぐれ給へりけるを、世人驚き聞ゆ。おとど太政大臣に

あがり・給ひて、大將・内大臣になり給ひぬ。世の中の事ども

まつりごち給ふべく譲り聞え給ふ。人からいとすくよかにさら

（元）の頭中將、（元）の内大臣、（元）の政務を頼られるやうに

（元）の頭中將、（元）の内大臣、（元）の政務を頼られるやうに

（元）の頭中將、（元）の内大臣、（元）の政務を頼られるやうに

（元）の頭中將、（元）の内大臣、（元）の政務を頼られるやうに

（元）の頭中將、（元）の内大臣、（元）の政務を頼られるやうに

韻塞には賢木卷の事。卷一、四三九頁参照。韻塞とは古人の詩の韻字を隠して當てる遊戯。

女御 弘徽殿ともうお一人。そのお一人とは雲居雁をいふ。

王家統流腹にて そのお一人といふのは王族の姫君の腹で、種姓の位格さは弘徽殿女御に劣るまいけれども。

さしむかひたる 大納言との仲に子供が澤山生れたので、内大臣はこの姫君をその母君に付けてやつて繼父の大納言の手にかけるのは甚だ面白くないと思つて。

女御には 内大臣は雲居雁を弘徽殿よりは軽く見て居られた

冠者の君 夕霧。

睦まじき人なれど 夕霧と雲居雁とは。

少女

きらしくて、心用ひなどもかしく物し給ふ。學問を立ててし給ひければ、韻塞には負け給ひしかど、おほやけごとに、かしくくなむ。腹々に御子ども十餘人おとなびつつ物し給ふも、次次になりいでつつ、劣らず榮えたる御家の内なり。女は、女御と今一ところとなむおはしける。王家統流腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察の大納言の北の方になりて、さしむかひたる。子どものかず多くなりて、それによれにまかせて後の親に譲らむ、いとあいなしとて、取放ち聞え給ひて、大宮にぞあづけ聞え給へりける。女御には、いとよなく思ひおとし聞え給へれど、人からかたちなど、いとうつくしうぞおはしたる。冠者の君、一つにて生ひ出で給ひしかど、あの十にあまり給ひてのちは、御方ことにて、睦まじき人なれど、「をのこごには打解くまじきものなり」と父あど聞え給ひて、いと二人の間はけどほくなりたるを、夕霧の幼心地に、思ふ事なきに

雛遊の雛遊をして雲居雁の御機嫌取をしたりして、懇に附纏つて好意を寄せてゐられるので。

何かは、なあと、幼い同志の事だから、それに今迄親しくしあつて居つた間柄だもの、急に引放してきまりわるい目をさせるでもあるまい。

女君こそ 雲居雁今年十四歳。

物げなき 頑是ない年頃。夕霧十二歳。

おほけなく 年に似合はず。二人の間に契の結ばれたことをいつてゐる。

まだ片生ひなる まだ未完成ではあるが未の綺麗なのをおもはしめる筆蹟で書きかはした手紙が、不注意から偶人中に落ち散る折などがあから、姫君の侍女達はうすく感付いて居る者もあるが。

所々の大饗ども 源氏と内大臣とが催した任大臣の大饗なども済んで。萩の上風も 義孝集・朗詠集上萩の上風も 義孝少将一萩の夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露

し・あらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊のつゐせうをも、懇にまつはれありきて、志を見え聞え給へば、いみじう思ひかはして、(今も)けざやかに今は恥ぢ聞え給はず。御後見ども、何かは。若き御心どちなれば、年頃見ならひ給へる御あ

はひを、俄にも、いかがはもて離れ・(そも)はしたなめ聞えむ、と見るに、女君こそ何心・なくをさなくおはすれど、男はさこそ

物げなき程と見・聞ゆれ・(思ひ)おほけなく、いかなる御ながらひにかありけむ。よそくになりては、これをぞ静心なく思ふべき。

まだ片生ひなる手の生ひ先うつくしきにて、書きかはし給へる文ども・(など)の、心をさなくて、おのづから落ち散る折・(などの)あ

るを、御方の人・(を)は、ほのく知れるもありけれど、何かは、(どうして)

斯くこそと誰にも聞えむ、見隠しつつある・(なご)べし。所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎ・(ども)もなく、(いと)

のどやかになりぬる頃、時雨うちして、萩の上風もただならぬ

姫君渡し聞え 雲居雁を大宮の
方に呼び寄せて。

琵琶こそ女の 琵琶といふものは
女が弾くとつらく感じは
しますが、気が利いたやうに思
はれるものです。

物の上手ののち 明石上はもと
もと名人の子孫ではあります
後になつては、多年明石に海
生活をして居ましたのに、どう
してさうまで上達したのでせ
う。

宣ふ折々侍れ 源氏が明石上の
琵琶の上手な事を吹聴する折が
あります。
他事よりは 他の事とは違つ
て。

ちうさす 左手で琵琶の柱を押
す事。幸に打添へて 明石上は仕合な
ばかりでなく。

少 女

夕暮に、大宮の御方に元の頭中將内のおとど参り給ひて、姫君・渡し聞え

給ひて、御琴など弾かせ奉り給ふ。大宮は何樂器にも堪能哉宮はよろづの物の上手にお

はすれば、いづれも傳へ奉り給ふ。雲居に傳授内大「琵琶こそ女のしたるに憎

きやうなれど、らうくじきものに侍れ。今の世にまことしう

傳へたる人、をさく侍らずなりにたり。何のみこ、親王くれの源

氏」などかぞへ給ひて、内大「女のなかには、（只今）大政大臣源氏おほきあとの

山里にこめ置き給へる人こそ、いと上手と聞き侍れ。物の上手

ののちには侍れど、末になりて、山賤にて年へた（三）る人、い

かでさしも弾きすぐれけむ。かのおとど、いと心殊にこそ思ひ源氏

て宣ふ折々侍れ。他事よりは、（も）音楽のわざは遊びの方のさえは、なほ廣う（々）物

・あはせ、かれこれに通はし侍るこそかしこけれ。（じ）獨りごと（じ）に（明石上が獨奏で上手に

て上手となりけむこそ珍らしき事なれ」など宣ひて、（な）宮にこそ（大宮に琵琶を

のかし聞え給へば、（柱）大宮「ちうさす事（う）・うひくしくなりにけり

や」と宣へど、面白う弾き給ふ。（大宮）幸に打添へて、なほ怪しう

老いの世に 源氏が年寄るまで持たれなかつた女の子をお生みたつて、而もその姫君を手に置いて見すばらしい生活もさせないで。

女御を 弘徽殿をさう詰らぬ娘ではなく、人並には育てたと思つて居ますが、思ひがけない秋好の爲に龍を奪はれた不運から世間は案外なものだと思ひ知りました。

春宮 後に今上と申し奉る。

かういふ 明石上といふ仕合人の腹に生れた後の候補者が引續いて現はれて來ました。

故おとど もとの左大臣で大宮

めでたかりける人なりや。老いの世に持給へらぬ女子をまうけさせ奉りて、身に添へてもやつしゐたらず、やんごとなきに譲れる心あきて、事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る」など、かつ御物語聞え給ふ。内大「女はただ心ばせよこそ世に用ひらるるものに侍りけれ」など、人の上宣ひ出でて、内大「女御を、けしうはあらず、何事も人に劣りてはおひ出でずかし」と思ひ給ひしかど、思はぬ人に押され、ぬる宿世になむ世は思ひの外なるものと思ひ、侍りぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なし侍らむ。春宮の御元服只今の事になりぬるをと人知れず思ひ給へ心ざしたるを、かういふ幸人の腹の后かねこそ、又おひすがひぬれ。立ちいで給へらむに、ましてさしるふ人ありがたくや」と打歎き給へば、大宮「なかさしもあらむ。この家にさる筋の人出で物し給はでやむやうあらじ、と故おとど」の思ひ給ひて、女御の御事をも居立ち急ぎ給ひしものを、おはせましか

明石姫君の事

をんなど

姫君を身分高き業上の養女とした心算

氣立て次第で

弘徽殿

他人の事

秋好

（憂）

（聞）

（出）

（さ）

（さ）

（知）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

（さ）

斯くもてひがむる。源氏もこんな非道い目にはせぬ事もなきならなかつたでせうに。
太政大臣 源氏。

そばめ給へる。横を向かれたその横顔。河内本「そばみ給へる」がよい。

取由の手つき。左手で絃を押す手つき。
掻合せ。琴の手。

律の調へのなか／＼。律の調べは秋のものであるが、冬に聞くと却つて粹（いき）に聞えるの意。

風の力。文選豪士賦序「落葉俟二微颺一以隕、而風之力蓋寡、孟嘗遣三推門一而泣、琴之感以末一なほ遊ばさむや」とお弾きになりませうかと大宮に勧め

秋風樂。盤涉調、律、嵯峨帝の御代に常世乙魚、大戸清上が作つたといふ。一説卷一、二七七頁。皆さま／＼。河内本が宜しい。雲井雁と内大臣とそれ／＼に。

少女

ば、斯くもてひがむる事もなからまし」など、この御事にてぞ、
太政大臣を恨めしげに思ひ聞え給へる。姫君の御さまの、い
ときびはにうつくしうて箏の御こと弾き給ふを、御髪みぐしのさがり
ば、かんざしなどの、あてになまめかしきをうちまもり給へば、
恥かたじけなくちらひてすこしそばめ給へる側目かたはらめつらつきうつくしげにて、
取由の手つき、いみじう作りたる物の心地するを、宮も限りな
くかなしと思したり。掻合せなど弾きすさび給ひて、押しやり給
ひつ。おとど和琴引寄せ給ひて、律の調べのなか／＼今めきた
るを、さる上手の亂格式がらないでれて掻い弾き給へる、いと面白し。お前の
梢木の葉がほろ／＼と残らぬに、老御達など涙落しつこ、此處彼處の御
几帳きちょうのうしろに頭をつどへたり。内大臣「風の力けだしすくなし」
とうちずじ給ひて、琴の手ならねど、怪しく物あはれなる夕
べかな。なほ遊ばさむや」として、秋風樂に掻き合せて唱歌し給
へる聲。いと面白ければ、皆さま／＼、おとどをもいとうつく

御几帳隔てて、雲居雁の居る方を几帳で仕切つて。

ざえの程、才學が身の程に過ぎず居るのもつまらない事だと源氏も御存じであるのに、かうまでさせようと考へてゐられるのは、何か仔細があらうとは思ひますが。

笛の音にも、學問に限らず、笛の音の中にも古の人の道は傳はつてゐるものです。

拍子、笏拍子。笏で拍子とるところ。

萩が花ずり、催馬樂更衣「ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは、野原篠原、萩の花摺や、さきんだちや」大殿も源氏もこんな「演奏に興味を持つて多忙な政務から遁れて休養なさるのでした。」

しと思ひ聞え給ふに、いとど(心)添へ(感興を)むとにやあらむ、冠者(夕暮)の君參り給へり。「こなたに」とて、御几帳隔てて入れ奉り給へり。
内大「をさく」(えたいめ)・對面(に)・もえ賜はらぬかな。など斯くこの御學問のあながちな(に)・給ふ(はし)・らむ。ざえの程、程より餘りぬるもあぢきなきわざと(源氏)・ちども・おぼし知れる事なるを、かく(う)おきて聞え給ふ、やうあらむとは思ふ。給へながら、斯う籠りおはする事なむ心苦しう侍る」(た)・と聞え給ひて、内大「時々はことわざし給へ。(他の事)」
笛の音にもふる(き)・ことは傳はるものなり」とて、御笛奉り給ふ。(夕暮の様)いと若うをか(うつく)・しげなる音に吹き立てて、いみじう(うつく)・ふ。
・面白ければ、御ことどもをば暫しとどめて、(内大臣)・いとどは(さく)・拍子(はうし)・あどろくしからず打鳴らし給ひて、「萩が花ずり」(や)・など謠ひ給ふ。(内大臣)「大殿もかやうの御遊びに心とどめ給ひて、いそがしき御政事どもをば遁れ給ふなりけり。げに(こ)・あぢきなき世に心(限り)・ゆくわざをしてこそ過ぐし侍りなまほしけれ」など宣

姫君は雲居雁を自分のお居間に歸された。内大臣は二人の間に無理に遠ざけて、姫君の御琴の音をさへ聞かせまいと無闇に夕霧を隔てなされるので。

いとほしき事 二人の間にやがてお氣の毒な事が起りさうだ。近う 大宮のそば近く。

人に物のたまふとて 女房に逢ふつもりで。 かいほそりて 身ほそになつて 身輕な衣裳に着かへて。

かしこがり給へど 内大臣は物の分つた顔はしていらつしやるが失張親馬鹿です。 子を知るは 雄略紀二十三年七月條「古人有言、知臣莫若君、知子莫若父」續紀光仁帝天應元年四月三日の詔「古人有言、知子者親生云、明食」管子大匡篇「鮑叔曰、先人有言曰、知子莫若父、知臣莫若君」史記李斯傳「明君知臣、明父知子」 思ひ寄らぬ事には 氣付かぬ事ではなかつたが。

少 女

ひて、御土器參り給ふに、暗うなれば、おほ殿油參り、御湯漬く

だものなど誰もく聞召す。姫君はあなたに渡し奉り給ひつ。

強ひてけどほくもてなし。給ひ、御ことのねばかりをも聞

かせ奉らじと、今はこよなく隔て聞え給ふを、「いとほしき事

ありぬべき世なるにこそ」と近う仕うまつる大宮の御方のねひ

人ども。ささめきけり。

おとど出で給ひぬるやうにて、忍びて人に物のたまふとて立ち

・給へりけるを、やをらかいほそりて出で給ふ道に、斯かる

ささめきごとをするに、怪しうなり給ひて、御耳とどめ・給

へば、わが御うへをぞいふ。女房「かしこがり給へど、人の親よ。

あのつからおれたる事こそ出でくべかめれ。子を知るはといふ

は、そらごとなめり」などどつきしろふ。あさましくもある

かな、さればよ、思ひ寄らぬ事にはあらねど、いはけなき程に

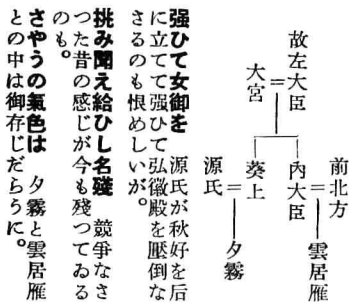
うちたゆみて、世は憂きものもありけるかな、と氣色をつぶ

いづれの隈に どの隠妻の所へ行かれたであらうか。あだけ 浮氣事。

冠者の君の 夕霧のお歸なのかと思ひました。

煩はしき 内大臣は氣むづかしい御氣性なのに。

いと口惜しく 夕霧と雲居雁とは不似合なわらい中といふではないが、從兄妹でよくある關係だと世人も噂する事だらう。



つぶと心得給へど、音もせで出で給ひぬ。御さき追ふ聲のいか

めしきにぞ、女房殿は今こそ出でさせ給ひけれ。いづれの隈

におはしましつらむ。今さへ斯かるあだだけこそ。といひあ

へり。私語した女房達。ささめきごとの人々は、「いとかうばしきか。のうちそ

よめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ。

あなむくつけや。しりうごとやほの聞召しつらむ。煩はしき御

心を」とわびあへり。殿は道すがらおぼすに、いと口惜しくあ

しき事にはあらねど、珍らしげなきあはひに世の人も思ひいふ

べきこと、おとどの、強ひて女御を押し沈め給ふもつら

きに、わくらはに人にまさる事もやとこそ思ひつれ、ねたくも

あ・る・かな、とおぼす。殿の御なかの、大方に、は昔も今

もいとよくおはしながら、かやうの方にては、挑み聞え給ひし

名殘もおぼし出でて、心愛ければ、ねざめがちにてあかし

給ふ。「大宮もさやうの氣色は御覽ずらむものを、世になくかな

あざやぎたる事をはつきりし
すぎる御氣性故。

御尼額 尼そぎの額髪。尼は髪
を肩のあたりで切り揃へて其儘
さげて居る。それを尼そぎ又は
さげ尼ともいふ。

おぼつかなき隔て 親しくして
居たいと思ふのです。

かうも思う給へじ さう恨めし
直とは思ふまいと一方では思ひ
抱出來ないやうな氣が致しまし
て。

少 女

遠故
しうし給ふ御うまごにて、まかせて見給ふならむ」と、女房の私語を人々の
いひし氣色を(も)・(な)・(た)・(く)・めざましうねたしとおぼすに、御心動
きて、すこし雄々(おほ)・しうあざやぎたる御心には、(と)・(い)・(と)・しづめ
がたし。

二日ばかりありて參り給へり。内大臣が大宮方にしきりに參り給ふ時は、大宮も

いと御心ゆき嬉しきものにおぼいたり。満足して御尼額引繕ひ(て)・うるきちんと

はしき御小桂(おんこうちぎ)など奉り添へて、子ながらも恥かしげにおはする
内大臣の事

人ざまなれば、まほならずぞ見え奉り給ふ。内大臣おとど御氣色あし
面と向はずに對面される

くて、(う)此處(こゝら)にさぶらふもはしたなく、人々いかに見侍らむと
女房達

心おかれにたり。私などはかしくしき身に侍らねど、世に侍らむかぎ
私の生きて居る間は

り、御目かれず御覽せられ、始終お目にかかりおぼつかなき隔てなくとこそ思ひ
勤靜も分らぬやうな隔たり

給ふれ。雲居雁の事よからぬものの上にて、(な)・(ん)・恨めしと思ひ聞えさせつ
大宮を

べき事の出でまうで來たるを、かうも思う給へじとかつは思
(お)

給ふれど、なほしづめがたく覺え侍りてなむ」と、(と)・涙あしの

今更の老年の私にわけだてをなさるのでせう。

頼もしき御蔭に 母上をお頼まして雲居雁をお預け申して置きまして、私は却つてあの子の幼少の折から馴染みもせず、差當り弘徽殿の宮仕などの思ふやうにならぬのを敷きもがいて居つて。

さりとも人となさせ 雲居雁の方はいくら何でも母上が立派な者にて居ましてに。

誠に天の下に 夕霧は實際天下無双の物識りでありませうが、あはつけきやうに 無分別なやうに物の数ならぬ人々の間でも考へて居るのですから。さし離れ 血族の關係のない立派な感興の新しいやうな家庭に聳となつて 近親結婚は様かでないし源氏も聞きもし思ひもなさない所が、それはいさうと、かざるにありませう。

ごひ給ふに、宮大宮けさうじ給へる御顔の色たがひて、御目驚いたさまも大さになりぬ。い大宮かやうなる事にてか、今更の齡の末に、心あきては、あぼさるらむ」と聞え給ふも、さすがにいとほしけれど、

内大臣 頼もしき御蔭にをさなき者を奉りあきて、みづからはなかな雲居雁の幼少の折からかをさなくより見給へもつかず。まづ目弘徽殿の宮仕の事に近きまじらひなど

・・・ はかくしからぬを見給へ。歎夕霧と雲居雁との戀きいとなみつつ、さりとも

人となさせ給ひてむと頼みわたり侍りつるに、思はずなる事の侍りければ、いと口惜しうなむ。誠に天の下(E)・ならば(ベ)・人な

き有職(イウ)には、物せらるめれど、親しき程(近親の間で結婚することは)に斯かるは、人の聞き思

ふ所(事)もあはつけきやうになむ何ばかりの程(なき)にもあらぬなからひ

にだにし侍るを、か(夕霧の爲にも)の人の御ためにも、いとかたはなる事なり。

さし離れ、きらくしう珍らしげあるあたりに、今めかしうも(花やかにとりもつてもらふ)

てなさるるこそをかしけれ。ゆかり睦びぬぢけがましきさまに(源氏)てあとも聞きあぼす所侍りなむ。さるにても、斯かる事なむ。

まきなき人々の 幼い二人の自由にまかせてほつておかれるのが面白くないのです。

げにいと口惜しき事は、そんな事があつたとすれば、誠に残念な事だと私の方が一層歎かねばならぬ事なのです。

もろともに罪を 私迄も一緒にして罪を著せられるのは恨めしい。

そこに あなたの氣付かぬ事も立派に仕上げようと内々心掛けて居りました。

物けなき程を 幼い二人を、可愛さに心が暗んで、いそいで一緒はしようとは思ひも寄らぬ事です。

人の言につきて 人の言葉を信じて。

と知らせ給ひて、殊更にもてなし、すこしゆかしげある事をまぜてこそ侍らめ。夕霧と雲居雁とをさなき人々の心にまかせて御覽じ放ちけるキイ

を、心憂く思ふ給ふる」と聞え給ふも、大宮は夢にも知り給はぬ事なれば、あさましうおぼして、大宮げに斯う宣ふもことわりなれど、

かけてもこの人々の、した下の心・なむ知り侍らざりける。げにいと口惜しき事・は、ここにこそまして歎くべく侍・れ。りもろ

ともに罪をおほせ給ふは、恨めしき事になむ。雲居雁を預つた前から見奉りしより、特別に注意して

心殊に思ひ侍りて、そこにおぼしいたらぬ事をも、すぐれたるさまにもてなさむとこそ人知れず思ひ侍・れ。り物けなき程を

心の闇に惑ひ・て、待り急ぎ物せむとは思ひ・寄らぬ事になむ。さても誰かは斯かる事はきこえ・けむ。待りよからぬ・人の言

につきて、大袈裟に考へもし仰しやりますものもきはだけくおぼし宣ふもあぢきなく、無實な事の爲に雲居雁の名むなしき事に

折れにもなる事でせう、根のない事ではない人の御名やけがれむ」と宣へば、内大何の浮きたる事にか侍

らむ。侍女達もさふらふめる人々も、かつは皆・もどき笑ふべかめる

立ち給ひぬ 内大臣が歸られた。

心知れる人は 事情を知つて居る女房達は。

心地もたがひて 氣もちがふ心地で。

睦物語 打解話。三一五頁にあつた事。

いと斯く人なみくくに 人並々に出世するやうにと願つて居たのは、私こそ御身以上になきけない人間でした。

さるべきひまにて 然るべき隙を覗つての事でせう。所が御兩人様の事は年來一緒に暮して居られたのだから。

打解けて過ぐし聞えつるを 打解けて過ぐし聞えつるを親しいまゝにおさせ申して來ましたが。

ものを、いと口惜しく、安からず思ひ給へらるるや」とて立ち給ひぬ。心知れる人は、いみじういとほしく思ふ。一夜の

しりうごとの人々は、まして心地もたがひて、「何に斯かる睦

物語をしけむ」と、思ひ歎きあへり。姫君は何心もなくておは

するに、さしのぞき給へれば、いとらうたげなる御さまを、あ

はれに、見奉り給ふ。若き人といひながら、心をさな

く物し給ひけるを知らで、いと斯く人なみくくに思ひける、

我こそまさりてはかなかりけれ」とて、御乳母どもを、さいな

み・たまふに、聞えむ方なし。かやうの事は、限りなき御門

の御いつきむすめも、おのづからあやまつためし、昔物語にも

あめれど、氣色を知り傳ふる人、さるべきひまにてこそあら

め。これは、あけくれ立ちまじり給ひて年頃おはしましつるを、

何かは、いはけなき御程を、宮の御もてなしよりさし過ぐして

も、隔て聞えさせむと打解けて過ぐし聞えつるを、一昨年ばか

不快に

ひとよ

雲居雁

雲居雁のさま

内大臣が

内大

も

の

御秘藏の姫宮でも

様子を知つて橋渡しする人が

問途をしでかす例は

何で効い、お二人を大宮のお取扱を差越してまでも私どもで引放す事が出来ませうと

も

けさやかなる お二人の間もきつぱり區別したお取扱になつて居るやうですが
 若き人 若い女房でも人目を忍んでどうやら色めいた事をする人もあるやうでございませうが
 事に亂れたる所 少しも取亂した態度があらせられないやうでござります故
 隠れあるまじき どうせ隠れなく知れ渡る事だらうが
 心をやりて 朗かに。心配さうな顔したら。露顯するからまるで氣にかけないやうな顔してをれといふ意。「心をやりて」を從來分別してと解いてゐるがさう解くべき語ではない
 あらぬ事とだに 影もない事となりとも「だに」は今更仕方がないからせめてはの義
 大納言殿に 雲居雁の繼父按察大納言への開えをさへ心配して居るのですもの、まして他の人々に漏らすやうな事を致しませうや
 何の珍らしきにか 新しい感興をひくやうな御結婚とは思ひも致しませぬ
 よろづに 内大臣がいろく説き聞かされるけれども

少女

りよりは、けさやかなる御もてなしになりにて侍るめるに、若
 き人とても、うちまぎればみ、いかにぞや世づきたる人もおは
 すべかめるを、夢に亂れたる所 心なく何れも
 更に思ひ・寄らざりけることと、おのかどち歎く。内大臣よし、
 暫し斯かる事漏らさじ。隠れあるまじき事なれど、心をやりて
 あらぬ事とだにいひなされよ。今かしこに渡し奉りてむ。宮の
 御心のいとつらきなり。そこたちは、さりともし、いと斯かれと
 しも思はれざりけむと宣へば、いとほしきなかにも、嬉しく宜
 ふと思ひて、乳母「あないみじや。大納言殿に聞き給はむ事をさへ
 思ひ侍れば。」 いっしかすぐれたるさまにてとこそ念じ聞きさ
せ侍れ。夕暮は
 か思う給へかけむ」と聞ゆ。姫君はいとをさなげなる御さまに
 て、よろづに申し給へども、かひあるべきにもあらねば、打泣
 き給ひて、「いかにしてか、いたづらになり給ふまじきわざは

宮は 大宮はどの孫達をも愛して居られる中にも。
 斯かる心の 夕霧が雲居雁に心を寄せて居たのをさへ可愛く思つて居られるのに、それを内大臣が無情にもけしからぬ事のやうに思ひもし仰しやりますので、なほにそんなにいられる事はない、内大臣はもと、雲居雁を大して心にかかるとは思はれなかつたのを。

ただびとの宿世あらば 臣下に縁付ける因縁があらば。

これより 夕霧を雲居雁より高い女と結婚させたい。
 及びなからむきはにも 手もとどかないやうな身分即ち皇女にも結婚させたいと思つてゐます。「思へ」との思つてゐるの意で「うらめしう思ひ聞え給ふ」につづく。

冠者の君 夕霧が大宮方に。

すべからむ」^(ま)と、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみ・恨み聞え給ふ。宮はいといとほしと思すなにも、男君の^(ま)御かなしきはすぐれ給ふ・にやあらむ、斯かる心のありけるもうつくしう思さるるに、情なくこよなき事のやうにおぼし宣へるを、^(ま)などかさしもあるべき、もとよりいたう思ひつき給ふこと・なくて、かくまでかしづかむともおぼし立たざりしを、わが斯くもてなしそめたればこそ、春宮の御事をもおぼしかけためれ、^(ま)とりはづして、ただびとの宿世あらば、この君よりほかにまさるべき人やは^(ま)。かたち有様よりはじめて、ひとしき人^(ま)・あるべきかは。これより。及びなからむきはにもとこそ思へと、わが^(ま)志のまさればにや、おとどを恨めしう思ひ聞え^(ま)給ふ御心のうちを見せ奉りたらば、ましていかに恨み聞え給はむ。

かく騒がるらむとも知ら^(ま)で、冠者の君まゐり給へり。一夜

ゆかしげなき事をいとこ同志の結婚などいふおもしろみのなかけなきるのが心苦しいのです。

さる心もかうした事情をも御存じがあるまいと思つて一寸お耳に入れておくのです。

恨み給ふべき事 大臣が私をお恨みになる事はあるまいと思ひます。

物まゐりなし給へど 大宮は食事なすつたが夕霧は少しも食事なさないで。

少女

も人目しげうて、思ふ事をも雲居籠に聞えずなりにしかば、常よりも

あはれに覺え給ひければ、夕つがたおはしたるなるべし。宮、大宮

例はいひ知らずうちゑみて待ち喜び給ふを、今夕はまめだちて物語な

ど聞え給ふついでに、大宮御事により、内のおとどのゑんじて物

し給ひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなき事をしも

思ひそめ給ひて、人に物思はせ給ひつべきかめが心苦しきこと。

かうも聞えじと思へど、さる心も知り給はでやと思へばなむ

と聞え給へば、心にもかかれる事の筋なれば、夕霧はふと思ひ寄りぬ。

おもて赤みて、夕霧何事にか侍らむ。大學寮に引籠つて後静かなる所に籠り侍りにし

のち、ともかくも人に人と交際するまじる折事なければ、恨み給ふべき事侍ら

じとなむ思ふ給ふる」とて、いと恥かしと思へる氣色を、いと

あはれに心苦しうて、大宮よし、今からなりとも今よりだに用意し給へ」とばか

りにて、ことごと他事にいひなし給ひつ。夕霧心いとど文なども通はむことの

難かごきなめりと思ふに、いと歎かし。う物などまゐりなどし

中障子 雲居雁の居る部屋との隔ての障子。

まざなき心地にも 雲居雁は無邪気な心にも 色々思ひ亂れるのでもあらう。

雲居の雁もわがごとや 伊行釋一霧深き雲居の雁もわがごとや 晴れせず物の悲しがるらむこの歌によつて 姫君を雲居雁といふ。

御乳母子 小侍従といふのは 姫君の乳母子である。つまらぬ事に顔をかあいなく ころまらぬ事に顔をか

の意。あはれは いくらかくても、
「哀れ」は 姫君の所在を知つても、
意。姫君をなやますのが憎いの

夜中に 哀れは 戀心である。
さ夜中の歌 夜中に友を呼ぶ
ながら空ゆく 雁の葉を渡る風迄
閉える所へ 淋しい。

が吹き添うて 淋しい。歌の「萩
の身にも しみるかな」
かたである。即ち萩の上風が身
に吹きよれる意。續古今秋上友則
「吹きよれる身にも 思ひけるか
風を色なきものと思ひけるか

給へど、更にまゐらで、寝給ひぬるやうなれど、心も空にて、

人しづまる程に、中障子を引けど、例は殊にさしかためなども

せぬを、つとさして、人の音もせず。いと心細く覺えて、障子

に寄りかかりて居給へるに、女君も目をさまして、風の音の竹

に待ち取られて、うちそよめくに、雁の鳴きわたる聲のほのか

に聞ゆるに、をさなき心地にもとかくおぼし亂るるにや、雲居

居の雁もわがごとや」と獨りごち給ふけはひ、若うらうたげな

り。いみじう心もとなければ、これあけさせ給へ。小侍従や

さぶらふ」と宣へど、音もせず。御乳母子なり。獨言を聞

き給ひけるも恥かしうて、あいなく御顔引き入れ給へど、あは

れは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母達など近く臥して、う

ちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹きそふ萩のうは風

身にもしみけるかな、と思ひつづけて、宮のお前に歸りて歎き

夕暮心

かの御方さまへも 姫君のお部屋の方へもえう行かず胸が破れるやうな心地であられる。

打語らふさま 乳母達が兩人の事について談じあつて居るさまなどをも、いやな事とも嫌つて居なかつた。

かく騒がるべき事 夕霧とあつたことは、こんなに問題にされたやうな事とおもはれなかつた。

今すこし 夕霧は姫君よりも年下だから。

斯かる事なむと 雲居雁の一件は少しも知らせない。只大方 只何となく不機嫌な様子で。

少女

がちなるも、^(も) 御目^(大宮)さめてや聞かせ給ふらむとつつましく、^(と)

みじろき臥し給へり。^(夕霧) あいなく物恥かしうて、^(早朝にわが部屋に歸つて) わか御方に疾く

出でて、御^(姫君)文書き給へれど、小侍従にもえあひ給はず、かの御

方^(雲居雁)さまにもえいかず、胸つぶれて覺え給ふ。女はた騒がれ給ひ

し事のみ恥かしうて、わが身やいかあらむ、人やいかが思は

む、^(と) とも深く^(うしろ) おぼし入れず、^(雲居雁のさま) をかしうらうたげにて、打

語らふさまなどを、うとましも思ひはなれ給はざりけり。又

かく騒がるべき事とも^(雲居雁の心) おはさざりけるを、御後見どもいみじ

う^(考へない事だと折檻するので) あはめ聞ゆれば、^(夕霧と交通も出来ない) えことも通はし給はず。大人びたる人やさ

るべきひまをも作り出づらむ、^(夕霧十二雲居雁十四もう一寸頼りない年輩で) 男君も今すこし物はかなき年の

程にて、只いと口惜しうのみ思ふ。

おとどは、^(内大臣 あれ以後) そのままに參り給はず、宮をいとつらしと思ひ聞え

給ふ。^(四の君) 北の方には、斯かる事なむと、^(も) 氣色も見^(知ら) せ奉^(聞き) り給はず。

只大方いとむつかしき御氣色にて、^(内大) 中宮の^(秋好が格別立派にして人内された爲に) よそほひ殊

女御 内大臣の女。

まかてさせ 女御を退出させて
氣樂に休養させてあげませう。
さすがに 「世の中思ひしめり
とあるをうけて、氣をくさ
らしてゐられるやうな事情では
あるが、さすがに天子の御寵愛
は衰へないでの意。
うへにつと 女御は主上のお側
に附ききりて居られるから。

宮に預け奉りたる 雲居雁は大
宮に預けてあるので安心のやう
ですが。

俄に渡し 急に雲居雁を手許に
引取られた。
一人物せられし 一人娘の奏上
が亡くなつたからは。

思ひの外に 意外にもあなたが
私を疎外なさるのも恨めしく

にて参り給へるに、女御の、世の中思ひしめりて物し給ふを、
心苦しう胸痛さに、まかてさせ奉りて、心やすくうち休ませ奉
らむ。さすがに、うへにつとさぶらはせ給うて夜晝おはします
めれば、ある人々も心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」と
宣ひて、俄にまかてさせ奉り給ふ。御いとまも許されがたきを、
うちむつかり給うて、うへはしぶく^{大臣が小言をいはれて}に思召したるを、強ひて
御迎へし給ふ。内大^{内大臣}につれく^もに思されむを、姫君わたして、諸共
に遊びなど^もし給へ。宮に^も預け奉りたる、うしろやすけれ
ど、いとさくじり^{こましくれました人}およすけたる人立ちまじりて、
ちかさも、あいなき程になり^{夕霧の事}にければなむ。と聞え給ひて、
俄に渡し^{奉り}聞え給ふ。宮いとあへなしと思して、大宮一人物せられ
し女子^も亡くなり給ひてのち、いとさうく^もしく心細かりしに、
嬉しうこの君を得て生ける限りのかしづきものと思ひて、明暮
につけて、老いのむつかしさも慰めむとこそ思ひつれ。思ひの

心に飽かず。私は不満に思つて居る點を、その通りに正直に申上げただけの事です。

内にさぶらふが 禁中に居る弘徽殿が。

くつし 屈し。ふさぎこんで。此頃まかてて。只今里歸りしてゐますが徒然で退屈して居ますので。

あからさまに 河内本の如く「あからさまに物し侍る。かうまではぐくみ」とあるべきである。

かうおぼし立ちにたれば 一旦かうと思ひ立つたらとめても思ひ返される内大臣の御氣性ではないので。

人の心こそ いやなもののは人の心です。

我に隔てて 私にないしよにしていやらしい事でした。又さもこそはあらめ 幼稚な者達があつたやうに私を疎外したてゐなされるあなたが私を恨んで。

少女

外に隔てありて思しなすもつらくなむ。と聞え給へば、うち

畏まりて、心に飽かずおもふ給へらるる事は、しかなむ思

給へらるるとばかり聞えさせしになむ。深く隔て思ふ給ふ事

はいかにか侍らむ。内にさぶらふが、世の中うらめしげにて、

此頃まかてて侍るに、いとつれづれに思ひてくつし侍れば、

心苦しう見給ふるを、もろとも遊びわざをもして慰めよと思

ひ給へてなむあからさまに物し侍る」とて、
一緒に遊んで女御を慰めてあげるやうに思つて一時雲居雁を呼んだのです

み、人となさせ給へるを、おろかにはよも思ひ聞えさせじ」と

申し給へば、かうおぼし立ちにたれば、とどめ聞え給ふとも、

おぼし返すべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しうおぼされて、

大宮、人の心こそ、憂きもの、はあれ。とかくをさなき心どもに

も、我に隔ててうとましかりける事よ。又さもこそはあらめ、

あとの、物の心を深う知り給ひながら、我を忿んじて、斯く

お手許に引取られた所で此處に置くより安心な事はありませんまい
ゐてわたし給ふこと。かしこにて、これよりうしろやすき事も

いささかのひまもやと。少しでも雲居雁に逢ふ隙もやと。

心の鬼に 脛に傷持つ身は内大臣にあふのがきまりわるくて。わが御方。三條の宮における夕霧の部屋。

異御腹なれど 内大臣の腹ちがひの兄弟ではあるが。

その御子ども 大宮には孫であるから。

今の程に内に参り 一寸参内して夕方雲居雁をお迎へに参りませう。

あらじ」と、うち泣きつつ宣ふ。

折しも冠者夕霧の君まゐり給へり。もしいささかのひまもやと、此

頃は繁（夕霧）うほのめき給ふなりけり。内のおとどの御車のあれば、

心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わか御方自分の部屋にに入り居給へ

り。内おとどの大殿の君だち、左（近）の少將、少納言、兵衛佐、侍

従、大夫（の君）などいふも、皆此處には参りつどひたれど、御簾

の内は許し給はず。左衛門督、權中納言なども、異御腹なれど、

故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつり給ふ事ねんご

ろなれば、その御子ども、さまへ参り給へど、この君に

似る匂ひなく見ゆ。大宮の御志も、なすらひなくおぼしたるを、

只この姫君を（のひ）ぞけぢかうらうたきものにおぼしかしづきて、

御かたはらさけず、うつくしきものに（うちは）思したりつるを、

かくて渡り給ひなむかいとさう（しき）しき事をおぼす。殿は

「今の程に内に参り侍りて、夕つ方（御）迎へに参り侍らむ」とて

いふかひなき事を、内大臣は、
どうせ仕方のない事だから、縁
便にいうと、姫君を夕霧に許さ
うかしらと思はれるが、それで
もやはり不快なので。
人の御程の夕霧がすこし出世
したら、その事實によつて一世
前の男と信じて、その時の愛情
の深淺の動きを見定めて。

此處にも彼處にも、四君にも大
宮にも、女御のお相手にといふ
口實で雲居雁を引取られた。
宮の御文にて、大宮から雲居雁
への手紙には。

出で給ひぬ。内大臣心いふかひなき事を、なだらかにいひなして、さて
もやあらましとおぼせど、なほいといふかひなき心やましけれ
ば、人の御程もの、すこし物々しくなりなむに、かたはならず見
なして、その程、志の深さ淺さのおもむきをも見定めて、許
すとも、殊更なるやうにもてなしてこそあらめ、制し諫むとも、
一緒に置いては、
一ところにては、をさなき心のままに、見苦しうこそあらめ、
宮もよもあながちに制し宣ふことあらじ、とおぼせば、女御の
御つれ釋便にいひつくろつてにことつけて、此處にも彼處にもおいらかにいひな
して、渡し給ふなりけり。宮の御文にて、「おとどこそ恨みもし
給はめ、君はさりととも志の程も知り給ふらむ。御身は私の心持がお分りでせう渡し給へ」
と聞え給へれば、いとをかしげに引きつくろひて渡り給へり。大宮の方へ
十四になむおはしける。かたなりに見え給へど、いと子めかし
うしめやかに、うつくしきさまし給へり。大宮かたはらさけ奉ら
ず、あけくれのもてあそびものに思ひ聞えつるを、奉りとつれづ

さうくしくもこれからあなたが居なさらなくなれば。

恥かしき事をかうして別ればならぬのも夕霧故と思へば雲居雁も取しくて。

同じ君とこそあなた様をも若君と同じ事に思つて居りましたのに、お引越し遊ばすのが残念でございます。

人の御宿世々々の縁といふものは分らぬものだ。物げなしと殿は若君を一向な者と御軽蔑なさるのでせう。わが君や私の主人(夕霧)が人に劣つておいでになるか聞合せて頂きたいものです。

れに淋しい。さうくしくもあるべきかな。残りすくなき齡の程にて、御有様を見果つまじき事と命をこそ思ひつれ。今更に見捨

てて移ろひ給ふやいづちならむと思へば、いとこそあはれなれ

とて泣き給ふ。姫君は恥かしき事をあぼせば、顔もまたけ

給はで、ただ泣きにのみ泣き給ふ。男君の御乳母宰相の君出で

来て、宰相同じ君とこそ頼み聞えさせつれ。口惜しく渡らせ

給ふこと。殿はことさまにあぼしなる事おはしますとも、さや

うにおぼし靡かせ給ふな」などささめき聞ゆれば、いよく恥

かしとおぼして、物も宣はず。大宮いで、むつかしき事な聞えら

れそ。人の御宿世々々のいと定めがたく」と宣ふ。宰相いでや、

物げなしとあなづり聞えさせ給ふに侍るめりかし。さりとも、

げにわが君や人に劣り聞えさせ給ふと聞召しあはせよ。

と、なま心やましきままにいふ。冠者の君、物のうしろに入り

居て見給ふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、

御身を行末を見届け得ない事と

とて(打ち)泣き給ふ。姫君は恥かしき事をあぼせば、顔もまたけ

給はで、ただ泣きにのみ泣き給ふ。男君の御乳母宰相の君出で

来て、宰相同じ君とこそ頼み聞えさせつれ。口惜しく渡らせ

給ふこと。殿はことさまにあぼしなる事おはしますとも、さや

うにおぼし靡かせ給ふな」などささめき聞ゆれば、いよく恥

害にとかく。大宮と色々相談の上
上工面して。

對面。夕霧を姫君に對面させ
た。

おとどの御心の内大臣が恨め
しいから、引取るなら勝手にな
さい。諦めてしまはう。とは思
つて見ますけれども。

などですこし。今までは人目の
隙もあつただらうに、なぜ逢は
ずに過した事でせう。

殿まかて給ふ。殿が禁中から御
退出の様様で。

さもさわがればと。そんなにや
かましく云はれるなら云はれて
もよろしい。

御乳母 雲居雁の乳母。

少女

いと心細くて、涙・おし拭ひつつおはする氣色を、御乳母いと
心苦しう見・て、宮にとかく聞えたばかりで、夕間暮の人のま
よひに對面・せさせ・給へり。かたみに・物恥かしく
胸つぶれて、物もいはで泣き給ふ。夕霧・おとどの御心のいとつら
ければ、さばれ、思ひやみなむと思へど、戀しうおはせむこそ
・わりなかるべけれ。などで、すこしひまありぬべかりつる
日頃、よそに隔てつらむ」と宣ふさまも、いと若うあはれげな
れば、雲居・まるもさこそはあらめ」と宣ふ。戀しとはおぼしな
むや」との・たまへば、すこしうなづき給ふさまも、をさなげ
なり。御となぶら参り、殿まかて給ふけはひ、こちたく追ひの
のしる御さきの聲に、人々、「そぞや」などおぢさわげば、いと
怖ろしとおぼしてわななき給ふ。男は、さもさわがればと、ひ
たぶる・に・許し聞え給はず。御乳母参りてもとめ奉るに、氣
色を見て、あな心づきなや、げに宮知らせ給はぬ事にはあらざ

めてたくとも 夕霧がいかにかに立
派な方でも姫君の結婚の初に六
位風情の人に縁付かれるとは。

めざまし 餘りの仕打だとおも
ふ。

かれ聞き給へ 夕霧が雲居雁に
いひかける詞。

くれなゐの歌 血の涙に深く
染まつてゐる私の袖の色を、浅
く緑色とけなしていゝものでせう
か。

色々にの歌 種々の事につけて
我身の不幸の思ひ知られるのは
どうしたあなたとの因縁なので
せう。「色々」は「染」の縁語。

殿入り給へり 内大臣が邸内に
入つて來られた。

御車三つばかりにて 夕霧は内
大臣が雲居雁をつれて御車三輛
程を連れて忍びやかに歸つて行
かれる音を聞くにつけても。

りけり、と思ふに、いとつらく、^(て)乳母^(い)いでや、憂かりける世か
な。内大臣のお叱りはいふまでもなく 殿のおぼし宣ふ事は更にも聞えず、雲居雁の繼父 大納言殿にもいかに聞

かせ給はむ。めでたくとも、物の初めの六位宿世よ」とつぶや
くもほの聞ゆ。^(き)給ふ。^(ふ)。たゞこの屏風のうしろに。^(し)も。尋ね來て歎く

なりけり。男君、我をば位なしとてはしたなむるなりけり、と
思すに、世の中。^(い)と。恨めしければ、多少興奮した心地がして あはれもすこしさむる心地

して、めざまし。夕霧「かれ聞き給へ。
くれなゐの涙に深き袖の色を浅みどりとやいひしをるべき

恥かし」と宣へば、
色々に身の憂き程の知らるるはいかに染めけるなかの衣ぞ

と。宣ひ。果てぬに、殿入り給へり。^(れ)ほ。姫君はどうにもかうにもならぬので自分の部屋に
歸られた。跡に取残されたの内も。わりなくて渡り給ひぬ。

男君は、立ちとまりたる心地も、いと人わろく胸ふたがりて、
わが御方に臥し給ひぬ。御車三つばかりにて、^(し)忍びやかに急ぎ
出で給ふけはひを聞くも、しづ心なければ、大宮 宮のお前より、「參

霜水の歌 いやなこと霜や水がはりつめて居るあけがたの空のほのあかりも見えないほどに涙が雨と降つてくる。あけぐれは明けきらうとする前に一時暗くなる、それを一あげぐれといふ。

大殿 源氏は今年五節の舞姫を差上げられる。惟光の女を源氏が世話して舞姫にあげるのである。

五節 五節の舞姫。河海「五節は常の年は公卿より二人、代始に人は公卿二人、受領三人、殿上今年依て爲新嘗若四人也。公卿二人爲新嘗若四人也。公卿二人受領者良清惟光也。一東の院 二條院の東院の花散里は。参りの夜の人々 河内本に「人々の」とあるのがよろしい。「参りの夜」とは晩参とも晩座ともいいつて、内々に参る事で、十一月の中の丑の日に「行はれる。十一事根源を照。去年は藤壺の諒瀧で五節に沙汰やみになつて淋しきの鬱積も加はつて。

少女

り給へ」とあれど、寝たるやうにて動きもし給はず。涙のみとどまらねば、歎き明して、霜のいと白きに、急ぎ出で給ふ。うち腫れたるまみも、人に見えむが恥かしきに、宮はた召しまつはすべかめれば、心やすき所にとて急ぎ出で給ふなりけり。道の程、人やりならず心細く思ひつづくるに、空の氣色もいたう曇りて、まだ暗かりけり。

霜氷うたて結べるあげぐれの空かきくらし降るなみだかな
 大殿には、今年五節奉り給ふ。何ばかりの御いそぎならねど、わらはべのさうぞくなど、近うなりぬとて、急ぎせさせ給ふ。
 東の院には、参りの夜の人々。さうぞくせさせ給ふ。殿には、大方の事ども、中宮よりも、童下仕の料まで、えならで奉れ給へり。過ぎにし年五節などと。まりしがさうくしかりし積りも取り添へ。人の心地も、常よりも花やかに思ふべかめる年なれば、所々いどみて、いといみじくよろづを盡し給

按察の大納言 按察大納言も左衛門督も五節を出される。うへの五節には 殿上人からあげる五節は。

大納言の 按察大納言が側室腹の娘を奉られるの、あなただが秘藏娘をあげるに何の恥かしい事がありませう。

その日の夕つけて 曉参の事である。源氏も各婦人達に仕へてゐる童女や下仕の中から、すぐれた者をと、見くらべて選り出されるので、選ばれた者ども栄に感じてゐる。程々に應じて光御前に召して、前上が御前に召し、源氏は自分前で下稽古の爲見てそれによつて選定された。

ふ聞えあり。按察の大納言、左衛門督、うへの五節には良清
（と云ひしが）今は近江の守に（まり）て左中辨なるなむ奉りける。皆
禁中にとどめさせ給ひて（やがて）宮仕すべく仰言ことなる年なれば、娘
をおの／＼奉り給ふ。殿源氏の舞姫は、惟光の朝臣の津の守にて左
京の大夫だいにぶかけたる・娘、かたちなどいとをかしげなる聞えある
を召す。五節に惟光はからい事に思ひたれど、人々大納言の外腹ほかはらの娘を奉らる
なるに、朝臣のいつきむすめ出だし立てたらむ、何の恥ぢかあ
るべき」とさいなめば、わびて、同じくは宮仕やがてせさすべ
く、思ひあきてたり。舞習舞の練習はしなどは、里里家でにていとようしたて
て、かしづきなど、親しう身に添ふべきはいみじうえり整へて、
後見人など親しく娘に附添ふ者は嚴禁してその日の夕つけて参らせたり。殿源氏にも、御かた／＼の童下仕わらはしちかへの
すぐれたるをと御覧じくらべ、えり出でらるる、心地ど
もは程々につけて、いとおもだたしげなり。御前ごぜんに召して御覽
せむうちならしに、お前を渡らせてと定め給ふ。捨つべう

おぼし煩ひて 取捨に困つて。
今一ところの もう一人の舞姫
に附ける童女達を當方から差上
げたい。

胸のみふたがりて 雲居雁の事
故なども 食事なども。

御簾の前にだに 御簾の前にさ
へ接近する事を源氏は夕霧に許
してない。源氏は自分の癖で
ういふお積りか紫上とは疎遠に
してあるので女房達なども夕
霧とは遠々しくして居つたのだ
が。

舞姫 惟光の女。

少女

もあらずとりく (にをかしけ) なるわらはべの様體 (かしらつきか)
たち (ども) をおぼし煩ひて、 選今一ところの料をこれより奉ら (せ)
ばや」など笑ひ給ふ。 只もてなし用意によりてぞ選びに入りけ
る。 (態度と心遣ひの二點によつて選に入つた)

夕霧 大學の君 (は)、 胸のみふたがりて、 物なども見入れられず、 くつ
しいたくて、 (胸のヤラヒ) 書もよま (れ) 物整くて物 (ふ) 給へるを、

心もや慰むと、 立出でて紛れありき給ふさまかたちは、 めでた
くをかしげにて、 静やかになまめい給へ (か) 給へ (おはす) れば、 若き女房

などは、 (ども) いとをかしと見奉る。 (紫上) うへの御方には、 御簾の前にだ
に物近 (く) うももてなし給はず。 わが御心ならひ (は)、 いかにおぼす

にかありけむ、 (をさなしと解るまじき物ぞとていと)
け (ならはし聞え給へ) れば、 御達 (女房) などもけどほき (の) みある (を)、 今

日は物の紛れ (どくさまぎれに) 夕霧 (が) に入り立ち給へるなめり。 舞姫 (車から) かしづきおろして、
妻戸 (ま) の間に屏風など立てて、 假初のしつらひなるに、 (夕霧が) やをら寄

を着する也。余勘、宇治左府記
 仁平元年十一月十七日癸丑晴、
 今夕五節参内、師長未_蒙、
 直衣_二之_一、宣旨_上、束帶_上、
 面_目、乃不_二参内_二云々。案_レ之_一
 五節の次、上占は直衣を聽る。舞
 夕霧も此次に直衣を聽と見えたり
 一_レ直衣など官位相當ならぬ一
 風變つた色を聽されて参内され
 たら。清らなる 河内本に「淺ましき」
 とあるのがよるしい。餘りだと
 は思はれるが。ざれありき給ふ
 五節の参る儀式 花鳥「十一月
 中_二舞夜_一参入(或曉参と云)即
 有_二帳_一出御、寅日御前試、卯日
 童女御覽、辰日御前舞、舞姫進舞、
 裝束、丑日は赤色唐衣、寅日は青
 色唐衣、辰日は赤色唐衣、赤紐、
 日蔭等也。青摺唐衣、赤紐、
 大殿のと源氏からあげた惟光
 大殿の女と源氏からあげた惟光
 美しいといつて人々は大殿さし
 て清げに、惟光の女は綺麗で現
 物清げに、惟光の女は綺麗で現
 代式で、元の姿がわからぬほど
 もなく美しき姿など、斯く譽めら
 れるのでも、例年の舞
 例の舞姫と、多少大人びて居つ
 へに、細流抄「上古ハ十二三也」
 げに心殊なる前に「宮仕へ」と
 べく、仰言ことなる年なれば」と
 あるのよつた語である。少女
 少女子もの歌、あつた、あな
 子も年とつたことだらう、あな

少女

のから、まださきにはいみじうませて
 給ふ。御門より始め奉りて、おぼしたるさまなべてならず、世
 に珍らしき御覺えなり。
 五節の参る儀式は、いづれともなく、心々に二なくし給へる
 を、舞姫のかたち、大殿のと大納言殿とはすぐれたりとめで
 のしる。げにいとをかしげなれど、
 くしげなる事はなほ大殿には及ぶまじかりけり。物清げに今
 めきて、その物とも見ゆまじうしたてたる様體などの、ありが
 たうをかしげなるを、かうほめたるのしるなめり。例の舞姫
 どもよりは、皆すこし大人びつつ、げに心殊なる年なり。殿
 参り給ひて御覽するに、昔御目とまり給ひし少女の姿を、あ
 ぼし出づ。辰の日の暮つかた遣はす。御文のうち思ひやるべし。
 少女も神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ經ぬれば
 年月の積りをかぞへて、うちおぼしけるままのあはれを、忍

たの舊友なる私も年寄つたのだから。「天つ袖」は舞姫の袖の義で、「ふるき」の枕詞。
 年月の積りを、長の年月を數へて、心で浮んだ儘の懐しさを、だまつて居れなくとも、消息なきつざれるものも、譯もない事だ。感ぜられたものも、動かし易い事だ。「はかしたしや」とも評したものである。
 かけていへばの歌、五節に關して、言葉のいたぐと、昔君に逢ひましたのも、今日のやうに思はれま。日蔭の意のかづら、それ、日光の意にとりなして、日光の下の霜といつて、「とけし」は「心」をゆるしたのも、けし「袖」とは歌語として音の意。「袖」は「心」をゆるしたのも、數を充たす爲に加へたまでのこと。「かけていへば」の縁語。
 青摺の紙、青摺の料紙も折に似つかはし。辰の紙には藍で摺つた著物を著る。
 まぎらはし、人目に立たぬやうに、手跡は變へて書いてある。
 草が、草は「草」は漢字の草書に、草の假名を多く使つて、平假名とまぜて散らし書きにしてある。
 人の目とまる、夕霧も、惟光の女が目につくにつけて、惟光女は夕霧を、あたり近くだに、惟光女は夕霧を、物つつましき程、きまりわるく思ふ年、若くすれてゐなくこと。

御返
 び給はぬ事の、をかしう覺ゆるもはかなしや。
 五節
 かけていへば今日の事とぞ思ほゆる日蔭の霜の袖にとけしも
 青摺の紙よく取りあへて、まぎらはし書いたる濃墨、薄墨
 ・草がちにうちませ、亂れたるも、人の程につけてはをかし
 ・と御覽ず。冠者の君も、人の目とまゝるにつけても、人知
 れず思ひありき給へど、あたり近くだに寄せず、いとけしう
 もてなしたれば、物つつましき程の心には、歎かしうてやみ
 ぬ。かたちほしもいと心につきて、つらき人の慰めにも見るわ
 ざしてむやとおもふ。
 やがて皆とどめさせ給ひて、宮仕すべき御氣色ありけれど、此
 度はまかでさせて、近江のは辛崎の祓、津の守は難波とい
 どみてまかでぬ。大納言も、殊更に參らすべき由
 奏せさせ給ふ。左衛門督、その人ならぬを奉りて咎めあ

（思ひたえ）もはかなしや。（離けれど）
 （書き）まぎらはし書いたる濃墨、薄墨
 （女の身分に合せては）人の程につけてはをかし
 （御）心には、歎かしうてやみ
 （雲居雁の無情を慰める爲にこの娘に逢ひたいと夕霧は思ふ）
 （國の）津の守は難波とい
 （奉るべきでない娘を御控にあけてお咎めがあつたが）
 （殿の）も、殊更に參らすべき由
 （せちじ）

やがて皆 其儘舞姫達を皆禁中
 とどめて宮仕するやうにと
 御内意であつたが。津の守は
 津の守の爲はと互に急いで退出し
 た。大納言も 按察大納言も改めて
 宮仕に上げる旨を奏して娘を引
 取つた。内侍のすけ 典侍缺員の所へ私
 の娘をすけ 願ひ出したので。私
 さもや 希望通りを取りなして
 やらうかと源氏を考へて居られ
 るといふ事を夕霧は聞かれては
 自由にならぬ典侍になつては
 わが年の程 夕霧の心。自分の
 年齢や官位が 微賤でないなら
 ば、結婚をも申出で見ようもの
 を、かしら考へて居るとさへ知
 られずにと終るとはと、格別
 どうかうといふ譯ではないが、
 雲居雁の事につれて涙ぐま
 れる折々がある。兄の弟で童殿上
 をする人。

男兄弟とて 男の兄弟だからと
 いつて近くも寄せませんから。

さきく、以前から斯様な事は
 父から禁ぜられて居るのにと童
 は迷惑がるけれども。

少 女

りけれど、それもとどめさせ給ふ。津（備）の守は、「内侍のすけあき
 たる・に」と申させたれば、さもやいたはらましと大殿（おほとの）もおぼ
 いたるを、か（夕霧）の人は聞き給ひて、いと口惜しとおもふ。わが年
 の程位など、かく物げなからずば、乞ひ見てましものを、思
 ふ（も）斯（か）かる心ありとだに知らでやみなむこと、と、わざと
 の事にはあらねど、打添へて涙ぐまるる折々あり。兄の童殿上
 する・常（夕霧）にこの君に参り仕うまつるを、例（夕霧）よりもなつかしう
 語らひ給うて、夕霧「五節はいつか内（禁中）へは参る」と問ひ給ふ。
 今年とこそは聞き侍れ」と聞ゆ。夕霧「顔のいとよかりしかば、
 すぐろにこそ戀しけれ。ましが常（改）に見るらむも羨しきを、又・
 見せてむや」と宣へば、いかにでかさは侍らむ。心（私）にまかせて
 もえ見侍らず。男兄弟（おとこから）とて近くも寄せ侍らねば、まして・
 いかでか君（お）だちには御覽ぜさせむ」と聞ゆ。夕霧「さらば
 文をだに」とて賜へり。さきく・かやうの事・はいふもの
 小イ

いとほしうて 折角頼まれたのを断るのも夕霧に氣の毒で。

生ひ先見えて 末の上達も思はれて大層きれいで。

日蔭にも 歌 私があなたに懸想して居た事は、あなたの方でもはつきり分つて居た事でせう。蘿を日光にとりなして、日光ではつきりわかつたでせう。といたのである。「かけし」は蘿の縁語。當日蘿の綬をかけるからである。昔天武天皇芳野の宮にまし／＼て琴を弾き給ひし時、前の峯より天女天降りて、少女の袖を五度から玉を杖にまきて少女さびすと、五節の舞はありけるとぞ。誰かぞ 娘と弟と二人で。名残なく 誰の手紙か。は打つて 變つて。

この君だちの 夕霧が、娘をすこし人がましく思つて下さるなをば。

を と 苦しけれど、強ひて渡されるので せめて賜へば、いとほしうてもていぬ。文を 年の程よりはざれてやありけむ、こましくれて をかすと見けり。この文を 緑の薄様の好ましきかさねなるに、夕霧の筆蹟 手はまだいと若けれど、生ひ先見えていとうか・しげに、

夕霧

日蔭にもしるかりけめや少女子があまの羽袖にかけし心は

二人見・る程に、居た 父ぬしふと寄り來たり。二人は 怖ろしう・あきれ

て、え引き隠さ・ず。けしからぬ事をしたものだ 惟其（れ）なぞの文ぞ」とて取るに、二人は おもて赤みて居たり。（志） 惟よからぬわざしけり・と・憎めば、せうと・逃

げていくを、呼び寄せ・て、（強ひて） 誰がぞ」と・問へば、源氏 殿

の冠者の君の、しかく宣ひて賜へる」といへば、（ふ） 名残なくう

ちゑみて、夕霧の事 惟いかにうつくしき君の御ざれ心なり。改 きんぢらは、

同じ年なれど、いふかひなくはかなかんめり・（か） などほめて、

母君にも見す。（も） 惟この君だちの、すこし人かずに・思しぬべか

らましかば、平凡な宮仕をさせる上り あほぞうの宮仕よりは、夕霧に 奉りてまし。殿の御心あき

惟光の妻 惟光の妻

源氏の氣性を見るに

御心とは 自分の方から見捨てなされる事はないから頼もしい。

皆急ぎ立ちにけり 宮仕にあげる準備をした。

立ちまさる方の 惟光の娘より立ちまさつた雲居雁の事が氣に懸つて。

わりなく戀しき 無闇に戀しい雲居雁の面影に二度と逢へないのかと歎くより外の事はない。

里さへ 雲居雁を思ひ出す種なるので夕霧は里なる三條の宮院の東院に引籠つて居られた。西の對 東院の西對に居る花散里に頼んで夕霧を預けられた。

かくそさなき 夕霧の若い今から手なづけておいて大宮の亡後世話を見て下さい。

ただ宣ふままの 花散里は源氏のいひなり次第になる人故。

斯かる人も こんな不器量な女をも父は見捨てなさらないか。たのだなどと思ひ。

少女

てを見るに、見そめ給ひてむ人を、御心とは(彌ろけならで)忘れ給ふまじき(かめる)に。こそいと頼もしけれ。明石の入道のためし(例に倣ふ事になるだらう)にやならまし」
などいへど、皆急ぎ立ちにけり。(た)

夕霧

惟光の女の所へ

祖母大宮

起き臥し

かの人は、文をだにえやり給はず、立ちまさる方の事し心にかかりて、程経るままに、わりなく戀しき・面影に、(御)又

あひ見で(も)・やと思ふ(それはかり氣にかけてゐる)よりほかの事なし。宮の御もとへも、あ

なく心憂くて參り給はず。(稀々まゐり給うては)雲居雁が

頃遊び馴れ(和)・し所のみ思ひ出でらるる事まされば、里さへ憂

く覺え給ひつつ、又籠りゐ給へり。殿(源氏 二條院の)はこの西の對(の 御方)・にぞ

聞えあづけ奉り給ひける。(もう長生きもなごるまいから)大宮の御世の残りすくなげなるを、

おはさず(せ)なり(大宮の死後も)なむのちも、かくをさなき程より見ならはして、

後見おぼせ」と聞え給へば、ただ宣ふままの・御心にて、なつ(夕霧を)

かしうあはれに思ひあつかひ奉り給ふ。(聞え)ほのかになど見奉るに

も、(花散里を見での夕霧の心)かたちのまほならずもおはしけるかな、斯かる人も人は。

又(數行後の)と思ふ心のうちとある「思ふ」にかゝる語。向ひて見るかひなからむも向きあつてゐる際に見るかひもなやうな醜女も斯くて年經給ひにけれど父は永年花散里と連れ添つて來たが承知の上で濱木綿の隔てを設けて何かの世話をして顔を見ないやうにしてゐられるもはまゆふばかり拾遺戀一人磨萬葉四「み熊野の浦の濱木綿百重なる心は思へどたゞにあはぬかも」の「百重なる」とつて書いたので、幾重にも目隠し(几帳)をおいてその陰でといふ意味。諸説誤つてゐる。

此處にも彼處にも夕霧は何處へ行つても人は誰も美人はか散里は元々美しくないので、すこし年寄つたやうな氣がして、誇らはしきけなしたくなるのであつた。

まじる事なう 専心に。
見るも物憂く 六位の裝束など
朔日 元日。

雲居雁

思ひ捨て給はざ(ぬ)・りけり(な)・など、わか強ちにつらき人の御か
 たちを心にかけて戀しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやう
 に柔かならむ人をこそあひ思はめ、と・思ふ。又、向ひて見
 るかひなからむもいとほしげなり、斯くて年・經給ひにけれど、
 殿の(今)・さやうなる御かたち・御心と見・給うて、濱木綿
 ばかりの隔てさし隠しつづ、何くれともてなし紛はし給ふめる
 も、うべなりけり、と思ふ心のうちぞ恥かしかりける。大宮の
 尼(尼姿では居られるが)かたちことにはあはしませど、まだいと清らにはし、此處にも
 彼處にも、人はかたち・よきものとのみ目なれ・給へるを、も
 とより・すぐれざりける御かたちの、ややさだ過ぎたる心地し
 て、瘦せく(か)に御髪(か)ずくななるなどがかく誇らはしきなりけり。
 年の暮には、睦月の御裝束など・宮はただこの君一所の御
 事を、まじる事なういそぎ給ふ。あまたくだりいと清らに
 したて給へるを、見るも物憂くのみあ・ばゆれば、朔日など

などてかさもあらむ
そんな事
があるのですか。

口惜しききはの
卑しい身分の
人でも。

暫しの事とは
六位であるのも
ほんの當分の事
とは思ひます
故おとど 葵上の父、夕霧の祖
父。元の左大臣。

ひんがしの院にて
父が二條の
東院に來られた
時のみ父のお側
近く参ります。

少 女

には、
•••必ずしも内へ参るまじう思ひ給ふるに、何に斯く
用意
いそがせ給ふらむ」と聞え給へば、大宮「などてかさもあらむ。
•••老いくづほれたらむ人のやうにも宜ふかな」と宣へば、
•••老いねどくづほれたる心地ぞするや」と獨りごちて、
うち涙ぐみて居給へり。かの事を思ふならむと、いと心苦しう
て、宮もうちひそみ給ひぬ。大宮「男は、口惜しききはの人だに、
心をたかうこそつかふなれ。あまりしめやかに、斯くな物し給
ひそ。何•••かかう眺めがちに思ひ入れ給ふべき。ゆゆしう」と
と宣ふ。夕「何かは。六位など人のあなづりはべるめれば、暫し
の事とは思ふ給ふれど、内へ参るも物憂くてなむ。故おとどお
はしまさましかば、たはぶれにても人にはあなづられ侍らざら
まし。物隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちておぼ
いたれば、おはしますあたりにも、たやすくも参り馴れ侍
らず、•••ひんがしの院にてのみなむお前近く•••侍る。對

何事を。何の物思ひもなかつた
でせうに。

宿世々々に それらの 運次第
で一人前になりきつてしまへば
自然疎略に思ふ人もない譯です
から。
故おとどの 故大臣がほんの
う暫くだけ御存命であつて下さ
つたら。
限りなき蔭には 此上なき保護
者として 故大臣も源氏も同じ
事と力にして居ますが、それで
も思ふ儘にならぬ事が澤山あり
ます。

世を思ひしめり 悲觀して居ら
れるので。

朔日にも 元日。
大殿は 源氏は參賀もなさらな
いので。

里の御方こそあはれに物し給へ。有りがたい方です 親今一所おはしまさしかば、葵上の事

何事を思ひ侍らまし」とて、涙の落つるを紛らはし給へる氣色、

いみじうあはれなる。(を)見給ふまき に、宮はいとどほろくと泣

き給ひて、大宮母におくるる人は、(ま)こ(そ)は(身)分(に)つ(れ)て 程々につけて、さの

みこそあはれなれど、おのづから宿世々々に人となり立ちぬれ

ば、あろかに思ふ人もなきわざなるを、(た)だ(ま)る(づ)氣(に)か(け)ぬ(や)う(に) 思ひ入れぬ

さまにてを物し給へ。故おとどの今暫しだに物し給へかし。限

りなき蔭には、同じことと頼み聞ゆれど、思ふに叶はぬ事の

多かるかな。内のおとどの心ばへも、なべての人にはあ

らずと世の人もめでいふなれども、昔に變る事のみまさりゆく

に、命・長さも恨めしきに、(の)先(の)長(い)あ(な)た(が) 生ひさき遠き人さへ、斯くいささ

かにても、世を思ひしめり給へれば、いとなむよろづ恨めしき

世なる」とて泣きおはします。

朔日にも、大殿は御ありきしななければ、のどやかにておはしま

て御前の試に詩を作りて及第し給て進士になりてやがて侍從に任じ給ふ也」甚しく臆病な學生はおくだかき

つながぬ船 細流「放島の作文とて中島の人も通はぬ所にやりて詩を作らする也。其故は自然人に談合などさせじの用也」

まじらひ遊び 閉ぢこもつて學問ばかりしてゐないでも、人と一緒になつて演奏してゐられる筈だのに。

昔の花の宴 桐壺院の花の宴の折、源氏が春鶯囀を舞はれた事を。卷一、三一〇頁参照。

その世の事 源氏は桐壺院の當時を懐しく追憶する。

九重を 霞の爲に禁中からかけへだてられ、春鶯囀の舞が春になつた事も告げてくれます。春は来てみても、今日まで春とも知りませぬでした。意に怨みも心がかくされてゐる。

帥のみや 源氏の弟宮で後に登兵部卿官と申す。

御題賜ふ。大殿の太郎君の試み給ふべき故なめり。おく

だかきものどもは、物も覺えず。つながぬ船に乗りて池に離れ

いでて、いとすべなげなり。日やうくくだりて、樂の舟ども

漕ぎまひて、調子ども奏する程の山風の響き面白く吹きあはせ

たるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでも、まじらひ遊びぬ

べきものを、と世の中恨めしう覺え給ひけり。春鶯囀

舞ふほどに、昔の花の宴の程おぼし出でて、院の御門、「又さば

かりの事見てむや」と宣はするにつけて、その世の事あは

れにおぼしつづけらる。舞ひ果つる程に、おとど

院に御かはらけ参り給ふ。

鶯のさへづる春はむかしにてむつれし花のかけぞかはれる

院のうへ、

九重をかすみ隔つるすみかにも春と告げくるうぐひすの聲

帥のみやと聞えし、今は兵部卿にて、今の上に御かはらけ参り

大后の宮 弘徽殿大后。朱雀院の御母。

かへさに 主上が歸りがけに大后の方に御立寄になる。

故宮を 主上は藤壺を思ひ出されて。

またくも 又々參上致しませう。殊更にさぶらひて 又改めて參歸らせ給ふ響きにも お歸りになる源氏の威勢を御覽になるにつけても。いかにおぼしいづらむ 一體源氏は昔の事を考へて、どんな風を思つてゐられるだらう。天下を握られる御幸運は壓倒出来るものでなかつたと。

び・はやみぬ・給はぬ程に。

夜更けぬれど、かかる序に、おほきさい大后の宮・おはします方をよぎ奏進りに

てとぶらひ聞えさせ給はざらむもなさけなければ、かへさに渡殿

らせ給ふ。おとどももろとも源氏にさぶらひ給ふ。后待ち喜ひ給ひ大后

て、御對面あり。いといたうさだ過ぎ給ひにける御けはひにも、

故宮を思ひいで聞え給ひて、かく長くおはしますたぐひもおは有

しけるものを、と口惜しうおもほす。大后老いこみまして今は斯く古りぬるよは

ひに、よろづの事忘られ侍りにけるを、いと忝くか・わたりら・

おはしまいたるになむ、更に昔の御世の事おもひ給・いでられ侍

る」と、うち泣き給ふ。冷泉さるべき御蔭どもにおくれ侍りて後

・春の春・けぢめも、おもろ給へわかれぬを、今日なむ慰

め侍りぬる。源氏またくも」と聞え給ふ。おとどもさるべきさ源氏も然御挨拶申上げて

まに聞きて、殊更にさぶらひて」など聞え給ふ。いつくりもせずのどやかな

らで歸らせ給ふ響きにも、大后の心后のなほ胸打騒ぎて、いかに

のどやかに 今は閑散のお身の上だから。

奏せさせ給ふ事ある時々ぞ 後の「御心にかなはぬ時ぞ」と同格語である。

取り返さまほしう 昔の御代に取り返したくて。

くらべぐるしう 大后の御機嫌が取りにくくて辛抱が出来ない程困つておしまひになつた。
進士 文章生ともいふ。式部省の登用試験に及第した人の資格。三四五頁頭註参照。
年積れる 長年修業してゐる。
秋の司召 京官除目。
かうぶり得て 五位に叙せられて。

少女

おぼし出づらむ、(か)世を保ち給ふべき御宿世は消たれぬものにこそ、と古へを悔いおぼす。臘月夜内侍のかんの君も、のどやかにおぼし出づるに、あはれなる事(ども)多かり。今も(猶)さるべき折風源氏との音聞のつてに(こ)もほのめき(聞)給ふ事絶えざるべし。后大后は、おほやけに奏せさせ給ふ事ある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、何くれの事に觸れつつ、御心にかなはぬ時ぞ、命長くて斯かる世の末を見る(が)心(ま)事(ま)と(思)怒(り)取り返さまほしう、よろづをおぼしむづかりける。老大后はいもておはするままに、さがなさもまさりて、院朱雀院もくらべぐるしう堪へがたくぞ思ひ聞え給ひける。かくて大學夕霧の君、その日の文詩うつくしう作り給ひて、進士しんじになり給ひぬ。年積(大)れる賢(人)き者どもをえらせ給ひしかども、及第の人わづかに三人なむありける。秋の司召つかまめしに、かうぶり得て、侍従になり給ひぬ。か雲居雁の人の御事忘るる世なけれど、あとの内大臣が雲居雁せち(は)にまもり聞え給ふもつらければ、わりなく夕霧は無理してまでも逢はうとなさらないなともたいめ

此處彼處にて、あちこちに離れて居つて容易には逢はれぬ山里人などを。

六條京極 六條御息所時代からの御住居。
四町 保と同じ。平安京の行政区劃上方四十丈を町とし、町四を保と名づけた。
げに過ぐしがたき 如何にも知らぬ顔も出来ない事だと思ひになつて。
事ども 河内本の「ども」の無いのに従ふべきである。

御としみの事 河海「御賀の事も。年滿ちたるを賀する故也」

んし給はず。御消息ばかりさりぬへきたよりに聞え給ひて、かたみに心苦しき御なかなり。

大殿、静かなる御すまひを、同じくは廣く見どころありて、此

處彼處にておぼつかなき山里人などを、つどへ住ませ・む

の御心にて、六條京極・わたりに、中宮の・舊き宮のほとりを、

四町を占めて造らせ給ふ。式部卿の宮、明けむ年ぞ五十になり

給ひけるを、御賀の事、對の上おぼし設くるに、おとども、げ

に過ぐしがたき事どもなりとおぼして、さやうの御いそぎも、

同じくは珍らしからむ御家居にてと、
年かへりては、ましてこの御いそぎの事、御としみの事、樂人

舞人の定めなどを、御心に入れて營み給ふ。經、佛、法事の日

の・装束、祿どもなどをなむ上はいそがせ給ひける。東の院に

も、わけてし給ふ事どもあり。御中らひ、ましていとみやびか

に聞えかはし・てなむ過ぐし給ひける。世の中響きゆすれる御

然るべき機会に交換されて

明石上

秋好

柴上の父

用意なされるに

御賀の準備も

(思)し(旋)て(こ)

五十の御賀の事

柴上

柴上と花散里との間柄は

優雅な御交際で

年頃源氏は年來世間に對して居られたが、情深い御心を持つて居られたが、當方に對しては意地わるく、當り、何かにつけては、きまりの悪い思ひをさせ、召使にも斟酌なく辛い仕打が多いたるで、さては自分を無情だと心に含んで居られる事があつたのだらうと。

心にくく 奥ゆかしく。

わが家までは、そのお蔭が自分の家までは及んで來ないが、名譽の事には思つて居られたのに。

女御の 嘗て姫君が女御として入内される折などにも、源氏が斟酌のない態度であつたので。

八月には 六條院竣功。

未申の町は 西南の一廓は秋好の舊邸故秋好が其儘おいでにならる事であらう。

少 友

いそぎなるを、式部卿の宮にも聞召して、年頃世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやになさげなく、事に觸れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、うれはしき事のみ多かるに、つらしと思ひおき給ふ事こそはありけめと、思ひもつらくも思はれたがいとほしくもからくもおぼし、（たり）かゝるを、源氏の關係して居られる多くの婦人達の中業上が特別に愛情がこゝろで、（御）取りわきたる御思ひすぐれて、（の申）世に心にくくめでたき事に思ひかしかれ給へる御宿世をぞ、わが家までは匂ひこねど、（眼りなき）めいぼくに**おぼすに**、（もなき）又かくこの世にあまるまで響かしいとなみ給ふは、（思しの）覺えぬよはひの末のさかりにもあるべきかな、と喜び、（宮の北方）北の方は、（不快に）心ゆかずものしとのみおぼしたり。女御の御まじらひの程などにも、（源氏）おとどの御用意なきやうなるを、いよく**恨めし**と思ひし**み給へる**なるべし。
八月には六條の院造り果てて渡り給ふ。未申の町は、中宮の御

辰巳は東南の一廓は源氏自身がおいでになる。

御方々の各婦人達の御希望通りの景色をお作らせになつた。南ひんがしは東南の町の庭は。紫上方である。春のお前ともいふ。

春のもてあそび 春の観賞物。

秋の前栽 秋の草花。

泉 遠くに泉水を湧出させて、その水を引いて来て遣水にする。

むとくに 見るかげもなく壓倒された秋の景色である。

舊宮ふるみやなれば、やがておはしますべし。辰巳たぢみには殿のおはこ・す
 べき町(方)なり。丑寅東北の一廓は、ひんがしは、東の院に住み給ふ花散里對の御方、戌亥西北の一廓の町は
 明石の御方とおぼしおきてさせ給へり。もとありける池山愉快をも、
 びんなき所なるをばくづしかへて、水のおもむぶき、山のおきて
 を改めて、さまざま(い)に、御方々の御願ひの心(ま)ばへを作らせ給へ
 り。南(い)・ひんがし(い)・は山高く、春の花の木(い)・・、數を盡して(移)・
 ・植(い)ゑ、池のさま(い)・・・・面白くすぐれて、お前(い)近き前栽(い)・
 に、五葉、紅梅、櫻、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもて
 あそび(物)・をわざとは植ゑて、秋の前栽(い)・をば、むら／＼ほのか
 にませたり。中宮秋好の御町をば、もとの山御息所の時の山に、紅葉の色濃かるべ
 き植木(い)どもを植(い)ゑ、泉の水遠く(い)・澄まし遣(い)・・水の音(い)・・ま
 さるべき岩(い)を・立(い)てくはへ、瀧おとして、秋の野を遙に作りた(い)
 る、その頃丁度今がその季節なのでにあひて、さかりに咲(い)き亂れ(面白き事すぐれ)たり。
 嵯峨の大井のわたりの野山(い)・、むとくに(い)けあ(い)されたる秋なり。

北の東 花散里の住む方。花散里を夏の御方ともいふ。

昔覺ゆる 昔を思ひ出すよすがとなる花橋や。古今夏一五月待つ花橋の香ぞする。昔の人の袖に木丹。龍膽の異名。

分けて 一部をさいて。馬場の殿 五月に競馬を催す爲の馬場殿である。

西の町 明石上の方。冬の御方といふ。北面築き分けて 北側を垣で仕切つて。

一度にと 各婦人とも同時にとお定めになつたが。

少 女

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の景色を主にしてある。夏の前近き前栽・吳竹・下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深く面白く、山里めきて、卵の花、垣根殊更にしわたして、昔覺ゆる花橋、撫子、薔薇、くだなどやうの、花のくさくさを、植ゑて、春秋の木草、そのなかにうちまぜたり。東面は、分けて馬場の殿造り、埒ゆひて、五月の御遊び所に、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、向ひに御厩して、世になき上馬どもを整へ立てさせ給へり。西の町は、北面築き分けて、御藏町なり。隔ての垣に、松の木繁く、雪をもてあそびむたよりに寄せたり。冬初め、朝霜の結ぶべき菊の籬、われはがほなる柞原、をさく名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。々々にして。

彼岸の頃ほひ・渡り給ふ。一度にと定めさせ給ひしかど、騷

その夜そひて 其の晩紫上に添うて引移つて來られた。河内本「その装ひにて」

御前 前驅の人。

こちたき 仰々しい程ではなく、世間の非難もやと簡素にせられたので。 今一方 花散里。

曹司町 局町。

あてのこまげ 小さく仕切つて、それ／＼に割當ててある部屋。「こまげ」は「小分け」である。

この町々の 四方の一廓々々の境には塀を構へたり廊を設けたりして往來の出來るやうにし、相互の關係を近しく風情のあるやうに工夫された。

がしきやうなりとて、中宮秋好はすこし延べさせ給ふ。例の大まじおいらかに氣色氣どらぬばまぬ花散里（は）ぞその夜（ま）そひて移ろひ給ふ。春榮上方の庭のの御作（ヒ）りしつらひは、今の時節には合はないがこのころにあはねど、いと心殊（ヤ）なり。御車十五、御前（ズ）四位五位がちにて、六位の殿上人などは、さるべき限りをえらせ給へり。こちたき程にはあらず、世の謗りもやと省き給へれば、何事もおどろ（か）しういかめしき事はなし。今一方の御氣色（儀式）も、榮上と同じ位の行装でをさ／＼おとし給はで、侍従夕霧の君添ひてそなたはも（三）でかしづき（聞え）・給へば、げにかうもあるべき事なりけりと見えたり。女房（さうし）の曹司町（まち）ども、あてのこまげぞ、大方の事よりもめでたかりける。五六日過ぎ（むし）て、中宮（秋好が宮中から）まかださせ給ふ。出（入）の御儀式はたさはいへどいと所せし。御さいはひのすぐれ給へりけるをばさるものにて、御有（入）様の心にくくおもりかにおはしませば、世に重くお（は）はれ給へる事、すぐれてなむおはしましける。この町々（なか）の中の隔てには、塀ども廊などをとかく行

宮のお前 秋好中宮方のお庭。

袖 婦人や童女の身に近く着る服。
紫苑 表は蘇芳、裏は青（花鳥織物）
文様を織り出した絹布。
赤朽葉 赤味を帯びた朽葉色。
汗袴 童の上衣の上に着る服。
うるはしき 斯かる場合は正式の作法故、女房を遣はすべきであるが、秋好は美しい童女を思ひきけることはお出来にならなかつた。

ころから 春をお好のあなたも、せめて風のつてになりと我が宿の紅葉を御覧下さい。

風に散る 風に散る紅葉は貫目がない。私はこの岩根の松の千代までも春の花を見はやしませう。

少女

き通はして、けぢかくをかしきあはひにしなし給へり。

九月（つぎ）になれば、紅葉むら／＼色づきて、宮のお前（中宮のお庭は）えもいはずお

もしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、色々の花紅葉

をこきませて、こなたに奉らせ給へり（奉）。大きやかなるわらはの

濃き袖・紫苑（あこめ）の織物かさねて、赤朽葉（れ）の羅の汗衫（うすもの）、いといたう

馴れて、廊、渡殿の反橋を渡りてまゐる。うるはしき（色）・ぎしき（けい）

なれど、わらはのをかしきをなむえおぼし捨てざりける。さる（この童女）

所にさふらひ馴れたれば、もてなし有様、ほか（の）には似ず、好

ましうをかし。御消息には、

秋好 ころから春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ

若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返りはこの御箱

の蓋に苔敷き、いはほなどの心ばへして、五葉の枝に、

風に散る紅葉は（葉上）かろし春の色を岩根（いっは）・の松（の）にかけてこそ見め

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなり

かく取りあへず、斯く突嗟に思ひ付かれた機轉の程などを、中宮は興味深く御覽になる。この紅葉の御消息、あの「紅葉を風のつてにだに見よ」の消息は實に憎らしいやうですな。

立田姫の。立田姫の思はくもありませんから。

さし退きて、今は黙つてゐて。花の蔭に、春になつたら花の背景をしようつてこそ威張つた事もいへるでせう。

聞えかよはし、婦人達は互に消息を通して居られる。

かずならぬ人は、取るにも足らぬ自分は、いつ引越したともなく目立たぬやうにと思つて。

大方の作法も、一體の作法も他の婦人達とあまり差別をつけずおもしろく待遇された。

けり。かく取りあへず、思ひ寄り給へる故々しさなどを、を思慮の深き、を栗上に宜ふ詞、を源氏、を中宮のお側付の女房達も、を御覧す。お前なる人々もめであへり。おとど、「この紅葉の

御消息、いとねたげなめり。春の花ざかりに、この御いら

へは聞え給へ。このころ紅葉をいひくたさむは、立田姫の

思はむこともあるを、さし退きて、花の蔭に立ちかくれてこそ

強きこと。は出でこめ。と聞え給ふも、いと若やかに盡きせ

ぬ御有様の見どころ多かるに、いとど思ふやうなる御すまひに

て、聞えかよはし給ふ。大井の御方は、かう方々の御移ろひ定

まりて、かずならぬ人は、いとなく紛らはさむとおぼして、

神無月になむ渡り給ひける。御しつらひ、事の有様劣らずして、

わたし奉り給ふ。姫君の御ためをおぼせば、大方の作法も

・けぢめこよなからず、いと物々しくもてなさせ給へり。

心々なる源氏はいろ／＼氣質のかはつた婦人達に逢ふことの積るにつけても。

右近 夕顔の侍女で、今は源氏に仕へて居る。
古人のかずに 故參女房の仲間入をして源氏に仕へて居た。

かいひそめたる 物靜かな。ひつそりとした。

明石の御方 明石上に劣らぬ程の御寵愛は受けたであらうに程もとく源氏はさまで愛しても居ない女をさへのけものにしては置かず氣長に面倒を見て下さる方だから、夕顔が身分の高い婦人並と、夕顔にはゆかぬ迄もこの六條院に引取つた婦人達の仲間入は出来たであらうに。

又今更に 今更愚癡をこぼして甲斐ない事故。古今東歌「犬上が名漏らすな 古今東歌「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名漏らすな」

年月隔たりぬれど、源氏は飽かざりし夕顔をつゆ忘れ給はず、心々なる人の有様どもを見給ひかさぬるにつけても、夕顔が生きて居つたらとあらましかばと、あはれに口惜しくのみおぼしいづ。右近は何の人かすならねど、夕顔のなほその形見と見給ひて、源氏が夕顔をらうたきものにおぼしたれば、ふるびと古人のかずに仕うまつり馴れたり。須磨の御移るひの程に、紫上方に女房對の上達全部を移した時から引續いて右近は紫上方に居る。
の御方に、右近の性質皆人々聞えわたし給ひし程より、紫上そなたにさぶらふ。心よくかいひそめたるものに女君も思したれど、右近の心のうちには、夕顔が生きてゐたら故君ものし給はましかば、明石の御方ばかりの御・覺えには劣り給はざらまし、源氏の性質を右近が思ふのであるさしも深き御志なかりけるをだに、紫上程ではなからうがあとしあぶさず取りしたため給ふ御心長さなりければ、六條院まいてやんことなきつらにこそあらざらめ、この御殿移りの花散里や明石上などかずのうちにまじらひ給ひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。かの西の京にとまりし玉臺若君をだに行方ゆくも知らず、夕顔の事を秘密にし偏へに物を思ひつづみ、又今更にかひなき事故によりて、わが名漏らすなと口がた源氏が

くだりにけり 乳母も一緒に筑紫に。

若君の四つに 夕顔は玉鬘三歳の折死去。 母君の乳母は若君の母夕顔の行方を知らうとして。

あやしき身に 卑しい自分如き者がお連れして筑紫に下るのは悲しくおもはれる事などを父君にそれとなくお知らせしようとは思つたが。此處は河内本の如く「遙なる道におはせむ事の如しき事」猶父君にや云々」とあるがよい。 父君 玉鬘の實父内大臣。昔の頭中將。 母君の以下乳母等詞。夕顔は内大臣殿が夕顔はどうしたとお尋ねになつたら何と申上げよう。

幼き心地に 玉鬘は子供心に。

め給ひしを、憚り聞えて、尋ねても音づれ聞えざりし程に、その御乳母のをとこ、少貳になりていきければ、くだりにけり。かの若君の四つになる年ぞ筑紫へはいきける。母君の御ゆくへを知らむと、よろづの神佛に申して、夜晝泣き戀ひて、さるべき所々を尋ね聞えけれど、遂にえ聞き出でず。さらばいかがはせむ、若君をだにこそは御形見に見奉らめ、あやしき身に添へ奉りて、遙なる程におはせむ事の悲しき事などを、父君に、ほのめかさむ。と思ひけれど、さるべきたよりもなきうち、
「母君のおはしけむ方も知らず。尋ね問ひ給はばいかが聞えむ。
玉鬘は父内大臣に馴染んで居られないのに、
まだよくも見馴れ給はぬに、をさなき人をとどめ奉り給はむも、
うしろめたかるべし。
父内大臣が御存じの上は、姫君をつれて筑紫に下れとはお許しになる筈もない、
乳母達が、
きにもあらず」など、おのがじ語らひ合せて、
玉鬘のさま、
只今からけだかく清らなる御さまを、殊なるしつらひ、
設備、
に乗せて漕ぎいづる程は、いと哀になむ覺えける。
幼き心地に、
乳母等の心、
をさな、

折々に 船中での事。

娘ども 少貳の娘で姉おもととあてき。あてきは後に兵部の君

舟道ゆゆし 船路で泣くのは不吉だといつて少貳は悲しい中に

心若うおはせしものを 夕顔君は若々しい氣立の方でしたの

たな 景色もお目にかけてたかつた。

かへる波も 伊勢物語・後撰編しきに羨しくもかへる波かな

舟人もの歌 船頭達も誰か戀しい人があるのか、船唄が何やら悲しげに聞える。「大島の」は浦島、筑前國也、鎮御崎近所なり。來し方も 前後も知らぬ廣々とした沖に出て何處の空で君を戀しく思つて居る事でせう。鄙の別れに 古今雜下「思ひきや鄙の別れに衰へて蠶の繩たぎさりせむとは」都をはなれて遠方に来た悲しさに。我は忘れず 萬葉七雜「千早振じしかの御崎を過ぎぬとも我は忘れずしめかのすめ神」

夕顔 母君を忘れず、折々に、玉鷲「母の御もとへいくか」と問ひ給ふに

つけて、涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、舟道・ゆ

ゆしとかつは諫めけり。面白き所々を見つつ、心若うおはせし

ものを、斯かる道をも見せ奉るものにもがな、おはせましかば、

我等は下らざらまし、と京の方を思ひやらるるに、かへる浪

も羨しく心細きに、舟子どもの荒々しき聲にて、「うらがなしく

も遠く來にけるかな」と謠ふを聞くまゝに、二人さしむかひて

泣きけり。

舟人もたれを戀ふとか大島のうらがなしげに聲のきこゆる

來し方も行方も知らぬ沖に出でて哀いづくに君を戀ふらむ

鄙の別れに、おののがじし心をやりていひける。金の御崎

を過ぎて、「我は忘れず」など、世と共のことぐさになりて、

かしこに到り着きては、まいて遙なる程を思ひやりて、戀ひ泣

きて、この君をかしづきものにて明し暮す。夢などに、いとた

いかさまにして、都にお連れして父殿に
お知らせ申さう。内大臣は姫君
いとよなき程を世話されたので
ある。帯木谷の撫子の歌は當時
の事である。

所につけたる場所相應の縁組
が出来た。その地に住みついて
しまった。

ねさう 細流抄「年星也。又年
三。正五九月此義可然歟。後
世の勤めなどし給ふ也」和秘抄
「ねんさうといひて年に三たび
精進をする也。當年星をまつる
事をもいふといへり」湖月師説
「一年三可レ用」

少貳のうまご 玉鬘の事。

大夫の監 監は太宰の大監で相
當は六位。その五位になつたの
を大夫の監といふ。

なる。あたかものを」といふ。(なるき)。聞くもゆゆしく(思ひつこ)。

玉鬘の「いかさまにして、都(玉鬘を)にゐて奉りて、父(内大臣)とどに知らせ奉らむ。

いとよなき程を、いとらうたしと思ひ聞え給へりしかば、さり

ともあろかには思ひ捨て聞え給はじ」などいひ歎く。佛神(くわん)に願

を立てて、(つこ)なむ念(玉鬘の幸福を)じける。娘どもを(男)のこ(こ)どもも、所につけ

たるよすがども出で来て、住みつきにけり。心のうちにこそい

そぎ思へど、京の事は、い(日に)く縁(縁が遠くなる)が遠(なる)ざかるやうに隔たりゆく。物(玉鬘は)お

ぼし知るままに、世(世)をいと憂きものにおぼして、ねさうなどし

給ふ。(はたち)二十ばかりになり給ふままに、生(ねんさう)ひととのほり(ねんさう)・て、

いと(と)・あたらしくめでたし。この住む所は、肥前の國とぞいひ

ける。そのわたりにも、いささかよしある人は、まづこの少貳

のうまご(孫)の有様を聞き傳へて、なほ絶えず音づれくるも、いと

いみじう耳かしがましきま(なかに)でなむ。

大夫の監(げん)とて、肥後の國(族)にぞう廣くて、彼處につけては覺(覺定)えあ

かたちある女 器量のよい女。

このまのこども 少貳の三人の息子達。

二人 次郎と三郎と。

よき人の 姫君は高貴の方の胤であつても、親からは子の中に入られず。
さるべきにて 縁あればこそ、こゝろな田舎にもお下りになつたのです。

玉 鬘

り、勢いかめしきつはものありけり。むくつけき心のなかに、いささか好色すきたる心のまじりて、かたちある女をいかにあつめて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、玉鬘「いみじきかたはありとも、我は見隠してもたらむ」と、いと懇にいひかかると、乳母はいとむくつけく思ひて、「いかで斯かる事を聞かで、尼になりなむとす」といはせたりければ、いよく危がりて、おして肥前の國に越え來ぬ。このをのこどもを呼び取りて語らふことは、玉鬘「思ふさまになりなば、同じ心に勢をかはずべきこと」など語らふに、三人兄弟の内二人は味方になつた二人は監はおもむきにけり。二人「暫しこそ似けなくあはれと思ひ聞えけれ、監はあのくわが身のよるべと頼まむに、いと頼もしき人なり。これにあしくせられては、この此の界限に居たたまらぬ近き世界にはめぐらひなむや。よき人の御筋といふとも、親にかずまへられ奉らず世に知られでは、何のかひかはあらむ。この人のかく懇に思ひ聞え給へるこそ今は御さいはひなれ。さるべきにてこそは斯か

せぬ事どもも 滅多にしない亂暴もする事でせう。

たいくしくあたらしき 事どももあり又惜しい事どもある。故少貳の 三六〇頁参照。

母君 夕顔。かひなくて 母上がありながらその甲斐もなく。

おこす 玉臺に。

る世界にもおはしましけめ^{(二)たるを}。逃げ隠れ給ふとも、何のたけ^{(何のよ、事があら}き事かはあらむ。負けじ魂に怒りなば、せぬ事どもも^(おぎく)もしてむ」といひおどせば、いと^(乳母心)いみじと聞きて、中^(太郎)のこのかみなる豊後^(ぶご)の介なむ、^(玉臺を監に許す事は)「むほいとたいくしくあたらしき事なり。故少貳^(父)の宣ひ^(置き)、し事もあり。とかく構へて京^(二)にあげ奉りてむ」といふ。娘どもも泣きまどひて、「母君の^(いふ)かひなくて、さすらへ給ひて行方をだに知らぬかはりに、^(玉臺を人並の結婚もさせたいと思つてゐるのに)人なみく^(あぶれ)にて見奉らむとこそ思ふに、さるもの^(監の如きに縁付くとは)のなかにまじり^(あぶれ)、給ひなむこと」と思ひ歎くをも知らで、^(監の已徳)我はいと覺え高き身と思ひて、^(評判者と)文など書きておこす^(三)。手などきたなげなう^(三)書きて、^(よき)唐の色紙^(二)、かうばしき香^(かう)に入れしめつつ、^(三)をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいと^(訛つてゐる)だみたりける。みづ^(監自身も)からもこの家の次郎を語らひ取りて、うちつれて來たり。年三十^(四)ばかりなるをこの、たけ高く^(やか)、物々しく^(うら)ふとりて、きたなげなけれど、^(氣のせい)思ひなしうとまし

さまかへたる 春の夕暮に来る
とは風廻りな事だ。
秋ならねども 古今戀一いつ
とも戀しからずはあらねども
秋の夕べは怪しかりけりこの
歌によつては、秋ではないが戀ひ
しかつたと見えると嗤笑した
句。
祖母おとど 乳母の事。玉臺の
祖母といひなして居るのであ

いかに 姫君を専心にお世話
しようと思つて奮發して今日
は来にくいところを無理に推參
したのです。

おとど 女に對する敬語。前に
祖母おとどとあつた。
よからぬ女なども 私がつまら
ぬ女どもを澤山持つて居るのを
お聞きになつていやがられるの
です。

わが君 玉臺の事。

く、荒らかなる振舞(など)、見るもゆゆしく覺ゆ。血色も元氣さうで
に、聲いたうかへれてさへづり居たり。懸想人は、夜に隠れたる
をこそよばひとはいひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋な
らねども怪しかりけりと見ゆ。心監の機嫌を指しまいとを破らじとて、祖母おとど出
であふ。故少貳の、いとなさけ風雅でび、きらくしく物し給ひし
を、いかでかあひ語らひ申さむと思ひ給へしかども、さゝる志
をも見せ聞えず待りし程に、いと悲しくてかくれ給ひにしを、
そのかはりに、いかに仕うまつるべくなむ、志を勵まして、
今日はいとひたぶるに強ひてさぶらひつる。このおはしますすら
む女君玉臺、筋こと高貴の落胤とに承れば、いとかたじけなし。只なにがしらが
私の君と思ひ申して、頂になむ捧げ奉るべき。おとどもしぶし
ぶにおはしげなる事は、よからぬ女などもあまたあひ知りて侍
るを、聞召しうとむななり。さりとも、すやつばらそんな女どもをを、ひとし
なみにはし侍りなむや。わが君をば、後の位に(お)、おとし奉らじ

宿世拙き 玉臺は不運の人や
ら、遠慮すべき仔細があつて、
結婚は致すまいと細々敷いて居
るやうですから、氣の毒に思つ
て困つてゐます。

その日ばかりといふに
日に玉臺を迎へに來るといつ何
で。季の果 三月は春季の終で嫁娶
れ。君にもし 玉臺の心に背くやう
な事があれはどんな神罰も受け
ますと鏡の明神にかけた誓ひま
せら。花鳥餘情一肥前國松浦郡
鏡明神は太宰少貳藤原廣繼が靈
也。又鏡山は神功皇后の御鏡化
りして石となれるを鏡山と云ふべ
なり。下の詞に、松浦箱崎同社
なりといへるに付て、八幡と同
體の由聞え侍り。然らば鏡の神
に此義もあるべき也。」
仕うまつりたりあまり長く待た
いと久しきに困つて、心に浮
せらので乳母は困つて、心に浮
んだまま。

ものをや」など、いとよげにいひ續く。乳母「いかがは。かく宜ふ
を、いと幸ありと思ひ給ふるを、宿世拙き人にや侍らむ、思ひ
憚ること侍りて、いかでか人に・御覽ぜられむと・人知れ
ず歎きはべるめれば、心苦しう見給へ煩ひぬる」といふ。更
になおぼし憚りそ。天下に・目つぶれ足折れ給へりとも、なに
がしは仕うまつりやめ・てむ。國の内の佛神は、己になむ靡
き給へる」など誇り居たり。その日ばかりといふに、乳母「この月
は季の果なり」など、田舎びたる事をいひのがる。ありていく
きはに、歌よままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、
「君にもし心たがはば松浦なるかがみの神をかけて誓はむ
この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひ給ふる」とうちゑみた
るも、世づかずうひくしや。あれにもあらねば、返しすべく
もおもはねど、娘どもによますれど、尊「まろはまして物も覺え
ず」と居たれば、いと久しきに思ひ煩ひて、うち思ひけるま
乳母は
退散させるが
恐ろしさに夢中

年を経ての歌 永年姫君の幸福
を祈つた甲斐もなく、その念願
が聞き届けられずに監に取られ
たら、鏡の明神が恨めしく思は
れるだらう。
おぼざらるる 湖月抄本の儘。
河内本よし。

おとど 祖母おとど、乳母の事。
さはいへど 「まろはまして物
もおぼえず」といひはしたが、
この人の姫君が片輪な爲に、
もしあなたが結婚の約束を破ら
れたら恨めしい事だらうといふ
祖母は、玉鬘の爲に幸を祈つて
みたところ、貴方から嬉しい御
申入れを受けましたので、祖母
は非常に喜んで「何分にもこの
孫女は人と違つてゐる(不具者)
のに、若し此度の幸運を神が取
りはづすやうなことをなさつた
ら(不具者)二度と結婚談など
なにつらく思はれぬから)どん
と、いふことを著録したのだらう
たので、申上げてそのことが神
のおい。納得の意をあらは
す詞。おら。

まに、

乳母 年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見む

とわななかし出でたるを、梅ろしがつて馬(ま)いでや、こはいかにおぼ(せ)さらるる

・・・と、(事ご)ゆくりかに寄り來たるけはひに、不意に・・・おびえて、青まてや

・・・と、色もなくなりぬ。娘たちは、さはいへど心強く笑ひて、

娘玉鬘この人の、さま殊に物し給ふを、引きたがへ侍らば、つらく

思はれむを、なほほけくしき人の、神かけて聞えひがめ給ふ

なめりや」と解き聞かす。馬(ま)おい、さり(さうたく)く」とうなづきて、

馬(ま)をか面白しき御口つきかな。なにがしら、(か)・田舎びたりといふ

名こそ侍れ、口惜しき民には、(た)侍らず。都の人とても、何ばか

りかあらむ。皆知りて侍り。(を)・なほしあなづりそ」とて、又

よまむと思へれども、出来なかつたと見えて堪へずやありけむ、往いぬめり。

次郎が、(か)・語らひ取られたる。(を)・もいと怖ろしく心憂くて、

この豊後長男の介を責むれば、上洛を促すが「いかかは仕うまつるべからむ。語

まれの兄弟は、たつた二人の弟は、私が監の味方をしないといつて、仲違ひをしてしまつた。あだまれては、仇にとられては。

人知れず、姫君が内心痛く、死んでしまはうと、沈みこんで居られるのも道理なので、大變な工夫をして上洛の準備をした。

あてきと、幼名あてきといつた姫君に、今は兵部の君といふのが、姫君に附添つて。

日取りて、吉日を選んで。

類廣くなりて、子供が澤山出来た爲に、一緒には出掛けられぬ。

らひあはずべき人もなし。まれ／＼の兄弟は、この監におなじ心ならずとて、中たがひにたり。この監にあだま・・・れては、いささかのみじろきせむも、所せくなむあるべき。なか／＼な却てひどい目にあふたらうる目をや見む」・と思ひ煩らひにたれど、姫君の、人知れずあばいたるさまの・いと心苦しうて、生きたらじと思ひ沈み給へる・、ことわりと覺ゆれば、いみじき事を思ひ構へて出で立つ。妹たちも、年頃經ぬるよるべを捨てて、この御供に出で立つ。あてきといひしは今は兵部の君といふぞ添ひて、夜逃げ出でて舟に乗りける。大夫の監は肥後に歸りいきて、四月の二十日の程に・日・取りてこむとする程に、かくて逃ぐるなりけり。姉あもとは、類廣くなりて、え出で立たず。かたみに別れ惜しみて、あひ見むことの難きを思ふに、年經つる古里とて、殊に見捨てがたき事もなし。ただ松浦の宮の・前の渚と、かの姉あもとの別るるをなむ、顧みせられて、悲しかりける。

姉者人は

兵部君の心

るる(多)

本年住み馴れた土地ではあるが

か(三)

數年連れ添つた夫を捨てて

姫君の

したふ

玉臺

浮島兵部の歌 浮島兵部の歌 浮島兵部の歌 浮島兵部の歌 浮島兵部の歌
出たが、私達の行く先の落着場はどどこでせう。「浮島」は憂き處といふ意味に名所を借りたのである。
行く先監の歌 私監は行先監のあてもない浮いた身の上だ。

おもふ方の風 順風。

怖ろしき人 監。

憂き事監の歌 玉鬘監の歌と見るべきだらう。この歌は河内本によつて解すべきである。胸の響にくらべると響の灘の響は名ばかりのやうなものだ。
唐泊 備前。

玉 鬘

浮島兵部を漕離れても行く方やいづく泊(三)まりと知らずもあるかな
行く先玉鬘も見えぬ波路に舟出して風まかに任する身こそ浮きたれ

・いとあとはかなき心地して、うつぶし臥し給へり。かく逃げぬる由監あ監のづからいひ出で傳へば、負監けじ魂監にて追ひ來なむ、

と思ふに、心も惑ひて、早船といひ(ふ物)て(特別の仕掛をしてあるので)さまことになむ構へたりければ、おもふ方の風さへ進みて、危きまで走りのぼりぬ。

響播磨の灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらむ、小さき舟の飛ぶやうにて來る」などいふ者あり。海賊(向ふ見ず)のひたぶるならむよ

りも、かの怖(お)ろしき人(お)の追ひくるにやと思ふにせむかたなし。

憂き事(お)に胸(お)のみ騒(お)ぐ響(お)きにはひびきの灘(お)もさはらざりけり

川尻(お)といふ所近づきぬといふにぞ、すこし生(お)きいづる心地する。

例の舟子(お)ども、「唐泊(お)より川尻(お)押すほどは」と謠(お)ふ聲(お)のなさけな

さ(お)も、あはれに聞ゆ。豊後(お)の介(お)、あはれになつかしく(お)。

謠(お)ひすさびて、豊後(お)いとかなしき妻(お)子(お)も忘れぬ」とて、思へば

いかにぞこの舟唄の通りに。以下豊後介の心中。妻子はどうか。なつた事だつかり。身の助けになるやうな事だつて。来てしまつたし。皆自分がつを憎むあまりに。妻子を遣散し、思ふに。無分別にも前後も考へず。出て来たものだと。少し落着いてから。餘りにも。軽率な自分の行動を思ひ續けて。輕率な自分の地の文。集縛或人「涼源郷井不得見。胡地妻兒虛棄捐」

げにあやしの兄の誦する詩を聞いて、自分の輕率を反省したのである。

ただ一所の 姫君一人の爲に。

浮べる波風に 舟に乗つてゐるのであるから、この詞によつて兵部の君が今の身の上を表現したのである。いかにしなし奉らむ 工夫がつかなく、自分な

げにぞ。皆妻子を筑紫にうち捨ててける。いかになりぬらむ、はかしく(き)身の助けと思ふ郎等どもは、皆つれてゐて來にけり、我をあしと思ひて追ひ惑はして、いかがしなすらむ、と思ふに、心をさなくも顧み・せで出でにけるかな、と、すこし心のどまりてぞあさましき事を・思ひつづぐるに、心弱くうち泣かれぬ。胡豊後の地の妻兒をば空しく捨てくつとずす・るを、兵部の君聞きて、げにあやしのわざや、年頃數年つれ添つた夫の心の中にも従ひ來つる人の心にも、俄に夫にたがひて逃げいでにしを、いかに思ふらむ、とさまく思ひつづける。歸るかた京の事ととも、その所といきつくべき古里もなし、知れる人といひよるべき頼もしき人も覺えず、ただ・一所の御ためにより、こころの年月住み馴れつる世界筑紫を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらすかたなし。この人をも、いかにしなし奉らむとするぞ、とあきれて覺ゆれど、いかにそれも仕方がないはせむ、とて京に急ぎ入りぬ。

そのやどりまき 玉臺の落着場に
とつておいて。 九條は場末
都の内といへども

水鳥の陸に 水鳥が陸にあがつ
てまごころしてゐるやうな落着
かぬ心持して。 徒然に定まつた仕事がないの
で退屈で、今まで経験しなかつ
た頼りなきを感じては居るが、
類に觸れて縁故を求めて。河
内本「ないにふれて」は誤寫故
校せず。

母おとど 河内本「おばおとど」
がよい。乳母の事。私の事は氣
この身はいと安く 私の事は氣
樂なものです。 咎あるまじ問題はないだらう。
わが君 玉臺をあんないだらう。
手にほつておいてはどんな氣持
がしよう。

九條に、昔知れりける人の残りたりけるをとぶらひ出でて、そ
のやどりをしめおきて、都の内といへども、はかしくしき人
の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女商人の中にて、い
ふせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、さし方行く
先、悲しき事多かり。も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して、徒然に、ならばぬ有様の
たづきなきを思ふに、歸らむにもはしたなく、心をさなく出
で立ちにけるを思ふに、従ひ來たりし者どもも、類に觸れて逃
げ去り、もとの國に歸り散りぬ。住みつくべきやうもなきを、
母、おとどあけくれ歎きいとほしがれば、何か。この身はい
と安く侍り。一人の御身にかへ奉りて、いづちもいづちもま
かり失せなむに咎あるまじ。われらいみじき勢になりても、わ
が君をさる、者の中にはふらかし奉りては、何心地かせ
まし」と語らひ慰めて、神佛こそは、さるべき方にも導き奉

八幡 山城石清水八幡宮。

かくなむ 御靈験によつて斯く上洛が出来ましたと早く神にお禮を申し上げなさい。

五師 弄花抄「八幡宮の五師五人ばかり有歟」一禪「五師は法師のつかさ也。五人事不憚八幡宮に限らず諸寺に有也」河海抄「貞觀八年別當安崇之時、以運如法師、始補五師云々」唐土にだに 河海抄「大唐僖宗皇帝后馬頭夫人(玄宗孫玄成太子娘)形の醜き事を歎き給成るに、國長谷寺觀音より、東にけるに、夢の中より、手貴を雲に乗て、東方より來て、手貴をべつて、瓶水を面にそぐと見て、りて乾符三年丙申七月十八日侍女を引率して、明州の津に出向ひ又吉備大臣入唐時、長谷寺觀音住吉明神に祈請して、野馬臺をよみけるに、靈場ある由江談に見えたり。

ましてわが國のうちにこそ唐

・給はめ。近き程に、八幡の宮と申すは、彼處にても・まる

祈り申し給ひし松浦、箱崎おなじ社なり。かの國を離れ給ふと

ても、多くの願(ぐわん)をも・立て申し給ひき。今都に歸りて、「かくな

む御しるしを得(ゆ)はりてまかりのぼりたる」と早く申し給へ」と

て、八幡にまうでさせ奉る。そのわたり知れる人にいひ尋ねて、

・五師とて、はやく親の語らひし大徳の残れるを呼び取り

て、まうでさせ奉る。豊後「打次ぎては、佛の御なかには、初瀬な

む日の本のうちにはあらたなるし顯はし給ふと唐土にだに

聞えあんなる。ましてわが國のうちにこそ、遠き國の境とて、

年經給ひつれば、わが君をばまして恵み・給ひてむ」とて、

いだし・奉る。殊更にかちよりと定めたり。ならばぬ心地に

いとわびしく苦しけれど、人のいふままに、物も覺えて歩み給

ふ・いかなる罪深き身にて、斯かる世にさすらふらむ、わが

親世に・なくなり給へりとも、我をあはれとおぼさ・ば、あは

げに人々來ぬ　これが右近の一行である。

頭かきありく同宿してくれるやうにと頻りに頼む。いとほしけれど玉臺の一行は法師に氣の毒には思ふが。

とに外の間に身を隠したりして、残りは部屋の片隅に寄つて泊つた。

軟障玉臺は慕などを隔てにして居られる。

かいひそめて　ひっそりして。

年月に添へて右近は落着かぬ奉公が年月のたつにつれて、似合はくなくいやうになつてゆく我身を思ひ惱んで。

かやすく身輕な支度で出たが。

折敷食器を載せる片木（へぎ）造りの角盆。隅切角のお膳である。手づから取りて姫君にかしづ御臺　膳などが揃はないで。

く程に、げに人々來ぬ。これもかちよりなめり。よろしき女二人、下人しもびとどもぞ、男女かずおほかめる。馬四つ五つ牽かせて、いみじく（う）忍びやつしたれど、清右近が召連れた人々げなる男ども（う）もあり。法師は、せめて右近の一行を此處にやどさまほしくして、頭かしらかきありく。いとほしけれど、又宿り（取り）かへむもさまあしく煩はしければ、人々は奥に入り、と（ほか）に隠しなどして、かたへは片つ方に寄りぬ。軟障（じやう）など引き隔てておはします。このくる人も恥かしげもなし。いたう（う）かいひそめて、かたみに心づかひしたり。さるはかの世と共に戀玉臺をひ泣く右近なりけり。年月右近はに添へて（は）はしたなきま今案上に奉公して居るが長谷寺じらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびくまうでける。例（れい）ならひにければ、かやすく構へたりけれど、かちより歩（は）み堪へがたくて、寄（う）り臥したるに、この豊後の介、隣の軟障のもとに寄り來て、參（まゐ）りものなるべし、折敷手づから取りて、（豊後）これはお前に參（まゐ）らせ給へ。御臺（みだい）など打合は

わがなみの 自分等なみの人
はあるまいと右近が思つて。

いと若かりし程を 豊後介の若
い時分を見たのだが。

三條 三條さん姫君がお呼びで
すよ。三條は玉壺の下女。

兵藤太 豊後介のもの名。

うちつけなりや 現金なもの
だ。 覺えずこそ侍れ 意外な事だ、
お人違ひでせう。

玉 壺

で、いと傍痛しや」(な)といふを聞くに、わがなみの人にはあら
じと思ひて、物のほざまよりのぞけば、この男の顔見し心地す。
誰とは覺えず。いと若かりし程を見しに、ふとり黒みてやつれ
たれば、多くの年経たる目には、ふとしも・見分かぬなりけり。
三條、ここに召す」と呼び寄する女を見れば、また見し人な
り(白り)。故御方に、下人なれど、久しく仕うまつり馴れて、か
の宿の事
の隠れ給へりし御すみかまで在りしものなりけりと見なして、
いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、
見ゆべくも構へず。思ひわびて、この女に問はむ、兵藤太とい
ひし人もこれにこそ・あらめ、姫君のおはするにや、と思ひ寄
るに、いと心もとなくて、この中隔てなる三條を呼ばすれど、
右近は氣がな
食物に心(を)入れて、とみにもこぬ、いと憎しと覺ゆるもうちつ
けなりや。からうじて來て、三條「覺えずこそ侍れ。筑紫の國に二
十年ばかり經にたる下種の身を、知らせ給ふべき京人よ。人

擲練 紅の練絹。

いとど覺えて「曆年とつたと
いふ感じがして。」

この女 三條。

わかものにて 右近は三條を若
女房として見馴れて居つた當時
を思ひ出すと。

おとど 少貳の北方即ち玉羹の
乳母。

若君 玉羹。

君 夕顔の事については、右近
は夕顔がはかなく死んだことを
思ふと、乳母や三條がつかり
して愚癡をこぼさうかと思つて
口に出すのも怖ろしくていひ出
さない。

いとつらく 夕顔を連れ出して
行方をくらましたのは右近であ
るから。

たがへにや侍らむ」とて寄り來たり。田舎びたる擲練三條のさまに絹など

着て、いといたうふとりにけり右近が三條を見て。わが齡もいとど覺えて恥か

しけれど、右近右近なほと・さしのぞけ。我をば見知りたりや」とて、

顔を右近がさし出でたり。この女打見つけ・手手を打ちて、三條三條「あがも

とにこそおはしましけれ。あな嬉しとも嬉しや。いづく三より參

り給ふひたるぞ。うへ夕顔はおはしますや」と、いとあどろくうしく

泣く先づ。わかわかしものにて見馴れし世を思ひ出づるに、隔て來

にける年月かぞへられて、いと三よなく・哀れなり。右近右近「まづ、お

とどの事はおはすや。若君兵部君の事はいかがなり給ひにし。あてきと聞えし

は」とて、姫君の御ことは、はかなき世を思ふに、あへなくも

やいはむとて、かけむもゆゆしくていひ出でず。三條右近は「皆おはしま

す。姫君玉羹も大人になりておはします。まづおとどに斯くなむと

聞えむ」とていりぬ。皆驚玉羹方の人々はきて、「夢の心地もするかな。いとつ

らくいはむ方なくひと・思ひ聞ゆる人右近にたいめんしぬべき事よ」と

でいひやるべき方なく 涙に咽ん

老人 乳母。

打捨て奉り給へる 夕顔が此世に
残してお置きになつた玉鬘が
おかはゆくもありおかはいさう
にしていらつしやるので、私は
それを冥途の障りともてあまし
てまだ目をつぶらずに居りま
す。

その折 夕顔頓死の折。

三人 乳母と三條と右近。

急ぎ立ちて 玉鬘の一行が。
立ち別る 一室に寄合つて話し
あつてゐた右近等が別々の部屋
に別れた。
もろともにや 御一緒に如何で
すか。

て、この隔てに寄り來たり。 けどほく隔て 名
・・屏風だつもの名残なく押しあけて、まづいひやるべき方な
く泣きかはす。老人は、ただ、「わが君はいかがなり給ひにし。
ここの年頃、夢にてもおはしまさむ所を見むと、大願を立つ
れど、遙なる世界にて、風のおとにてもえ聞き傳へ奉らぬを、
いみじく悲しと思ふに、老いの身の残りにとどまりたるもいと心
憂けれど、打捨て奉り給へる若君の、らうたくあはれにておは
しますを、よみぢのほだしにもて煩ひ聞えてなむ瞬き待る」と
いひつづぐれば、昔その折、いふかひなかりしこと・よりも、
いらへむ方なく煩はしと思へ。ども、右近「いでや、聞えてもかひ
なし。御方ははやう亡せ給ひにき」といふままに、三人ながら
むせかへり、いとむつかしくせきかねたり。
日暮れぬと急ぎ立ちて、みあかしの事どもしたため出でていそ
がせば、なか・く・いと心あわただしくて立ち別る。右近「もろとも

この介にも 豊後介にも。

恥かしくはあらで 氣恥かしくも思はないで。昔馴染の中とわかつたからである。

卯月の單衣めくもの 四月の更衣の頃に單衣めいたもの。更髪（まげ）の透影（すけかげ） 髪を單物（ひともの）の下に著込めてあるから透いて見えるのである。

佛の右の方に 長谷寺は東向故佛の方（みぎのほう）は南である。右近の局（うき）は南の方（みなみ）で佛に近い所に設けられたのである。
この御師 玉臺の祈禱師は。西の間に 玉臺一行の局（うき）は西の間（ま）で佛からは遠かつたのである。
いひたれば 乳母にいうてやつたのである。
大殿源氏。かくかすかなる道にても 斯く微行（みぎぎょう）をやつて來ても、誰も失禮（しつれい）な事をする者はあるまいと力強く思つて居ります。田舎者と見からぬはした者どもが輕蔑（けいべつ）したります。玉臺も私方に居られれば大丈夫です。

に・や」といへど、互（たがひ）に供（とも）の人の怪しと思ふべければ、この介（けい）に・も、事のさまざまにいひ知らせあへず、我（われ）も人も殊（こと）に恥（はづ）かしくはあらで、皆（みな）あり立ちぬ。右近は、人知れず目とどめて見るに、なかにうつくしげなるうしろでの、いといたうやつれて、卯月（うしづき）の・單衣（ひともの）めくもの着込め給へる髪（かみ）の透影（すけかげ）、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦（こころくる）しうかなしと見奉る。すこし足馴れたる人は、疾く御堂（ごどう）に・著（ま）きにけり。この君を・もてわづらひ聞えつつ、初夜（はつや）行ふ程にぞのぼり給へる。いと騒がしく人まうでこみてののしる。右近が局（うき）は、佛の・右の方に近き間（ま）にしたり。この御師は、また深からねはにや、西の間に遠かりけるを、右近（うき）なほ私（わたし）方にいらつしやい、玉臺の局（うき）に「介にかうくといひあはせて、こなたに移し奉る。とどめて、介にかうくといひあはせて、こなたに移し奉る。右近（うき）は、かくあやしき身なれど、只今の・・・大殿になむさぶらひ侍れば、かくかすかなる道にても、らうがはしき事は侍らじと頼

騒がしきに催されて 騒ぎの中にまきこまれて。佛を拜み奉る 右近は話も出来ず。

かつく どうかからか。

幸あらせ 姫君を仕合にしてあげて下さい。

いかめしく 威勢のいかめしいのが羨しくて。

大悲者 観音様。

當國の 大和の國司の北方に於て下さい。私共も身分相應に榮えてお禮詣を致しませう。いとゆゆしくも 忌はしい縁起でもない事をいふものだ。聞いて受領の北方といつて願ふのを聞き答めたのである。中將殿 昔の頭中將、今の内大臣。玉愛の實父。昔の儘に呼んだのである。

み侍る。田舎びたる人をば、かやうの所には、よからぬなまものども。の、あなづらはしうするも忝きことなり」とて、物語いとせまほしけれど、おどろしき行ひの紛れに、騒がしきに催されて、佛を拜み奉る。右近は心のうちに、右近「この人をいかで尋ね聞えむと申しわたりつるに、かつく斯くて見奉れば、今は思ひのごと、おとどの君の、尋ね奉らむの御志深かめるに、知らせ奉りて、幸あらせ奉り給へ」など申しける。國々より、田舎人多くまうでたりけり。この國の守の北の方もまうでたりけり。いかめしくいきほひたるを羨みて、この三條がいふやう、「大悲者には、他事も申さじ。あが姫君、大貳の北の方ならずば、當國の受領の北の方になし奉らむ。三條らも、随分に榮えて、かへり申しは仕うまつらむ」と、額に手を當てて念じ入りてをり。右近、いとゆゆしくもいふかなと聞き、右近「いといたくこそ田舎びにけれな。中將殿は、昔の御覺え

知れる大徳の 右近は玉璽の一行を誘つて自分の知人の僧坊におりた。

殿の上 紫上。殿は源氏。

いとことわりに 源氏の實子であるから美しいのは當然だの意。

かうやつれ給へるさまの 玉璽の事。身なりはわるいが。

當帝 冷泉院。

姫君 明石姫君。

まだかたなりにて 姫君今年七歳。

玉 璽

れ」といふ。いと騒がしう夜一夜行ふなり。

明けぬれば、知れる大徳の坊におりぬ。物語心やすくとなる。

べし。姫君のいたくやつれ給へる、恥かしげに思したるさ

まいとめでたく見ゆ。覺えぬ高きまじらひをして、多くの人

をなむ見集むれど、殿の上の御かたちに似る人おはせじとなむ

年頃見奉るを、又生ひ出で給ふ姫君の御さま、いとことわ

りにめでたくおはします。かしづき奉り給ふさまも、ならびな

かめるに、かうやつれ給へるさまの、劣り給ふまじく見え給

ふは、ありがたうなむ。おとどの君、父御門の御時より、そこ

らの女御后、それより下は残りなく見奉り集め給へる御目に

も、『當帝の御母后と聞えしと、この姫君の御かたちとをなむ、

よき人とはこれをいふにやあらむと覺ゆる』と聞え給ふ。見奉

りならぶるに、かの後の宮をば知り聞えず、姫君は清らに

おはしませど、まだかたなりにて、生ひ先ぞ推し量られ給

うへ紫上。見給ふ河内本に「見え給ふ」とあるのに従ふべきである。

我に並び給へる私と夫婦になられたのはあなたには過分です。源氏が紫上に戯れていふ詞。

いづくか劣り給はむ玉鬘も紫上に劣らない。

頂を離れたる光楞嚴經「世尊頂放三百寶無畏光明」頂以外の光はない。飛びはなれた美人はない。

斯かる御さまきこんな美しい方をすんでの事に筑紫三界に埋木にしてしまはうとしたのですよ。

男女の頼むべき頼りにしてゐる男女の子供達にも別れて。

ゆきまじるたより内大臣邸に出入りする機会もあります。

父おとど玉鬘の事が父内大臣に開召され。

ふ。(まて)うへの御かたちは、なほ誰か(たれ)。並び給はむとなむ見

給ふ。(え)殿もすぐれたりとおぼした(な)。めるを、言に出でては、

何かはかぞへのうちには聞え給はむ。『我に並び給へるこそ君は

おほけなけれ』となむたはぶれ聞え給ふ。見奉るに、命延ぶる

御有様どもを、又さるたぐひおはしましなむや、となむ思ひ侍

るを、いづくか劣り給はむ。物は限りあるものなれば、すぐれ

給へりとして、頂を離れたる光やおはする。只これをすぐれた

りとは聞ゆべきなめりかし」と、うちゑみて見奉れば、老人

も嬉しと思ふ。乳母(ひご)「斯かる御さまを、ほとくあやしき所(せ)に

沈め奉りぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家竈(いへかまど)をも捨て

男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ却りて知らぬ世の心

地する京にまうでこし。あかあもと、はやよきさまに導き聞

え給へ。高き宮仕し給ふ人は、おのづからゆきまじりたるたよ

り。物し給ふらむ。父おとど。聞召され、かすまへられ給ふべ

ふ。(まて)

給ふ。(え)殿もすぐれたりとおぼした(な)。めるを、言に出でては、

何かはかぞへのうちには聞え給はむ。『我に並び給へるこそ君は

おほけなけれ』となむたはぶれ聞え給ふ。見奉るに、命延ぶる

御有様どもを、又さるたぐひおはしましなむや、となむ思ひ侍

るを、いづくか劣り給はむ。物は限りあるものなれば、すぐれ

給へりとして、頂を離れたる光やおはする。只これをすぐれた

りとは聞ゆべきなめりかし」と、うちゑみて見奉れば、老人

も嬉しと思ふ。乳母(ひご)「斯かる御さまを、ほとくあやしき所(せ)に

沈め奉りぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家竈(いへかまど)をも捨て

男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ却りて知らぬ世の心

地する京にまうでこし。あかあもと、はやよきさまに導き聞

え給へ。高き宮仕し給ふ人は、おのづからゆきまじりたるたよ

り。物し給ふらむ。父おとど。聞召され、かすまへられ給ふべ

たれ(たれ)。並び給はむとなむ見

な(な)。めるを、言に出でては、

こそ君は

命延ぶる

思ひ侍

ものなれば、すぐれ

老人

所(せ)に

家竈(いへかまど)をも捨て

世の心

導き聞

たよ

父おとど。聞召され、かすまへられ給ふべ

父大臣に引取つて頂かれる工夫を

恥かしくおぼいて 玉鬘が。

やんごとなき御妻どもおはしま
すなり。紫上や明石上など。だ
から源氏の妻にはなれないの
意。

ありしさま 河原院で夕顔が頓
死した事情。

心のまさなかりける事は 私の
阿呆といつたら。

少貳になり あなたの夫君が少
貳になられた事はお名前でも知
りました。少貳が暇乞に源
氏の方に來られた時。

きたばかり、おぼし構へよ」といふ。恥かしくおぼいて、う
しろ向き給へり。右近「いでや、身こそ數ならねど、殿もお前近く
召し使はせ給へば、物の折ごと玉鬘はどうなられたでせうに、『いかにならせ給ひにけむ』
と聞えいづるを、源氏が聞召しおきて、『われいかで尋ね聞えむと思ふ
を、若しお前が玉鬘の事を聞さいで奉りたらば』となむ宣はする」といへば、源氏が乳母おと
どの君はめでたくおはしますとも、さるやんごとなき御妻ども
おはしますなり。まづ誠の親とおはするおとどにを、内大臣知らせ奉り
給へ」などいふに、ありしさまなど語り出でて、源氏が夕顔を世に忘れが
たく悲しき事になむおぼして、『かの御かはりに見奉らむ。子も
すくなきがさうくしきに、わが子を尋ね出でたると人には知
らせて』と、あの當時からそのかみより宣ふなり。心のまさなかりける事は、
よろづに物・つつましかりし程にて、玉鬘をえ尋ねも聞えて過ぐしし
程に、少貳になり給へるよしは、御名にを聞きて知りなき。まか
り申しに殿に參り給ひし日、少貳をほの見奉りしかども、玉鬘の事をえ聞えて

田舎人にて 玉薨が田舎娘になつて居られたら。

見くださるるかた 高い所であつたから、参詣人を見おろすことが出来たのである。

二本の歌 初瀬にお参りしたお蔭で姫君にめぐりあふ事が出来ました。古今旋頭歌「初瀬川布留川のべに二もとある杉瀬川を經て又もあひ見む二本ある杉」
嬉しき瀬にも 六帖三「祈りつづ頼みぞ渡る初瀬川嬉しき瀬に初瀬川の歌 以前の事は知りませんが今日あなたに逢つたので嬉し涙に身までも流れてしまひます。
かたちはいと斯く 右近が玉薨を見ての心の中。

おとどを嬉しく 玉薨を斯く立派に育てあげたのは乳母であるから。

やみにき。さりとも、^(こ) 姫君^{玉薨}をば、かのありし夕顔の五條に、^(ぞ)
とどめ^(奉り)・給へらむとぞ思ひし。あな^(奉り)いみじや、田舎人にてお
はしまさましよ」など、打語らひつつ、日一日、昔物語念誦な
どし^(奉り)つつ。^(奉り)

まゐり^(うで)つどふ人の有様ども、見くださるるかた^(はう)なり^(けり)。前よ
りゆく水をば、初瀬川といふなりけり。右近、

「二本の杉の立ち^(木立)どを尋ねずば布留川のべに君を見ましや
嬉しき瀬にも」と聞ゆ。

初瀬川はやくの事は知らねども今日の逢瀬に身^{流れに泣かれがもたせてある}さへなかれぬ
と打泣^{玉薨}きておはするさま、いと目やすし。かた^{玉薨}ちはいと斯く^(い)。
めでたく清げながら、田舎^{こつくして}びこち^(こ)しくおはせましかば、
いかに玉の瑕^{きず}ならまし、いであはれ、いかで斯く生ひ出で給ひ
けむ、と^{乳母}おとどを嬉しく思ふ。母君^{夕顔}は只いと若やかに^(き)おほどか
にて、やはくとぞたをやぎ給へりし、これ^{玉薨}はけだかく、^(き)・^(か)・^(か)

筑紫を 玉鬘を見て筑紫を奥ゆ
かし土地のやうに思ふが、
今迄見た筑紫人は皆田舎臭い
で、その間の矛盾を右近は解し
かねて居る。

物いとあはれなる 物思ひがち
な玉鬘一行の心々には。
人なみく玉鬘が人並の身に
なる事は出来まいと人々は沈み
こんで居たのだが、右近の話の
序に父大臣の有様や、腹々に生
れた大した事もない子供をも立
派に育てあげられる由を聞くと
自分のやうな日蔭者も望みがあ
ると玉鬘は思はれるやうになつ
た。

程遠からて 玉鬘の九條の家と
はあまり遠くないので、相談す
るにも便宜が出来たやうに玉鬘
の方の人々は思つた。

右近は大殿に 右近は下向後源
氏の六條院に参つた。

しゆら、もてなしなど恥かしげに、よしめき給へり。筑紫を心
にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるを、心得がたくなむ。
暮るれば御堂(寺)にのぼりて、又の日も行ひ暮し給ふ。秋風谷より
遙に吹き(地)のぼりて、いと膚寒きに、物いとあはれなる心。ども
にはよろづ思ひつづけられて、人なみくならむ事もありがた
き事(身)と思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、(父内大臣)あとの
御有様、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆物めかしなし
たて給ふを聞けば、斯かる下草・頼もしくぞあはしなりぬる。
寺(寺)から歸る時にも、かたみに宿る所も問ひかはして、もし又追ひ惑は
したらむ時、と危く思ひけり。右近が家は、六條の院近きわた
りなりければ、程遠からで、いひかはすもたづき出で來ぬる心
地しける。
右近は大殿(おほと)に参りぬ。このことを、かすめ聞ゆるついでもやと
て急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひ殊に廣々として、

數ならて 右近が自分の事を思ふのである。

よべ里より 昨晚賀家から歸り参つた古参りの女房や若女房達の中から紫上が特に右近を召したので。

例ならず この句は下の「こまがへるやうもありかし」に係る。こまがへるやうもありかしに係る。やすき我身老いぬとも又こまがへり君をし待たむ(萬)細流抄「河海萬葉十一」若反「こまがへる」を引けり。當時流布の仙覺が點本若反「わかへる」と點せり。古點こまがへる也。わかへる心分明成る者歟一花鳥餘情「こまがへるは年寄の立歸り若やぐを云也」

山踏 山寺詣。

ふと聞え出ても 右近はふといひ出すのも、まだ紫上にお話しない前に、源氏にだけ特にお話上げた事を後で紫上がお聞きになつたら、分けへだてするやうに疑はれはせぬかと心配して。

まかで参る事多くまよふ。數ならで立ちいづるも、まはゆき心地する玉の臺なり。その夜はお前にも・参らで、思ひ臥したり。又の日、よべ里より参れる上藤若人どものなかに、取分きて右近・召しいづれば、おもだたく覺ゆ。おととも御覽じて、運どか里居は久しくしつる。例ならず、やもめ人の、引きたがへ、こまがへるやうもありかし。をかしき事などありつらむ」など、例のむつかしうたはぶれごとなど宜ふ。右近「まかでて七日に過ぎ侍りぬれど、をかしき事は侍りがたくなむ。山踏し侍りて、あはれなる人をなむ見奉りつけたりし」。源「何人ぞ」と問ひ給ふ。ふと聞え出ても、まだうへに聞かせ奉らで、取分き申したらむをのちに聞き給ひては、隔て聞えけるとやおぼさむ、など思ひ亂れて、右近「今聞えさせ侍らむ」とて、人々まゐれば、聞えさしつ。大となぶらなどまゐり、打解け並びおはします御有様ども、いと見るかひ多かり。女君は、二十七八に・なり

詰らぬ自分如きが
ままりがわるい程の

玉璧の事

玉璧の事

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

右近は

思ひなしにや 氣のせいのか矢張
 幸のあるときと 幸のあるは
 紫上なきは玉登 幸ひのあるは
 ばならぬ善のものだと、右近は
 二人を比較して考へてゐる。河
 内人が「思ひ合せらる」とある
 方若き人は 若女房は足をさする
 事を苦しいといつていやがるや
 うだ。
 誰かその 誰がお使ひ下さる事
 をいやがりませう。
 うへも 紫上も私も年寄同志
 があまり親しくしすぎると、や
 はり(年とつてゐるからだとて
 も)腹を立てようといふのです
 か。腹を立てない人とはいへな
 いか。
 さるまじき心と見ねば危し 此
 の一句を諸註に皆紫上の詞と見
 て居るが誤りである。この條紫
 上の右近に話しかけしことなく
 またかゝる嫉妬がまき起ると
 人前にて、右近に試みる紫上と
 もおもはれないから源氏の言
 葉と見なければならぬ。なほ河
 内本に「御心」とあるに従ふべ
 きである。
 まいと愛敬づき これを紫上のさ
 まいと見るとはわるい。

給ひぬらむかし、さかりに清らにねびまさり給へり。すこし程
 經て見奉るは、又この程にこそ匂ひ加はり給ひにけれ、と見え
 給ふ。玉登をかの人をいとめでたく劣らじと見奉りしかど、思ひなし
 にや、なほこよなきに、幸さいはひのあるとなきと、隔へてあるべきわ
 ざかな、と見思ひ・合せらる。大殿籠るとて、右近右近を御足參りに召
 す。源「若き人は、苦しとてむづかるめり。なほ年經ぬるとちこ
 そ、心かはして睦びよかりけれ」と宣へば、人々忍びて笑ふ。
て親しみ易い
 人々「さり・・や、誰かたれその使ひならひ給はむをばむづからむ。う
 るさきたはぶれごといひかかり給ふを、煩はしきに」などいひ
 あへり。源紫上うへも、年經ぬるとち打解け過ぎば、はたむづかり
 給はむとや。さるまじき・心御と見ねば、危し」など右近源氏に語ら
 ひて、笑ひ給ふ。いと愛敬づき、をかしきけ・・さへ添ひ給へ
 り。太政大臣は願掌がないから暇である今はおほやけに仕へ、いそがしき御有様にもあらぬ御身ねほに
 て、世の中のどやかにおぼさるるままに、只はかなき御たはぶ

斯かる古人 右近の事。

尊き修行者 前に右近が「山踏し侍りて云々」といつたから源氏が斯く問はれるのである。

年頃はいづくにか 玉鬘は今迄どこに居たか。

昔人も 昔の女房達も一部は其儘に居りましたから。

心知り給はぬ 事情を知らぬ紫上の前ではあまり話さぬがよい。

誰ばかりと 玉鬘は誰位の美しさか。紫上とはどうか。

れごとを宜ひ、をかしく人の心を見給ふあまりに、斯かる古人女房達のをさへぞたはぶれ給ふ。源「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者すげやうぎ・語らひてゐて來たるか」と問ひ給へば、右近右近あな見苦しや。はかなく消え給ひにし夕顔の露の御ゆかりを玉鬘の事なむ見給へつけたりし」と聞ゆ。源「げにあはれなりける事かな。年頃はいづくにか(三)」と宣へば、ありのままには聞えにくくて、右近「あやしき山里になむ。昔人もかたへは變らで侍りければ、その世の物語しいで侍りて、(いと)堪へがたく思ふ給へり(られ)」など聞え居(出で)・たり。源「よし、心知り給はぬ御あたり」と隠し聞え給へば、紫上「あな煩はし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖(そで)して御耳(を)・ふたぎ給ひつ。源「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」など宣へば、右近「必ずさしもいかでか物し給はむと思ひ給へりしを、こよなうこそ生夕顔よりひまさりて見え給ひしか」と聞ゆれば、源「をかしの事や。誰ばかりとか

したりがほにこそ右近が紫上
と比較するやうな答へぶりだか
ら「右近も得意に思つてゐるや
うだ」と評したのである。口
親めきて「安心だ」といふ口
き方が我が子の事をいつてゐ
られるやうだから。
かく聞きそめ源氏が玉鬘の事
を耳にはさんでからは右近を一
人だけ呼んで。

父おとどには父大臣には何で
知られる必要があらう。
數ならで、その大勢の子供達の
中に玉鬘が今頃になつて物の數
でもない（卑しい腹から生れた）
身で仲間入をしようと、却つて引
取られぬがまし位に思ふ事もあ
らう。

いといたう 大切に育てよう。

おとどに内大臣にお知らせす
るにしても、君の外には誰もお
知らせする方はございませぬ。
いたづらに過ぎ物し源氏に逢
つた甲斐もなく亡くなつてしま
はれた夕顔の代りに。

玉 鬘

覺ゆ。この君（と）」と宣へば、右近（業上程には違ふ）いかでかさまでは」と聞ゆれば、

「したりがほにこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろや

すしかし」と、親めきてのたまふ。

かく聞きそめ（給ひ）。てのちは、召し放ちつつ、右近を「さらばかの人、

このわたりに渡り奉らむ。年頃（も）・物のついでごとに、口惜し（玉鬘を）う

惑はし（つる）事を思ひ出でつるに、いと嬉しく聞き出でながら、

今まで（對面せしに居るもの）おぼつかなきも、かひなきことになむ（する）。父おとどに

は、何（と）・か知られむ。内大臣には子供が澤山あるのにいとあまたもて騒がるめるに、數なら

で、今はじめ（と）・立ちまじりたらむが、なかくなる事こそあ

らめ。我は（か）・さう（子供が少くて）しきに、覺えぬ所より尋ねい（で）だしたる

ともいはむかし。好色者（すきもの）どもの心つくさずさるくさはひにて、い

といたうもてなさむ」など語らひ給へば、右近の心か（つ）いと嬉しく

思ひ（ふ）つつ、右近（君の御心ませに）ただ御心になむ。おとどに知らせ奉らむ（と）も、

誰かは傳へほのめかし（聞）・給はむ。いたづら（夕顔の代りに）に過ぎ物し給ひ（と）。

いたうもかこちなすかな ひと
く因縁をつけるもんだね。

いふかひなくて 折角逢つた甲斐もなく亡くなつてしまつて。

さて物し給はば 玉鬘を此處に引取る事が出来れば。

かく聞ゆるを この句は次の歌に續けて意味を取る。今は御存じなくとも後に人から聞いてお分りになるだらう。あなたとは絶つ事の出来ぬ縁がつながつてゐるのだから。三稜は菱。筋は葛。「三島江」から「三稜の」までは筋即縁の枕詞。

しかはりにば、^(イ)ともかくも引き助けさせ給はむ事こそは罪
 かるませ給はめ」と聞ゆ。 ^(ウ)いたうもかこちなすかな」と、ほ
 ほゑみながら、涙ぐみ給へり。 ^(六)あはれにはかなかりける契り
 となむ年頃思ひわたる。かくてつどへたる方々のなかに、^(夕顔との)かの
 折の志ばかり思ひとどむる人。 ^(七)なかりしを、命長くて、わが
 心。 ^(八)長さをも見果つるたぐひ多かめるなかに、いふかひなくて
 と、 ^(九)そこばかりを形見に見るは、口惜しくなむ思ひ忘るる時な
 きに、 ^(右近)さて物し給はば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」と
 て、 ^(玉鬘へ)御消息たてまつり給ふ。 ^(世)かの末摘花のいふかひなかりしを
 おぼしいづれば、 ^(筑紫三原に寄落して寄つた玉鬘の事が心配で)さやうに沈みて生ひいでたらむ人の有様うし
 ろめたくて、 ^(玉鬘の)まづ文の氣色。 ^(を)ゆかしうおぼさるるなりけり。物
 まめやかに、 ^(尤らしく)あるべかしく書き給ひて、 ^(十)はしに、源文「かく聞ゆる
 を、
 知らずとも尋ねて知らむ ^(攝津三島郡にある)三島江に生ふる ^(みく)三稜の筋は絶えじを」

御文自ら 右近はこの御文を携へて自身玉璽方に持参して源氏の仰せの趣を傳へた。玉璽の衣類や女房御さうぞく玉璽の色々ある。御匣殿裁縫所などにも用意の品々を取寄せて、色合や作り方など格別よいのを選択されたのだから。

いかでか知らぬ人の 赤の他人の源氏の處へ行くのはいやだといひはつて迷惑がつて居るけれども。

おのづから とにかく源氏の處に行つて身分が高まつて来れば自然内大臣もあなたを見付け出される事です。

まして誰もく まして親子でいらつしやるのだから、父大匠もあなたも御無事でさへいらつしやれば結局は逢へる事です。

となむありける。御文、自らまかでて、宣ふさまなど聞ゆ。御さうぞく、人々の料などさまくあり。うへにも語らひ聞え給へるなるべし。御匣殿などにも、設けのもの。召集めて、色合しざまなど、殊なるをとえらせ給へれば、田舎びたる目どもには、まして珍らしきまでなむ思ひける。さうじみは、只かごとばかりにても、誠の親の御けはひならばこそ嬉しからめ、いかでか知らぬ人の御あたりには、はまじらはむ、とおもむけて、苦しげにおぼしたれど、あるべきさまを右近聞え知らせ、女房達も、「おのづから、さて、人だち給ひなば、あとどの君も尋ね、聞え給ひなむ。親子の御契りは、絶えてやまぬものなり。右近が、數にも侍らず、いかでか御覽じつけられむと思ふ給へしだに、佛神の御導き侍らざりけりや。まして誰もく平らかに、おはしまさば」と、皆聞え慰む。人々「まづ御返りを」と、せめて書かせ奉る。いとこよなく田舎びたらむも

のを、と・恥かしくおぼいたり。唐の紙のいとかうばしき、とり出でて書かせ奉る。

數ならぬ玉簷三稜みくろや何の筋なればうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手ははかなだちて、よろぼはしけれど、あ

てはかにて口惜しからねば、御心落ちぬにけり。源氏は安心した

住み給ふべき御かた・御覽ずるに、南の町には、いたづらなる

對どもなどもなし。祭上が侍女共多くでいさほ秋好の未中の町ひ殊に住み満ち給へれば、けしよ

に人繁くもあるべし、中宮のおはします町は、かやうの人も住

みぬべくのだやかなれど、さてさふらふ人のつらにや聞きなさ

・む、とお・ぼして、すこし中宮の侍女と間違はれるのを惧れてもれたれど、丑寅の町花散里の方の西の

對、文殿にてあるを、他方へ移してとおぼす。相住み・も、忍

びやかに心よく物し給ふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、

とおぼしおきつ。祭上うへにも、今ぞかのありし昔の世の・物語聞

えいで給うける。かく御心にこめ給ふ・・事ありけるを恨み聞

數ならぬの歌。數ならぬ我身は
何の因縁で憂き世に斯く生れ落
ちた事てせう。
ほのかなり。墨色もかすかに書
よるぼはしけれど。ひよろついで
は居るが。

住み給ふべき。源氏は玉簷の住
む居間を見立てなさるに。

けしよ。顯證。はれがましく
もあり、人の出入りも多からう。

相住み。共同生活者(花散里)も
ひつこみがちなよい人だから。

ありし昔の世の。夕顔との關係
を業上に語られた。

すがくしくもさうきつさと行くものではない。よろしきわらは若人相當な童女や女房などを探させられる。

市女などやうのもの女商人などいづつた風なものが、上手に探し出して侍女を連れて来る。

その人の御子など玉鬘の種姓はあらはさなかつた。

人々えり整へ侍女達を選定したり。

物うじして失望して。がつかりして。

中將を夕霧をあなたに頼みした所が結果がわるくない。故に同様に玉鬘を世話して下さ

おぼしかへさる。かくいふは九月ながつきのことなりけり。渡り給はむ玉鬘が六條院に

こと、すがくしくしもいかでかはあらむ。よろしきわらは若わか

人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人々も京より散りこ

ばひ來たるなどを、たよりにつけて呼び集めなどしてつこさぶら玉鬘に

はせしも、俄に惑ひ出で給ひし騒ぎに、皆あぐらかしてければ、筑紫に残して來たので

又人もなし。京はとあのづから廣き所なれば、市女などやうのいちめ

もの、いとよく求めつつゐてく。その人の御子などとは知らせこ

ざりけり。右近が里の五條に、まづ忍びて渡し奉りて、人々え玉鬘を

り整へ、さうぞくととのへなどして、十月とせにぞわたり給ふ。源氏

とど、ひんがしの御方に聞え奉り給ふ。酒あはれと思ひし人の夕顔の事

物うじして、はかなき山里に隠れ居にけるを、をさなき人のあ玉鬘の事

りしが、うんじい年頃も人知れず尋ね侍りしかども、え聞き出でつれでな

む女おんなになるまで過ぎにけるを、覺えぬ方よりなむ聞きつけ意外な方面から

たる時にだにとて移ろはし侍るなり。母もなくなりけり。中夕顔

山がつめきて山賤のやうにして育つた事だから田舎臭い所が多いでせう。何かにつけて然るべく躰けてやつて下さい。
姫君の一所姫がお一人だけで淋しく思つて居ります所へ、それは仕合です。

つきん私がお世話するのに似合はしいやうな人も餘りなくて退屈で居ますのに。

ふるものあつかひ厄介な古物扱ひをなさる。玉鬘を老女と推量してゐるのである。
御車三つ引移りの時の様子。

おとどの君源氏が玉鬘の居間に。昔光源氏などは河内本に「兵部など」とあるのは女房の名。

將をも・聞えつけたるに、あしくあやはある。同じごとご・後見給

へ。玉鬘は山がつめきて生ひ出でたれば、鄙びびたる事こと・多からむ。

さるべくき事に觸れて教へ給へ」と、いとこまやかに聞え給ふ。

花散花散の事げに斯かる人のおはしけるを、知り聞えざりけるよ。姫君の明石姫君

一所物おし給はふがさうくしきに、よき事かな」と、おいらかに

宣ふ。酒の親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。

御心あなたの氣立ももうしろやすく思ひ聞ゆれば」など宣ふ。花散「つきん私しく

後見む人なども事多からで、つれづに侍るを、嬉しかるべき

事になむ」とはかり聞え給・宣ふ。殿六條院内のの内玉鬘をの人は、御おむすめとも知

らで、「何人を又尋ね出で給ふるならむ。・むつかしきおふる

ものあつかひかな」といひけり。御車三つばかりして、人お供の人々のの姿

どもなど、右近あれば、田舎たごびずしたごたり。殿源氏よりぞ綾あ何かく

れと奉り給へる。

その夜早速やがておとどの君渡り給へり。・兵部などい昔光源氏などい

籠外を覗き見る爲に、帷子の縫はずにある部分。怖ろしくさへ あまりの美しさに

心ことにこそ 戀人に逢ひに行くと戸口のやうな氣がして。火こそいと 火が薄暗くて戀の出會ひでもするやうな氣がする。河内本にはこの一句中に「こそ」が重複するけれども本の儘。親の顔は 自分を貰父らしくいひなすのである。

おもなの人や 恥かしがりやだね。

げにと覺ゆる 成程夕顔の娘と思はれる目元の美しさである。いささかも 源氏は少しも他人らしい疎々しさはなく、ひどく親ぶつて。年頃御ゆくへも 年來あなたがどこにゐられるかも知らないので、終始心配して嘆いて居つたのです。

ふ・名は聞きわたり奉りしかど、年頃のうひくしさに、長い間そんな人を見馴れて居ないので さいとも 思ひ聞えざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳の綻より(御)となぶる はつかに見奉る、いとど・・・怖ろしくさへぞ覺ゆるや。渡氏が來 給ふかたの戸を右近かい放てば、渡この戸口に入るべき人は、氣が改まる 心ことにこそ」とうち笑ひ給ひて、ひさし 庇なる御座につい居たまひて、源火こそいと懸想びたる心地・・すれ。親の顔はゆかしきものとこそ聞け。さもおぼさ・ぬか」とて、几帳すこし押しやり給ふ。玉巻は わりなく恥かしければ、横を向いて そはみておはする様體など、いと目やすく見ゆれば、嬉しくて、源今すこし光見せむや。あまり心にくし」と宣へば、右近かかけてすこし寄す。玉巻の方に 源「おもなの人や」とすこし・笑ひ給ふ。げにと覺ゆる御まみの恥かしげさなり。いささかも他人と隔てあるさまにも宣ひなさず、いみじく親めきて、源年頃御ゆくへも知らで、心にかげぬひまな(折) く歎き侍るを、かうて 見奉るにつけても、夢の心地して、夕顔の事 過ぎ

かく年経たる かう長い間對面に
しない例は外にありますまい

などかおぼつかなくは なぜそ
んなに黙つてばかり居られるの
ですか。
足立たず まだ足も立たぬ頃に
筑紫に下りましてからは、何事
も夢現の心地で、日本紀覽宴歌
「かぞいろはいかに哀と思ふら
む三年になりぬ足立たずして」
玉鬘の筑紫下りは四歳の時。

あはれとも今は あなたに同情
するのは私より外にはありませ
ぬ。
心ばへいふかひなくは あらぬ
玉鬘の心構へが萬更ではないと
思ひやられる返答振だと源氏は
思召す。

目やすく 源氏は玉鬘が無難な
女である事を嬉しく思召して。

などにも へ切れぬ怒しさに、
何とも口が利けない、
にしかたの事ども取り添へ、忍びかたきに、えなむ聞えられざ

りける」とて、御目押しのごひ給ふ。誠源氏がに悲しうおぼし出でら

る。御年の程かぞへ給ひて、源「親子のなかの、かく年経たるた

ぐひ・あらじものを、契恨めしい前世の宿縁でしたりつらくもありけるかな。今は物うひ

かしがる年もあるまいに、若び給ふべき御程にもあらじを、年頃の御物語など

も聞えまほしきに、などか・おぼつかなくは」と恨み給ふに、

玉鬘は 玉鬘は聞えむこともなく恥かしければ、源「足立たず沈みそめ侍りにけ

るのち、何事もあるかなきかになむ」と、ほのかに聞え給ふ聲

ぞ、昔人夕顔に似てにいとよく覺えて若びたりける。ほほゑみて、源「沈み

給へりけるを、あはれとも今は又誰かは」とて、心ばへいふか

ひなくはあらぬ御いらへとおぼす。右近に、宜しく頼んで源氏は歸られたあるべき事宜はせ

て、わたり給ひぬ。

目やすくものし給ふを、嬉しくおぼして、案上に玉鬘の噂をされたうへにも語り聞え給

ふ。源「あんな田舎者の中に誇つたのだからさる山がつのなかに年経たれば、どんなに見苦しからうといかにいとほしげなら

兵部卿の宮などの私の所を好
ましがつて來られる兵部卿宮な
どの心を攪亂してやりたいもの
だ。兵部卿の宮は源氏の弟で
兵部卿の宮と申す。

斯かる物のくさはひの かうし
た氣を揉ませる種のない時の事
です。

いたうもてなしてしがな 玉鬘
をうまく取り扱つて見たいも
だ。

なほうちあらぬ 眞面目では通
せぬ人々の様子を見てやら
う。

あやしの心勵まさむ事を 何よ
り先に人の心をそくするやうな事
をお考へになる。

いと無心に 深い考へもなく妻
にしてしまつて残念だ。

戀ひ渡るの歌 夕顔を忘れず
の我身であるけれども、實の親
ではないのに、この娘はどうし
た因縁で私方に來たのだらうし
からうまで戀しがつてみる夕顔の
引合せであらうか。玉鬘は筋
(毛筋)の枕詞。
げに深く成程深く愛した夕顔
の形見なのだらうと禁上は思
ふ。

むとあなづりしを、却りて心恥かしきまでなむ見ゆる。斯こんなよいかるい娘

があるものありといかで人に知らせて、兵部卿の宮などの、この籬まがきの

内好ましうし給ふ心、亂りにしがな。好色者すばしものどもの、いとうる

顔顔をばかりしてこの邸に來るもの

はしだちてのみ此のわたりに見ゆるも、斯かる、物のくさはひ

のなき程なり。いたうもてなしてしがな。なほうちなほうち・あらぬ人

の氣色見集めむ」と宣へば、禁上「あやしの、人の親や。まづ人の

心勵まさむ事を(先)・おぼすよ。けしからず」と宣ふ。源源「まこと

に君をこそ、今の心私が今のやうな料簡であつたらならましかば、さやうにもてなして見つべ

かりけれ。いと無心むじんにしなしてしわざぞかし」とて笑ひ給ふに、

禁上禁上はもて赤みておはする、いと若く若くをかしげなり。硯硯氏が引寄せ給ひ

て、手習に、

「戀源氏ひ渡る身はそれなれど玉鬘いかなる筋を尋ね來つらむ

あはれ」とやがて獨りなごらいごち給へば、げ禁上に深くおぼしける人夕顔の名

殘なめり、と見給ふ。

人がかすならずとも不東者で、先にもこんな兄があるからと、眞先に私をお召し下さる筈でした。

御渡りの程 あなたが六條院に引越される折にもお迎へにも参りませんで、いとまめくしう夕霧は實の兄弟と思つてゐるからである。

親兄弟と 玉鬘が親兄弟として親しくする源氏夫妻夕霧明石姫君等のお姿容貌を初として。今ぞ三條も 前に玉鬘をせめて大貳の北方に祈つた三條も、この様を見て始めて大貳を輕蔑する氣になつた。

監 肥後の大夫の監。

おほぞうなるは、いい加減にして、おくと諸事だらしくなりがちだとあつて、源氏は玉鬘附の家司を定めた、然るべき事柄を規定された。

夕霧 中將の君にも、源^{玉鬘の事}斯かる人を尋ね出でたるを、用意してむつびとぶらへ」と宣ひければ、夕霧が玉鬘方に「あなたにまうで給ひて、夕霧人かすならずとも、斯かる者さぶらふと、まづ召寄す^{數まむ}べくなむ侍りける。御渡りの程にも参り仕うまつらざりける事」と、いとまめまめしう聞え給へば、傍痛きまで心知れる人は思ふ。心の限り^{筑紫の住居は思ふ}盡したりし御すまひなりしかど、あさましう田舎びたりしも、六條院とは、たとしへなくぞ思ひくらべらるるや。御しつらひよりははじめ、今めかしうけだかくて、親兄弟と^{かみはから}・むつび聞え給ふ^{入々}・御さまかたちよりははじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ^か・三條も大貳をあなづらはしく思ひける。まして^{かの}・監がいきざしけはひ、思ひいづるもゆゆしき事限りなし。豊後の介の心ばへを、^{おほ}ありがたきものに君もおぼし知り、右近も思ひいふ。おほぞうなるは事^{こと}も怠りぬべしとて、こなたの家司どもさだめ、あるべき事どもあきてさせ給ふ。豊後の介もなりぬ。年頃田舎び沈

いかでか 参上すべく便宜があるものかと思つて居つた六條院を、朝夕自由に出入りし。

御しつらひの事 玉臺方の年末の節付。
やんごとなき 源氏は玉臺を他の身分のある婦人達と同等に取扱はれた。
山がつの方に 田舎者の事だからと侮つて仕立てた衣裳を玉臺に贈る序に。

細長 童男や若い婦人の著る細長い服。
小袖 表は浮織物で裏は平絹。廣袖で色は一定しない。下に打衣と單とを重ねて著る。唐衣や裳を著ない時に着用するのが普通である。
かたぐに 誰にも恨みつかないやうに分配するがよいでせう。
御匣殿に 裁縫所で拵へたのも紫上方で仕立てたのも。

みたりし心地豊後介の、俄に名残なく、いかでか、かりにても立ち出で見るべきよすがなく覺えし大殿の内を、朝夕に出で入りならし、人を従へ、事取行ふ身となれるは、いみじき面目と思ひけり。あとのどの君の御心おきての、こまかにありがたうおはします事、いとかたじけなしひなり。

年の暮に御しつらひのあるべき事、人々のさうぞくなど、やん

花散里など
ごとなき御つらに思しおきてたり容姿は美しくとも。斯かりとも、田舎びたる事

・やを・と、山がつの方に思し、あなづり推し量り聞え給ひて調じ

たるも、奉り給ふついでに、織物どもの、我もくと手を盡し

て織りつづもて參れる細長小袷こうちぎのいろくさまく眞氏がなるを御覽

するに、選いと多かりけるものどもかな。かたぐに、うら

みなくこそ物すべかりけれ此の重ねどもと、うへ紫上に聞え給へ

ば、御匣殿みくげどのに仕うまつれるも、こなたにせさせ給へるどもも、

皆と取出うでさせ給へり。斯紫上は染縫の事も上手でかるすちはた、いとすぐれて、世にな

はい

搦殿 布帛等を光澤を出す爲に
硝で打つ場所。

大人びたる上臈 年長の上臈の
女房達も伺候して。
取り具しつ つ とりそろへなが

つれなくて 何くはぬ顔して、
着物で人の容貌を推し量らうと
いふたくらみですな。そしてど
れを御自分のと思ひますか。それ
それも鏡にては、それも鏡を見
ただけでは決められませぬ。
文浮きたる 文様を浮かして織
つた。
蒲萄染 表は蘇芳、裏は花田。
又表は紫、裏は赤。
今様色 濃い紅梅色。又當時流
行の色ともいふ。
櫻 表白裏濃赤。
海賦 波海藻貝類等を取合せた
文様。

き色合匂ひを染めつけ給へ。ば、源氏は紫上のやうな人は稀だとありがたしと思ひ聞え給ふ。
ここかしこの搦殿うちどのより參れるものども御覽源氏がじくらべて、濃紫のき赤
きなど、さまつぎくをえらせ給ひつ、御衣櫃うちものどま・・・ころもばこ
どもに入れさせ給ひて、大人びたる上臈どもさぶらひて、「これ
は、かれは」なと、取り具ぐしつ つ入る。紫上うへも見給ひて、い
づれも・劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はむ人
の御かたち聲委に考へ合せてに思ひよそへつ奉れ給へかし。着たるもの人の
さまに似ぬは、ひが見つともないくしくうもありかし」と宣へば、源氏おとど打
笑ひ結ひ・・て、運つれなくて、人のかたち推し量らむの御心なめ
りな。さていづれをとかおぼす」と聞え給へば、紫それも鏡に
てはいかでか」と、さすがに恥ぢらひておはす。紅梅のいと・
・文浮きたる（七）・蒲萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたると
は、紫上の御資料この御料、櫻の細長につややかなる搔練取り添へては、明石姫
君の御料源氏な・り。浅縹あさはなだの海賦かひぶの織物、織りざまなまめきたれど、

山吹 表朽葉、裏紅梅。

内のおとど 玉簞の實父内大臣。

色には 紫上は顔色にはあらはさないが。

なほそこひあるものき 矢張奥底があるのに。

柳 表白、裏青。夏は卯花といふ。

ほほあまれ 衣裳があでやかすぎで未摘花には似合ふまいと思ふのである。

思ひやりけだかきま けだかい人柄と想像されるので。

聽色 禁色でなく誰でも着用し得る色。薄紅薄紫等。

匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、(は)夏の御方に、くも
上着の色。りなく赤き、山吹の花の細長は、かの西の對に奉れ給ふを、
見ぬかりしてうへは見ぬやうにて思しあはず。内のおとどの、花やかに、あ
紫上な清げとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに
源氏が紫上方似たるなめりと、げに推し量らるるを、紫上は色にはいだし給はねど、
源氏で紫上方殿見やり給へるに、常態ではないただならず。いこのかたちのよそへは、
いくらわゆるくても人腹だちぬべき事なり。よしとて、物の色は限りあり。人の
いくら立派なものでもかたちは、おくれたるも又なほそこひあるものを」とて、かの
(具)末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を亂れ織れ。るも、
源氏はいとなまめきたれば、人知れずほほあまれ給ふ。梅の折枝、蝶
濃茶鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿に、濃きがつややかなるか
紫上さねて、明石の御方に、思ひやりけだかきを、うへはめざまし
(う)と見給ふ。空蟬の尼君に青鈍の織物、いと心はせあるを見つ
源氏の御着料け給ひて、御料にある山梔子の御ぞ、聽色なる添へ給ひて、お

おなじ日着給ふべき 以上の衣裳を同日に一同着るやうにと廻りに似げづいたる。似合つてゐる御返りども、その衣裳を受けた人々からの御返事は何れも立派なものだ。今すこし離れ、六條院の人々とは違つてもう少し花やかに風流な取扱ひをなさるべきである。打掛け給へり 與へられた。衣裳は貫つたらば肩にかける例であつたからかういつたのである。賜へるは おいで下さらないのに衣裳を頂いたのは却て恨めしい。きて見ればの歌 着て見ると無情な君が恨めしくなります。この着物は涙で袖を濡らしてお返し致しませう。「返し」は衣の縁語。

御使に 末摘花が使に與へた祿を源氏の御覽になつて、假にも自分で妻と名をつく女が、かままで氣がきかないかと、人の手前甚だつらくも恥かしくも思つて御機嫌がわるいので、かやうにわりなく、末摘花はかやうに無闇に古風で、人の手前まりのわるいやうな所のある生意思氣さに源氏才女あまねしておきまされる。祝儀などしなればよの意にと源氏が思つてゐられる。

なじ日・着給ふべき御消息聞えめぐらし給ふ。げに似げづいたるども見むの御心なりけり。皆御返りどもただならず、御使の祿・心々なる・に、末摘花・ひんがしの院におはすれば、今すこしさし離れ艶なるべきを、うるはしく物し給ふ人にて、すべき事は慣例に背かずあるべき事はたがへ給はず、山吹の袿の袖口いたくすすけたるを、う着も重ねずうつほにて打掛け給へり。御文には、いとかうばしきみちのくに紙の、すこし年經厚きが黄ばみたるに、末摘文いでや、賜へるはなかくにこそ。

きて見れば根に裏がかけてあるうらみられけり唐衣返しやりてむ袖を濡らして」御手のすぢ、殊におうよりにたり。源氏はいといたくほほゑみ給ひて、とみにも打置き給はねば、榮上がうへ何事なむと見おこせ給へり。御使にかづけたる物を、いとびしく傍痛しとおぼして、御氣色あしければ、使はすべりまかでぬ。いみじく・あのくはささめき笑ひけり。末摘花がかやうにわりなう古めかしう傍痛き所のつき給へる。

唐ごろも袂濡る唐ごろもと歌の句に付きもかいふ怨言が始終今めきたる現代風の言葉遣ひに自信の強さがねたましいさうし人のなかなる事會合の事などで催される正式の歌會の席でまはる懸想の風流な贈答には又昔の人おいて言葉の續きがしつかりするやうに思はれるものです。

そのうちの言葉を草子や歌枕中の語句を拾ひ出して見るに、歌の詠みぶりは何れも似たやう常陸のみこ末摘花の父宮。

和歌の髓腦所せう詠歌の心得がごとく書いてあつて、避けなければならぬ歌の病を説いた條項が澤山あつたので、私のやうな歌の下手は、却つて規則に縛られて身動がつかないやうであつたので、よく案内知り給へる着て見れば、よく案内知り給へる歌として平凡な歌です。

さかしらにもてわづらひぬべくおぼす。(い)・・恥かしきまみ・なり。(舞)・・古代の歌よみは、唐ごろも袂濡るるかごとこそ離れねな。本摘花の事私その仲間だもそのつらぞかし。更に一筋にまづはれて、今めきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ、ねたきことはあれ。人のなかなる事を、折節お前などの、わざとある歌よみのなかにては、まとの離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人(い)・といふ五文字を休めどころに打置きて、言の葉の續き、たよりある心地すべかめり」など笑ひ給ふ。源よろづの草子歌枕、よく案内知り見つくして、そのうちの言葉を取りいづるに、讀みつぎたるすぢこそは、強うは變らざるべけれ。常陸のみこの書きあき給へりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせ給へりしか。私に見よとて本摘花が贈つて下さつたが和歌の髓腦いと所せう、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれたる方の、いとどなか／＼動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。本摘花に・・よく案内知り給へ

玉

箋

尤たの事たに
ことわりや
とぞあめ（り）
ける。